

図106 第3面建物2・4平・断面図

遺物は、146ピットから土師器細片などが出土した。

建物11(122・115・137・141・152・146ピット)(図104・111)

建物9の南側で建物4、建物7、建物8、建物10に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の南側について不明瞭な部分が多いが、東西2間(4.4m)×南北2間(4.1m)以上の南北棟になるものと思われる。主軸方向はN-18°-Eである。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均1.9~2.0mを測る。建物ピットの検出形は、建物の角部にあたるピットが隅丸方形を呈し、短辺約50cm、長辺約80cmを測る。その他のピットは、やや不整形な小ぶりの楕円形を呈す。短径約20cm、長径約40~70cmである。深さは6~20cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルト、黄灰色砂礫混じり粘質シルトが主を成す。ピット内から土師器細片などが出土した。

建物12(405・406・330・162・156・105・69・318・313ピット)(図104・109)

建物9の西側で建物3、建物4に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の西側で不明瞭な部分が多いが、東西5間(10.8m)以上×南北1間以上(4.0m)の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN-17°-Eである。柱穴間は東西列が平均2.0mを測る。南北列については、間にピットが検出されなかったため、不明瞭である。建物ピットの検出形は、やや方形気味に歪んだ楕円形を呈す。ピットの検出長径は38~58cm、短径は30~50cmで、深さは5~15cmを測る。

埋土は暗灰黄色砂礫混じり砂質シルトが主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物13(132・327・68ピット)(図104・109)

建物12、建物4に重複して検出された柱列で、掘立柱建物、あるいは柵列になるものと思われる。

遺存するピットは不明瞭な部分が多いが、東西1間(2.2m)以上×南北1間(2.2m)以上を測る。

主軸方向はN-13°-Eである。ピットの検出形は、小ぶりの楕円形を呈する。検出長径は30~50cm、短径は30~40cm、深さは10~20cmを測る。埋土は暗灰黄色および浅黄色粘質シルトが主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物14(34・38・56・86・75・83・62・95ピット)(図104・109)

建物1の東側で建物1、建物5に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の西側について不明瞭な部分が多いが、東西3間(6.0m)以上×南北2間(3.8m)の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN-20°-Eである。柱穴間は東西列が平均1.8~2.2m、南北列が平均1.6~2.2mを測る。建物ピットの検出形はやや小ぶりの方形気味で不整形な楕円形を呈す。検出短径は約30cm、長径は30~70cmである。深さは4~10cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトが主を成す。

ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物15(40・55・59・82ピット)(図104・107)

建物1、建物14に重複し、(その5)調査区と(その6)調査区にまたがって検出された掘立柱建物である。

建物の西側について不明瞭な部分があるが、東西2間(4.0m)以上×南北2間(3.9m)の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN-6°-Eである。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均1.9mを測る。建物ピットの検出形は、やや小ぶりの円形を呈すもの。また、方形を呈するものも見られた。方形を示すものの検出径は、一辺約35~40cmを測る。やや小ぶりの円形を呈すものは、検出径が約20cmを測る。深さは4~15cmを測る。埋土は灰黄褐色ないし暗灰黄色粘質シルトが主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

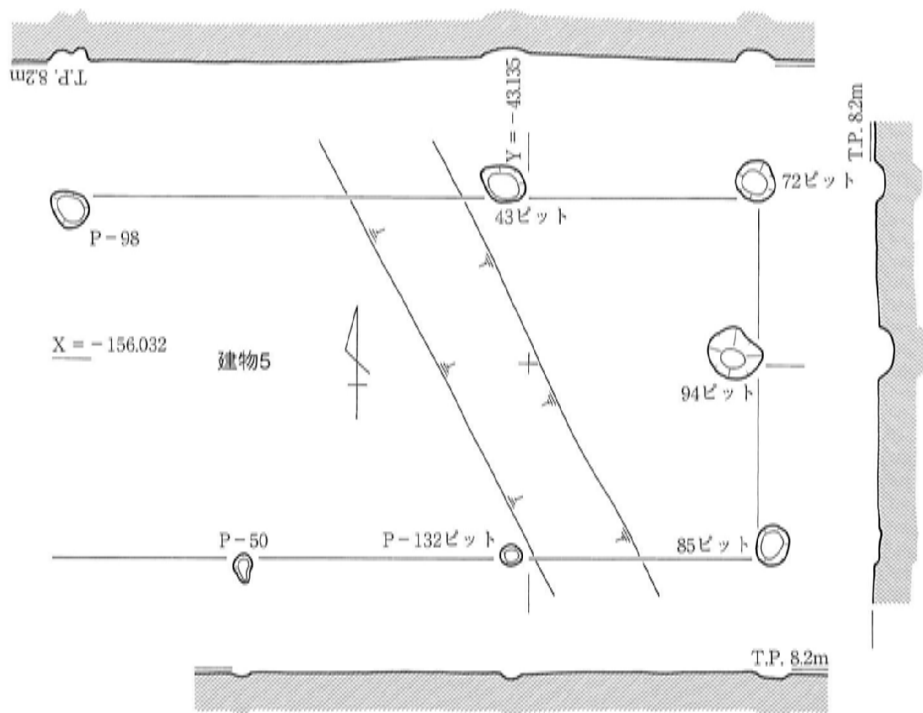
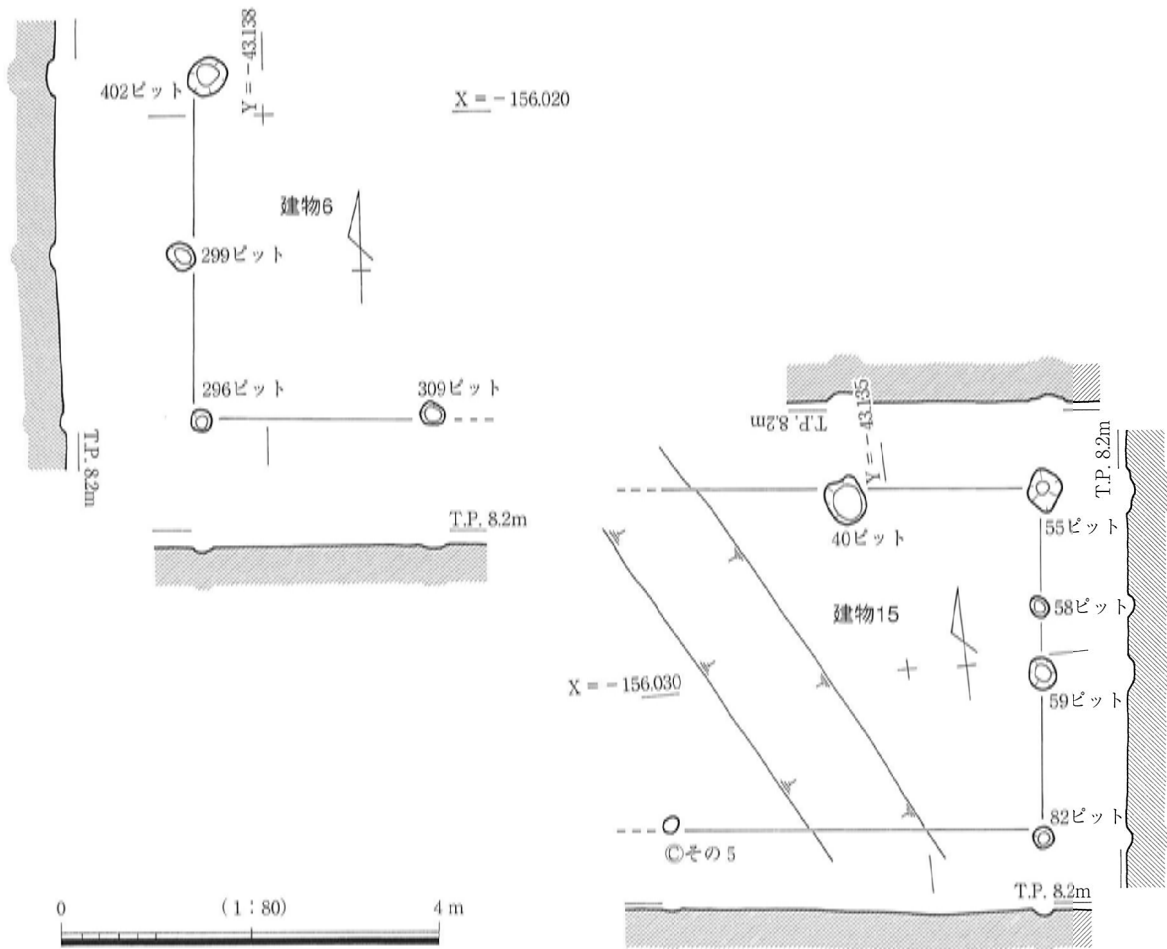


図107 第3面建物6・15・5平・断面図

建物16(179・197・201・389・181ピット) (図104・108)

建物2の南側で、建物3、建物4に重複して検出された掘立柱建物である。

遺存するピットは不明瞭な部分があるが、東西1間(2.0m)以上×南北2間(3.2m)以上の南北棟になるものと思われる。主軸方向はほぼ正方位を示す。柱穴間は南北列が平均1.8mを測る。

建物ピットの検出形はやや小ぶりの楕円形を呈すもので、短径約30cm、長径約40cm、深さは8～18cmを測る。埋土は暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、黄褐色砂混じりシルトが主を成す。

ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物17(367・366・387ピット) (図104・108)

建物2の北東側で検出された掘立柱建物である。

建物の北側、東側について不明瞭な部分があるが、東西1間(2.2m)以上×南北1間(2.2m)以上の建物になるものと思われる。主軸方向はN-6°-Eである。

建物ピットの検出形は、小さいほぼ円形を呈するもので、検出径は25～30cm、深さは10～20cmを測る。埋土はオリブ褐色砂礫混じり砂質土、黄褐色砂質土が主を成す。

ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物18(357・359・363・384ピット) (図104・108)

建物17に重複して検出された柱列で、掘立柱建物、あるいは柵列になるものと思われる。

遺存するピットは不明瞭な部分があるが、東西3間(5.2m)以上である。主軸方向は正方位を示す。

柱穴間は平均1.8～2.0mを測る。ピットの検出形は小型の円形を呈するものと、やや大きめの楕円形を呈するものが見られる。円形のもの検出径は約25cm、楕円形のもの検出短径は約30cmで長径は約60cmである。深さは5～10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂混じり砂質土が主を成す。

ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物ピット(190・206・94・216・189・182・288・217ピット) (図104・112)

検出された掘立柱建物の建物ピットは、上層の削平などの影響で不明瞭なものが多かった。建物や柵列のプランとして復元できなかったが、建物等のピットと思われるものもいくつか見られた。

190・206ピットは建物4、94ピットは建物5、216ピットは建物7、189ピットは建物8にともなうピットである。182・288・217ピットは建物等のピットと思われるものである。

190・94・182ピットは柱痕が見られるものである。

216・217・288ピットなどは、断面観察からおそらく残存していた柱を抜いたと考えられる。

これらのピットは、検出径が約25～50cm、深さは上層によって削平されて、浅くなっているものも見られたが、おおむね10～30cmを測る。

この他、ピット内埋土に黒褐色系粘質シルトが見られるもの(37・40・41・43・110・154・189・206・216・351・400ピットなど)が幾つか見られた。

黒褐色系粘質シルトは、第4面上で整地土層と見られる土層で「黒茶層」と呼称している土層にあたる。この土層がピット内埋土として入るということは、整地土として搬入される以前に建っていた建物であると考えられることができる。

掘立柱建物は第3面として検出しているが、下面の第4面相当時の掘立柱建物も含まれているものと思われる。

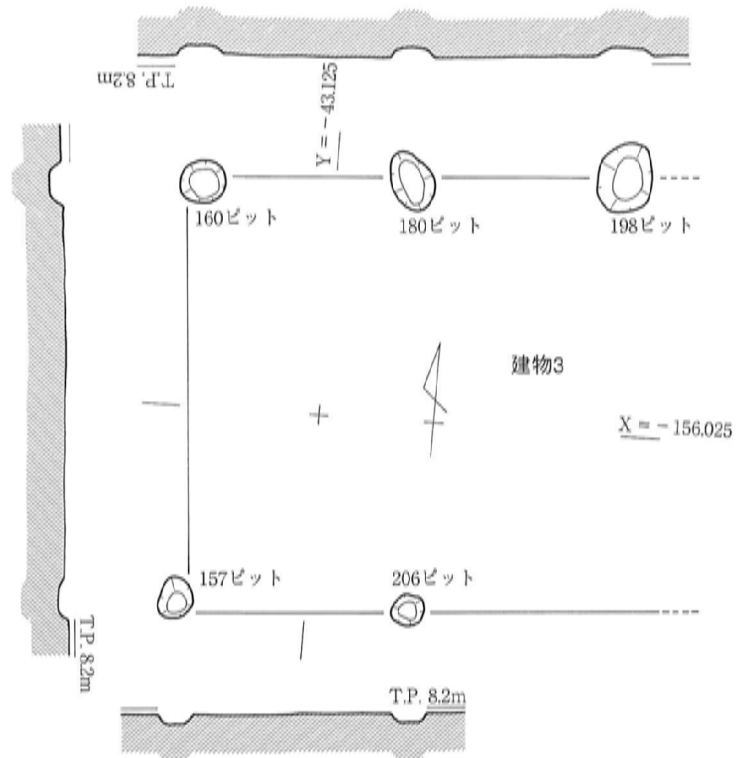
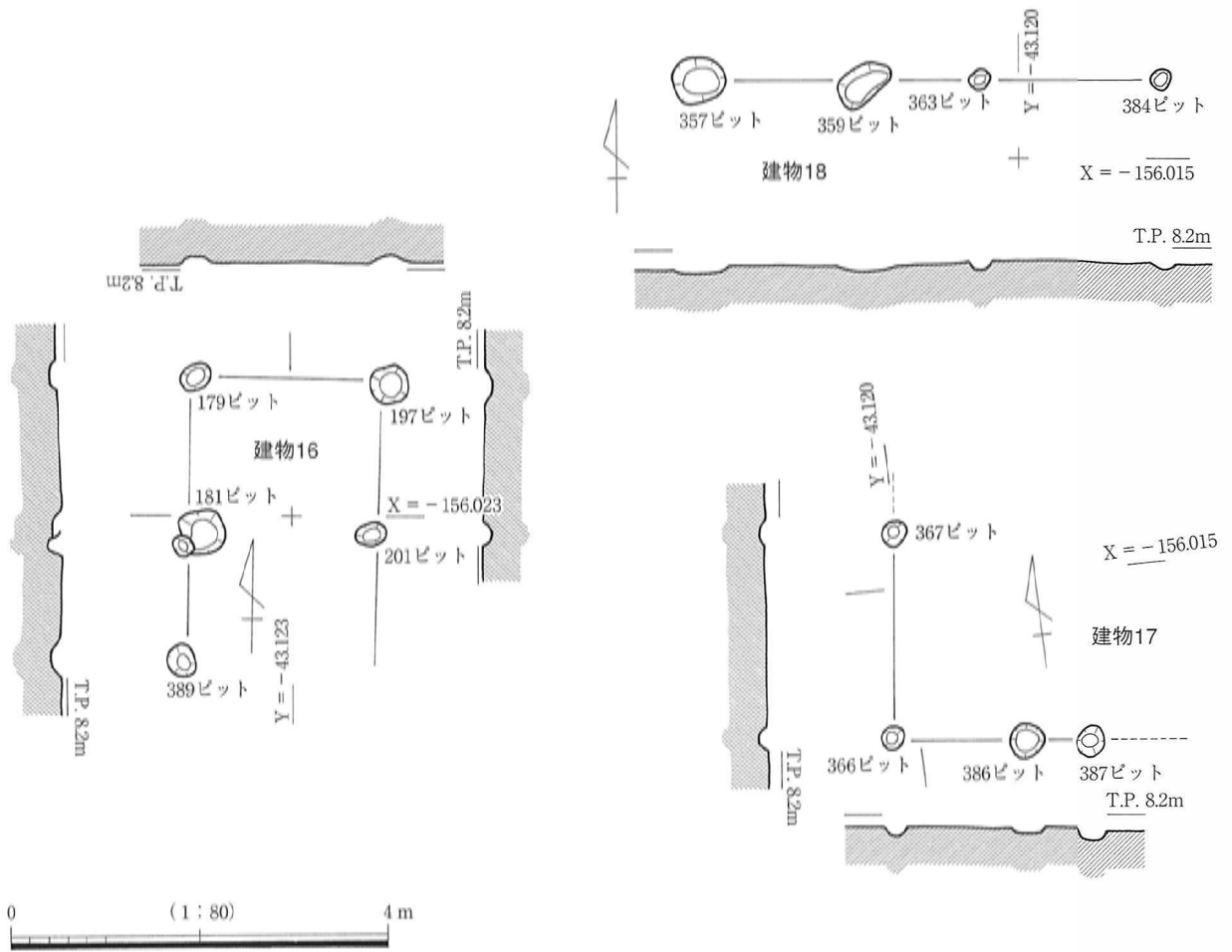


図108 第3面建物3・16・17・18平・断面図

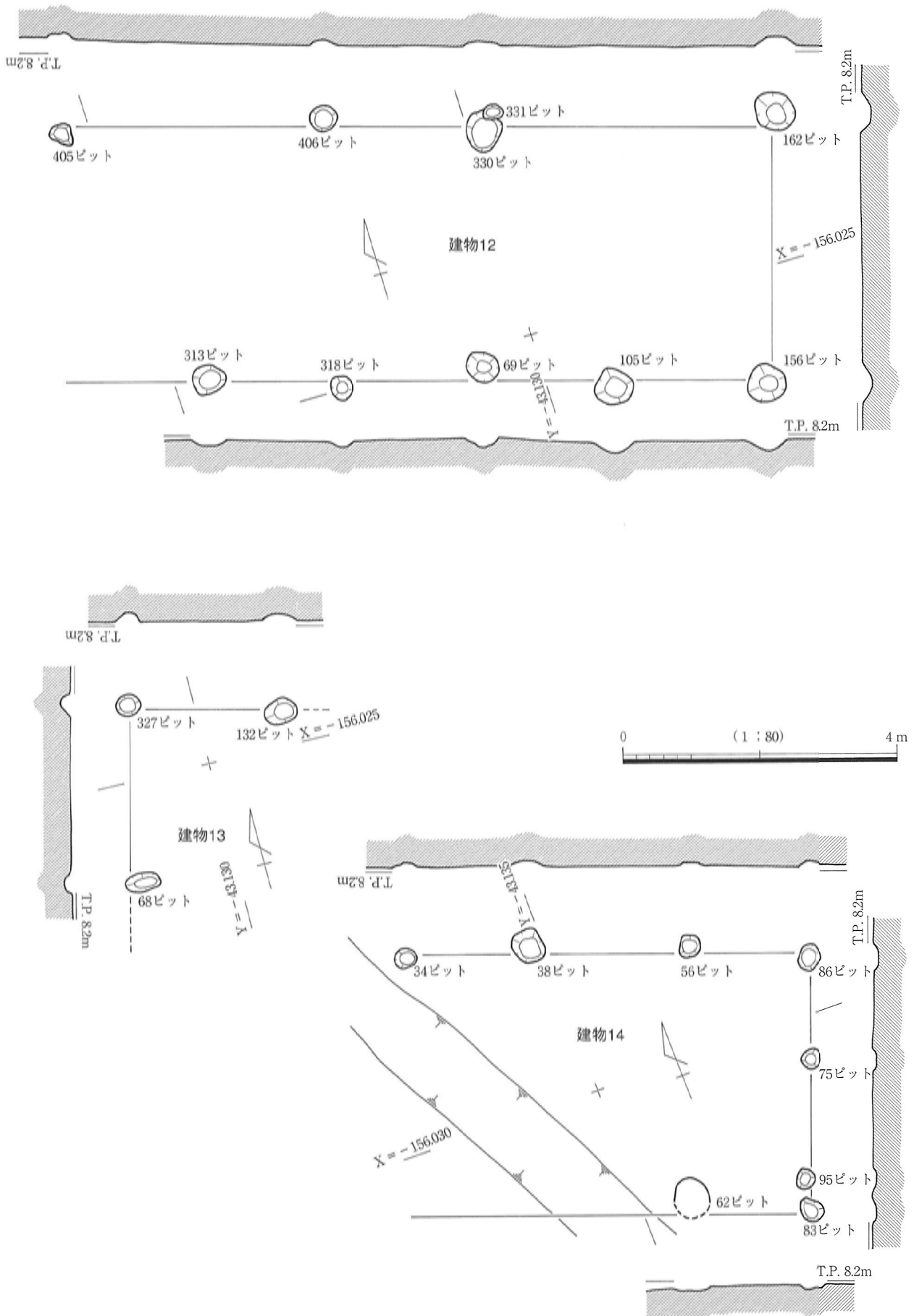


図109 第3面建物12・13・14平・断面図

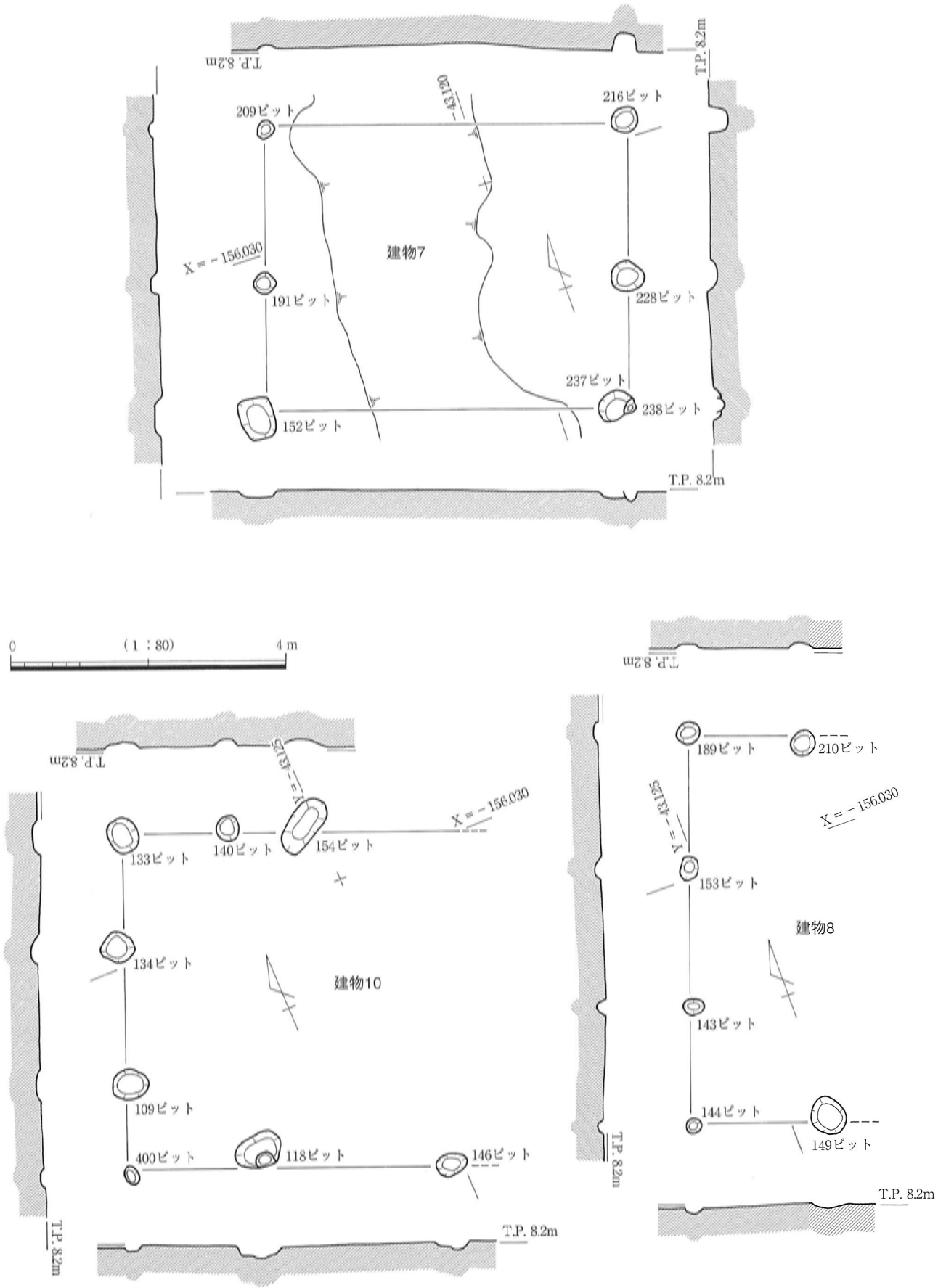


図110 第3面建物7・8・10平・断面図

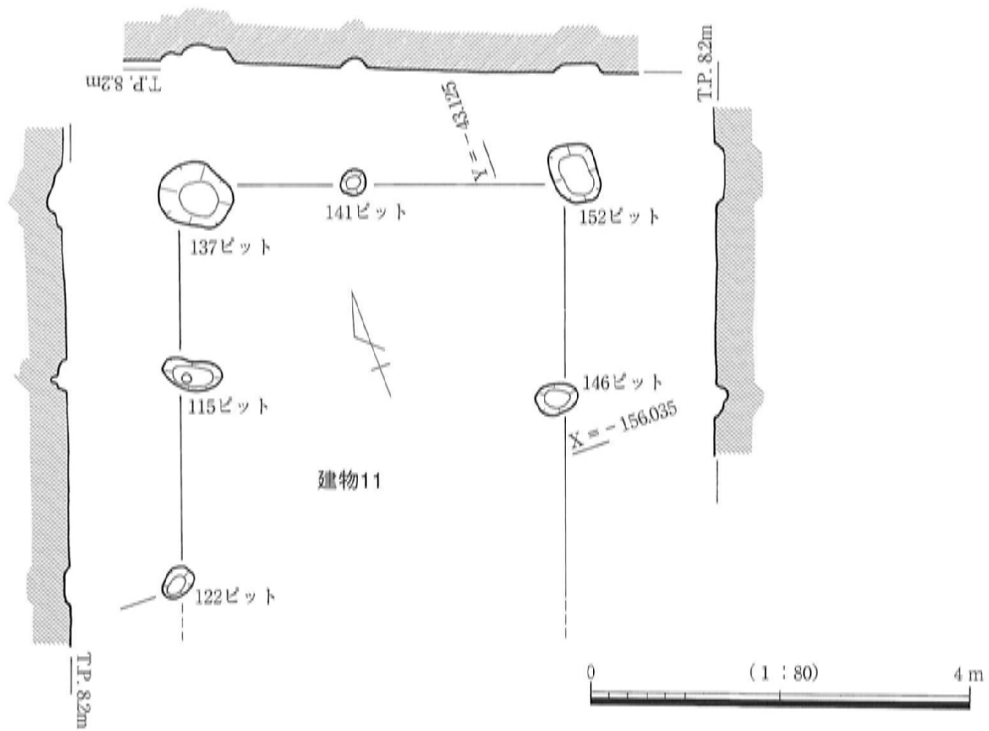
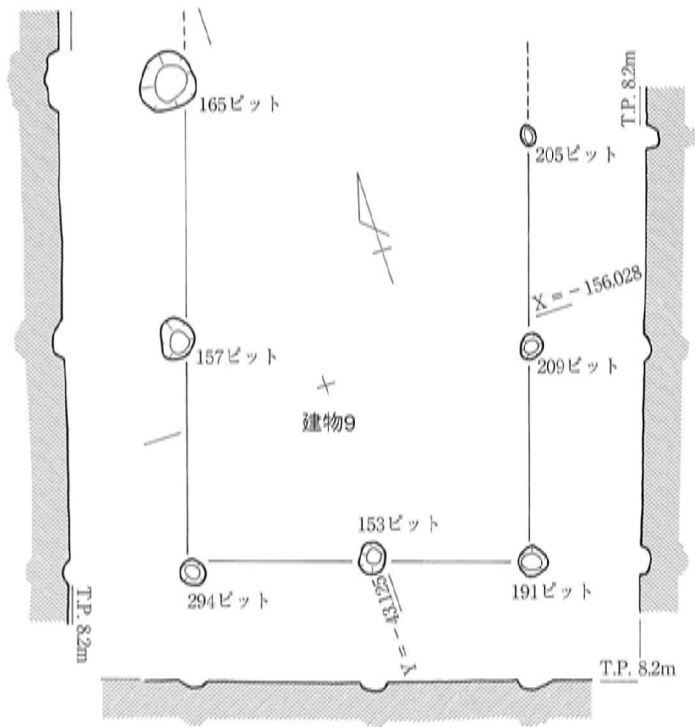


図111 第3面建物9・11平・断面図

・掘立柱建物の配置について (図104)

今回検出したピット群からいくつかの掘立柱建物のプランを想定することができた。想定された掘立柱建物のプランは、その主軸方向や、建物ピットの形態などからいくつかのタイプに分類することができた。分類については、(その5) 調査区の第3面で検出した掘立柱建物のプランに順じて行うものとする。

- ① 正方位……………建物1・建物5・建物6・建物16・建物18
- ② ほぼ正方位……………建物4
- ③ N-12° -E……………建物13
- ④ N-20~23° -E……………建物8・建物14・建物10
- ⑤ N-15~17° -E……………建物7・建物11・建物9・建物12
- ⑥ N-5° -E……………建物15・建物17
- ⑦ N-5° -W……………建物2・建物3
- ⑧ N-14° -W……………(該当なし)

これらのプランの相対順位として、①→②→⑦⑥→⑤③→④→⑧と考えることができる。

①は、やや古い様相が見受けられるが、建物の時期として奈良時代末頃に該当するもの。②は、平安時代から鎌倉時代頃、その他の建物は鎌倉時代から室町時代頃に相当するものと思われる。

建物の主軸の方向にやや違いが見られたが、その時点での土地区画の影響を受けるものと推測される。

建物ピット出土遺物 (図113 図版46)

建物7の216ピットからは土師器皿Jbタイプ細片 (図版46-437)、瓦器碗細片が出土している。175は瓦器碗口縁部片である。外面体部に密なヘラ磨きが残る点から、II-1~2期にあたる。他の瓦器碗は細片のため、時期の特定は難しいがおそらくII~III期に相当する事から、12世紀から13世紀初頭と考えられるものである。

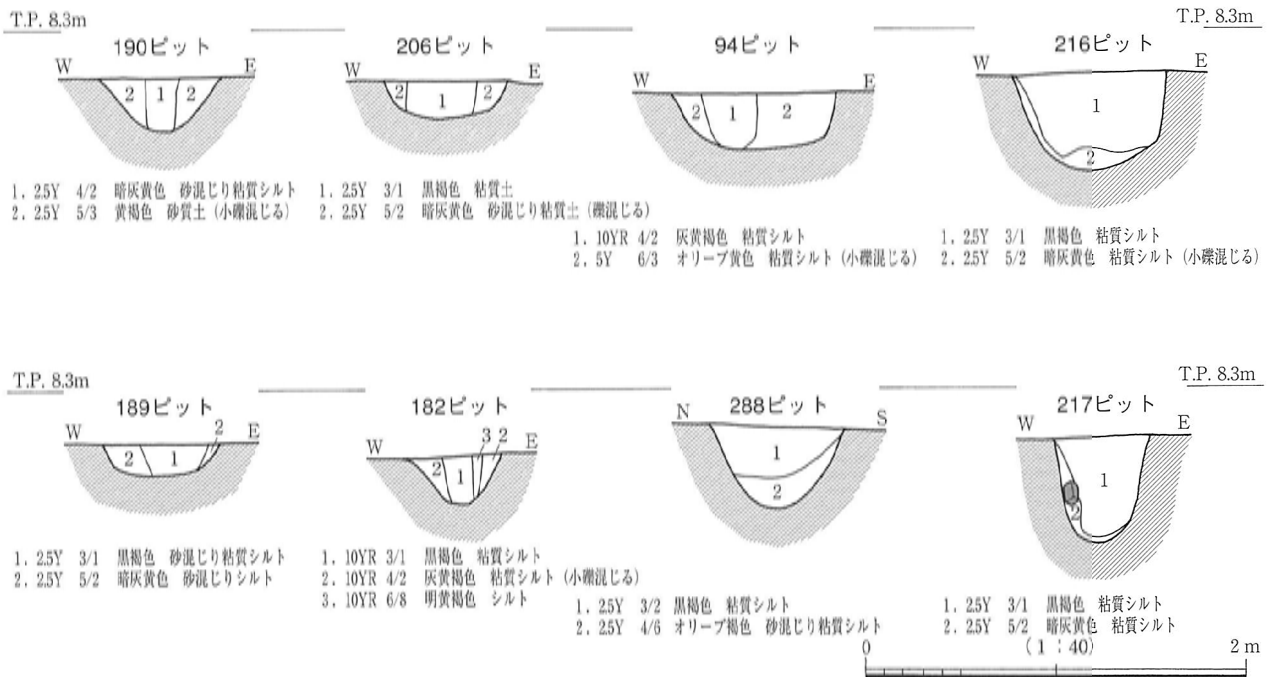


図112 第3面建物ピット断面図

214ピットからは瓦器椀高台片が出土している。176の時期はII-2～3期の12世紀中葉にあたる。

269ピットからは土師器細片と瓦器椀が出土している。177は見込みに斜格子状暗文、外面には体部下方までヘラミガキが施されており、II-1～2期の12世紀中葉にあたる。

263ピットからは瓦器椀が出土している。178は外面体部中央までヘラミガキが見られ、II-1～2期の12世紀中葉にあたると思われる。

この他、図示できなかったが、建物のピット埋土からは遺物が出土している。

36ピットからは須恵器器台片、土師質羽釜片。146ピットからは土師器皿片。240ピットからは瓦器椀片。256ピットからは瓦器椀片、土師器片、須恵質土器片。288ピットからは土師器片。335ピットからは瓦器椀片が出土している。

15井戸 (図103・114)

調査区中央部西側の微高地で検出した、やや不整円の平面形を呈する、素掘りの井戸である。

検出径は約1.0m、深さは約45cmを測る。断面形は、浅いすり鉢状である。埋土は、上層がオリブ褐色砂混じりシルト、中層が灰黄色および明黄褐色粘質シルトでブロック土が混じる。下層は明黄褐色砂質土で、止水堆積の様相を示す。井戸は比較的浅いものであることから、おそらく農業用などの溜め井戸として使用されたものと思われる。井戸内から遺物は出土しなかった。

491井戸 (図103・114 図版30)

調査区南側中央部の、方形区画溝の南側張り出し部西辺下層で検出した井戸である。

井戸の検出形は、やや不整形な円形を呈す。断面形は上部がラッパ状に広がり、下方は円柱状を示す井戸である。検出径は約1.7m、深さは約1.6mを測る。下方の検出径は約1.0mを測る。下層では曲げ物が3段重なって検出された。

埋土は、上層が灰黄色ないし暗灰黄色粘質土に明褐色粘質シルトのブロック土を含むもので、瓦器椀、土師器皿などの破片が多く出土した。また、遺存状況がきわめて悪いが、銅銭の一部も出土している。井戸廃棄後、人為的に埋め戻しが行われたものと思われる。

中層は灰色ないし暗灰黄色粘土と砂混じり粘質シルトの互層を成し、炭化物を含む層が見られた。滞水性の水成堆積の様相を示す。中層からは、完形品を含む瓦器椀・小皿、土師器皿や瓦質羽釜、須恵質すり鉢、箸など多くの遺物が出土した。瓦器椀・小皿、土師器小皿などは井戸内の北西部で集中して出土した。おおむね上面を向き、重なっている状況が看取できた。井戸機能時、あるいは井戸廃棄に伴い埋納されたものではないかと思われる。

下層では曲げ物が、据えられた状況で検出された。曲げ物の内側は、植物遺体を含む灰色砂混じり粘質土、最下層では褐色灰色砂層が堆積しており、止水堆積の状況を示す。また、曲げ物の外部は、緑灰色小礫混じり砂質土で湧水層になっている。

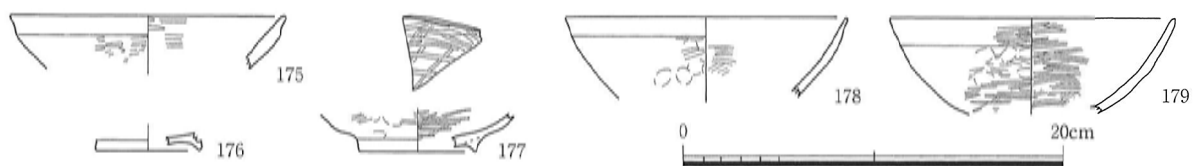


図113 第3面建物ピット他出土遺物

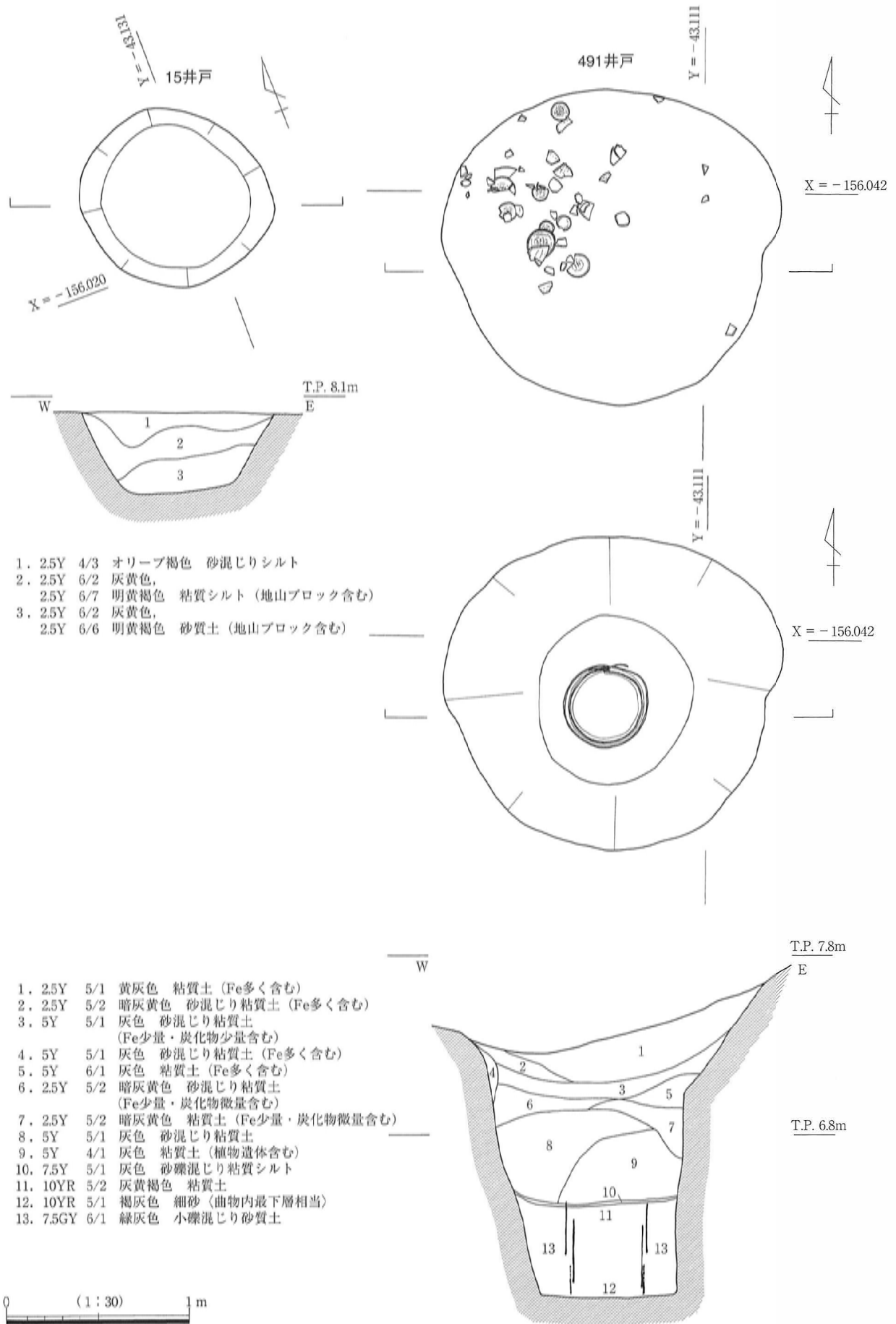


図114 第3面15・491井戸平・断面図

曲げ物は、井戸のほぼ中央部に設置されており、3段重ねられていた状況が看取できた。下段に径の大きなものを設置し、その上段にやや径の小さいものを入れ込んでおり、上段と下段の間には薄い板がかみ合わされ、落ち込まないように工夫されていた。最上段にはやや径の大きなものをはめ込んでいた。

出土した遺物などから、491井戸の機能時期は12世紀を中心とする時期で、13世紀中頃には廃絶していたものと想定される。

491井戸出土遺物（図115～117 図版43・44）

古墳時代と考えられる土師器体部破片、古代末の土師器皿、中世の瓦器皿・椀、土師器皿・壺、須恵質鉢、丸瓦細片などが出土している。

180・181は土師器皿である。180はJbタイプ、181はAaタイプと思われる。

182・183は土師器台付皿の台部破片である。184は、てづくねの蛸壺形をした土器である。

185は須恵質鉢であり、口縁端部は少し肥厚している。186は土師質口縁部である。これは口縁部の立ち上がりと鐙が小さい、平安京II期中の羽釜口縁部かと考えられる。

187～192は瓦器皿である。187を除き、全体に器高が深くて底部に丸みを持ち、見込みの暗文に斜格子状、密な平行線状などを施しており古い要素が見られる。

193～214は瓦器椀である。202・204・212・213は見込に斜格子状暗文、201・203・205～208・214は平行線状暗文、211はジグザグ状に施された暗文が見られる。これらのうち、最も古いと思われる211でI-3～II-1期、最も新しいと思われるもので、193・199・212のII-3～III-1期があり、12世紀代にあたる。

215～218は曲物である。215は直径48.5cm、高さ27.8cmを測る。幅約10cm、厚さ5mmの3段重ねの曲物内側に、一枚もので少し幅の長い曲物があり、さらにその内側には216が重ねられていた。3段重ねの曲げ物と、一枚もので少し幅の長い曲物との間には、幅5cmの板が縦方向に楔状に入れられており、しっかりと固定されている。

215の下部には直径2～5mmの小孔が一巡しており、木製の釘が残っている所もある。少し幅の広い一枚ものの曲物内面には、縦および斜め方向の細い筋が、0.5～1cm間隔で全面に施されていた。

216は直径43.6cm、高さ8.8cm。この内面には綴じ部分付近の一部にのみ、細い筋がつけられている。

217は直径43cm、高さ36.5cmの最も深い曲物で、内面には縦方向の細い筋がつけられている。

下部には215と同じく直径7mm前後の小孔が穿たれているが、さらに直径1.2×1.3cmの孔が1箇所開けられている。215内側の丈高い曲物は217と類似する。

218は直径43cm、残存高7.7cmで、曲物下部のみ残存し、直径5～9mmの孔が一巡する。内面には1cm間隔の細い筋が綴じ付近に一部見られ、内面全体に柿渋が塗布されている。曲物の材は、全て桜と思われる樹皮で綴じられており、215・217のように綴じが縦1列のものと、216・218のように縦2列のものが見られる。

219・220は中央部断面が多角形で、両端に向けて細くなる箸である。219は長さ20cm、幅0.4cm、厚さ0.5cmを測る。220は長さ20.7cm、幅・厚さとも0.6cmを測り、途中で折れ曲がっている。

221は不明板状加工品である。残存長12.6cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmである。4面と一端が加工され、他方の端は折損している。

図版43-436は古銭の縁が一部残存するもので、詳細は不明である。

492井戸 (図103・118 図版30)

調査区中央部の微高地上で検出した、南北方向にやや長い楕円形を呈する井戸である。

井戸の検出径は、長径が1.35m、短径が1.05m、深さは約1.4mを測る。

断面形は上方がやや狭いラッパ状に開くが、下方は円柱状を示す。おそらく曲げ物や井戸枠などがあったものと思われる。

埋土は、上層が褐灰色砂混じり粘質シルトでブロック土を含む。井戸内の南側肩部で銅銭が5枚重なって出土した。銅銭は、元豊通宝などの北宋銭である。井戸を廃棄する際に、銅銭などを埋納したものと思われる。中層は、明黄褐色砂礫混じり土と灰黄褐色砂質シルトなどが互層を成し、滞水性の水成堆積の様相を示す。わずかではあるが、瓦器碗、土師器などの細片が出土した。下層は、明黄褐色砂、および灰褐色粗砂礫土などの砂層で湧水層である。湧水層の上部は細砂であるが下方では粗砂、砂礫が堆積している。最下層は灰黄褐色およびにぶい黄橙色細砂が厚く堆積している。

出土した遺物などから、492井戸の機能時期は12世紀中葉頃と考えられる。

495井戸 (図103・118)

調査区東端部で方形区画溝の南辺下層で検出した、東西方向にやや広がりをもつ不整円形状の平面形を呈する井戸である。

井戸の検出径は、長径が約1.6m、短径は約1.3m、深さは約1.55mを測る。断面形は上部約50cmがすり鉢状に開くが、下部は径約0.9mの円柱状を成す。おそらく曲げ物や井戸枠などがあったものと思われる。

埋土は、上層が灰黄褐色粘質シルトおよび褐灰色砂混じり粘質シルトが堆積しており、焼けた瓦片、唐津焼皿片などが含まれる。井戸廃絶後に設定された方形区画溝内からの落ち込みにより、混入したものと思われる。中層は灰オリーブ色粘質土と砂礫混じり粘質土が互層を成す。ブロック土や小礫を含むものも見られることから、人為的に埋め戻しを行ったものと思われる。下層は炭化物や遺物片を含む灰色砂混じり粘質土、オリーブ灰色粘質土が堆積しており、止水堆積の様相を示す。遺物として、わずかではあるが、瓦器碗・小皿、土師器、須恵質土器などの細片が出土した。最下層はオリーブ褐色砂で湧

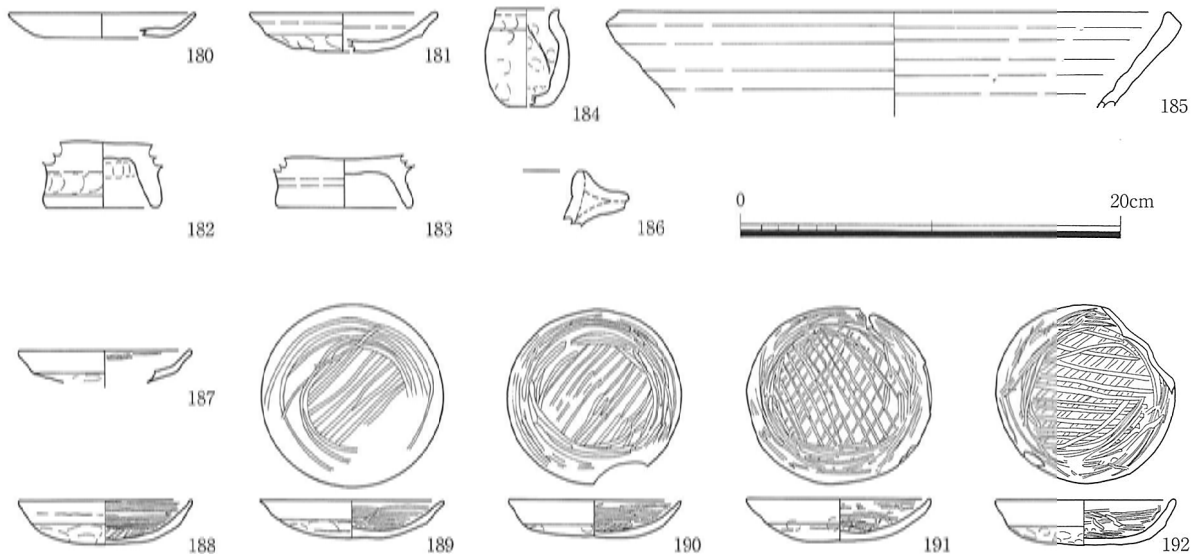


図115 第3面491井戸出土遺物①

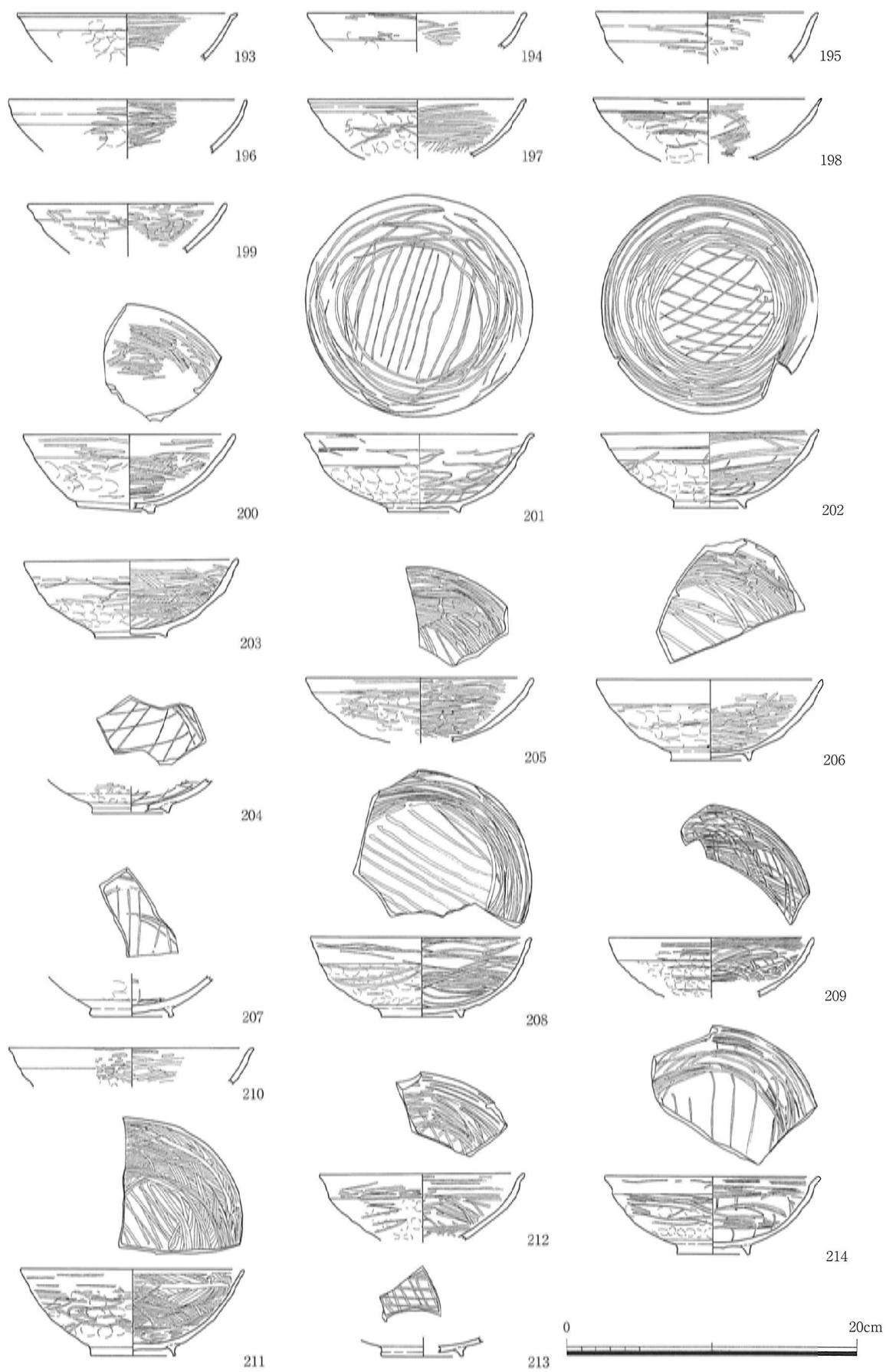


图116 第3面491井戸出土遺物②

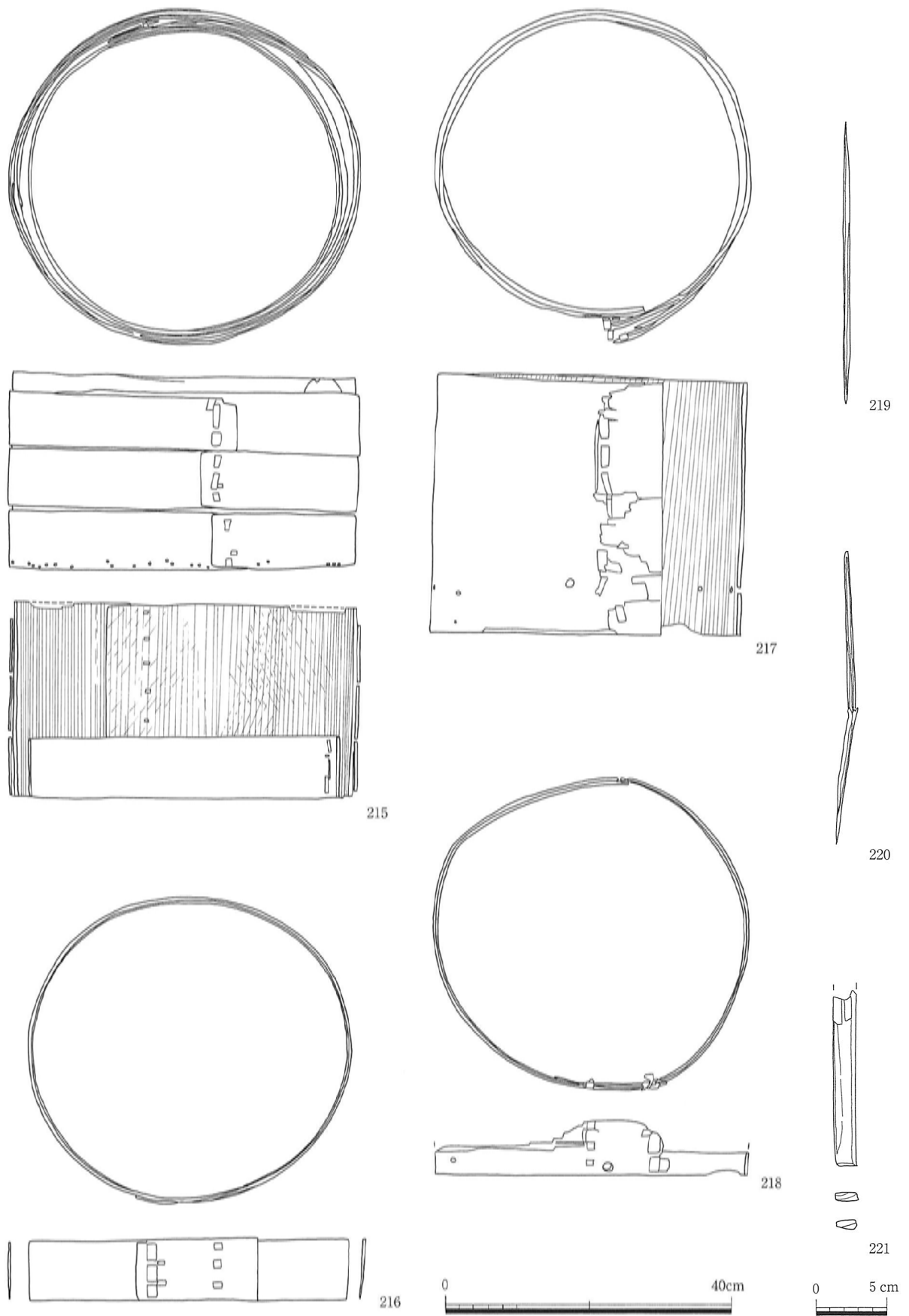


図117 第3面491井戸出土遺物③

水層となっている。

出土した遺物などから、495井戸の機能時期は12世紀後半頃と考えられる。

492・495井戸出土遺物 (図119 図版45)

492井戸からは土師器、瓦器、古銭等が出土している。

222は土師器皿で、ての字状口縁をなし、Baタイプの11世紀から12世紀のものである。223は瓦器皿である。これは破片ではあるが、若干底部に丸みが見られる。224～226は瓦器碗である。これらはII-2～3期の12世紀中頃にあたる。

227～230は北宋銭である。228が2枚重ねのため、計5枚出土している。227～229は初鑄1078年の元豊

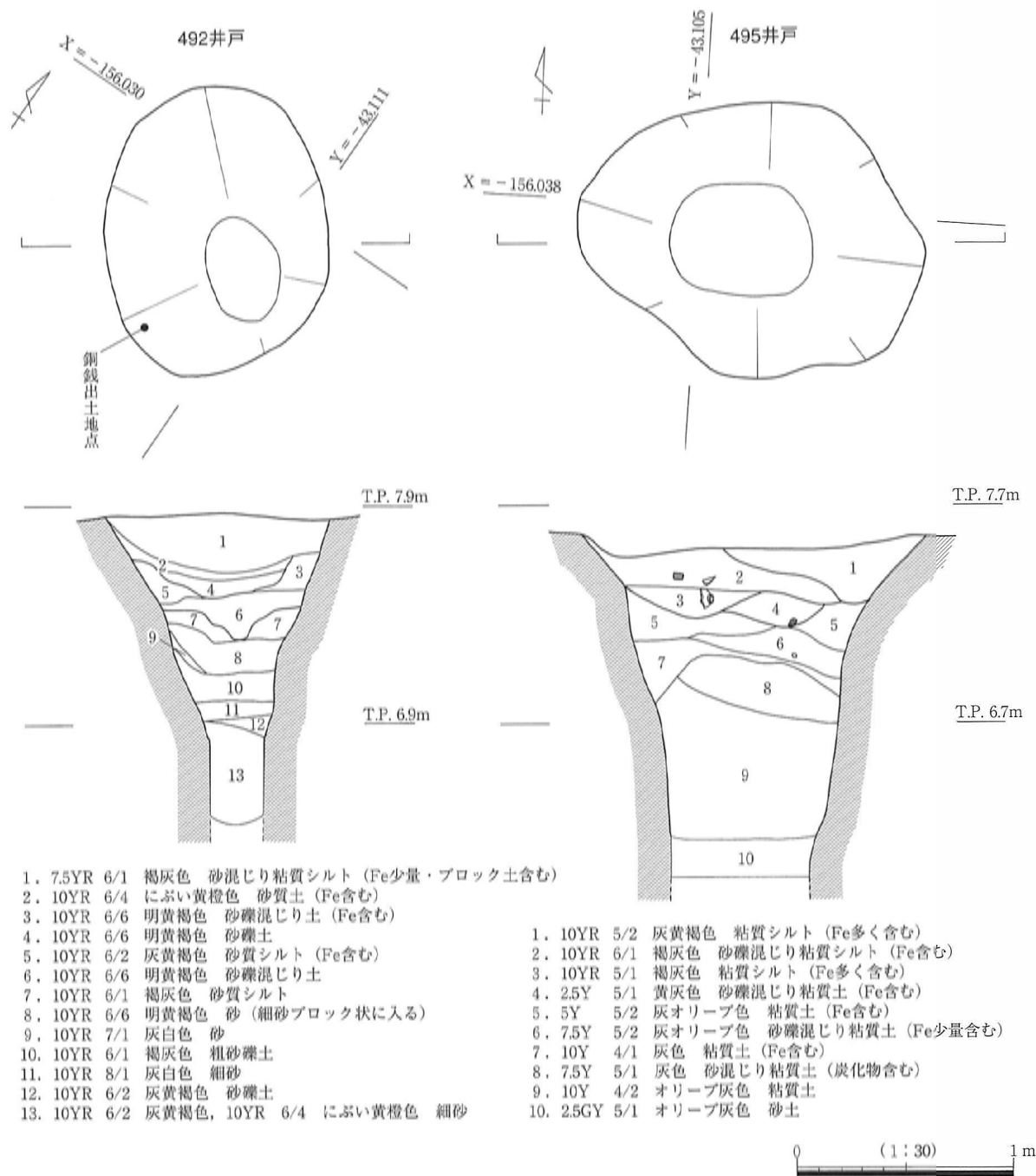


図118 第3面492・495井戸平・断面図

通宝で、227は篆書、228・229が行書である。230は初鑄1111年の政和通宝で書体は、分楷である。

これらの遺物から、492井戸は12世紀中頃に相当すると考えられる。

495井戸からは土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀、瓦質羽釜、瓦片などが出土している。

231は瓦器皿、232・233は瓦器椀、234は須恵質鉢、235は唐津窯系皿である。

瓦器椀はII-3～III-1期の12世紀後半代にあたる。須恵質鉢は第II期第2段階と第III期第1段階との中間形態と思われ、13世紀半ば頃に相当する。235は見込みに砂目の痕跡があり、17世紀前半のものであるが、他の中世土器とは異なり、方形区画溝内からの混入品と考えられるものである。

495井戸は12世紀後半から13世紀代に相当すると考えられる。

その他の遺構 (図103・120)

調査区西側から中央部の微高地で多数のピットとともに、多くの溝、溝状遺構、土坑、土坑状遺構などが見られた。

295溝は、調査区中央部西端で南西側から屈曲して北側に伸びる溝跡である。検出幅は約40cm、深さは約5cm、検出長は約3mを測る。西側は(その5)調査区に伸びているが、(その5)調査区では確認できなかった。また、北側にもさらに伸びる可能性が考えられるが延長は不明である。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。直線的に伸び、屈曲することから、計画的に掘削されたものと思われる。

埋土内からは遺物は出土しなかった。

66溝は、調査区中央部西端で北西側から南東側へ直線的に伸びる溝である。検出幅は約40cm、深さは約3cm程度である。上層の削平を受けているものと思われる。西側は(その5)調査区に伸びているが、295溝同様に確認できなかった。埋土は灰黄褐色砂混じり粘質シルトである。埋土内からは遺物は出土しなかった。

この他、63溝、139・142溝状遺構などが見られたが、いずれも上層の削平を受けているものと思われる、非常に浅く、不明瞭であるため、全容を把握することはできなかった。いずれも遺構内からは遺物は出土しなかった。

16井戸周辺で、不定形を呈する321土坑を検出した。321土坑は東西方向に長い楕円形状を呈する土坑

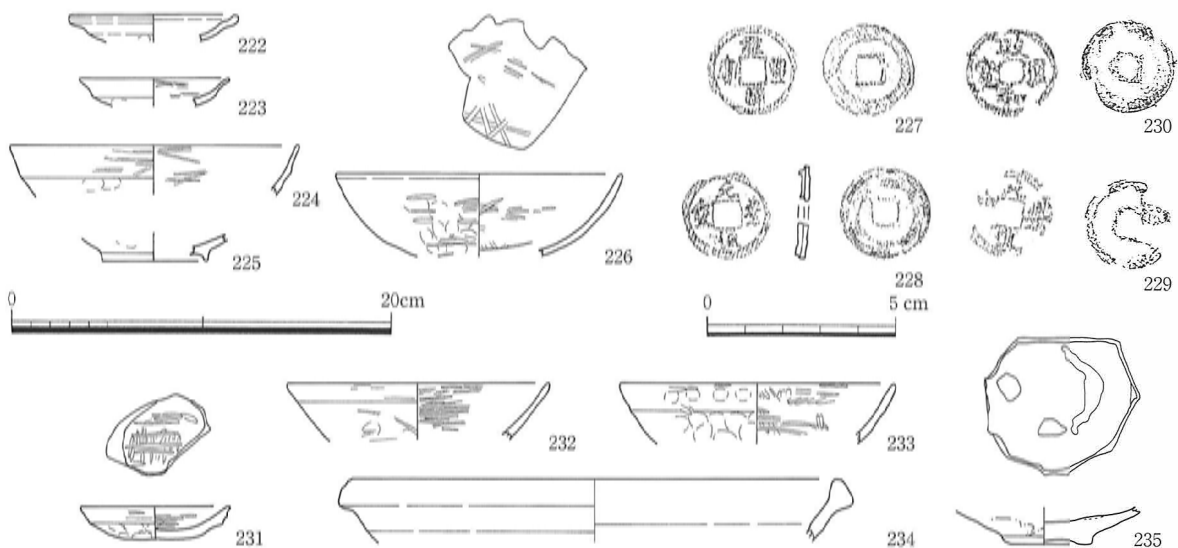


図119 第3面492・495井戸出土遺物

で長径が約2.5m、短径が約0.8mを測る。深さは8cm程度の浅いものである。埋土はオリブ褐色砂、砂礫混じり粘質シルト、下層は明黄褐色砂質シルトである。

16井戸の東側では、やや広いが不定形を呈する333・334土坑を検出した。

333土坑は南北方向に長い楕円形状を呈するもので、長径が約2m、短径が約1.2mを測る。深さは5cm程度である。埋土は褐色砂混じり粘質シルト、灰黄褐色シルトである。埋土内から、須恵器壺体部片が出土しているが、おそらく混入遺物と考えられる。

334土坑も同様に、洪水砂などが堆積した様相を示している。おそらく地面の浅い窪地に洪水砂などが堆積し、土坑となったものと考えられる。

この他、微高地上で検出された大小の土坑でも同様に流水・洪水砂などが堆積したものがいくつも見られた。遺構354・358・155・319なども同様のものと考えられる。

調査区西側中央部で建物ピット群の南辺に沿って、120・121流水跡が見られた。120流水跡は北方向に伸びる様相が見られる。121流水跡は東西方向に伸びる様相が見られるが、いずれも非常に浅く、不明瞭であるため、全容を把握することはできなかった。洪水時などに流水した跡と考えられる。

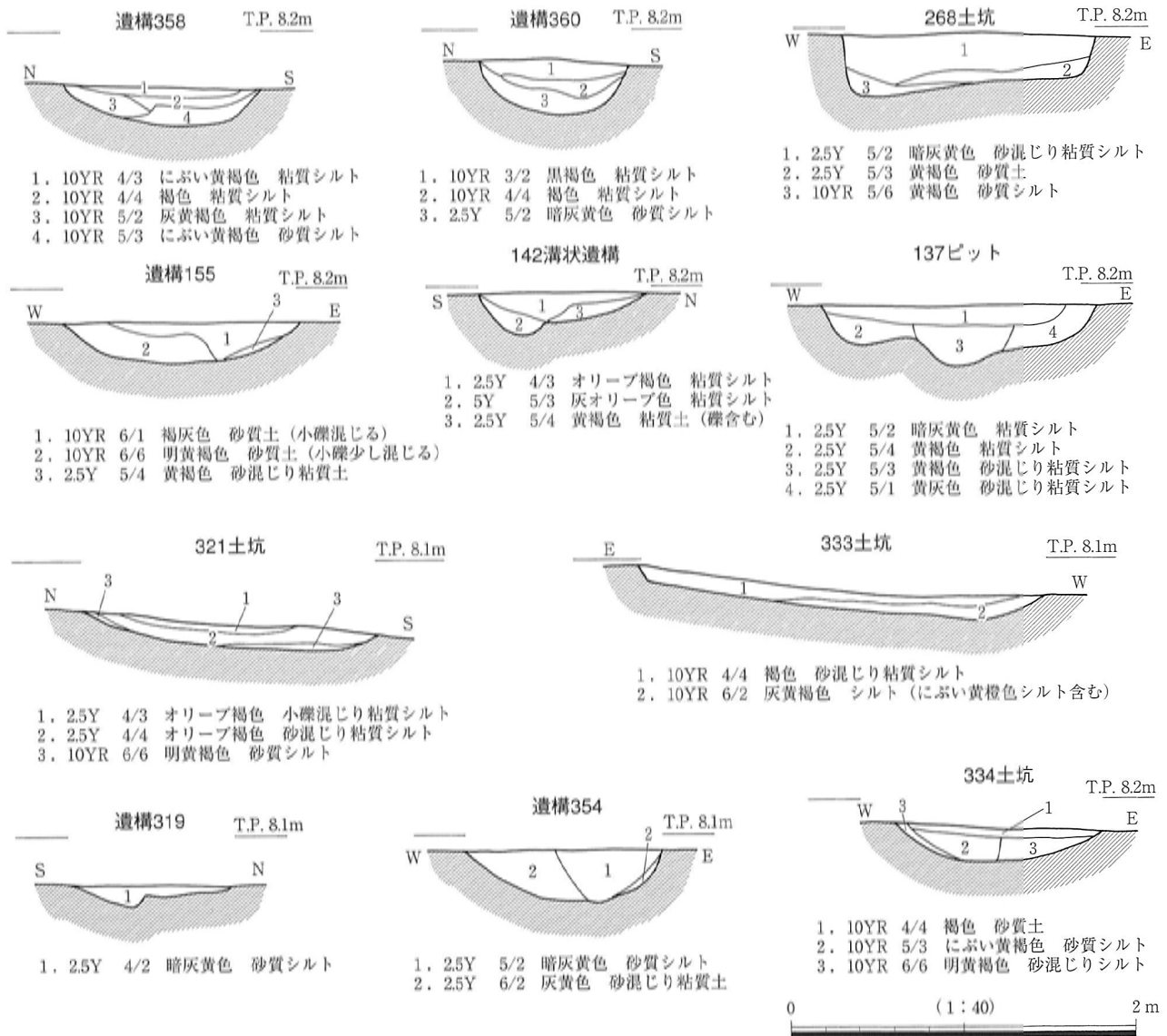


図120 第3面遺構断面図

第3面遺構内出土遺物 (268・333・334土坑) (図113・151 図版46・52)

268土坑からは土師器細片と瓦器椀が出土している。179は外内ともに密なヘラミガキが施されており、深く丸い体部をなす。時期はII-1期の12世紀前葉にあたると思われるものである。

333土坑からは古墳時代須恵器甕体部片と、中世の土師質羽釜体部片が出土している。334土坑からは焼成不良の須恵器甕体部と、円筒埴輪片 (図151 図版52-420) が出土している。いずれも、他からの混入と考えられる。

第3面包含層出土遺物 (図121・147 図版46)

第3面包含層からは弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代、平安時代の土師器・須恵器が少量と、中世の遺物がまとまって出土している。中世の遺物には土師器皿、土師質羽釜、瓦器皿・椀、瓦質甕・羽釜、須恵質鉢、陶磁器などがある。403は弥生中期の小型甕と考えられる底部破片である (図147)。

236~239は土師器皿であり、236がAbタイプ、237がBcタイプ、239はEタイプにあたると思われる。

238は色調が褐色で底部に回転糸切り痕が残る。このタイプは(その6) 調査区では1点のみの出土である。240は土師器の盤脚台と推定されるものである。

241・242は瓦器皿であり、底部が平らに近い形状をなす。242は見込みに斜格子状の暗文が見られる。

243・244は瓦器椀である。243は見込みに斜格子状暗文が見られ、II-2~3期にあたる。244は外面のヘラミガキが口縁部付近に見られることから、III-1~2期に相当すると思われる。

245・246は夏門碗窯系白磁碗で、13世紀第1四半期である。247は須恵質鉢で、第II期第2段階のものである。248は凸面に縄叩きと砂の付着、内面には布目が見られる。平安時代後期から鎌倉時代の平瓦である。

このほか、図化していないが、瓦質甕や常滑焼甕の体部片も出土している。

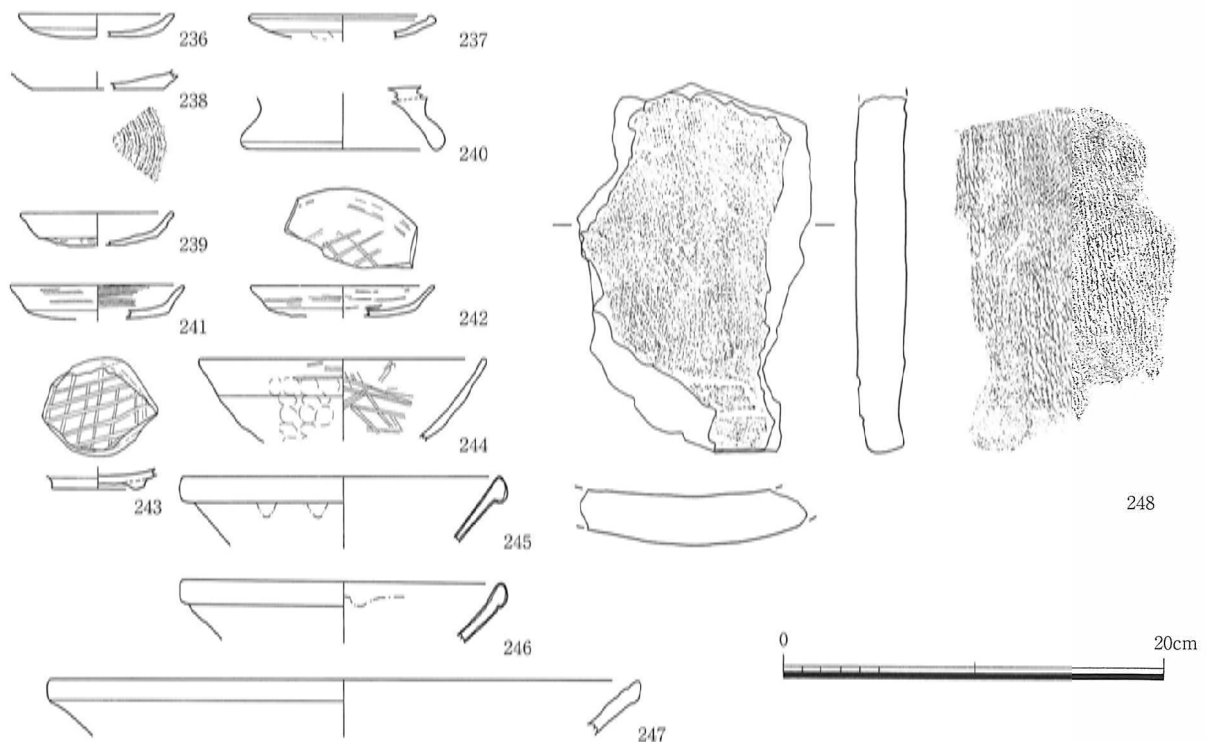


図121 第3面包含層出土遺物

第4-a面 (図122 図版31)

第4-1層の灰色ないし灰オリーブ色シルト層、および第4-2層にぶい黄褐色砂質シルト層を除去し、検出した面を第4-a面とした。上層の第4-1層は調査区の南側および東側で厚く堆積しており、西側の微高地ではほとんど第4-1層の堆積は見られなかった。第4面の地形は、調査区南側が谷状に落ち込んでいる。この谷部を中心として増水・洪水による砂層(第4-2層)が堆積していた。この砂層上面で、無数の足跡、わだち跡などを検出した。第4-2層砂層は、(その5)調査区の第4面で検出した東西方向に流れる南側川に相当する南側川(遺構500)の上面を覆っていることから、これまでの調査結果と照合して、南側川(遺構500)を中心とする遺構面を第4面とし、足跡、わだち跡などを検出した南側川(遺構500)上層面を第4-a面とした。第4-a面と第4面は洪水砂層を境にした前後の時期に相当するもので、あまり時期差がないものと思われる。

第4-a面では、南側の谷部で増水・洪水跡とともに、足跡、わだち跡などを検出した。検出面は、T.P.7.7m前後を測る。また、調査区北側は北東側に向かって低くなるが、砂層上に足跡、わだち跡などが見られた。さらに、(その5)調査区の第4面で検出した東西方向に流れる東側川に続く河川跡(北河川)を検出した。足跡、わだち跡は、T.P.8.1m前後を測る。北河川は、T.P.8.0m前後を測る。

調査区の南側では、耕作面で畦畔を検出した。調査後の資料整理の結果、畦畔は下層面の第4面に相当するものと考えられることが判った。第4-a面遺構図(図122)に畦畔493・494が含まれているが、下層面の遺構に相当するものと思われる。

各遺構および包含層から出土した遺物として、土師器、瓦器、須恵質土器などが見られた。

第4-a面の時期は、検出された遺構・遺物から平安時代後半から鎌倉時代初め頃に相当するものと考えられる。

493・494畦畔 (図122・123 図版31)

調査区の南側で耕作面にともなう畦畔を2条検出した。畦畔および耕作面上層には南側の谷部を一気に埋めた第4-1・2層および第4-3層の洪水砂層が堆積していた。先にも記したが、調査時には畦畔は第4-a面として検出したが、畦畔の上層を第4-3層の洪水砂層も覆っていたことが判ったため、本来は下面の第4面に相当するものと判断した。

493畦畔は、やや湾曲気味ではあるが東西方向を示す畦畔である。検出幅は約0.7~1.2m、残存する高さは約30cm、検出長は約9mを測る。畦畔の西側はおそらく流水・洪水などで寸断され、流失したものと思われる。東側はさらに伸びる様相を示す。畦畔の盛土は暗褐色粘質土のベース層にぶい黄褐色シルトおよび砂混じり粘質土を積み重ね、さらに上面を灰黄褐色粘質土で覆い、鉢伏せ状に形造っている状況が看取できた。盛土内からは遺物は出土しなかった。

494畦畔は、南東側から北西方向を示す畦畔である。検出幅は約0.6~0.9m、残存する高さは約30cm、検出長は約5mを測る。畦畔の北側は寸断されているが、南側はさらに調査区外に伸びる様相を示す。

494畦畔は鉢伏せ状を呈すが両側に浅い掘り込みの溝をともなうものである。溝の検出幅は約30cmで10cm程度の深さを有する。畦畔の盛土はベース層上に灰黄褐色粘質土と褐色シルトを積み重ねている状況が看取できた。盛土内からは遺物は出土しなかった。

494畦畔は、正方位に則ったものではなく、近接する南側川(遺構500)に対してほぼ垂直方向を示すものである。西側から東側に低くなるこの地の自然地形に沿って畦畔が形成されたものと思われる。

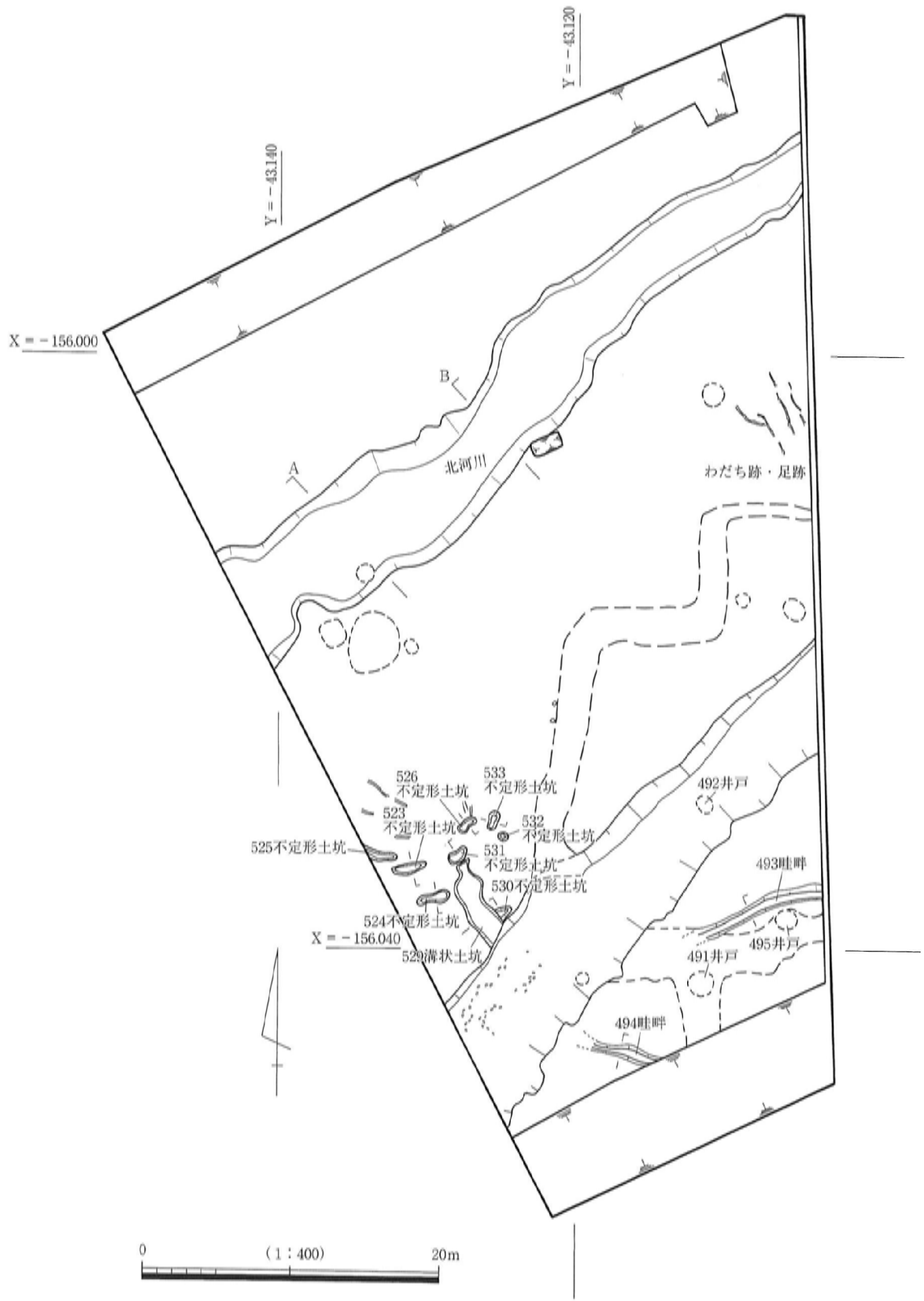


図122 第4-a面

不定形土坑・溝状土坑 (図122・123)

調査区西側の微高地上で、幾つかの不定形土坑および溝状土坑を検出した。主に微高地上で見られる堅く締まった黒褐色砂混じり粘質シルト層 (黒茶層) をベース層とする遺構である。

検出した523～526・530～533不定形土坑は、いずれも不整形な形状を呈すものである。検出幅はおおむね40～90cm、検出長は約0.7～2.5mが主を成す。深さは約10～20cmである。遺構の断面形は浅い皿状ないしレンズ状を呈す。埋土はにぶい黄褐色ないし灰黄褐色砂礫混じり粘質シルト、黒褐色砂礫混じり粘質シルトが主を成す。下層に砂層が堆積するものも見られた。

529溝状土坑は不整形な形状で南北方向に伸びるものである。検出幅は約1.5m、検出長は約6mで南側に伸びる様相が見られるが、南側川によって切られているため詳細は不明である。深さは約15～25cmを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質シルトが主を成し、灰黄褐色ないし黄褐色砂礫混じり粘質シルトが下層に堆積するもの。不定形土坑および溝状土坑は、おそらく地盤の窪地などにオーバーフローした洪水砂などが堆積したものと考えられる。

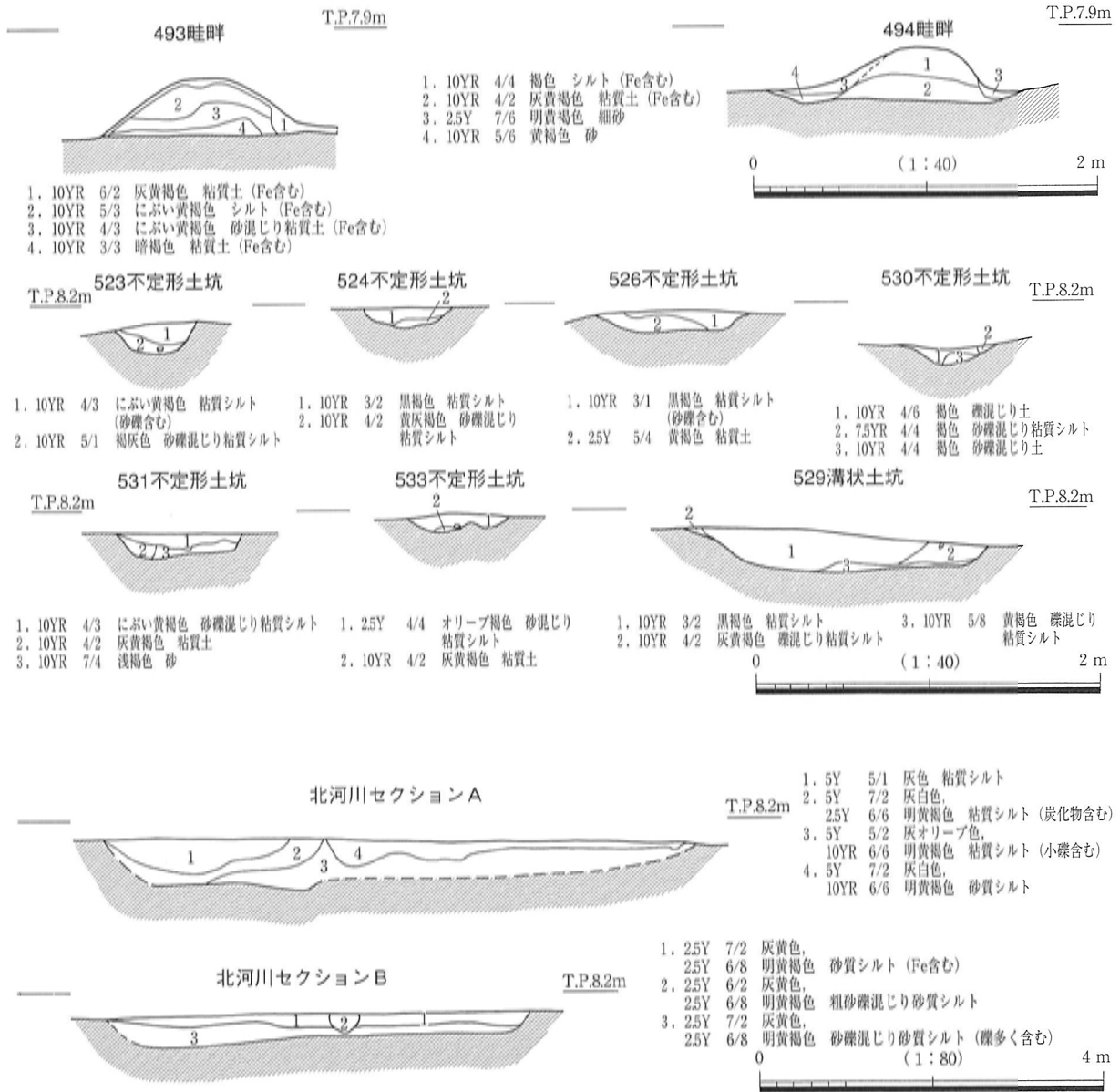


図123 第4-a面畦畔・不定形土坑・北河川断面図

529溝状土坑出土遺物 (図147)

529溝状土坑からは、古墳時代か不明の土師器細片、古墳時代と思われる須恵器甕体部破片が出土している。402は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての甕底部破片である。底部は小さな平底で、体部に叩き目が見られる。

北河川 (図122・123)

調査区の北側で東西方向に伸びる河川跡を検出した。

(その5) 調査区の第4面で検出された大河川から分岐して東側に伸びる東側川の延伸部にあたる。北河川は、検出時から遺構番号を付与することなく個別名称で対応しているものである。北河川は河川跡としたが、常時流水していたのではなく、大河川などの増水時に川筋となった流水跡である。南西側から東北側に流れを有していたものと思われる。

北河川の検出幅は約4～8.5mであるが、やや振幅が見られる。深さは10～60cmを測る。北河川は西側から東側へ向けて流れる流路跡であるが、調査区の東側で地盤がやや高くなるため、流路跡の西側で滞水し、川幅が広く底が深くなる様相が見られた。東側では流水が及ばないものもあり、断面観察用のセクションでは洪水跡の形跡があまり見られず、川幅も狭く、浅くなる様相が見られた。

埋土は、上層の灰色粘質シルトと灰白および明黄褐色砂質シルト層から成る流水堆積層と、下層の灰黄色ないし黄褐色砂礫混じり砂質シルト層から成り、西側では幾度か流水が起こった様相が見られた。

北河川内からはわずかではあるが、瓦器椀・小皿片、土師器皿片・土師質羽釜片、瓦質甕片などの遺物が出土した。北河川は、南側川の埋没時期頃から第3面で掘立柱建物や柵列が並ぶ時期頃までの間に流層した流水跡と考えられる。

北河川出土遺物 (図151 図版52)

ここからは418の円筒埴輪片、中世土器が少量出土している。中世の土器は瓦器椀、土師質羽釜、瓦質甕などの体部破片であり、いずれも細片のため、図化できなかった。

わだち跡・足跡 (図122・124 図版31)

調査区北東部の微高地上、さらに、西側の微高地上で無数の足跡とわだち跡などを検出した。また、調査区南側の谷部で南側川の上面で増水・洪水跡とともに、無数の足跡などを検出した。わだち跡、足跡の埋土内から遺物の出土はなかった。

調査区北東部および西側の微高地上で検出したわだち跡は、検出幅が約10cm、深さは10cm程度を測る。断面形はコの字状に四角い様相を示す。埋土はにぶい黄褐色細砂ないし細砂混じり粘質シルトが主を成す。ベース層は黒褐色粘質シルトおよび灰黄褐色砂混じり粘質シルトである。わだち跡の両筋間はやや蛇行するものも見られるがおおむね約1.5mを測る。検出長は約23mを測りほぼ平行して伸びている。この他、幾条にもわだち跡は見られた。

このように検出されたわだち跡は、おおむね南北方向を示すが、幾重にも重なって検出しており、また、その延長方向も一様ではなく、多方向を示している。

これらの事から、わだち跡を残した牛車は、街道や畦道を通行していたのではなく、湿地状態の荒野を縦横無尽に往来していたものと思われる。

調査区南側の谷部で増水・洪水跡とともに検出した足跡は、検出幅が約25cm、深さ3～8cm程度を測るもので、裸足の人間の足跡である。親指などが確認できるものもあった。埋土は第4～2層のにぶい黄橙色細砂、灰黄色砂質シルトが主を成す。ベース層は灰黄色砂質シルトが主を成す洪水砂層である。

足跡は一面に広がる状態で無数に検出されたが、足跡を辿れるものも見受けられた。足跡から、洪水砂で埋まった湿地状態の河川跡内を複数の人が、東から西へ移動している状況が看取された。

わだち跡や足跡は、これまでの大和川今池遺跡の発掘調査で、数多く検出している。(その4)、(その5) 調査区や大阪府教育委員会が平成7年度に調査をした3区出土の轍などである。いずれも、時代的には各々の検出面がおおむね古代末から中世にかけての時期に相当する事などから、広範に残る同一時期の遺構であると考えられる。

(その6) 調査区においては、第4面で検出した南側川(遺構500)の埋没後から第3面で検出した掘立柱建物や井戸を形成するまでの時期に相当し、平安時代末頃から鎌倉時代初頭頃に比定する事ができる。

第4-a面包含層出土遺物(図125 図版46)

ここからは古墳時代や奈良・平安時代の須恵器、土師器が少量と、中世の遺物が出土している。主に中世の遺物を図化している。

249は瓦器皿である。見込みに斜格子状の暗文が僅かに残る。250～252は輸入陶磁器である。250が14世紀前半の青磁蓮弁文碗、251が13世紀第1四半期の厦門碗窯系白磁碗、252がV4c類の白磁碗で12世紀

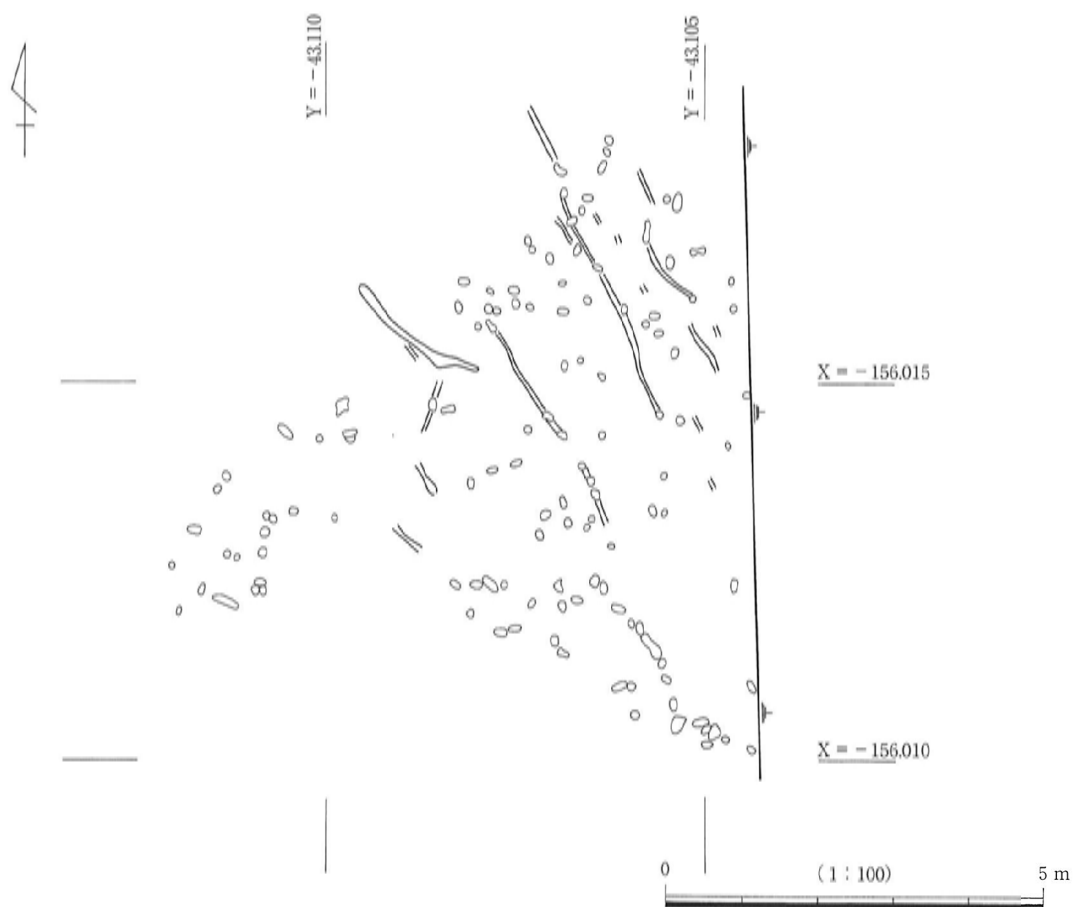


図124 第4-a面わだち・足跡平面図

後半のものである。253は器種不明の高台部分である。254は瓦質羽釜で和泉D1a型、255は土師質羽釜で河内B1c型と思われるものである。256・257は備前焼の播鉢と徳利である。2点とも16世紀で、播鉢が16世紀前半である。258は瓦質播鉢、259は第II期第2段階の須恵質鉢である。260は平安京II期古の時期と考えられる土師器甕である。261は16世紀前半の備前甕である。262は深鉢Iタイプの瓦質火舎底部である。263～265は軒平瓦である。唐草文の特徴から中心飾りが宝珠文軒平瓦に類似する、段顎の室町時代のものである。

第4-a面はおおむね第4面で検出した南側川(遺構500)の埋没後から第3面で検出した掘立柱建物や井戸を形成するまでの時期に相当することから、鎌倉時代初頭頃を中心とする時期にあたるが、度重なる洪水・増水などにより、上層のものや下層のものが入り混じっている状況が見られた。

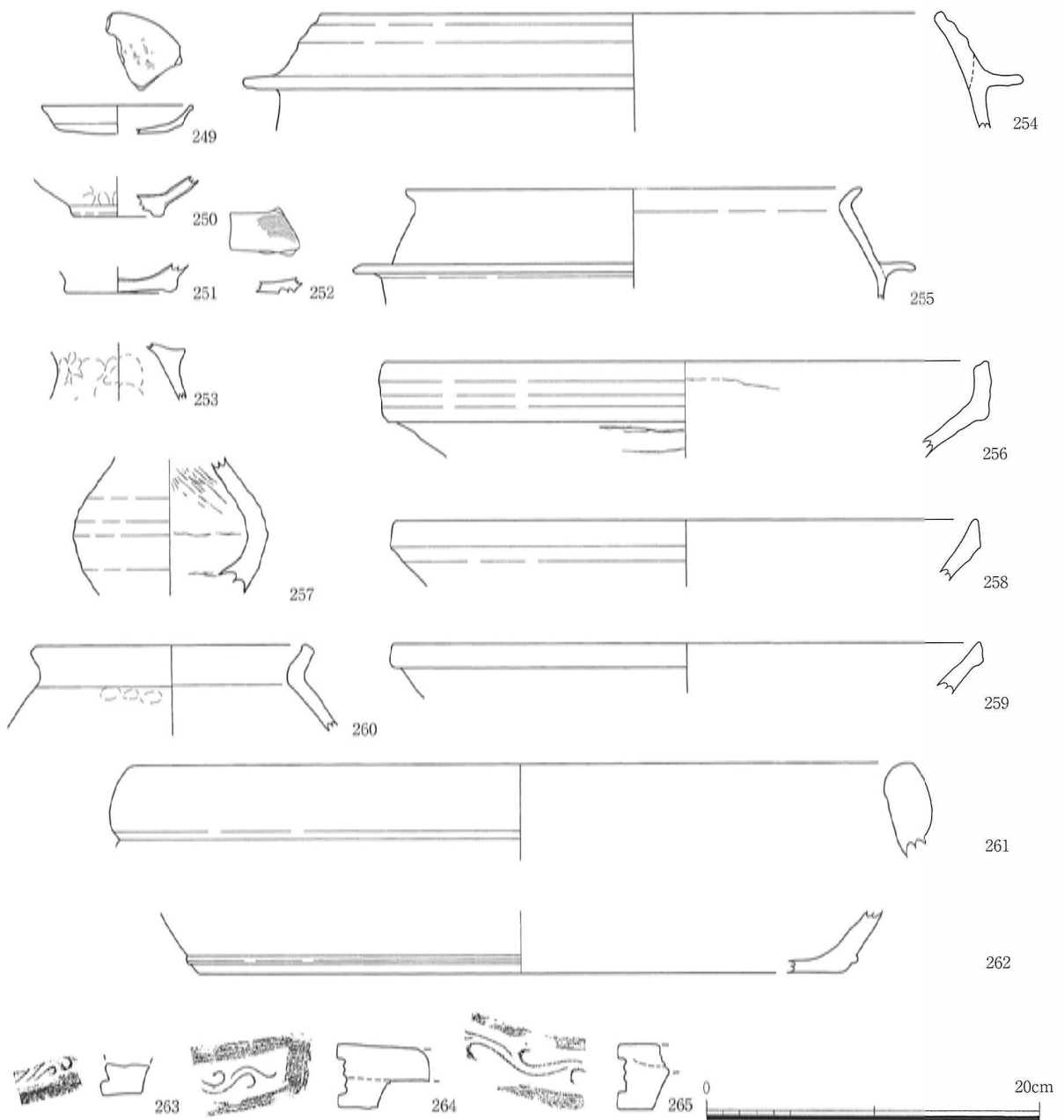


図125 第4-a面包含層出土遺物

第4面（図126）

第4 - 3層の灰黄色砂混じりシルト層の洪水砂層および灰黄褐色粘質シルト層を除去し、さらに南側の谷部に分厚く堆積した第4 - 2層のにおい黄橙色細砂の洪水砂層を除去して検出した南側川（遺構500）を中心とする遺構面を第4面とした。

南側川は、南側の谷部を深く刻み東西方向に流れる河川跡で、南岸部（右岸）は平坦面となっている。

南側川の北側（左岸）では、西側が黒褐色砂混じり粘質シルトをベース層とする微高地となっており、東北側に向かって徐々に低くなる様相を示す。南側川南岸部の平坦面では、灰褐色粘質土、暗灰黄色粘質シルトを中心とする第5層の整地層が見られた。この整地層の上面では畦畔をとまなう耕作面を検出した。検出時には第4 - a面としたが、整理した結果、第4 - a面相当時には第4 - 2層のにおい黄橙色細砂の洪水砂層で埋まっていたことから、第4面として検出した南側川と同時期頃のものであると判断したものである。この他、南側川の南岸で幾つかピットが見られた。

第4面では南側川内から、奈良時代から平安時代頃に相当する遺物が大量に出土した。また、円筒埴輪片や須恵器なども見られた。おおむね、南側川は奈良時代から平安時代頃に機能し、平安時代中頃には埋没したものと想定される。

南側川（遺構500・504）（図126～131 図版32・33）

調査区の南側で西側から東側へ向けて流れる河川跡を検出した。（その5）調査区で検出された南側川の延伸部にあたる。調査時には、遺構500として遺構番号を付与し遺物等の取り上げを行ったが、遺構の性格を明確にするため呼称名称として、「南側川」とする。

遺構504は、調査時には南側川と時期の異なる遺構と考え遺構番号を付与したが、調査の結果、南側川が分岐するものであることが判った。遺物の取り上げについては南側川（遺構500）と別に扱うが、遺構としては南側川として取り扱うものである。

・概要

南側川は、深さ約1.0～1.4mを測る。検出長は約35mで、（その5）調査区で検出されているものと合わせると全長約80mを測る。南側川はさらに調査区外に伸びている様相を示している。

・埋土（図128・129）

南側川の堆積状況については遺構を横断するセクションを設定し、観察をした。

南側川は幾度かの増水・流水を繰り返しながら、その洪水砂によって徐々に埋没していった状況が看取できた。南側川の北肩部（左岸）では、検出した区間について護岸強化のためのものと思われる盛土と整地している部分が見られた。

南側川内の埋土は、おおむね7層に大別することができた。

1層（西側セクション1～13）

灰黄色砂、明褐色粘質シルトなどの互層からなる南側川の上面を覆う洪水砂層である。下層には鉄分沈着が顕著に見られる。基本層序の4 - 2層に相当する。下面には夥しい無数の踏込み痕が見られた。

2層（西側セクション14～17、東側セクション1～9）

上層（西-14～16、東-1～4・7～9）は、におい黄褐色ないしオリーブ褐色粘質シルトなどが互層をなす流水堆積層である。下層（西-17、東-5・6）は、植物遺体や炭化物を含む、黒褐色ないしオリーブ黒色粘質土が主となる止水堆積層である。一時期河床となっていた状況が看取できた。2層の

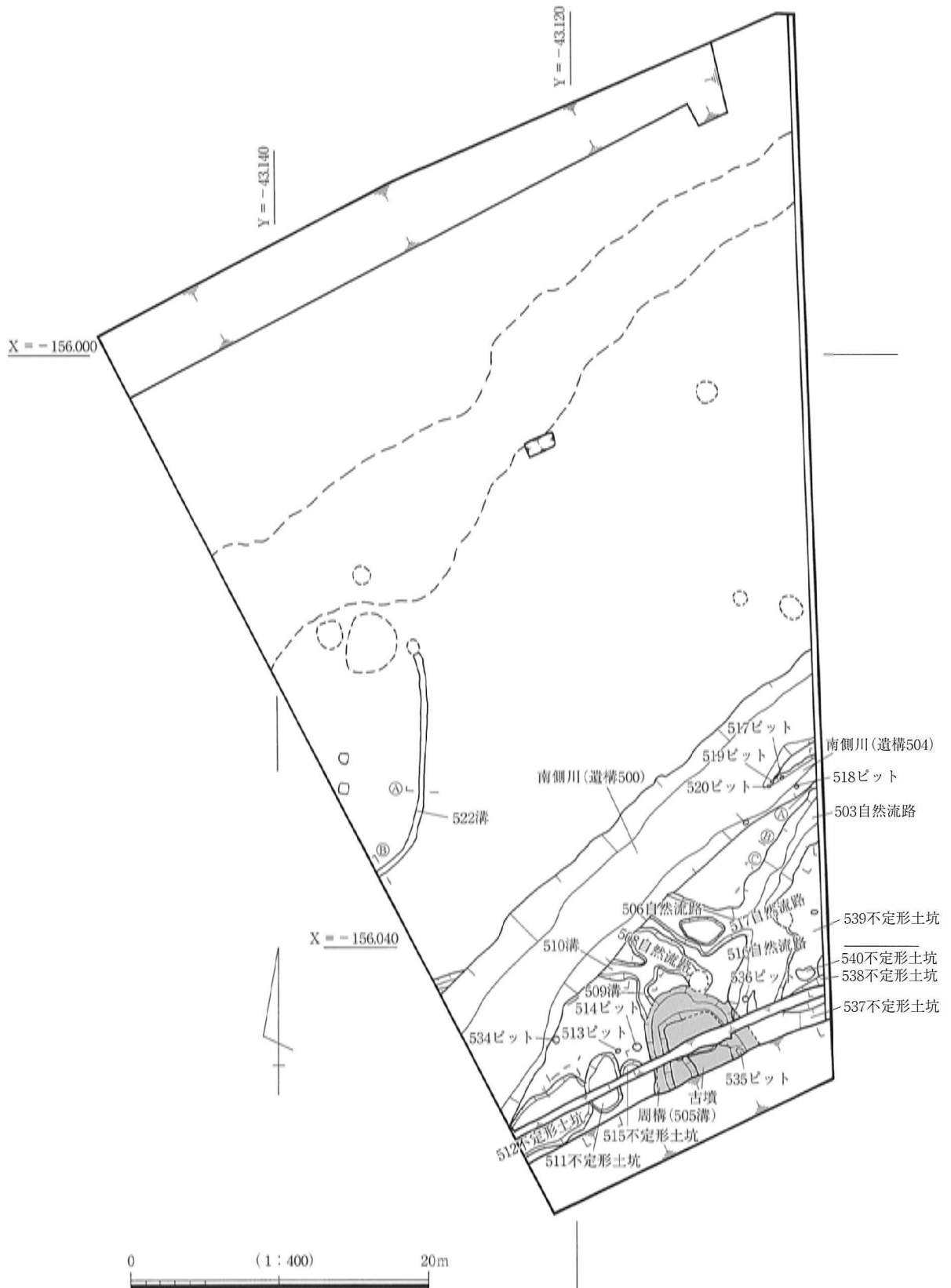


図126 第4面・第5面・第6面

層厚は約20～45cmを測る。

3層（西-18～36、東-10～19）

灰黄褐色ないし暗灰黄色砂礫混じり粘質シルトと灰白色砂が主となる堆積層（西-24～27、東-14～16）である。粘質シルトと砂層が互層を成す流水堆積の様相を示す。層中の一部では、暗灰黄色粗砂礫混じり粘質シルト（西-18～21・23、東-10）とその下層にオリーブ黒色ないし黒褐色砂混じり粘質シルト（西-22、東-11～13）が堆積しており、止水堆積を示すものも見られた。

最下層（西-33～36、東-18・19）では、オリーブ褐色砂ないし黄褐色細砂などが厚く堆積する沈殿堆積層も見られた。3層の層厚は約20～50cmを測る。

4層（西-37～47、東-20～23）

褐灰色および灰黄褐色細砂混じり粘質シルトが主となる堆積層で、ラミナが顕著に見られる流水堆積の様相を示す。4層の層厚は約10～50cmを測る。

5層（西-48～53、東-35～37）

黒褐色ないしにぶい黄褐色砂礫混じり粘質土が主となる南側川最下層の堆積層で、炭化物や植物遺体を多く含む層である。沈殿堆積の様相を示す。上層にはオリーブ黄色ないしにぶい黄褐色粗砂や砂が堆積する部分も見られた。5層の層厚は約15～40cmを測る。

6層（西-54～68、東-27～34・38～49）

黒褐色ないし褐灰色粗砂礫混じり粘質土が主となる堆積層で炭化物や植物遺体を多く含み、また砂礫が多く含まれ、非常に強く締まっている。土器の細片なども混入していた。特に、南側川左岸の肩部を覆うように厚く堆積する整地土層である。度重なる河川の増水・流水に対応する河川肩部の護岸堤になると思われる。6層の層厚はおおむね30cmを測るが、約60～80cmを測る部分も見られた。

7層（西-50、東-69・70）

青灰色およびにぶい黄橙色粘質土を主とする強く締まった堆積層で、地山層に相当する。

・護岸堆積（図129）

南側川左岸の肩部を覆うように厚く堆積する整地土層が一様に確認された。河川の増水・流水に対応する河川肩部の護岸堤になるものと思われる。南側川の6層に当たる。

南側川の肩部の地山層を覆うように川底からほぼ水平に積み上げられている状況が看取できた。南側川の下層堆積物であるにぶい黄色砂（9）層上に、黒褐色砂礫混じり粘質土（8）の整地土をブロック状に積み、ある程度の厚さに成るとつき固め水平にしている。さらに、黒褐色砂礫混じり粘質土（7）の整地土をブロック状に積み、つき固めて水平に整形していた。南側川の肩部際では、幅約60cm、深さ約30cm程度の溝状の窪みが見られた。溝状の窪み内には下層に灰黄褐色砂礫土（6）、上層に黄褐色砂混じりシルト（5）が見られた。おそらく河川内に流入する水を護岸堤内で排水するように工夫されていたものと考えられる。河川肩部上面には、黄褐色粘質シルト（3）、灰黄褐色砂礫混じり土（2）が層状に積み固められていた。上層にはにぶい黄褐色礫混じり粘質シルトがやや厚く積み重ねられている状況が見られた。

整地土を積み重ねるといふ工事内容であるが、南側川左岸のほぼ全域でこのような堆積層が見られることから、かなりの大きな工事であったと考えられる。積み重ねられた整地土は、搬入されてきたものである。（その5）調査区の調査においてもこのような整地土が確認されているが、おおむね調査区の南方向から搬入されてきたものと推測される。この地域において大規模な開発が行われたものと考えられる。搬入されてきた整地土中には、須恵器片や土師器の細片が含まれていることから、生活層を含む

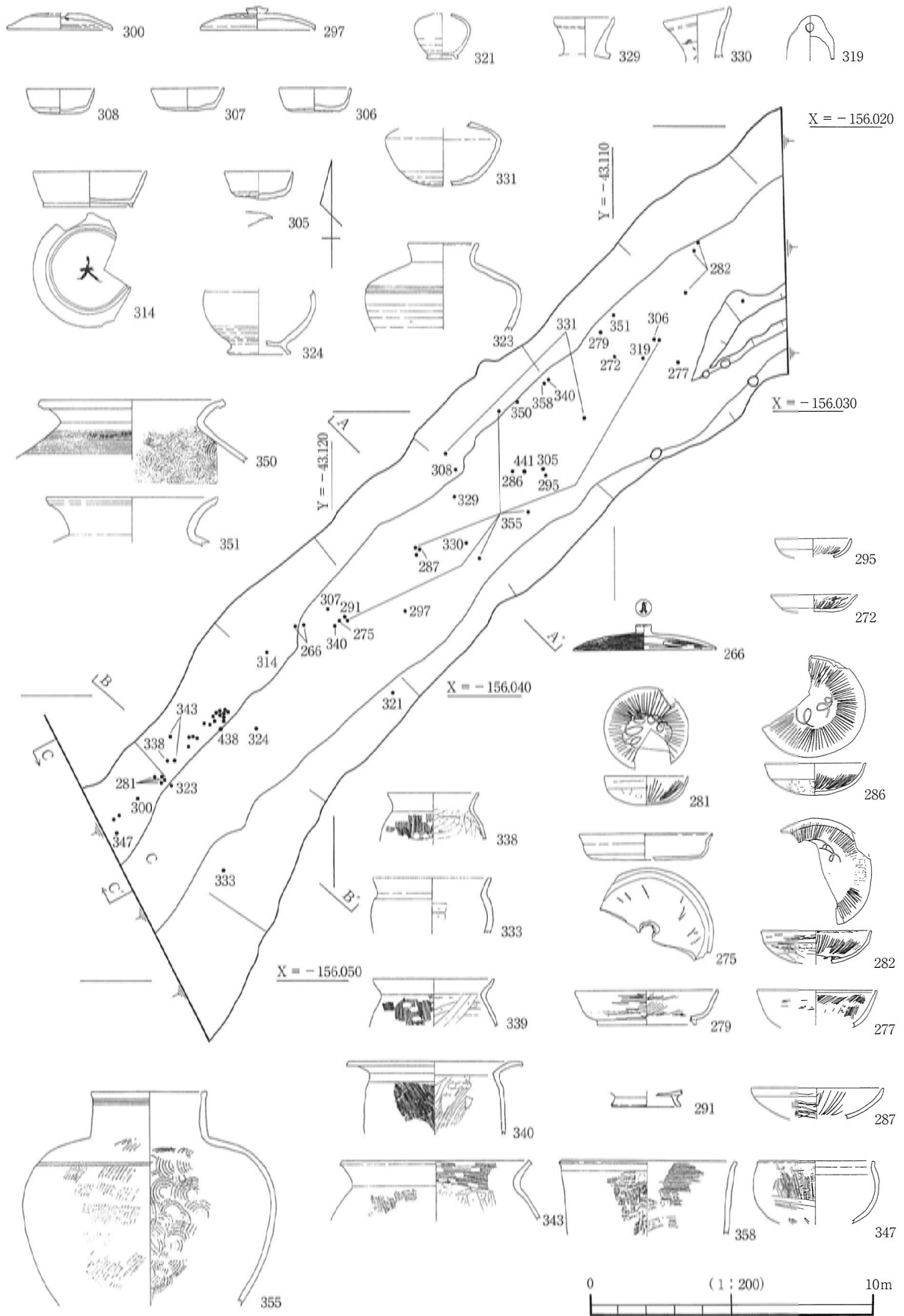


図127 第4面南側川(遺構500)遺物出土配置図

土層が掘削されたものと思われる。

南側川は、出土した遺物や堆積状況などから、奈良時代から平安時代頃に機能し、平安時代中頃には埋没したものと想定される。このような大規模な土木工事が南側川の機能時に行われていたことが確認された。

大和川今池遺跡の東側には、阿麻美許曾神社が鎮座している。延喜式内社で、平安時代前期の大同年間(806~809年)の創建と伝えられている。この神社の境内に「行基菩薩安住之地」の石碑が建っている。『河内国名所図会』や『河内国名所鑑』などでは、この神社に行基が居住していたとされる。

また、神社から西北側に、行基が作ったと伝えられる行基池、行基が開いたものと伝えられる北山の墓地、そこにあったとされる行基塚、調査区の上に架かる行基大橋など行基に関連する地名や伝承が残っている地域でもある。伝えられる行基の功績としては、池を築き、溝を掘り、橋を架け、道を造り、寺院を建てるなどさまざまな社会活動を行っている。

大和川今池遺跡内で見られる土木工事の痕跡が、行基に由来するものかどうかは判らないが、近接してこのような伝説が残り、また、大和川今池遺跡の西側には、築造された古代の池である「依網池」が在り、古代の計画された官道である「難波大道」が遺跡内を通過する事などから、河川の護岸工事や大規模な開発は容易に計画されたものであったのかも知れない。

当地においては、土木工事や開発に伴うあらゆる知識と技術が集約されていたものと思われる。

・遺物検出状況と河川の機能 (図127・130・131 図版33)

南側川内からは、数多くの遺物が出土した。奈良時代、平安時代のものが主をなすが、古墳時代の埴輪なども多く出土している。南側川内では、遺物はある程度のまとまりを持って出土している。

特に南側川の左岸寄りから出土しているものが多く見られた。おそらく南側からの北側の微高地に集落域が存在したためと考えられる。

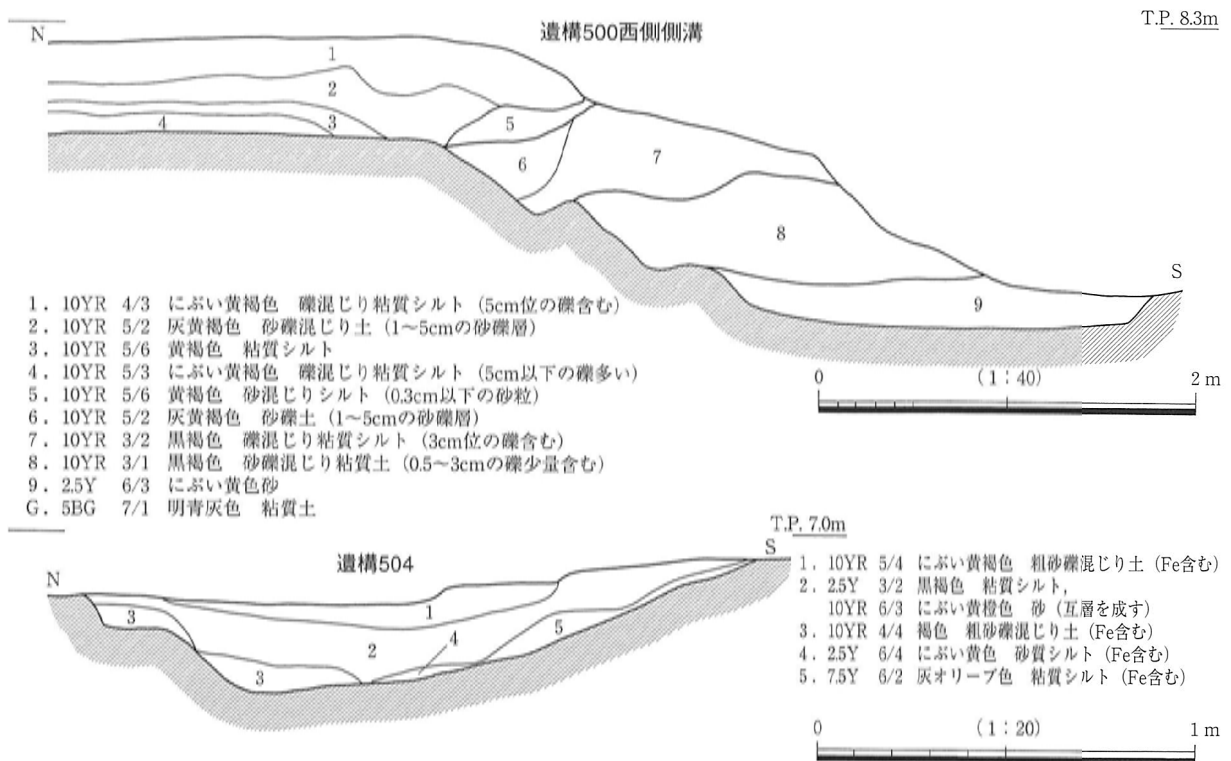


図129 第4面南側川(遺構500)護岸他断面図

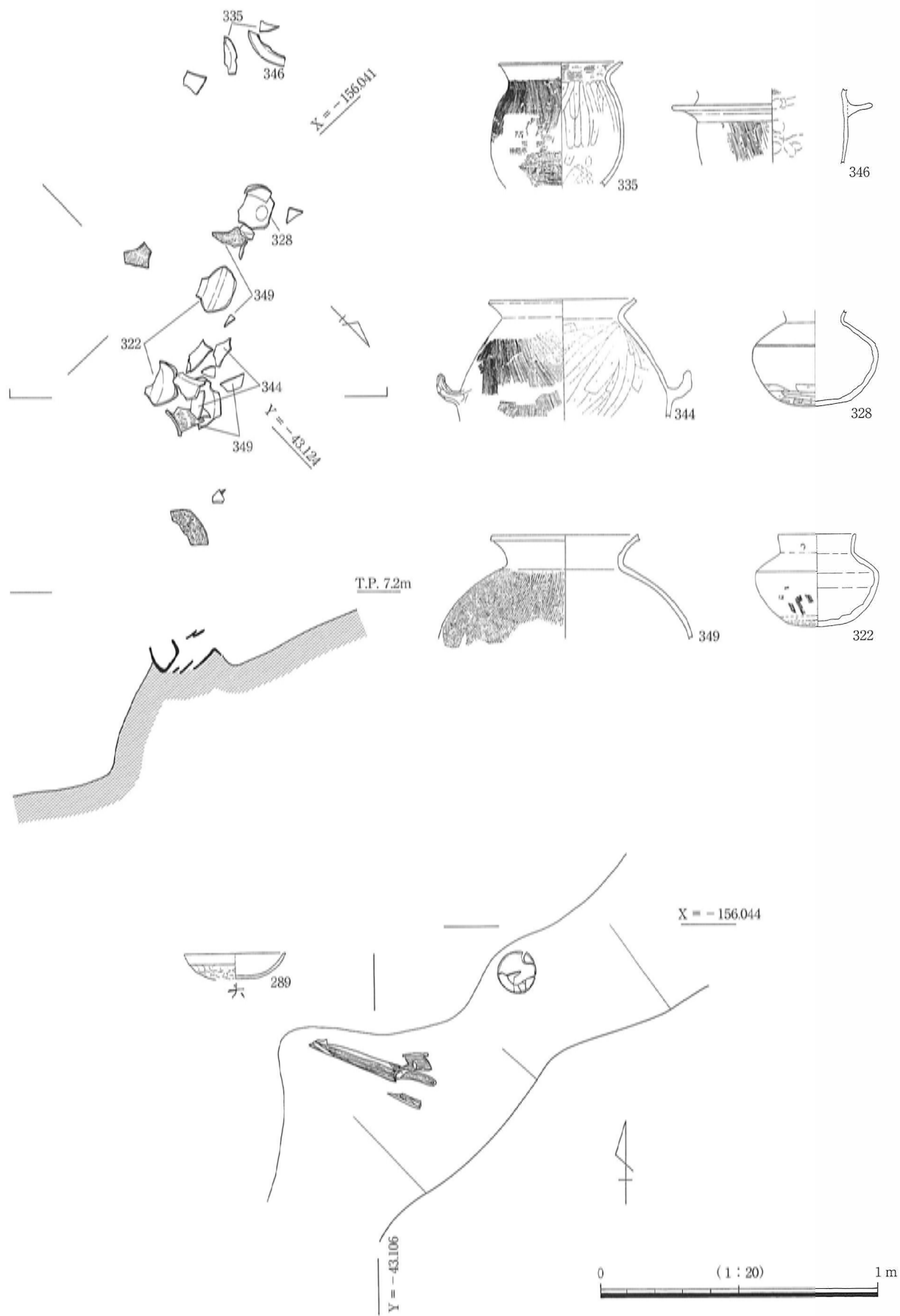


図130 第4面南側川（遺構500）内土器出土状況図①

出土した遺物として、墨書土器がいくつか見られた。文字を記するもの、絵を描くものであるが、文字を記するものとして、「大」「真」などが見られた。「大」は須恵器杯の底中央部に記されていた。また、土師器杯の底にも記されていた。「真」は土師器蓋のつまみ部の上面に記されたものである。

この他、土師器杯の中央部に穴をあけるものなども見られた。いずれも、実用性に乏しいもので、河川内におけるまじないや祭祀の際に捧げたものと解される。南側川の北側肩部では土器の集中する箇所が幾つか見られた。不用なものを投棄したものではなく、まじないや祭祀を行ったポイントとなるようである。祭祀形態は把握できなかったが、祭祀を行う場所として南側川が利用されていたことが明らかになった。この地域に住む人々にとって生活に密着した河川であったことがうかがえる。

南側川は、出土した遺物や土層観察から、おおむね奈良時代末頃から平安時代を中心とする時期が隆盛期であったものと思われる。

南側川（遺構500）内出土遺物（図132～136・144～147・151 図版47～52）

南側川からは第2-b面検出の方形区画溝に次ぐ多量の遺物が出土している。それらは縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代のものであり、なかでも奈良時代、平安時代のものが最も多い。

図132・134・136に土師器、図133・135に須恵器をまとめた。図136にはその他の遺物を載せた。

266・271～280は平城宮I～IIIの範疇に入るとされる土師器である。266の蓋つまみ上面には「真」と墨書されている。267～270は土師器皿である。267が平城宮I～II、268・269は平安京I中の皿である。270は平城宮Vと思われる。271～287は杯である。271・274・277・278が平城宮I、272・273・275・276・279・280が平城宮II～IIIの時期と思われる。275は器表の残りが悪く、暗文は不明瞭であるが、底部中央に直径約2cmの穿孔が見られ、内側から外側へ向けて開けたためか、外面側に大きく剥離している。外面にはヘラ状の工具で成形調整した痕跡が残る。281・282・284～287は飛鳥II～IIIの杯である。282の口縁部外面にヘラミガキが見られる。283は平城宮Iと考えられる。

288・289は平城宮Vと思われる椀である。内面には暗文が無く、丸い体部の外面には指押さえの痕跡が見られる。289の底部外面には「大」の墨書がある。279・280は平城宮II杯BIIである。290は器形が平城宮IIIの椀Xと類似する。口縁端部内面に沈線が1条巡り、内面全体に煤が付着している。291は大皿の脚台と思われるものであるが、時期は不明である。

292はてづくねの小型甕であり、飛鳥IV頃の時期と考えられる。293は体部のみ残存するが、平城宮IIIの壺Bに類似すると思われる。294は古墳時代の高杯杯部である。脚部内面に削りの痕跡が残る。295は6

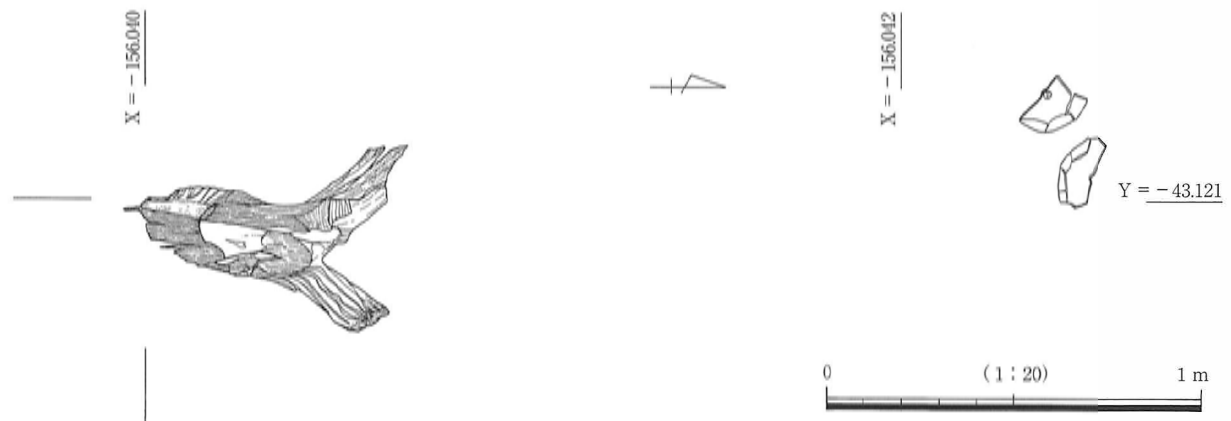


図131 第4面南側川（遺構500）内遺物出土状況図②

世紀代と思われる杯であり、内面に放射状の暗文が施されている。296は古墳時代の高杯もしくは器台の脚部であろう。脚裾外面に刻み目があり、胎土は若干白味を帯びる。東部瀬戸内地域のものが搬入された可能性が高い。時期は庄内式に属する。

297～332は須恵器である。297～300はつまみの付いた蓋である。301・302は当初、杯身と考えたが、底部外面の調整が身のように粗雑でないため、蓋とした。303～310は杯A、311～314は杯Bである。

314の底部外面には「大」の墨書がある。この「大」の墨書は289の土師器碗とあわせ、南側川から2点出土している。須恵器の蓋は297が平城宮I～II、298・299が平城宮II～IV、300が飛鳥IVの時期にあたると思われる。杯蓋の301・302は陶邑II-5～6。杯身の303は平城宮V～VI、304～308は飛鳥II～IIIの時期か。304～307の底部外面にはヘラ記号がある。図版47-305・306が「フ」状、304・307は「-」状か不明である。309～313は平城宮II～IVの時期にあたる。314は平城宮V～VIの時期にあたると思われるものである。315・316は杯身である。315が陶邑II-4～5、316が陶邑II-3～4である。317は鉄鉢形鉢で平城宮IVかと思われるものである。318は壺口縁部で、平城宮VIか。319は蛸壺で陶邑IV-1～2と考えられる。

320・321は壺である。320の底部外面に回転糸切り痕が見られ、321は底部に高台をはりつけたもので、2点ともに平安京I期新にあたると思われる。322・323は短頸壺である。323の体部中央に2条の沈線文が施されている。2点ともに飛鳥IIIの時期。324は壺底部の高台の特徴から平城宮I。325・326は壺高台が外側についている点から平城宮VI～VIIの時期にあたると思われる。327は脚台付壺底部で、陶邑II-3～4、328は底部外面が静止ヘラ削りで体部中央に沈線を1条施した陶邑I-2～3の時期と思われるものである。329は提瓶か平瓶の口縁部である。陶邑II-5～6にあたる。330・331は別個体であるが、平瓶の口縁部と体部である。飛鳥III～Vの時期にあたる。332は底部外面に無数のヘラで刺突したすり鉢底部である。陶邑II-5～6である。

333～347は土師器である。古墳時代から奈良時代までのものと思われる。333が平城宮V、334が平城宮I、335～337は7世紀代、338・339は6世紀代のものか。それら以外の甕は奈良時代のものと思われる。344は把手付甕で平城宮II～III。345・346は羽釜であり、346の胎土中に角閃石を含む。罌および口縁の形状から、345は平城宮II～III、346は飛鳥IV～Vの時期にあたると思われる。347は鉢であり、調整は外面が縦方向の刷毛目、内面はナデである。時期は不明である。

348～354は須恵器甕および壺である。348が陶邑III-1～2の時期にあたるものと思われる。350は陶邑II-4～5、352は陶邑II-2～3、354は陶邑IIの時期と思われる。349・351は口縁部の拡張が殆ど見られず、体部内面の当て具痕がナデですり消され、陶邑I-2～3の時期に当たるとと思われる。

353は口縁部のみ残存するが、349などと同時期のものか。355の短頸壺は平城宮IV～Vの時期。

356～358は土師器甕である。平城宮IV～Vの時期か。359～362は土師器の竈破片である。時期は古墳から奈良時代のものである。

359は上端部と焼き口上部が残存し、庇部分の剥落痕が残る。外面はハケ、内面はヘラ削り調整が施されている。360・361は焼き口の側面部が残存する。360の外面には縦方向に粘土帯の剥落痕が残る。360と図版48-438は胎土や調整などの特徴から、同一個体と思われる。361は縦方向に粘土帯が見られる。これらの外内面はハケ調整である。362は焼き口の向かって右側下端部が残存する。接地部分を平らにすると、上方へ直線的に内傾する。外面はナデ、内面はヘラ削り調整である。外面に縦方向の粘土剥落痕が見られる。

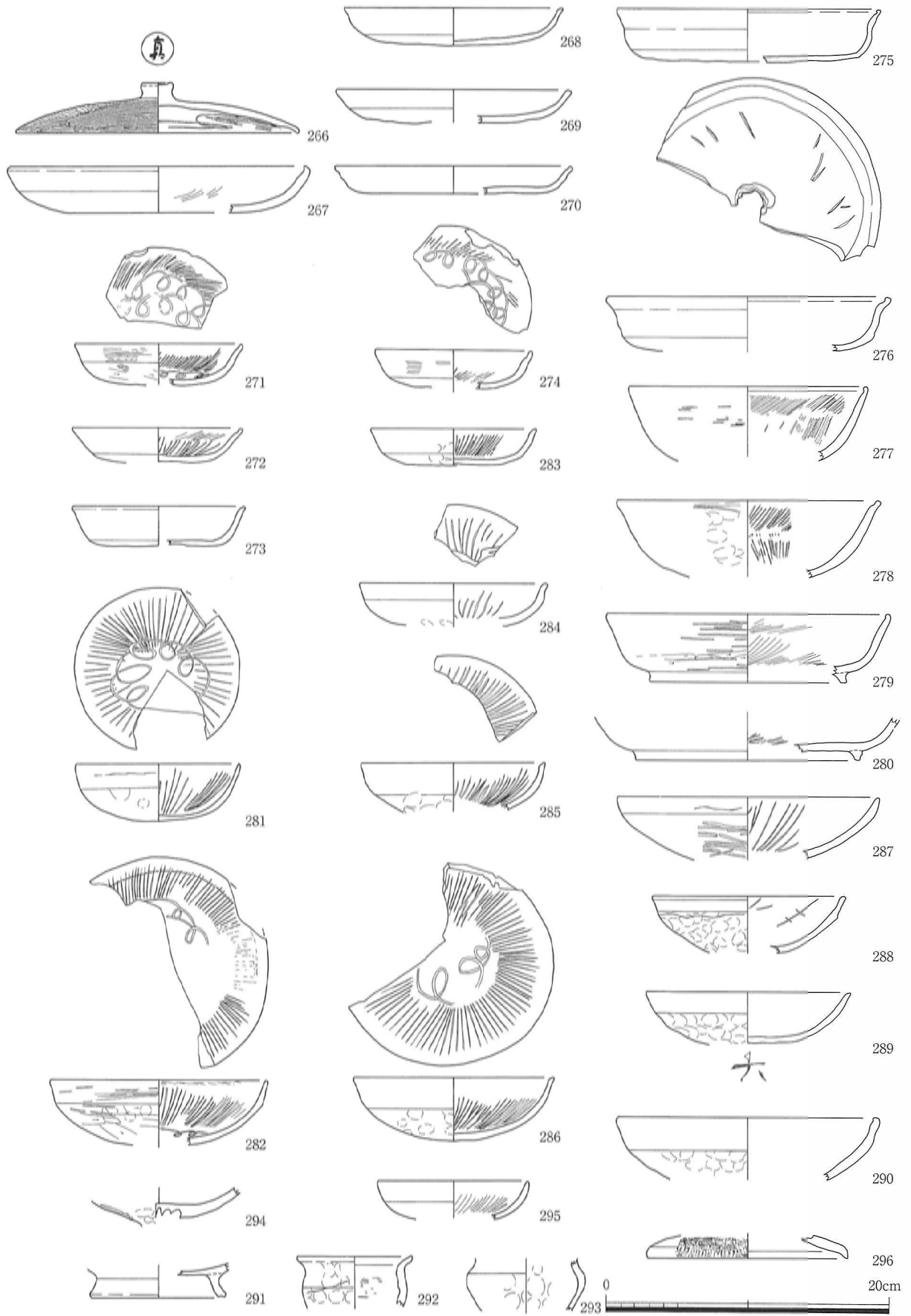


図132 第4面南側川(遺構500)内出土遺物①

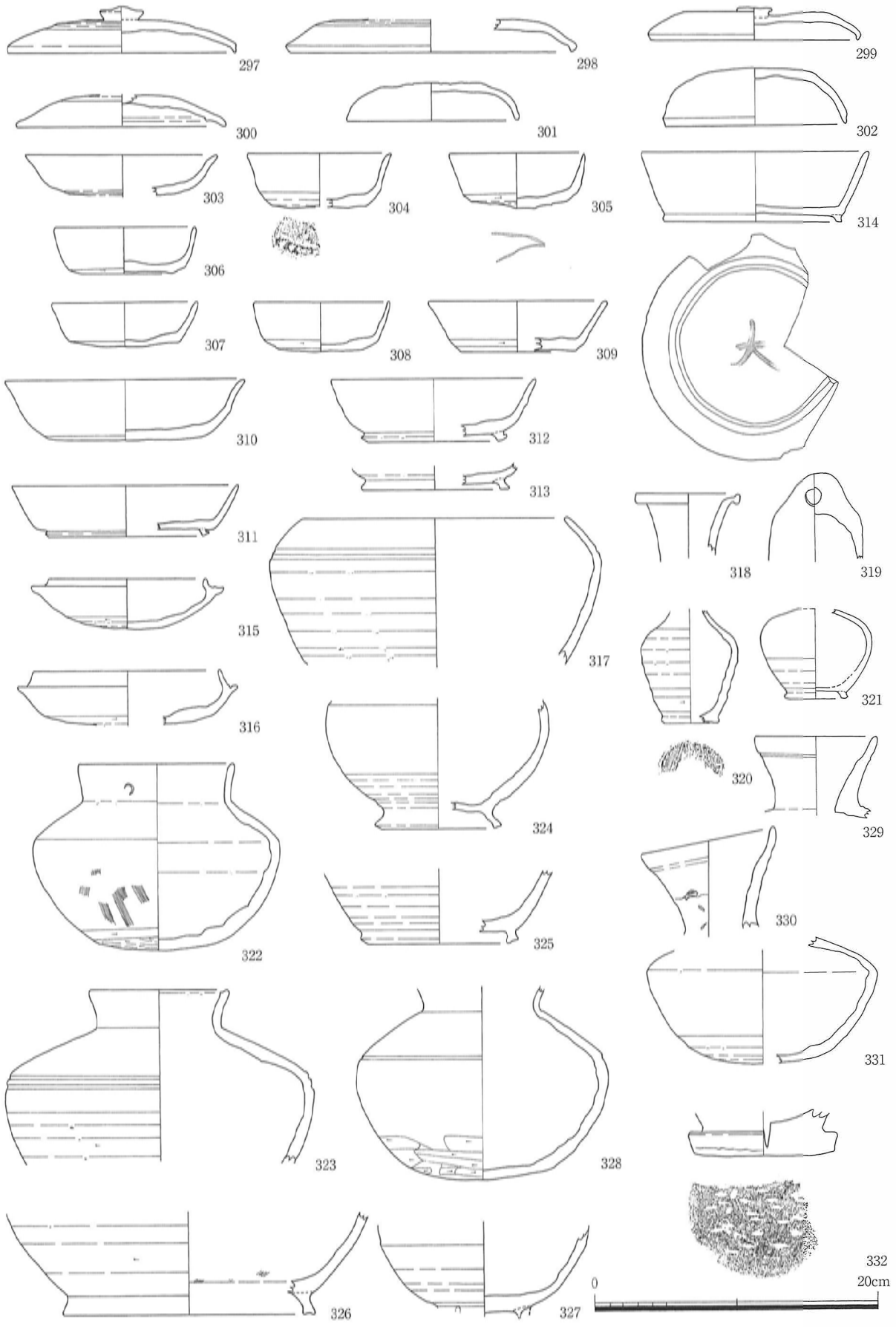


図133 第4面南側川（遺構500）内出土遺物②

363は古墳時代の鞆羽口と思われるものである。残存直径は5.8cm、孔の直径は2.4cmである。364は直径4.6cm、厚さ0.5mmの円板状の中央部で浅く湾曲した青銅製品である。色調は凸面側が暗灰色、凹面側が赤銅色である。中央部には凹面側から凸面側へ向けて、直径1.5mmの孔があげられている。

365は長軸の一端が欠損した根石と思われるものである。石材は花崗斑岩Aに分類されているものである。一部に煤の付着が見られる。長さ16.2cm、幅11.4cm、厚さ11.1cm、重さ3,620g。1側面は平らであるが、砥石に使用されたものか。表面・裏面は叩打痕が一部見られ、中央部が浅く窪む。もう一方の側面は膨らみをもち、自然に近いものか。366の石材は細粒砂岩で、根石と思われるものである。長さ30.9cm、幅13.7cm、厚さ4.9cm、重さ3,320g。表面は自然面を残し、裏面は平らな割れ面である。表面および長軸方向の側面はなめらかであり、砥石に使用したものか。表面には一部叩打痕も残る。

367は折敷か曲物などの底板と考えられるものである。現存長24.5cm、現存幅10.6cm、厚さ0.7cm。短軸方向に数本の筋が見られるが、下部は再加工により切り落とされたものか。1箇所、樹皮で綴じた痕跡を留める。表・裏の両面に無数の線状痕が見られ、まな板として転用されたものと推測される。

縄文・弥生時代ではチャート製の石槍(381)、サヌカイト製の石槍未成品(380・386・387)、二次加工のある剥片(384)、剥片(391)、石核(395)が出土している。また、出土埴輪(図151)の大半がこの遺構からのものである(407～409・411・413・414・416・421～423)。

縄文土器は406の晩期深鉢の凸帯文土器細片が1片見られ、胎土中に角閃石を含む。

弥生時代の遺物には中期、後期のものがある。396は中期の甕蓋、図版49-440は刻み目凸帯が1条巡る中期の壺頸部である。図版49-441は胎土中に角閃石を含む器種不明の把手破片である。図版49-442は中期の壺か不明の底部破片である。外内面ともに残存状態が悪く、調整は不明である。400・401は後期から庄内期にかけての波状文が施文された壺か不明の口縁部破片、404・405は中期の壺か不明底部破片である。図版49-439は口縁部内面には横方向、外面には縦方向の粗いハケ目が施された弥生後期から庄内期にかけての壺かと考えられるものである。

南側川(遺構504)出土遺物(図145 図版51)

サヌカイトの二次加工のある剥片(383)が1点出土しているのみである。

ピット(図126・137)

南側川の南岸(右岸)で幾つかのピットを検出した。主に、南側川(遺構500)南岸の東側部で南側川(遺構504)との分流部にあたる。517・518・519・520ピットは南側川の南岸部で検出されたもので、ほぼ一箇所集中していた。いずれも、上層部は削平されており不明瞭であるが、検出形はほぼ円形を呈す。直径は約30cm、深さは5～30cmを測る。埋土は、黒褐色ないし灰黄褐色砂混じり粘質シルト、暗緑灰色粘質シルトが主を成す。掘り方は、垂直に掘り込まれている感がある。

541ピットは、南側川(遺構504)との分流部の南岸で検出したもので、検出形はほぼ円形を呈する。直径は約45cm、深さ3cmと非常に浅いものである。埋土は、オリーブ黄色粘質シルトである。

これらのピットは、上部が削平されており不明瞭であるが、南側川に関連する施設・建物のピットではないかと思われる。川岸に建っていた小さな建物、あるいは橋などの支柱などではないかと推定される。

南側川(遺構500・504)の北岸でも幾つかピットが見られたが、確定するには至らなかった。

各ピットから遺物は出土しなかった。

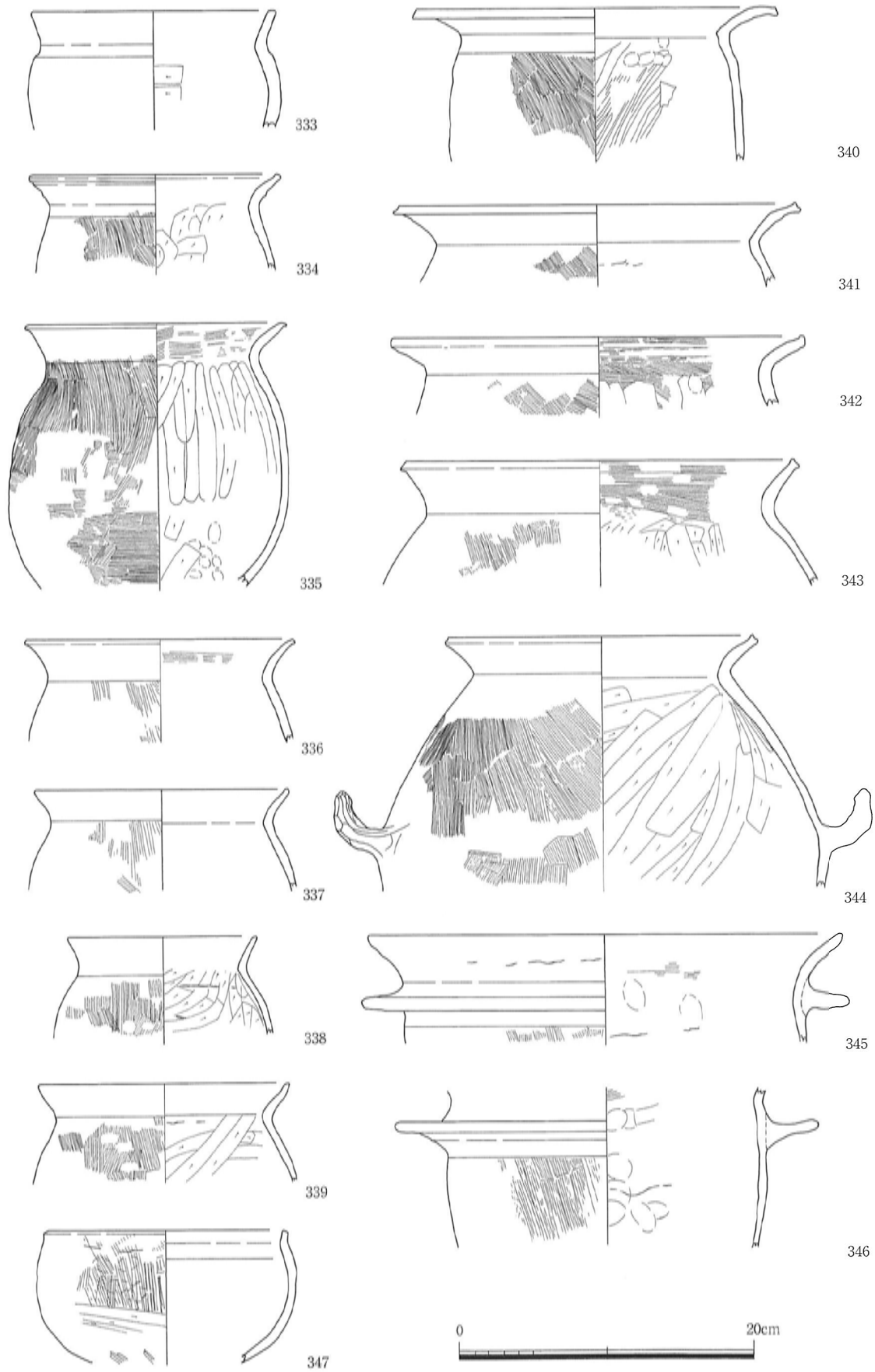


図134 第4面南側川（遺構500）内出土遺物③

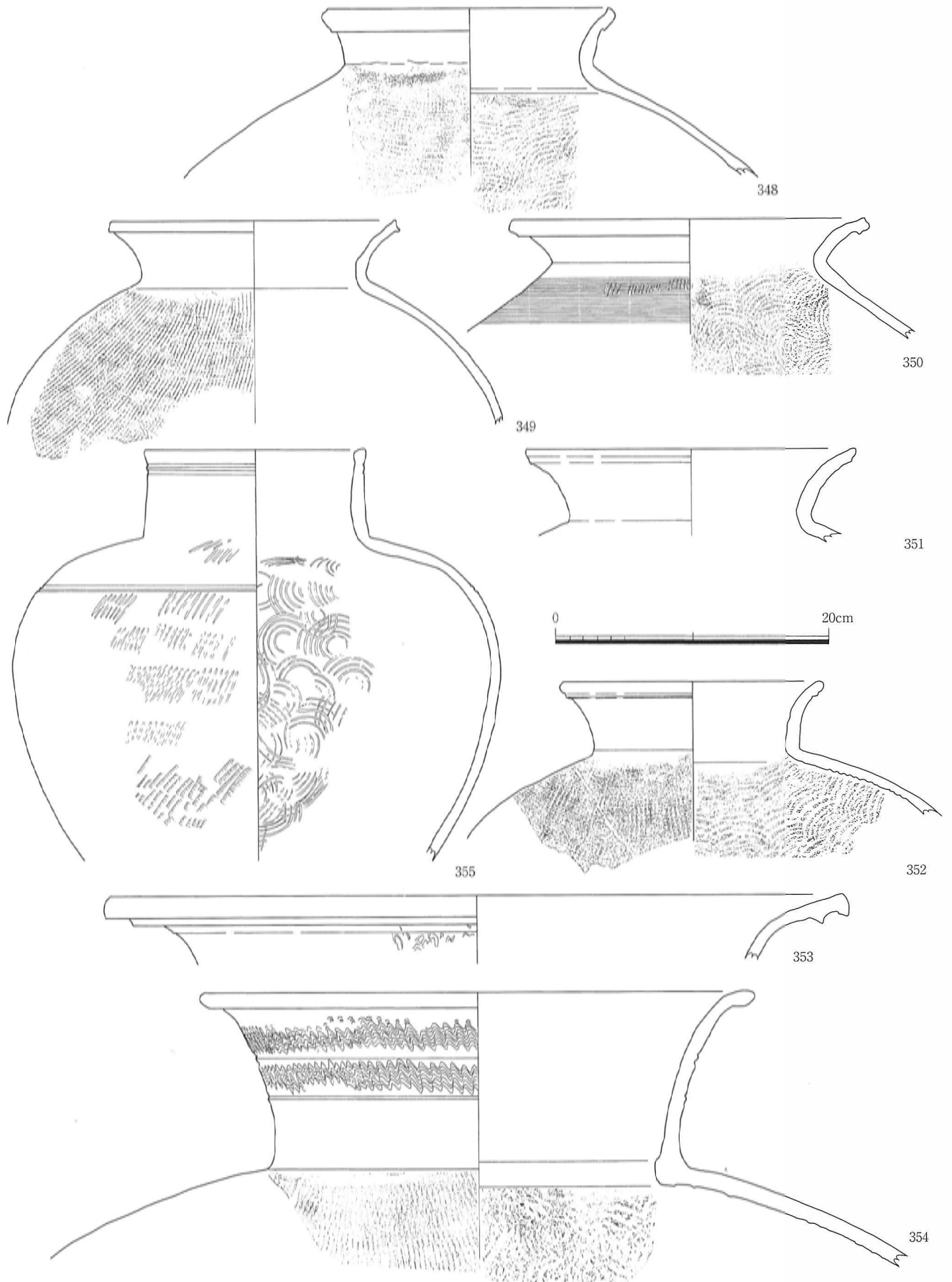


図135 第4面南側川(遺構500)内出土遺物④



図136 第4面南側川（遺構500）内出土遺物⑤

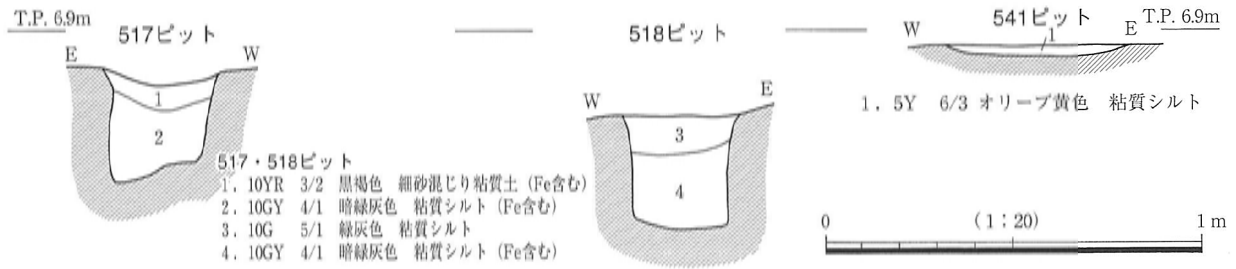


図137 第4面相当面遺構断面図

第5面 (図126)

南側川南岸部の平坦面で第5層灰褐色粘質土、暗灰黄色粘質シルトを中心とする整地層を除去し、検出した面を第5面とした。

第5面は、地形的には東側および北側に向かって徐々に低くなる様相を示す。また、西側の微高地以南ではやや平坦になる様相を示す。南側川以北の検出面は、T.P.7.9m前後を測る。南側川以南の平坦部では、T.P.7.2m前後を測る。

第5面で検出した遺構として、多方向に広がる自然流路跡と窪み状に広がる不定形土坑、溝状土坑、ピットなどが見られた。これらの遺構は検出時には第4面と考えていたが、(その5)調査区第5面で検出した自然流路跡や不定形土坑に類似し、また第4面で検出した耕作面と畦畔が南側川と同時期頃に相当すると思われることなどから、自然流路跡等を検出した遺構面を第5面とした。

第5面では、自然流路跡や不定形土坑のほかに、調査区西側で黒褐色砂混じり粘質シルト（黒茶層）を埋土とする溝などが見られた。また、最終面からは調査区の南端部中央で溝に囲まれた方形の小古墳を検出した。

第5面および最終面で検出した遺構から出土した遺物はきわめて少なく、時期を確定することが困難であった。層的的には、古墳時代後期頃に相当するものと考えられる。

自然流路 (図126・139)

南側川南岸の平坦部で多方向に流れを持ち、網目状に広がる自然流路跡を検出した。(その5)調査区の第5面でも同様の自然流路跡を検出した。

503自然流路は、北上する516自然流路から東北側に流走するものである。検出幅はやや振幅するが約1.5~3.2m、深さは約10~30cm、検出長は約10mを測る。埋土は、上層が灰黄褐色粘質シルト、黄灰色砂混じり粘質シルトである。中層は明黄褐色ないし褐色粗砂礫混じり土で洪水砂の流水堆積の状況を示す。下層は黒褐色砂混じりシルトおよび粘質土で炭化物を含む、滞水性の止水堆積状況を示す。

最下層は緑灰色ないし灰オリーブ色粘質土で地山層である。503自然流路からは、須恵器壺・土師器片・石器などの遺物が出土した。

506・507自然流路は、516自然流路から分岐して北西側へ伸びるもので、検出幅は約2.0~3.0m、深さは約10cm、検出長は約6mを測る。

埋土は、にぶい黄橙色細砂混じり砂質土で、流水堆積の様相を示す。遺物は出土しなかった。

516自然流路は、南側から北側に向かって流走するもので、検出幅は約3.5m、深さは約10~15cm、検出長は約8mを測る。埋土は、灰黄褐色砂質土、褐色粗砂礫混じり土などで、流水堆積の様相を示す。須恵器壺などの遺物が出土した。

508自然流路は、北西側へ伸びるもので、検出幅は約1.5～2.5m、深さは約10cm程度、検出長は約6.5mを測る。埋土は、にぶい黄橙色細砂混じり砂質土、明褐色細砂などで、流水堆積の様相を示す。

自然流路跡内からわずかではあるが、遺物が出土した。須恵器壺片、土師器片、石器などが見られた。しかしながら、プライマリーな状況での堆積であるとは言えず、流水により流されて来たもの、あるいは下層の巻き上げによるものと考えられる。

南側川以南の平坦部に広がる自然流路跡は、埋土中に砂礫を含むシルト層と粘質シルト層が互層を成すことから、恒常的な溝ではなく河川の増水・洪水時などに形成された一過的な自然流路跡であると考えられる。また、地盤の窪地などでは、植物遺体を含む黒褐色ないし暗黄褐色粘質シルトなどで、止水堆積の様相を示す。度重なる増水・洪水などで長い時期にわたりこの周辺は湿地状態であったものと思われる。

不定形土坑 (図126・139)

南側川南岸の平坦部で、窪み状に浅く、不定形を呈する土坑状遺構を検出した。

511不定形土坑は、やや歪んだ楕円形を呈すもので、検出長径は約4.0m、短径は約2.5m、深さは約20cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂質シルト、にぶい黄橙色砂混じり粘質土などで、止水堆積の様相を示す。遺物は出土しなかった。512不定形土坑は、やや不整形な方形を呈すもので、検出幅は約3.5m、検出長は約5.5m、深さは約20cmを測る。埋土は、にぶい黄橙色および灰黄褐色砂礫混じり砂質土、明オリブ灰色粗砂礫混じり粘質土などで、止水堆積の様相を示す。512不定形土坑からは、サヌカイト剥片、石槍などが出土した。この他、515・540・539・538・537不定形土坑などが見られた。いずれもやや不整形な形状を呈する、浅い土坑で、埋土が灰黄褐色砂質シルトや砂礫混じり砂質土などの止水堆積状況を示すものである。537不定形土坑からは、土師器皿片などが出土した。

不定形土坑は、地盤の窪地などに洪水砂が堆積した状況を示すものである。

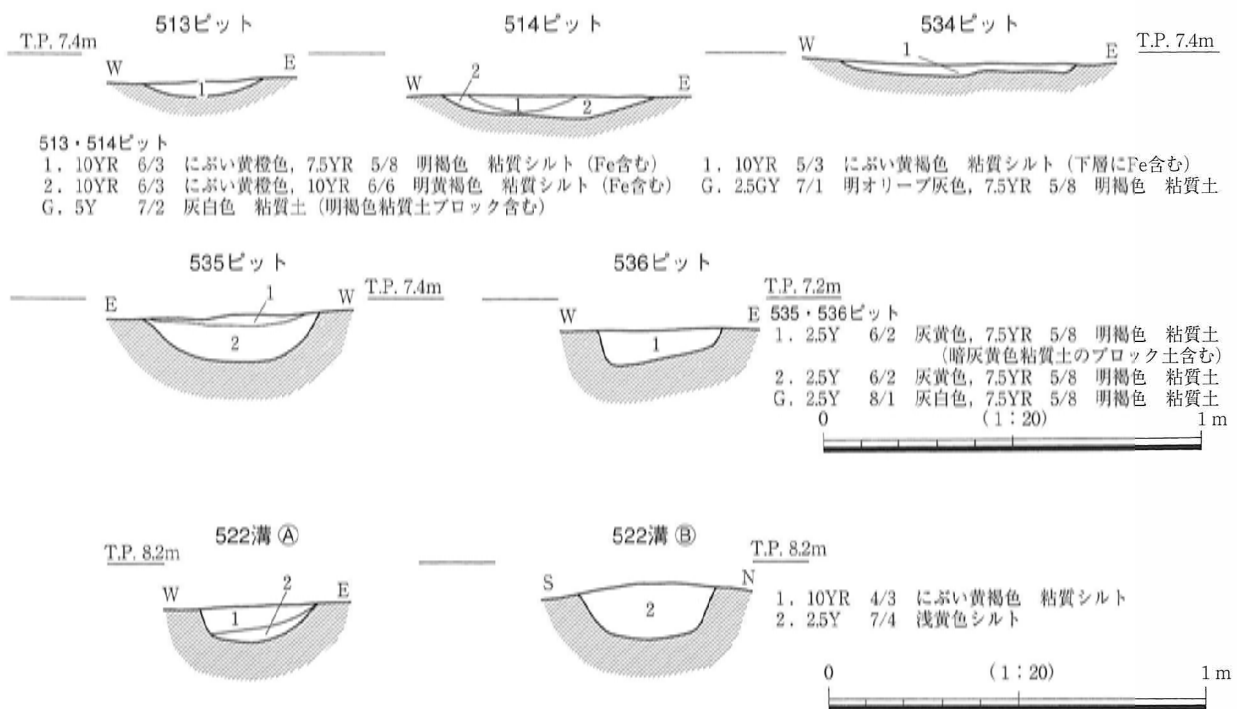


図138 第5面相当面遺構断面図①

ピット (図126・138)

南側川南岸の平坦部で、幾つかのピットを検出した。

513・514・534・535ピットは、ほぼ円形を呈するピットで、直径約0.7~1.3m、深さは約10cmを測る。埋土にはにぶい黄橙色ないし明褐色粘質シルトなどが主を成す。埋土内からは遺物は出土しなかった。

535ピットは南端部中央で古墳のマウンド部分から検出された、やや楕円形を呈するピットである。長径が約45cm、短径が約30cm、深さは10cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土に暗灰黄色粘質土ブロックを含むもの。埋土内からは遺物は出土しなかった。

この他、いくつかピットが見られたが、ピット内からは遺物は出土しなかった。不定形土坑と同様に、湿地状態下の窪地であったと思われる。

522・510・509溝 (図125・138・139)

調査区西側の微高地で検出した溝である。522溝は、やや湾曲しながら北東方向に伸びるもので、検出

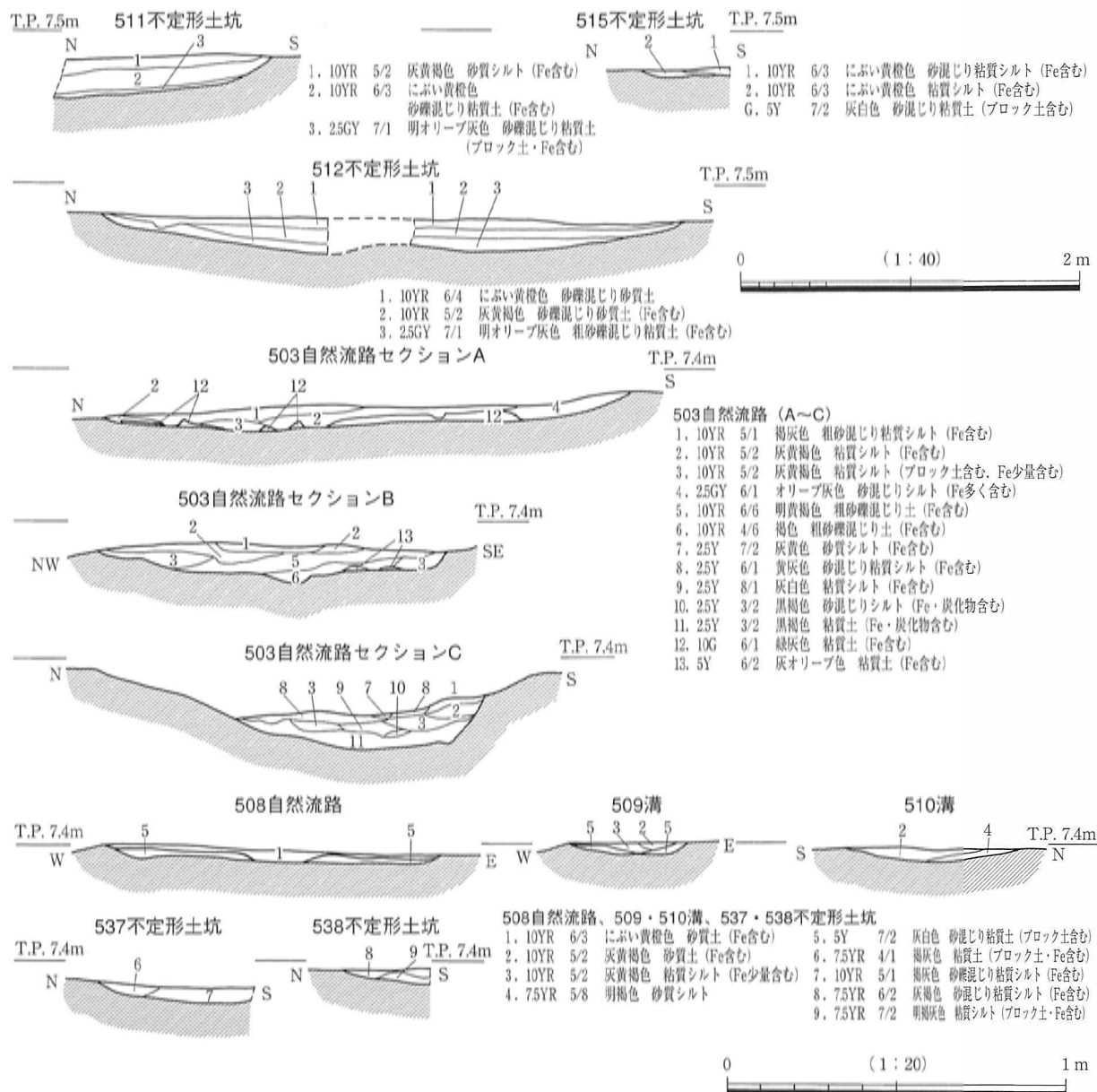


図139 第5面相当面遺構断面図②

幅は約30～35cm、深さは約15cmを測る。検出長は約15mである。掘り方はやや浅いU字状を成す、人工的に掘られた溝である。埋土はにぶい黄褐色ないし黒褐色砂混じり粘質シルトである。(その5)調査区の微高地で検出された158溝に続くものである。溝内からは、遺物は出土しなかった。

509溝は、南北方向に伸び、508自然流路にあたるもので、検出幅は約0.7m、深さは約5cm、検出長は約4mを測る。埋土は、灰黄褐色砂質土および粘質シルトが主を成す。

510溝は、東西方向に伸びるもので、検出幅は約1.0m、深さは約10cm、検出長は約4mであるが、南側川(遺構500・504)を隔ててその延長部が見られ、全長は約14mを測る。(その5)調査区の第5面で検出した161・162溝の延長部に相当するものである。埋土は、灰黄褐色ないし明褐色砂質シルト、砂質土と灰黄褐色ないし黒褐色砂混じり粘質シルトなどである。埋土内からは遺物は出土しなかった。

第5面遺構内出土遺物(図140・144～146 図版49～51)

自然流路である503からは、古墳時代の須恵器II型式の蓋杯片と思われるものや、古墳時代から奈良時代の土師器片が少量と、サヌカイトの凹基無茎式石鏃(379)、剥片(385)が各1点出土している。

369は須恵器短頸壺である。口縁部が直立より僅かに開き、外面には横ナデによる凹線状のものが2条巡る。陶邑IV-2前後の時期にあたるものか。

自然流路である516からは古墳時代の須恵器体部破片および蓋杯が出土している。368は陶邑II-6～I-II-1の蓋杯と思われるものである。蓋として図化した。天井部外面は回転ヘラ切り未調整である。

不定形土坑である512からはサヌカイト製の石槍未成品1点、剥片2点が出土している。382は石槍未成品である。表面は周縁からの剥離により厚みを取っており、裏面は中央に大きく大剥離面を留める。裏面左側の一部が新しい割れである。裏面には鉄分が付着しており、全体に風化が見られる。

389は左側辺に自然面を残す縦長剥片、393は横長剥片である。393の下辺には新しい割れがある。両剥片ともに鉄分の付着が見られる。393は全体に風化している。

第4・5面黒茶層出土遺物(図141・146・147・151 図版49・51・52)

弥生時代中期の甕、古墳から奈良時代の土師器、須恵器甕などが出土している。また、サヌカイトの楔形石器(388)や円筒埴輪(図151 図版52-410・412)も見られる。

370は内面に放射状1段の暗文を施した杯である。外面に一部ヘラミガキが残る。飛鳥IV～Vの時期にあたる。371は飛鳥IIかと思われる須恵器杯身である。372は土師器羽釜口縁部であり、胎土中に角閃石を含む。時期は平城宮II～IIIか。373は土師器甕である。口縁内面に横方向のハケ目が残る。平城宮I～IIの時期にあたるものか。374は土師器壺かと考えられるもので、飛鳥IVの時期のものか。

375は輝石安山岩Aに分類されている平たい石で、根石と思われるものである。長さ18.7cm、幅17.7cm、厚さ16.2cm、重さ2kg。三角形の左側辺は新しい割れである。表面には擦った様な痕と、火を受けた痕跡が見られる。

397は弥生中期の鉢口縁部である。口縁端部を長方形に肥厚させ、体部に幅広の簾状文を施している。399は弥生中期の口縁端部を拡張した甕である。397・399ともに第III～IV様式に属する。

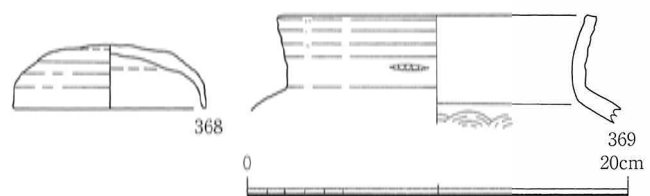


図140 第5面相当面遺構出土遺物

第6面 (図126)

古墳 (図126・142 図版34)

調査区の南側中央部で周溝をともなう小方墳を検出した。

古墳は南半分が調査区外に広がっているため、全容は不明であるが、状況として観察できたものを記載するものとする。

検出した古墳は、墳丘は方形を示すもので、一辺は東西方向が約5.8m、南北方向が残存長約6mを測る。墳丘の上面は削平をうけるため不明瞭であるが、墳丘の残存高は約25cmを測る。墳丘の中央部には小土坑が見られたが、主体部になるかどうかは不明である。

古墳の周囲に周溝(505溝)が見られた。南側は調査区外であるため確認はできなかったが、おそらく墳丘を巡るものと考えられる。周溝の検出幅は、約1.5~2.5mを測る。深さは約10~30cmである。洪水などの流水作用により削平される箇所も見られたが、おおむね形状を把握できる状況であった。

調査区南側に設定した土層断面観察用の側溝において、古墳墳丘部周辺の土層を観察することができた。ベース層は明オリーブ灰色粘質土である。墳丘部は上層が灰オリーブ色粘質土でブロック土を含むもの。下層は暗灰黄色粘質土で上層のブロック土を多く含むものである。上層部は削平をうけるため詳細は不明瞭である。

周溝については、遺存状況が良くないため、周溝の切り込み面が確定できなかった。また、周溝内の埋土については削平が著しく、周溝内の下層部の堆積状況が観察できたに過ぎなかった。南側側溝の断面で観察できた断面eによって、周溝内の状況が確認された。周溝内の上層は、褐灰色粘質シルトで粘土ブロックを多く含んでいる。中層は灰黄色粘質土と褐色砂混じり粘質シルトなどが互層を成す、流水堆積層である。下層は褐灰色粘質土で炭化物やブロック土を含み、止水堆積の様相を示す。周溝内の堆積状況から、上層および中層は古墳の築造期のものではなく、後世の洪水などによる堆積の状況であると思われる。周溝(505溝)内埋土内から遺物が出土した。墳丘の東側の周溝部内から須恵器蓋と土師器細片が出土した。遺物は周溝内の最下層の褐灰色粘質土中から出土したものである。

おおむね6世紀前半頃のものと思われる。

墳丘部中央部で東西方向に長い様相を示す土坑状遺構を確認した。土坑状遺構は東西方向に約1.0m、南北方向は約20cmのみが残存している。土坑の断面形は浅い皿型を呈す。深さは約15cmを測る。埋土

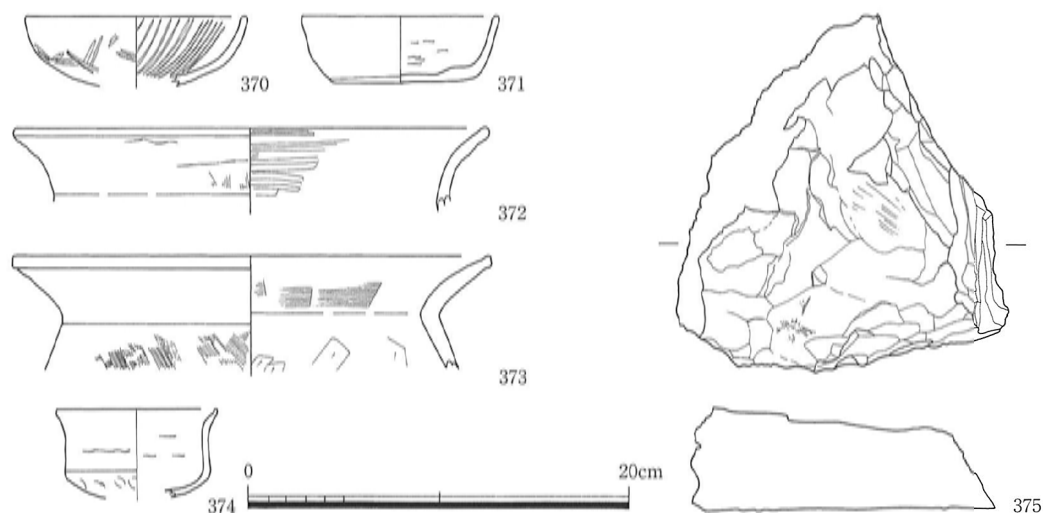
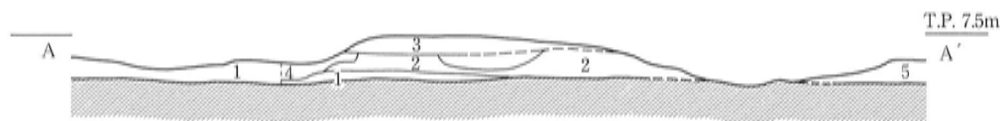
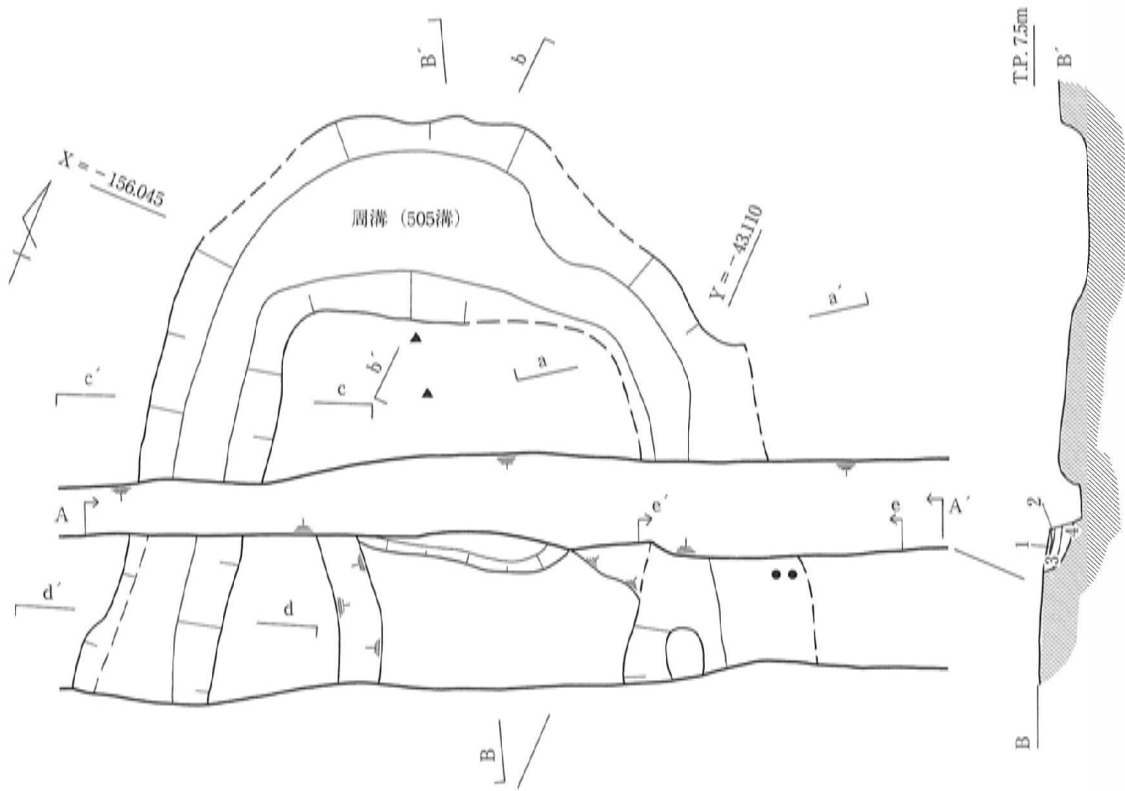


図141 第4・5面黒茶層出土遺物

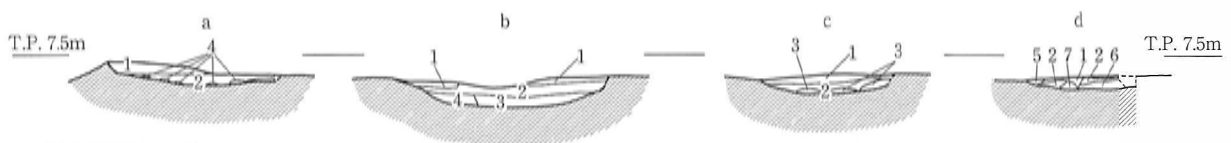


古墳 (東西方向)

- 1. 5Y 6/4 オリーブ黄色 粘質土 (上層にFe含む)
- 2. 5Y 5/3 灰オリーブ色 粘質土 (Fe・ブロック土含む)
- 3. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘質土 (Fe・2層のブロック土含む)
- 4. 10YR 3/2 黒褐色 砂礫混じり粘質シルト (攪乱土)
- 5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト (Fe含む)
- G. 10Y 6/2 オリーブ灰色 粘質土

古墳 (主体部)

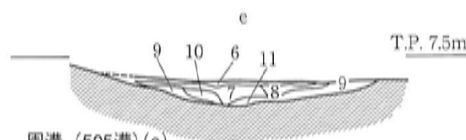
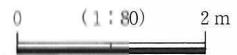
- 1. 10YR 5/1 褐灰色 砂混じり粘質シルト (Fe含む)
- 2. 2.5Y 6/3 にぶい黄色 砂混じり粘質シルト (Fe・ブロック土含む)
- 3. 2.5Y 6/2 灰黄色 粘質土 (Fe・ブロック土含む)
- 4. 2.5Y 6/2 灰黄色 粘質土 (Fe含む)



周溝 (505溝) (a~d)

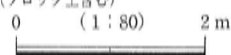
- 1. 7.5YR 4/2 灰褐色 粘質土 (Fe少量・炭化物少量含む)
- 2. 10YR 4/2 灰黄褐色 砂混じり粘質シルト (Fe含む)
- 3. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂礫混じり粘質土 (Fe少量含む)
- 4. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂礫混じり粘質土 (Fe少量・粘土ブロック含む)

- 5. 7.5YR 4/2 灰褐色 砂礫混じりシルト
- 6. 10YR 6/1 褐灰色 砂礫混じり土
- 7. 7.5Y 7/2 灰白色 粘質土 (Fe・粘土ブロック含む)



周溝 (505溝) (e)

- 6. 7.5YR 4/1 褐灰色 粘質シルト (粘土ブロック含む)
- 7. 2.5Y 6/2 灰黄色 粘質土 (粘土ブロック含む)
- 8. 2.5Y 6/2 灰黄色 砂混じり粘質土 (Fe・粘土ブロック含む)
- 9. 7.5YR 4/1 褐灰色 粘質土 (Fe・炭化物・ブロック土含む)
- 10. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂混じり粘質シルト (粘土ブロック多く含む)
- 11. 2.5Y 6/1 黄灰色 粘質土 (ブロック土含む)



X = -156.046

Y = -43.1083

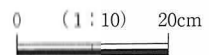


図142 古墳平・断面図

は、上層が褐灰色砂混じり粘質シルトで鉄分沈着が著しいものである。中層はにぶい黄色砂混じり粘質シルトでブロック土を含むもの。下層は灰黄色粘質土でブロック土を含むものである。遺物などは出土しなかった。この土坑状遺構は古墳にともなうものか後世の掘削土坑であるかは不明であるが、埋土中に墳丘部に相当するブロック土が多く含まれていたため、関連のあるものと考えることができる。

検出された古墳は、状況が極めて悪いものであったが、平野部における小古墳として価値のある発見であると思われる。1基だけの検出であることが残念であるが、当地周辺においても小古墳群が展開していた可能性が広がったわけである。古代や中世において革新的な開発を進めてきたこの地域に、古代や中世代における開発で埋没または消滅した古墳があったことが判った。

これまでの調査で、円筒埴輪・器材埴輪片が出土しており、埴輪をとまなう大型古墳の存在が問題になっていたが、小古墳の存在も明らかとなり、古墳時代の当地における環境を復元する上で貴重な成果であるといえる。

平野部における小古墳となると、旧西除川を挟んで東側に位置する長原古墳群が連想される。大和川今池遺跡周辺での今後の調査成果に期待されるところである。

古墳出土遺物・第6面包含層出土遺物（図143・144・146 図版49～51）

古墳墳丘内からは土師器の不明体部破片が1点出土している。

周溝（505溝）内から、古墳時代の土師器甕体部破片と、須恵器杯蓋が1点（376）出土している。杯蓋の時期は陶邑I-4～5である。また、392のサヌカイト製縦長剥片が1点出土している。これは全体に風化しており、鉄分の付着が認められる。

第6面包含層から須恵器杯身が1点とサヌカイト製石鏃1点、剥片1点が出土している。

377は口径が大きく、口縁部の立ち上がりの低い、陶邑II-4～5である。378は凹基無茎式石鏃である。茎の挟りも深く、縄文中期から後期頃のものか。表面左側辺上部は一部新しい欠けである。394は横長剥片である。周縁に新しい欠けが数箇所見られる。

石器（図144～146 図版50・51）

サヌカイト製の石器および剥片は総数21点、チャート製石器は1点出土している。

内訳はサヌカイト製では石鏃2点（378・379）、石槍未成品4点（380・382・386・387）、楔形石器1点（388）、2次加工のある剥片3点（383～385）、縦長剥片5点（389・392）、横長剥片5点（390・391・393・394）、石核1点（395）である。チャート製は石槍（381）である。

石鏃は凹基無茎式の茎の挟りが大きい点から、縄文時代のものと考えられる。石槍および石槍未製品、楔形石器、2次加工のある剥片、縦長および横長剥片などの時期は不明であるが、縄文時代から弥生時代に属するものと考えられる。2次加工のある剥片の中には、384のようにスクレーパーの形をしたものも見られる。

縄文土器・弥生土器

（図147 図版49）

縄文晩期の深鉢口縁部が1点出土している。406は口縁端部外面に



図143 古墳・第6面出土遺物

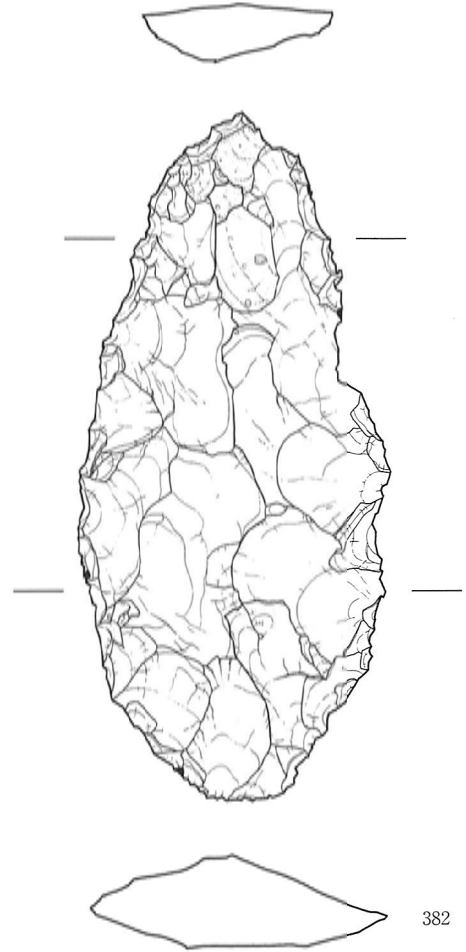
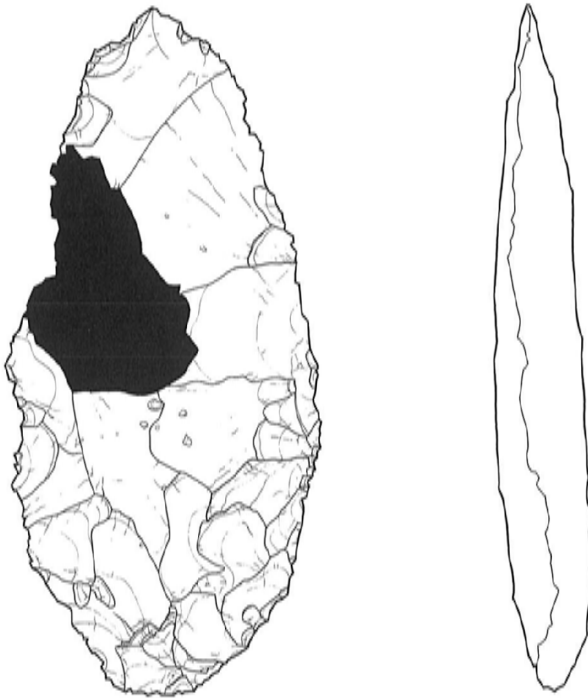
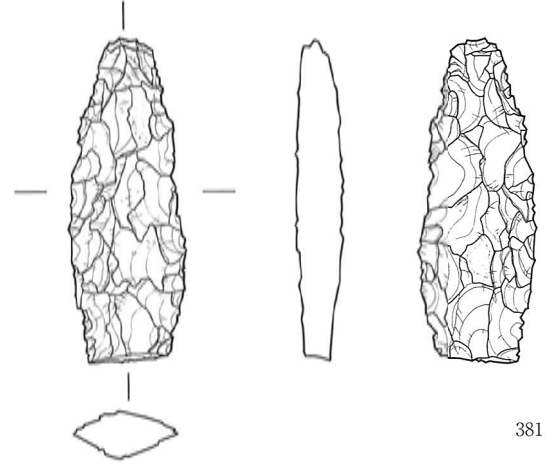
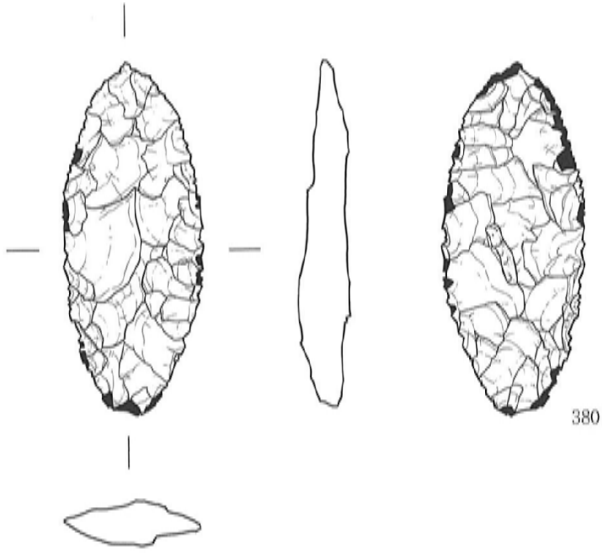
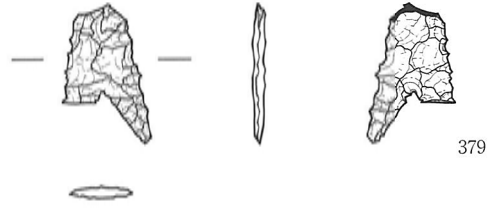
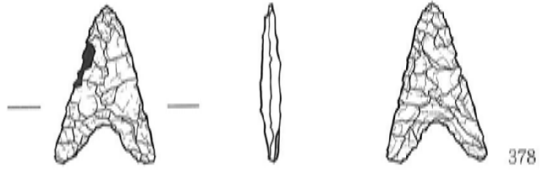


图144 石器

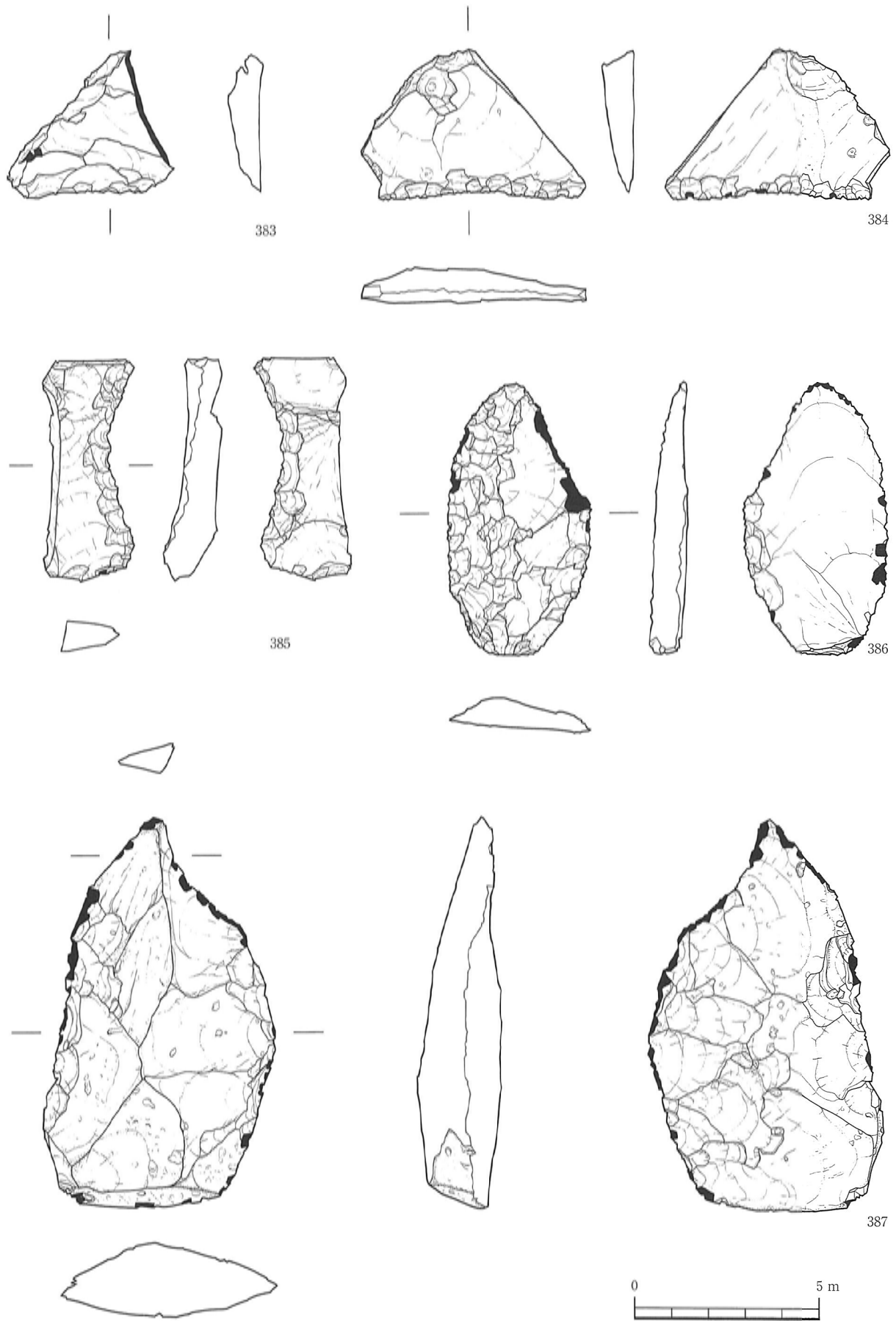


図145 石器

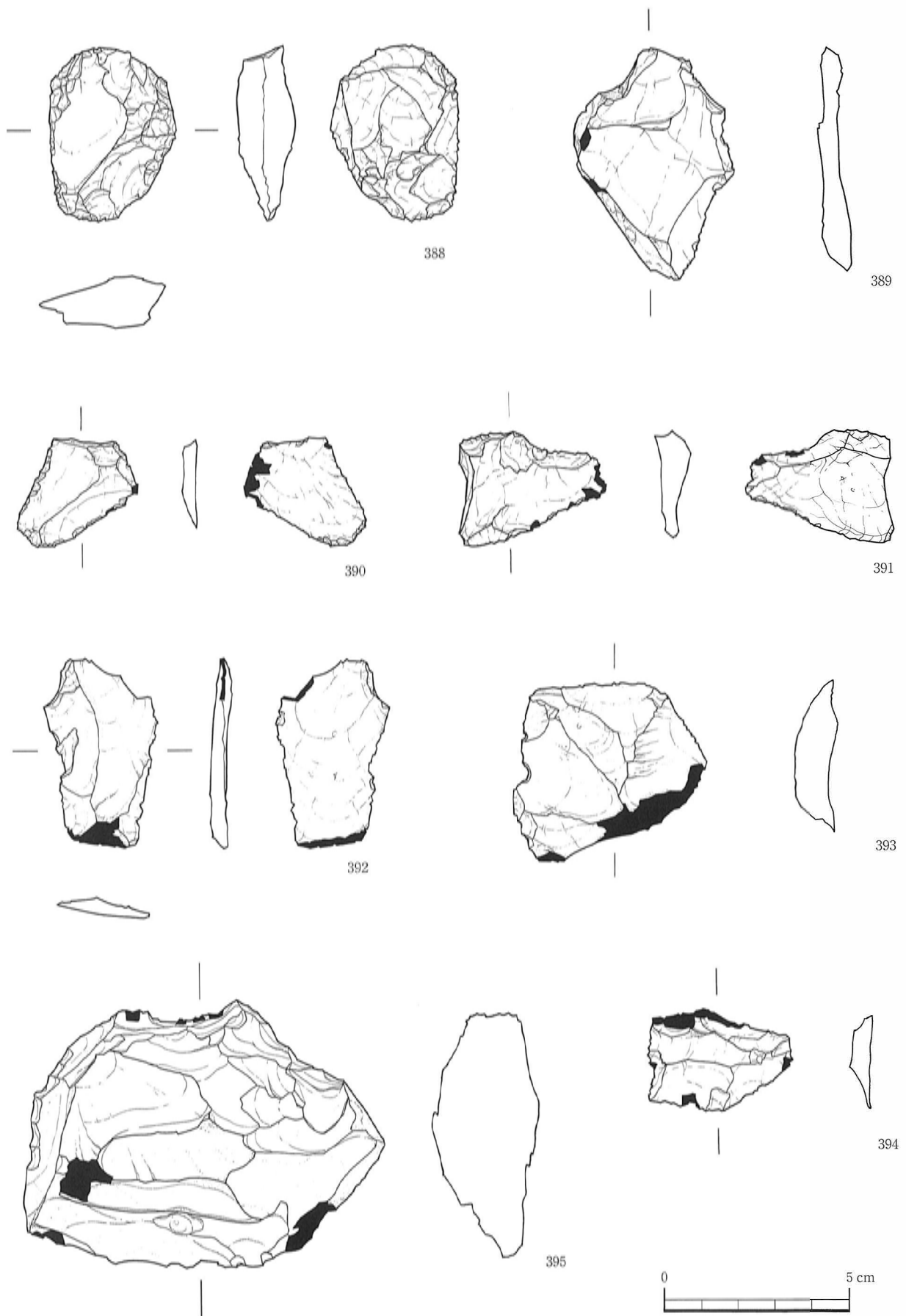


图146 石器

刻み目凸帯を1条巡らせている長原式の深鉢である。胎土中には角閃石を含む。

弥生土器としたものには中期から後期ないし古墳時代の初め頃のものも含まれている。

396・397・399・403～405・図版49-440・441・442は第III～IV様式に属すると思われるものである。396が甕蓋、397が鉢、399が甕、403～405・図版49-442は不明底部である。図版49-440は壺頸部に扁平な刻み目凸帯が1条巡る。図版49-441は鉢か壺の把手であり、胎土中に角閃石を含む。

398・400・401・402は弥生後期から古墳時代初め頃のものである。398・402が甕、400・401は壺か高杯の口縁部と推定されるものである。図版49-439は弥生後期から古墳時代初め頃の壺口縁部で、外面には粗い縦方向のハケ目、内面には横方向の粗いハケ目が施されている。

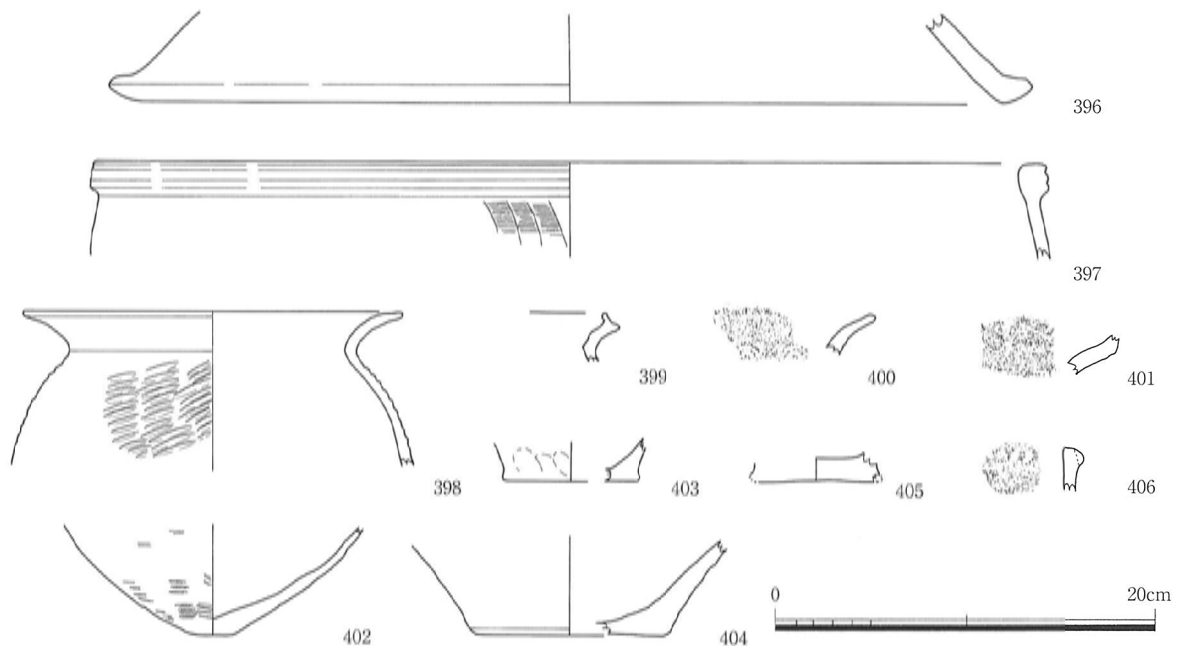


図147 縄文土器・弥生土器

引用・参考文献

- ・『松原市史』・『大阪市史』・『大阪府史』
- ・『大和川・今池遺跡』・『大和川・今池遺跡Ⅱ』・『大和川・今池遺跡Ⅲ』 大和川・今池調査会
- ・『大和川今池遺跡(その1・その2)』『大和川今池遺跡(その3・その4)』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・『大和川今池遺跡発掘調査概要』Ⅰ～ⅩⅢ 大阪府教育委員会
- ・『大和川今池遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告書 1997-1 大阪府教育委員会
- ・『余部遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告書 2001-2 大阪府教育委員会
- ・『鑄造遺跡研究資料2002』 2002 鑄造遺跡研究会
- ・『刈田4丁目所在遺跡現地説明会資料』 2002 (財)大阪市文化財協会
- ・広瀬和雄 「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学6』 1986 岩波書店

註

- 1) 『刈田4丁目所在遺跡現地説明会資料』 2002 (財)大阪市文化財協会
- 2) 堺市立埋蔵文化財センターの森村氏よりご教示頂いた。
- 3) (その5) 調査区同様、瓦については市本氏の御教示による。
- 4) 『図録 発掘速報展大阪2001 - 難波宮と大坂城 -』 2001 に笠舂が掲載されていることを三好氏に御教示頂いた。
- 5) 『観音寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第34集 1998 および『日置荘遺跡』(財)大阪文化財センター 1995 には溶解炉や鑄造関連土坑が掲載されている。
- 6) 註1)に同じ

5・6 調査区出土の埴輪類 (図148～151 表7・8 図版23・24・52)

今回の調査で出土した埴輪類はすべて原位置を保つものではなく、付近の古墳を削平して運び込まれたものであるため、ここに一括して報告する。器材埴輪類、円筒埴輪 (径が復原できる破片、小破片) と調査区毎に分けて掲載し、そのなかで、残存部位、おおよその時期順に従い報告する。また円筒埴輪個別別の情報は表にまとめているので参照されたい (表7・8)。

(その5)・(その6) 調査区で出土した埴輪は併せて、器材・形象埴輪類7点、円筒埴輪類34点を数える。これら埴輪類の出土遺構、層位は、第4面南側川 (その5)、第2-b面大河川 (その5)、第4面南側川 (遺構500) (その6) 等ですべて後世の遺構、包含層に伴うものである。(その6) 調査区南端で削平を受けた小方墳かと思われる遺構を一部検出したが、それは埴輪を伴っていない。

[その5 調査区出土器材埴輪類] (図148 図版23)

器材埴輪 (図148-397) は、第6面以下トレンチ出土のもので、鞍形埴輪矢筒部である。断面矩形の矢筒部上部が残存し、上端は欠損するが矢筒部上面に鍬の表現を有する。矢筒部最上段の直弧文「忍ヶ岡系」[斎藤・宇佐1952] 文様帯の上端部にみられる「中央割付線」の存在¹⁾、および類例型式の大きさからほぼ左右中央部分で欠損しているものとわかり、また矢筒部側面には、側面から外反して背板にとりつく接合部分が一部残存することから、側辺高は4～5cmほどのものと復原できる。外面はタテハケ中心で矢筒部突帯付近はタテハケのちヨコハケが施される。また、突帯付近にはヨコハケが施されること、側面の上下方向の描線が停止していること、側面 (残存下部) の水平方向の小さな刻線が文様を構成するというよりは突帯の上端部仕上げの際の工具で削り取った痕跡と理解できること、突帯の剥離痕と考えられる色調の変化等から、矢筒部残存の最下部直下の位置に2段目の突帯がめぐることが推測

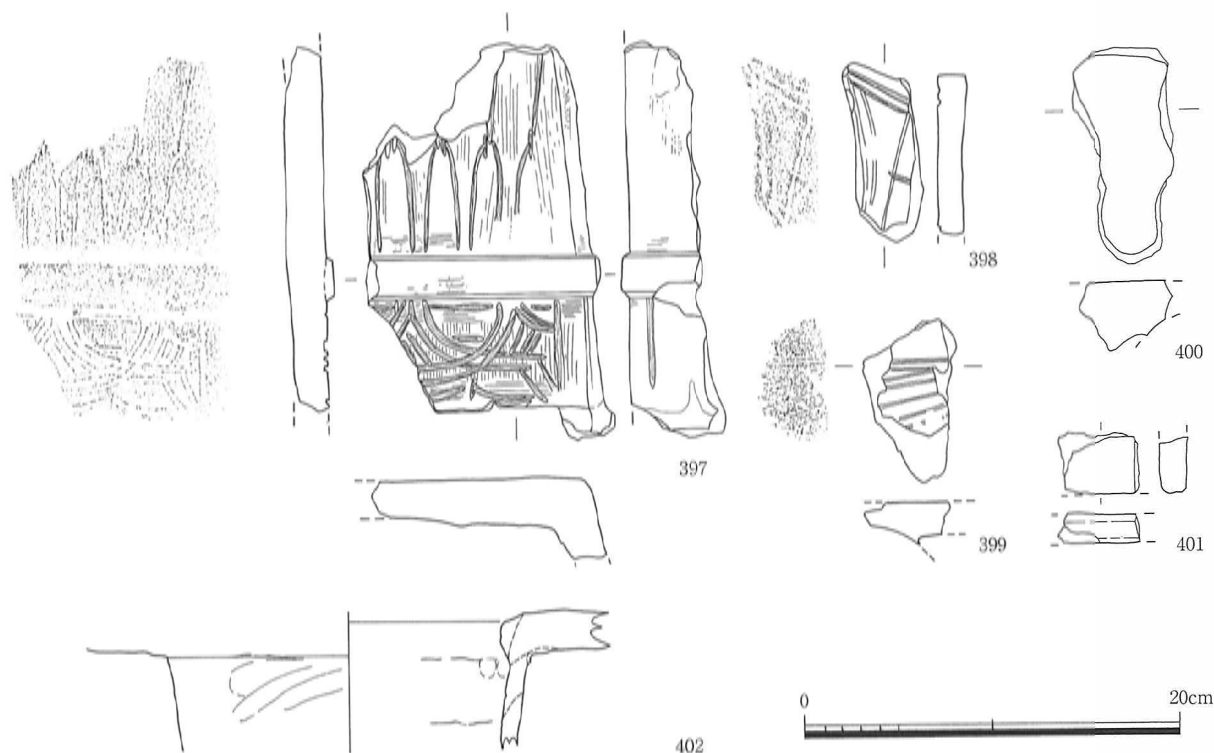


図148 形象埴輪 (その5 出土)

できる。内面は縦方向の指ナデの痕跡がみられる。胎土はやや粗く、2 mm以下の砂粒が多く含まれる。焼成は良好で概ね浅黄橙色を呈し、径2 cm程度の黒斑が最上段突帯右縁辺部にみられる。また、矢筒部正面、側面とも一部赤色顔料が残存している。

鏃の描線と矢筒部上段の忍ヶ岡系文様は、別個の線刻工具を用いている。忍ヶ岡系文様は断面三角形に近い、太く深い描線で刻まれる。鏃部の表現は矢筒部文様帯とは異なり、細い断面四角形状を呈する鋭い描線で刻まれる。鏃部の表現は矢筒部文様帯とは異なり、細い断面四角形状を呈する鋭い描線で刻まれる。鏃身部上半は失われるが、鏃身下半部、鏃身関部・茎部の表現から柳葉鏃を模したことがわかる。

器材埴輪(図148-398)は、第6面以下トレンチ出土のもので、鞍形埴輪鱗飾り部分である。397と焼成、胎土の特徴から同一個体のもので判断でき、左側辺の鱗飾り部分に相当すると思われる。表面が摩滅し細部不鮮明であるが、2種類の線刻工具を用いたと推測できる。板状の背負革(以下「背負板」)の左側辺を示す上下の描線と、それに直角に取り付く描線は断面四角形状の細い描線で刻まれ、同一平面上に描かれる。鱗飾り部分は、摩滅が特に著しいが、断面逆三角形から逆台形状の描線を刻む。

器材埴輪(図148-399)は、第2-b面大河川出土のもので、盾形埴輪片である。盾面の右周縁部(外区部分)で、鋸歯文の一部が残存し、盾面と円筒部(基部)の接合部分が残存する個体である。鋸歯文については、2種類の線刻表現が見られ、鋸歯文外形線は断面逆台形状のやや太い描線で、鋸歯文内には断面四角形状の細い描線で刻まれる。上方の鋸歯文外形線は水平に描かれ、鋸歯文内の斜線は、描線の深さ(強さ)から、左から右上がりの描線で刻まれる。また、内の描線の間隔が下方に比べて上方が狭くなっていくことから、先に直角三角形の鋸歯文外形線を描き、その後内の描線を斜辺に平行に、同じ幅で引き、上方部分で調整したものであろう。胎土はやや粗く2 mm以下の砂粒が多く含まれ、焼成はやや不良で概ね赤褐色を呈し、断面には黒色部分が残る。盾面部分には、一部赤色顔料が残っており、盾面全面に赤色顔料が塗布されていたものと思われる。

器材埴輪(図148-400)は、盾形埴輪片であろうと思われる。第2-b面大河川から出土した。器表面には、線刻等痕跡を見出せない。磨耗しているせいもあるが、無文帯部分であろうかとおもわれる。盾面と円筒部(基部)の接合部分が残存するものである。胎土はやや粗く、2 mm以下の砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、断面には黒色部分が残る。色調は明茶褐色を呈す。

器材埴輪(図148-401)は、器材埴輪につく突帯部分であろう。第2-b面大河川出土のもので胎土はやや粗く、2 mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は明茶褐色である。

形象埴輪(図148-402)は、胴部と脚部分の残存個体であろうか。第2-b面大河川出土のものである。脚部の内径は16cmほどである。他の、器材埴輪、円筒埴輪とまったく異質な胎土で、精良な胎土を用いている。0.2mm以下の砂粒を少量含み、色調灰白で、焼成はやや不良である。

[その5 調査区出土円筒埴輪] (図149 図版24)

円筒埴輪(図149-403~405・410)は、(その5) 調査区出土のもので径が残存、もしくは復原できる個体である。すべて、土師質である。

410は、外面調整が1次タテハケ(4本/cm)で、2次調整にB種ヨコハケ(6本/cm)が、内面にはタテハケ(5本/cm)が施される。色調は、にぶい赤褐色を呈し、胎土は0.1~1 mm程度の細かい砂礫で構成され、花崗岩、角閃石を含むのが特徴である。ヨコハケの静止がナナメ方向に傾斜せず、川

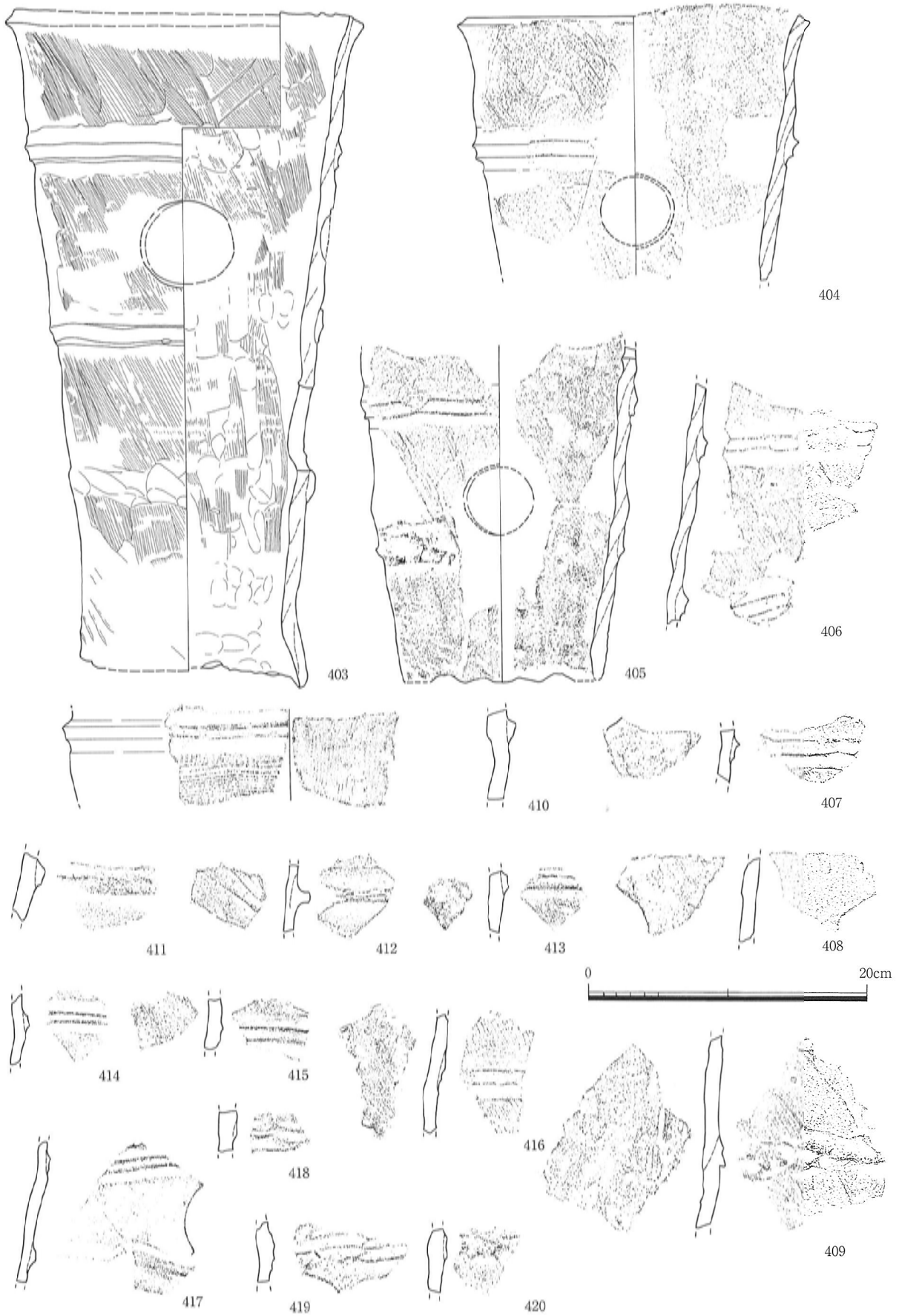


図149 円筒埴輪（その5出土）

西編年Ⅲ期で5世紀第三四半期のものと思われる²⁾。

403～405は、410とは異なり、色調が、にぶい黄橙から灰白の白色系で、0.2～3mmの長石、石英、流紋岩(黒、暗灰、灰色)を多く含み、1cm近くある小礫を含むものもある。概して毛羽立った器表面を成す。川西編年Ⅴ期のものである。403は、口縁部径23.6cm、底部径14.9cm、3条突帯で、2、3段目に円形スカシが施される。粘土帯はおおよそ4～5cm程度の幅で反時計まわりに積み上げられ、表面の接合痕は一時調整により消されるが、内面にはナナメハケが十分ではなく、接合痕跡が多く残る。外面調整は1次調整ナナメハケ(6～9本/cm)のみで、内面にはナナメハケ(6～9本/cm)、成形・調整時の指オサエ・ナデがみられる。口縁部は、口縁端部を指ナデする際に上方へのつまみ上げがみられ、内側、外側の両端部が上方に捻り出される。口縁部はやや外反する傾向がある。最下段突帯には、2本の指を用い指で器壁に粘土を断続的にナデつけただけでその後のヨコナデを省略した、いわゆる断続ナデ技法がみられる。2段目以上の突帯は、総じて突出度の低い断面M字の形状を示す。底部は、底部調整に板状工具による押さえつけ・ナデがみられ、また、埴輪倒立時における打ち欠きと思われる痕跡がある。最上段には、ヘラ記号がみられ、右上がりの2条の平行するヘラ状工具による線刻が施される。さらに特徴的であるのは、2次的に内面に煤の付着や器壁表面の被熱赤変がみられることである。内面の煤は底部打ち欠き面からの3段目のスカシ下方まで顕著にみられる。底部打ち欠き面やスカシの端面に関しても煤が付着する。表面は最上段部分が一部被熱して赤変している様子が窺える。また3段目付近には被熱により器壁がはじけて剥落したような痕跡もみられる。404は、口縁部から突帯1条、スカシ1が残存する2段目まで残存する個体である。復原口径23.4cm、外面調整は1次調整ナナメハケ(7～8本/cm)のみで、内面にはナナメハケ(6本/cm)、成形・調整時の指オサエ・ナデがみられる。口縁部は、403ほど内側の端部が上方に顕著に捻り出されないがよく似た口縁形態をとる。突帯は、突出度の低い断面M字である。突帯以下の内面煤の付着が顕著である。405は、底部から2段目の突帯まで残存する。復原底部径は、13.7cmで、403と同じく、最下段突帯には、2本の指を用い指で器壁に粘土を断続的にナデつけただけでその後のヨコナデを省略した、いわゆる断続ナデ技法がみられる。2段目の突帯は、突出度の低い断面M字の形状を示す。底部は、底部調整に板状工具による押さえつけ・ナデがみられ、また、埴輪倒立時における打ち欠きと思われる痕跡がある。また、スカシ部分も含め、最下段突帯以下の内面煤の付着が顕著である。

これらの色調、胎土、成形、調整、形態が大和川今池遺跡出土埴輪で最も多くみられるものであり、それらの時期は川西編年Ⅴ期を中心とするものである。特徴的であるのは、内面に2次的に顕著なススの付着がみられるものが多く見られることである。

円筒埴輪(図149-406～409・411～420)は、(その5)調査区出土の埴輪片である。外面一次調整で終わるものばかりで、内外面ともナナメハケ調整である。内側には、成形・調整時の指オサエ・ナデが顕著にみられる。また、埴輪の断面はローリングを受けるものもあるが、ほとんどが鋭い破面を残している。406・407・409・411～420は突帯部分が残存する破片である。併せて、スカシ部分が残存するもの(407・416・417)もある。414・415・417は赤色系の色調、異種胎土で、411・412・416はその他の別系統の色調、胎土。その他は、白色系の大和川今池遺跡で一般的にみられるものである。

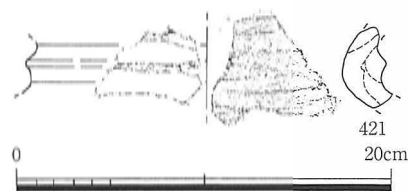


図150 朝顔形埴輪(その5出土)



図151 円筒埴輪（その6出土）

411・412は突帯の突出が大きい。他に比べてやや時期が古く、IV期の埴輪であろう。413～415はゆるいM字形の突帯で、突帯は比較的突出している。その他のものは、総じて突帯の突出度が低い。また、409・420のように、断続ナデ技法を持つものもある。408はスカシ部分が残存する破片である。

他に、朝顔形埴輪の口縁部から胴部の屈曲部の破片(図150)が出土している。

[その6 調査区出土の円筒埴輪] (図151 図版52)

円筒埴輪(図151—407～423)は(その6)調査区出土の埴輪片である。(その5)調査区に比べて、径を復原できる個体が少ない。外面一次調整で終わるものばかりで、内外面ともナナメハケが施される。内側には成形・調整時の指オサエ・ナデが顕著にみられる。IV期後半からV期の時期のものが主を占める。

407は、口縁部片である。白色系の色調で、胎土も含めて、大和川今池遺跡出土埴輪の主要なものの特徴を持つ。口縁はやや外反し、内外両端部が若干上方にひねり出される。他の埴輪に比べて、つくりが比較的丁寧であり、IV期のものか。408・411・413～416・418～420・422は突帯部分が残存する破片である。併せて、スカシ部分が残存するもの(408・411・422)もある。418・419は褐色系の色調、精良な胎土で、408・411・413～415・420・422はその他の別系統の色調、胎土で特徴的に花崗岩を含むものや、角閃石を含むものがある。その他は、白色系の大和川今池遺跡で一般的にみられるものである。415は色調、胎土も別系統で、さらに突帯の突出が大きく他の埴輪に比べ異質な埴輪である。IV期の所産か。411・413・416・418・419はゆるいM字形の突帯をもち、比較的突出する。その他のものは、総じて突帯の突出度が低い。また、413・420のように、最下段突帯に断続ナデ技法を持つものもある。410はスカシ部分が残存する破片、409・417・423は胴部片である。410は赤色系の色調、同種胎土、417は、褐色系の色調、精良な胎土、409・423はその他の別系統の色調、胎土で花崗岩、角閃石を含む。その他は、白色系の大和川今池遺跡で一般的にみられるものである。また、内面に煤の付着が見られるものも多くあり、特に411は一定ラインより下方に煤の付着が顕著である。(山崎 頼人)

註

- 1) 筆者は以前に大和川今池遺跡出土の鞍形埴輪を検討する中で、線刻表現の筆致の観察から「中央割付線」の存在を指摘し、文様の割付方法が鞍形埴輪の変遷と大きく関わってくることを明らかにした[杉本・山崎2000]。併せて参照されたい。
- 2) 円筒埴輪の編年は[川西1978]に従っている。

表7 円筒埴輪観察表(その5)

遺物番号	出土遺構	地点・層位	器種	時期	部位	内外面の手法	突帯	色調	焼成	胎土	備考
403	第4面(南側川内)遺構308・321	A12-g5	円筒	V期後半	口縁部から基部スカシ2段・2方向突帯3	外:ナナメハケ8~9本/cm、板ナデ 内:ナナメハケ8~10本/cm、指オサエ、ナデ 口縁部:ヨコナデ	M字、断続ナデ	白色系 10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y8/2灰白~2.5Y8/3淡黄 10YR8/4浅黄橙	良好	0.2~3mmの長石・石英・黒・暗灰流紋岩多く含む。0.5~10mmの長石・黒・暗灰流紋岩少量含む	内面:2段上方までスス付着 外面:一部二次赤変、ヘラ記号あり
404	第4面(南側川内)遺構308	A12-f4・5 A12-g5	円筒	V期	口縁部スカシ1突帯1	外:ナナメハケ7本/cm 内:ナナメハケ6本/cm、指オサエ、指ナデ 縁部:ヨコナデ	M字	白色系 10YR7/3・7.5YR6/4にぶい黄橙	良好	0.2~3mmの長石・石英・黒・暗灰流紋岩多く含む。0.5cmの長石・石英・黒・暗灰流紋岩含む。0.7cmの長石含む。	内面:スス(バラツキ有)突帯以下顕著 395~399同一個体か
405	第4面(南側川内)遺構308・315・321	A12-g5 A12-f4・5	円筒	V期後半	底部スカシ2段・突帯2	外:ナナメハケ5~8本/cm、板ナデ 内:指オサエのち、ナナメハケ(4本)/cm	M字、断続ナデ	白色系 10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y8/2灰白	良好	0.2~3mmの長石・石英・黒・暗灰流紋岩多く含む。0.5cmの長石・黒・暗灰流紋岩含む。1cmの黒流紋岩含む。	内面:最下段突帯以下スス、2次赤変
406	第4面(南側川内)遺構308	A12-g5	円筒	V期	突帯2・スカシ	外:タテハケ5本/cm、ナナメハケ6本/cm 内:指オサエ、指ナデのちナナメハケ6本/cm	M字	白色系 10YR6/4にぶい黄橙 10YR5/6黄褐 2.5Y8/3淡黄	良好	0.2~3mmの長石・灰・黒流紋岩・石英多く含む。0.5cmの石英・長石・黒・灰・暗灰流紋岩少量含む。	下方一定ラインより下スス
407		A12-f5 第6面	円筒	V期か	突帯・スカシ	外:ナナメハケ(単位不明) 内:ナナメハケ(単位不明)のち指オサエ、指ナデのち、突帯部:指ナデ	M字	白色系 7.5YR8/3浅黄橙	やや軟	0.2~2mmの長石・灰・黒流紋岩・石英多く含む。	内面:スス小
408	第4面(南側川内)遺構308	A12-g5	円筒	IV期後半~V期	スカシ	外:ナナメハケ(4本)/cm 内:指オサエ、指ナデのち、ナナメハケ7本/cm、スカシ部・ナナメハケのち指オサエ		白色系 10YR7/4にぶい黄橙	良好	0.2~3mmの長石・石英・灰・黒流紋岩多く含む。1cmの黒流紋岩含む。	内面:スス全面
409	第4面南側川内	A12-f5	円筒	V期	突帯	外:ナナメハケ5本/cm 内:指オサエ、指ナデのち、ナナメハケ6本/cm、突帯部・ハケ後指オサエ、指ナデ	断続ナデ	白色系 10YR7/4にぶい黄橙	良好	0.2~3mmの長石・石英・灰・暗灰・黒流紋岩多く含む。0.5~0.6cmの長石・暗灰流紋岩含む。	内面:スス全面
410	A12-g4 第2面包含層		円筒	III期か	突帯	外:1次 タテハケ4本/cm後、2次B種ヨコハケ6本/cm 内:タテハケ5本/cm	凹	赤色系 5YR5/4にぶい赤褐色	良好	0.1~1mmの長石・石英暗灰流紋岩・花崗岩・黒雲母・角閃石含む。	
411	第2-b面大河川	A12-c・d8	円筒	IV期	突帯	摩耗により不明 内:ナデか	凸	別系統 10YR7/2にぶい黄橙	良好	0.2~1mmの長石・石英・黒流紋岩多く含む。花崗岩・角閃石・黒雲母微量含む。	
412	第5面335溝	A12-f9	円筒	IV期か	突帯	内:指ナデ	凸	別系統 2.5Y8/3淡黄	良好	0.1~0.5mmの長石・石英少量含む。	
413		A12-e4 上層包含層	円筒	IV期後半か	突帯	外:ナナメハケ(8本)/cm 内:ナナメハケ6本/cmのち指オサエ	ゆるいM字	白色系 2.5Y8/3淡黄	軟	0.2~1mmの長石・石英多く含む。	
414	第2-b面大河川	A12-c・d8	円筒	IV期後半か	突帯	内:指ナデ	ゆるいM字	赤色系 7.5YR6/8橙	軟	0.2~0.5mmの長石・石英暗灰流紋岩少量含む。	
415	第5面160溝	A12-e4	円筒	IV期後半か	突帯	内:ナナメハケ7本/cmのち指オサエ	ゆるいM字	赤色系 7.5YR7/6橙	やや軟	0.2~1mmの長石・石英・暗灰流紋岩少量含む。	
416	第4面(南側川内)遺構308	A12-g5	円筒	V期	突帯・スカシ	外:ナナメハケ7本/cm 内:指オサエ、指ナデのち、ナナメハケ9本/cm	M字	別系統 2.5Y7/2灰黄	良好	0.2~1mmの長石・石英・黒流紋岩多く含む。0.2mm角閃石・花崗岩少量含む。	
417	A12-d・e9 第2-b面包含層		円筒	IV期後半か	突帯2・スカシ	外:摩耗により不明 内:指オサエ、指ナデ	ゆるいM字	赤色系 10YR8/4浅黄橙	軟	0.2~1mm暗灰流紋岩・長石ごくわずかに含む。	
418	A12-ef 第4面包含層		円筒	V期か	突帯	内:指オサエのちナナメハケ(単位不明)のち指オサエ	三角	白色系 2.5Y8/3淡黄	やや軟	0.2~1mmの長石・石英・暗灰流紋岩多く含む。	
419	A12-g8 第4面黒茶層		円筒	V期か	突帯・スカシ	内:指オサエのち指ナデ(スカシ部穿孔後の調整)	M字	白色系 10YR8/2灰白	やや軟	0.2~3mmの長石・黒流紋岩・石英多く含む。	
420	A12-f9 第2-b面包含層		円筒	V期	突帯	摩耗により不明 内:指オサエ	断続ナデ	白色系 2.5Y8/3淡黄	やや軟	0.2~3mmの長石・石英・黒流紋岩多く含む。	

表8 円筒埴輪観察表(その6)

遺物番号	出土遺構	地点・層位	器種	時期	部位	内外面の手法	突帯	色調	焼成	胎土	備考
407	第4面南側川(遺構500)	A12-d2・3	円筒	IV期後半	口縁部突帯・スカシ	外:ナナメハケ6本/cm 内:ナナメハケ6~7本/cm、指ナデ、指オサエ	ゆるいM字	白色系 7.5YR7/3にぶい 黄 10YR7/3・7.5YR7/3にぶい 黄橙	良好	0.1~2mmの長石・石英・ 灰流紋岩少量含む。	内面:スス大 407~413まで同一 個体か
408	第4面南側川(遺構500)	A12-e3	円筒	V期か	スカシ・ 突帯	外:ナナメハケ6本/cm 内:ナナメハケ7本/cm、 指ナデ、指オサエ	M字	別系統 10YR5/4にぶい 黄褐	堅緻	0.1~2mmの長石・石英・ 灰流紋岩多く含む。花 崗岩・角閃石微量含 む。0.5cmの暗灰流 紋岩含む。	内面:スス大、スカシ 部は外面にかけても スス。
409	第4面南側川(遺構500)	A12-e3	円筒	IV期後半	胴部	外:ナナメハケ(6本)/ cm 内:ナナメハケ(8本)/ cm	白色系	7.5YR7/3にぶい 黄橙	やや軟	0.1~2mmの長石・石英・ 灰流紋岩多く含む。	
410		A12-e3 第4・5面黒 茶層	円筒	IV期後半 ~V期	スカシ	外:ナナメハケ6本/cm 内:ナナメハケ7本/cm、 指オサエ	赤色系	7.5YR7/6橙	やや軟	0.1~1mmの長石・石英・ 灰流紋岩多く含む。	
411	第4面南側川(遺構500)	A12-d3 A12-e3・ 4	円筒	V期	スカシ・ 2段・突 帯	外:ナナメハケ6~8本/ cm 内:ナナメハケ6~ 9本/cm	M字	白色系 10YR5/3にぶい 黄褐 7.5YR8/3浅黄 橙 10YR 6/3にぶい 黄橙	良好	0.1~2mmの長石・石英・ 角閃石多く含む。花崗 岩微量含む。	内面:スス(スカシ部 分の周囲のみ) 外面:スカシ部分に も少量有 ヤマト5-407 同一個 体か
412		A12-e3 第4・5面黒 茶層	円筒	IV期後半 ~V期	胴部	外:タテハケ6本/cm 内:ナナメハケ7本/cm、 指ナデ、指オサエ	白色系	7.5YR7/3にぶい 橙	やや軟	0.1~1mmの長石・石英・ 黒流紋岩多く含む。	
413	第4面南側川(遺構500)	A12-d3 A12-e3・ 4	円筒	V期	基部 スカシ・ 突帯2	外:ナナメハケ6~7本/ cm 内:指ナデ、指オサエ のちナナメハケ7~9本/ cm	ゆるいM字 ・前 統ナデ	別系統 7.5YR4/4褐 10YR7/2にぶい 黄橙 7.5YR7/4にぶい 橙	良好	0.2~1mmの角閃石・長 石・石英・黒流紋岩多 く含む。花崗岩微量含 む。	内面:スス全面、ス カシと片側の破断面 にもスス 外面:スス全面、割 れ口には及ばない ヤマト5出土分はロー リング受けハケ、スス 等消える
414	第4面南側川(遺構500)	A12-e4 A12-c2・ 3	円筒	V期	突帯	外:ナナメハケ(8本)/ cm 内: ナナメハケ(10本)/cm	M字	別系統 7.5YR6/3にぶい 褐 10YR 6/2灰黄褐	堅緻	0.1~1mmの長石・石英・ 流紋岩(灰・黒・暗灰・ 赤)多く含む。角閃石・ 花崗岩微量含む。 2~5mmの灰流紋岩多 く含む、2cm大も有	内面:スス全面
415	第3-a面方形区 面溝(遺構30)	A12-e2	円筒	IV期か	突帯		凸	別系統 10YR5/6黄褐	軟	0.2~5mmの長石・石英・ 灰・暗灰流紋岩多く含 む。金雲母含む。	
416	第4面南側川(遺構500)	A12-e3	円筒	IV期後半	突帯	内:ナナメハケ8本/cm、 指ナデ	ゆるいM字	白色系 2.5Y7/2灰黄	良好	0.1~1mmの長石・石英・ 灰流紋岩少量含む。	
417	第3-a面方形区 面溝(遺構30)	A12-d2・ 3	円筒	IV期後半 か	胴部	外:ナナメハケ4本		褐色系 7.5YR7/6橙	軟	0.1~1mmの長石・石英・ 灰流紋岩微量含む。	
418	第4-a面北河川	O12-j2	円筒	IV期後半 か	突帯	外:ナナメハケ(6本)/ cm	ゆるいM字	褐色系 7.5YR6/8橙	軟	0.1~1mmの長石・石英・ 黒流紋岩少量含む。	
419	第3-a面方形区 面溝(遺構30)	A12-d2・ 3	円筒	IV期後半 か	突帯		ゆるいM字	褐色系 10YR7/8黄橙	軟	0.1~1mmの長石・石英・ 灰流紋岩微量含む。	
420	第3面334土坑	A12-e3	円筒	V期	スカシ・ 突帯	内:指オサエ、指ナデ	断統ナデ	別系統 10YR7/4にぶい 黄橙	やや軟	0.1~2mmの長石・石英・ 赤流紋岩多く、花崗 岩微量含む。 0.5cm灰・黒流紋岩含 む。	内面:スス全面
421	第4面南側川(遺構500)	A12-e3	円筒	IV期後半 ~V期	胴部	外:ナナメハケ6本/cm 内:ナナメハケ8本/cm、 指オサエ	白色系	7.5YR6/3にぶい 褐	堅緻	0.1~2mmの長石・石英・ 灰流紋岩多く含む。	内面:スス小 421~423まで同一 個体か
422	第4面南側川(遺構500)	A12-c1 A12-e3	円筒	V期	スカシ・ 突帯	外:ナナメハケ6~7本/ cm 内:ナナメハケ7~ 10本/cm、指ナデ、指オ サエ	ゆるいM字	白色系 10YR7/4にぶい 黄橙 7.5YR6/4にぶい 橙 7.5Y R8/3浅黄 橙	良好	0.1~2mmの長石・石英・ 黒流紋岩多く含む。 0.1~1mmの花崗岩多 く含む。 2~5mmの灰・暗灰流 紋岩含む。	内面:スス全面
423	第4面南側川(遺構500)	A12-e3・ 4	円筒	V期	胴部	外:ナナメハケ7本/cm 内:指オサエ	別系統	7.5YR8/3浅黄 橙	良好	0.1~1mmの長石・石英 多く含む。角閃石・花 崗岩微量含む。	内面:スス全面

大和川今池遺跡 5・6 出土埴輪の基礎分析 (図152~154 表9 図版23・24・52)

前述しているように、大和川今池遺跡からは、多くの破壊された埴輪が原位置から遊離した形で後世の遺構、包含層から出土している。それらの埴輪は大きく器材、形象埴輪と普通円筒埴輪に分かれる。

また、それら埴輪類の所属時期は5世紀中頃と6世紀前半に大別される。これらの埴輪が、河内平野後世の大規模開発により、どこから、どのようにして運ばれたのかを詳細に検討するためには、大和川今池遺跡出土埴輪の特徴、特質を明らかにしておく必要がある。

以下、若干の基礎分析を行う。なお、筆者は以前に、当遺跡出土の器材埴輪の検討を行っている [杉本・山崎2000]。あわせて参照されたい。

・器材埴輪の特徴

以下に、大和川今池遺跡出土埴輪のなかで特徴的な鞍形埴輪、盾形埴輪についての見解を示す。

(1) 鞍形埴輪

当遺跡出土鞍形埴輪は、断面矩形の矢筒部上部が残存し、上端は欠損するが矢筒部上面に鏃の表現を有することから、高橋編年の1類2式、松本編年のI式に相当する5世紀前半代とされる資料である [高橋1988・1992、松本1988]¹⁾。鏃の表現方法が浮き彫り状を呈さず、線刻による表現のみで、さらには側面の鏃表現が消滅した段階となり、鏃部分の表現簡略化が進んでいる。鏃の本数も中央割付線から推定すると、6本となっており、鏃表現本数の減少傾向が進んでいる。突帯部文様ももたず、側面の文様も縦線が1本認められるのみで、側面感はほぼ欠如している。拙稿で鞍形埴輪の割付方法の変遷を提示したように、鏃表現が矢筒部と一体化したもので、高橋編年1類2式、松本編年II式以降では崩れていく矢筒部からの規制がしっかりと残っている段階のものである [杉本・山崎2000]。よって、高橋編年1類2式、松本編年I式(新相)の範疇で捉えられる資料であるが、鏃表現の特徴、矢筒部側面間の欠如、側面高の減少等から、それぞれの分類の中でも新しい要素を持つ資料である。したがって、所属時期はそれぞれの編年の下限時期、5世紀中頃である。

(2) 盾形埴輪

当遺跡出土盾形埴輪は、盾面の右周縁部(外区部分)で、鋸歯文の一部が残存し盾面と円筒部(基部)の接合部分が残存する資料(図148-399)と、同じく盾面と円筒部(基部)の接合部分が残存するもので、おそらく無文帯部分であろう資料(図148-400)が出土している。双方とも小片のため不確定要素はあるが、盾面と円筒部の接合状況に分類の着眼点を置いた田中秀和分類のI-C類、5世紀後半代の資料で鞍形埴輪の時期と大過ない [田中1994]。

・円筒埴輪の属性分析

以下に、大和川今池遺跡出土円筒埴輪に見られる特徴について記す。

(1) 大和川今池遺跡出土円筒埴輪の概要

当遺跡出土円筒埴輪は、川西編年III期のものと、IV期後半からV期のものに大別できる。ただし、III期の資料は、(図149-410)の一個体のみである。色調、焼成、胎土の特徴からは、大きく3類型化することができる(表9)。以下、主に当遺跡出土円筒埴輪の主要なA類についての諸属性の特徴を述べる。

法量については、径が復原できるもの(図149-403~405)に関しては、口縁部径24cm程、底部径14~15cm程になる。これらは、3条突帯で、2、3段目に円形スカシが施される。大和川今池遺跡出土

表9 大和川今池遺跡出土円筒埴輪のグルーピング

類型	A類	B類	C類
色調	白色系	赤色系	別系統
焼成硬度	硬質	やや軟	硬質～軟
胎土	非常に粗い(3mm以下多く含む)	密(1mm以下含む)	密(1mm以下含む)
胎土中の含有鉱物等	長石	◎(5mm以上も有り)	○
	石英	◎	○
	流紋岩	◎(5mm以上も有り)	○
	花崗岩	—	○
	角閃石	—	○
	雲母	—	△
煤付着	有り(付くものが多い)	なし	なし
突帯	M字/断続ナデ	凸/M字/(断続ナデ)	凸/M字/(断続ナデ)
備考	大和川今池遺跡出土主要タイプ。径復原可、底部有り。毛羽立った器表面を持つ。		

【凡例】 ◎:多く含む ○:含む △:少量含む

埴輪は、これら中形品が主を占めるようである。粘土帯はおおよそ4～5cm程度の幅で積み上げられ、表面の接合痕は一次調整により消されるが、内面にはナナメハケが十分ではなく、接合痕跡が多く残る。外面調整は一次調整ナナメハケ(6～9本/cm)のみで、内面にはナナメハケ(6～9本/cm)、成形・調整時の指オサエ・ナデがみられる。口縁部は、口縁端部を指ナデする際に上方へのつまみ上げがみられ、内側、外側の両端部が上方に捻り出される。口縁部はやや外反する傾向がある。最下段突帯には、いわゆる断続ナデ技法もみられる。2段目以上の突帯は、総じて突出度の低い断面M字の形状を示す。底部残存のもの(図149-403・405)は、底部調整に板状工具による押さえつけ・ナデがみられる。また、ヘラ記号をもつ個体(図149-403)もあり、右上がりの2条の平行するヘラ状工具による線刻がみられる。また、特徴的であるのは、内面に2次的に顕著なススの付着がみられるものも多く見られることである。煤の付着は内面にしかみられないか、もしくはスカシ部の縁辺のみに見られる現象で、一定のラインで煤部と非煤部とに区切られるものもみられる。おそらくは、竈の部材(煙突)に用いられたと思われる。

(2) 突帯における特徴

大和川今池遺跡出土円筒埴輪は破片のものが多く、全体形状を検討の対象とするのは困難である。よって、比較的多く存在する突帯部分残存のものから、その形状の特徴を抽出したい。先に分類した色調・胎土・焼成による分類(表9)に従うと、A類には、突出度の高いタガが存在しない。また、C類には、断続ナデのものがみられないことが指摘できる。A類に関しては、径の復原できる大形破片の状況からも、突出度の高いタガが存在しないことは一般化できるであろう。突出度の低いM字が主を占め、最下段突帯には、断続ナデが施される。これらのM字の突帯は、はじめに、粘土紐の下側を中心

に、人差し指の腹全体と親指横腹を使って押さえつけながら一周する。主に人差し指に力をいれ、親指は添えるだけのことで断面M字部分下半、山形を創出する。次に、もう一度、人差し指と親指で粘土紐上部を押さえつけ、一周する。この際は、親指の横腹部分で粘土紐を器壁に接着させる。人差し指は添えているだけであるが、親指と人差し指をつまむように密着させた場合、人の摂理で親指のみ力を入れられないため、おのずと人差し指の押さえつけが生じ、断面M字上半部分山形を創出する。この摂理により、M字は上方部分が下方部分よりも高くなるものが多い。また、突帯上部の接着を強固にし、見栄えをよくするために人差し指のみで仕上げのナデがみられるものもある。

これら、M字の突帯、断続ナデの突帯を詳細に観察すると技法上の共通点が浮かび上がる。次節で若干の検討を行う。

(3) 断続ナデ技法の分類

先に、M字突帯と断続ナデの共通点を示唆したが、そのことについては以前から中島和彦氏により、言及されているように、断続ナデA類とB類の分類があり、従来の断続ナデ技法(B類)は、断続ナデ後のヨコナデを省略したものであるという指摘がある(図152[中島1992])。すなわち、断続ナデ技法A類は、断続ナデ技法(B類)によって貼り付けられた粘土紐を最終的な仕上げとしてヨコナデを突帯の上半部を中心に行う技法であるといえる。中島氏は、さらに断続ナデ技法は、「突帯の調整技法ではなく、粘土紐を器壁に密着させ突帯の基本形を作る突帯成形技法」とし、本来は最終的に「ヨコナデ調整で形を整える」ものだとしている。また、その技法の採用には突帯の剥落防止のためであるとしている[中島1991]。確かに、IV期以前の埴輪には突帯を剥落したものが多く確認でき、また小工程ごとの突帯貼り付けもその剥落に対する施策であろうことは窺い知れる。

以下、上記の視点を含み、大和川今池遺跡出土埴輪による断続ナデ技法の分類を行う。

大和川今池遺跡出土埴輪のタガ部分には、断続ナデA種・B種がみられるが、A種は中島氏が素材として取り上げた奈良市菅原東遺跡窯跡群で見られるような顕著な親指の圧痕等みられない。それは、断続ナデの手法の違いによるものと思われる。

断続ナデ技法について大和川今池遺跡出土のものから、図152・153のように分類できる。大和川今池遺跡出土資料から、特に断続ナデBⅡのなかで、2分できることがわかる。すなわち、①は、貼り付けの際の両指の運びが上下方向を指向し、短い間隔のもの。②は、両指の運びが水平方向を指向し、長い間隔のものである(図149-407・416・418・419など)。この手法の違いが、中島氏が用いた資料とは技法上異なる要因と思われる。②の場合は、顕著な上部の爪の圧痕はみられない。

大和川今池遺跡で多くを占めるA類型の胎土色調のものは、突帯貼り付けの際にBⅡ②の手法を用いるものが確認できる。

また、それを仕上げナデしたもの(断続ナデA)もみられ、断続ナデの手法は最下段のみでなく、どの突帯にも施されていることがわかる、もしくはその可能性が高い。やや、飛躍すると突帯貼り付け時に最下段突帯を創出する時はおのずと手が下方

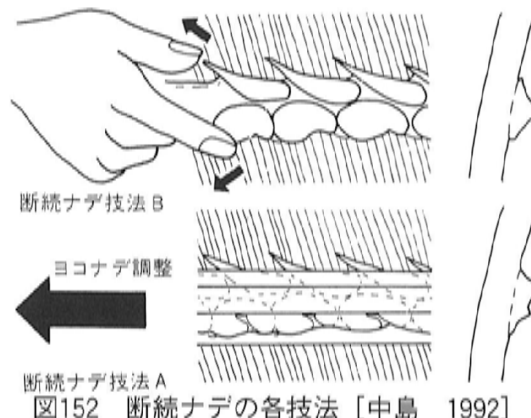


図152 断続ナデの各技法 [中島 1992]

断続ナデB (仕上げヨコナデなし)	
I. 一本の指を使うもの (押し付け)	
II. 二本の指を使うもの (貼り付け)	①上下方向のストロークの指運び (短い)
	②水平方向のストロークの指運び (長い)

断続ナデA (仕上げヨコナデ有り)	
①上部・突帯上面を2本の指で仕上げるもの	
②上部のみを一本の指で仕上げるもの	

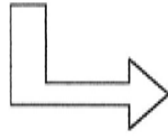


図153 断続ナデ技法の細別

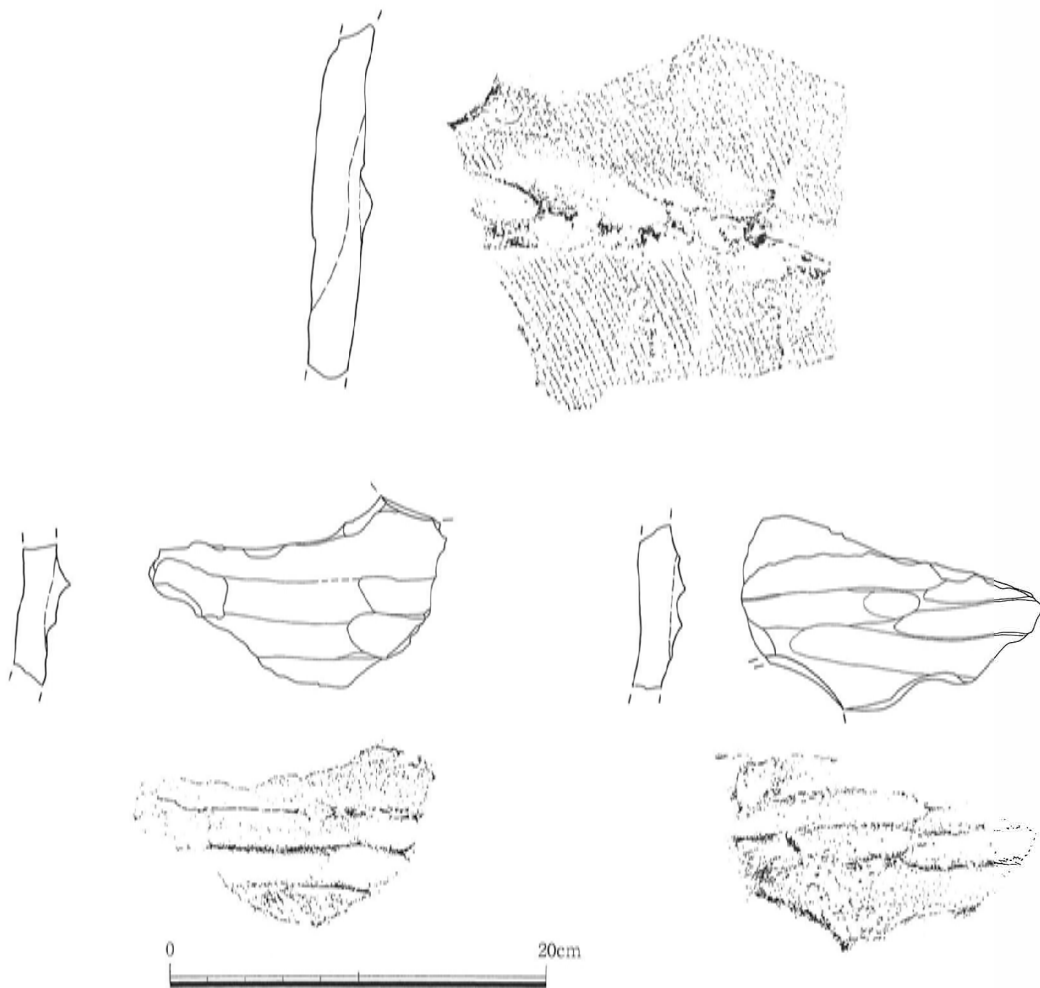


図154 断続ナデ各技法の実測図

まで伸ばした状態で施すため、上下方向の断続ナデになりやすく、上方の突帯になるに従って、手の位置も近く断続ナデの各技法 (図152[中島1992]) になり、水平方向に近い断続ナデになるとも想定できよう。断続ナデA技法は図154で示した以外に図149-416、図151-408・411・414・422に顕著に確認できる。大和川今池遺跡資料のみでは、これらB II ①と②の手法の違いが工人差の現われなのか、小時期差を示すものなのか、にわかには判断できない。多くの可能性が考えられるが、現時点では、大和川今池遺跡出土の埴輪製作工人の自然の摂理であることを想定しておく。

すなわち、前述のとおり、埴輪を倒立させ、最下段から上方の突帯貼り付けになるに従って、工人の手が垂直方向から水平方向に近くなる（手の位置が自分の顔から離れていた（手を伸ばした状態）のが近くなっていく（肘を曲げて手の位置が上がる））ことに起因しているものと考えられる。埴輪製作時の工人の姿勢等に影響してくるものであろう。

・大和川今池遺跡出土埴輪の特徴

これまで検討してきたことを特に円筒埴輪についてまとめると、大和川今池遺跡出土埴輪の特徴として以下のことが言える。

まず、円筒埴輪A類型が付近の近接した古墳群から、運ばれた埴輪であろうことは推測できる。それは、底部残存のもの存在、多くの転用痕跡がみられることから、それらの円筒埴輪は古墳を削平する際に意識的に持ち帰り、竈部材等に転用していることが伺える。円筒埴輪A類の時期はIV期後半からV期とすることができ、大和川今池遺跡付近の近接した古墳群の時期は、その時期を充ててよいだろう。さらには、器材埴輪の時期はそれらとは、異なるもので、他の古墳群に出自を考えるべきであるかもしれない。

また、断続ナデ技法については、断続ナデB種の細分を行い、大和川今池遺跡資料には、特徴的なB II ②の突帯貼り付けの際、水平方向に長いストロークの指運びのものがみられる。また、B II ①の上下方向の短いストロークのものも多く見られ、これらが工人差であるのか、小時期差であるのかが今後の検討課題である。これらの視点を持って一級資料の検討を行う必要があるだろう。同一古墳、同一窯跡内の資料で改めて検討したい。

また、これら大和川今池遺跡出土埴輪の特徴を明らかにしたことによって、今後付近の古墳群との出土埴輪の比較検討が可能になったと思われる。今後、それらに関わる追認作業を筆者に科せられた課題とすることを許されたい。

(山崎 頼人)

註

- 1) 靱形埴輪の編年観は高橋克壽、松木武彦両氏の編年を併せて用いる〔高橋1988・1992、松木1988〕。両者の編年の対応関係は〔杉本・山崎2000〕を参照されたい。

引用・参考文献

- 齊藤和夫・宇佐晋一1952 「直弧文の研究 二」『古代学研究』第7号 古代学研究会
秋山日出雄・網干善教1959 「室大墓 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18集」奈良県教育委員会
京都大学文学部1968 「京都大学文学部博物館資料目録」第2部
川西宏幸1973 「埴輪研究の課題」『史林』56-4 史学研究会
吉田恵二1973 「埴輪生産の復元」『考古学研究』19-3 考古学研究会
小林行雄1974 『埴輪』陶磁大系三 平凡社
川西宏幸1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
赤塚次郎1979 「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90 古代学研究会
田中憲治1981 「盾形埴輪について」『古市遺跡群Ⅲ』羽曳野市教育委員会
笠井敏光編1984 『古市遺跡群Ⅴ』羽曳野市教育委員会
楠元哲夫1985 「大和における盾形埴輪の系譜」『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市教育委員会
勝部明生1987 「靱形埴輪小考」『文化史論叢（上）』横田健一先生古稀記念会
河内一浩1988 「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論文集刊行会
杉山秀宏1988 「古墳時代の鉄鏝について」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館
高橋克壽1988 「器材埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71-2 史学研究会
坂 靖1988 「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館
松木武彦1988 「畿内における靱形埴輪の変遷」『待兼山遺跡Ⅱ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

- 河内一浩1990 「埴輪をめぐる製作集団の動向」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 高橋克壽1992 「器材埴輪」『古墳Ⅲ 埴輪』古墳時代の研究9 雄山閣
- 筒井崇史1992 「瓦谷古墳出土の靫について」『京都府埋蔵文化財情報』第45号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中島和彦ほか1992 「菅原東窟跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991年度』奈良市教育委員会
- 広瀬雅信編1992 「萱振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯」大阪府教育委員会
- 栗林誠治1993 「古墳時代・靫の分類と変遷」『徳島県埋蔵文化財センター紀要真珠』第2号 (財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 菊池芳朗1994 「会津大塚山古墳南棺出土の靫」『福島県立博物館紀要』第8号 福島県立博物館
- 高橋克壽1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』41-2 考古学研究会
- 田中秀和1994 「畿内における盾形埴輪の検討-革盾模倣盾形埴輪を中心として-」『大阪市文化財論集』(財) 大阪市文化財協会
- 坂 靖1994 「奈良県の円筒埴輪」『橿原考古学研究所論集』第十一 吉川弘文館
- 望月幹夫1995 『器材はにわ』日本の美術347 至文堂
- 杉井健1996 「靫の構造とその成立背景」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会
- 高橋克壽1996 『埴輪の世紀』歴史発掘⑧ 講談社
- 筒井崇史1996 「靫形埴輪の変遷について-実用靫との比較検討を通じて-」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編1997 『大和の考古学』常設展示図録
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編2000 『残されたキャンパス -装飾古墳と壁画古墳-』平成12年度春季特別展
- 杉本清美・山崎頼人2000 「大和川今池遺跡出土の埴輪(1) -器材埴輪-」『大阪文化財研究』第19号 (財) 大阪府文化財調査研究センター

試掘調査の成果

1. はじめに

建設省による大和川の河川改修事業に先立つ発掘調査として、平成12年3月より大和川今池遺跡（その6）の調査を行っている。調査区は大阪市東住吉区矢田7丁目に位置し、大和川今池遺跡の北東端にあたる。今回の調査において、鎌倉時代後期から室町時代頃の堀割り状の溝で区画された屋敷地跡を検出し、その区画溝がさらに東側に広がり遺跡範囲外に伸びることが予測された。さらに下層から平安時代の河川跡も検出され、同じく遺跡範囲外の東側に伸びていることが予測された。これらの調査成果をもとに、遺構の広がりを確認すべく、大阪府教育委員会文化財保護課の指導をうけ確認調査を行うこととなった。

2. 調査の方法（図155）

試掘調査は、遺物包含層の広がりや遺構面検出高の確認および表土、ガレキ土を含む機械掘削土の厚さを確認することを主とし、調査トレンチを設定した（図155）。

おおむね調査対象地の北側と南側に東西方向のトレンチを設定予定であったが、行基大橋の橋脚が隣接するため、北側のトレンチを2分割して設定した（No2、No3トレンチ）。

さらに、大和川沿いの調査可能な範囲を確認するため、大和川に対して直交する南北方向にトレンチを設定した（No4、No5トレンチ）。

各トレンチにおいて、まず表土およびガレキ土に関しては機械掘削を行った。それより下位の層位に関してはさらに幅1.5m×延長5mの地点を設定し人力掘削によって調査を進めた。各トレンチの規模は、次のとおりである。

- ・ No1 トレンチ 幅1.5m×延長90m (A・B・C・D地点)
- ・ No2 トレンチ 幅1.5m×延長25m (E地点)
- ・ No3 トレンチ 幅1.5m×延長50m (F・G・H地点)
- ・ No4 トレンチ 幅1.5m×延長10m (I地点)
- ・ No5 トレンチ 幅1.5m×延長5m (J地点)

各トレンチでは、東西方向のトレンチについては北辺、南北方向のトレンチについては西辺の土層断面図を作成した。また、必要に応じて遺構の検出状況の平面図を作成した。

3. 調査の成果（図155）

(No1トレンチ A・B・C・D地点)

No1トレンチは、調査地の南側で東西方向に設定した延長90mのトレンチである。トレンチ内の西から0～5mの地点をA地点、20～25mの地点をB地点、60～65mの地点をC地点、85～90m地点をD地点とし、機械掘削の後下位の層位を確認するため人力掘削によって調査をすすめた。調査の結果、各地点の下位の層位から遺物包含層を確認した。

(A地点) 3. 洪水砂層を除くと4. オリーブ黄色粘質シルト層に足跡が確認された。遺物は瓦が出土した。大和川今池遺跡(その6)の調査における第3遺構面に相当すると思われる。6. 黄褐色粘質土層上面は砂層に覆われており、多くの足跡を確認した。遺物は須恵器片が出土した。(その6)調査の第4遺構面に相当すると思われる。7. 黒褐色粘質土層は植物遺体を含む。下層において浅い溝を検出した。(その6)調査の第5遺構面に相当すると思われる。

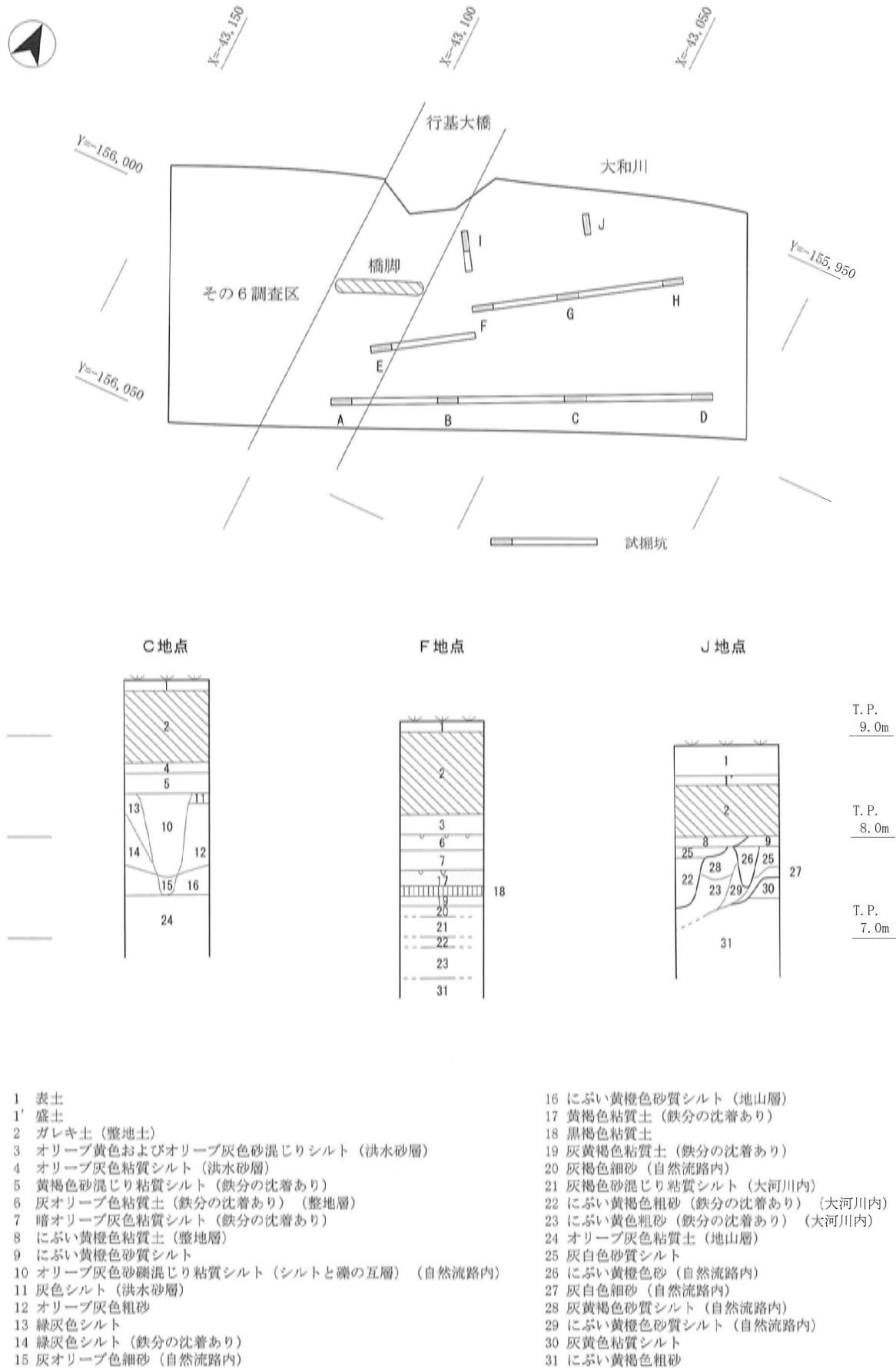


図155 試掘調査区位置図・断面図

(B地点) 3. 洪水砂層と12. 緑灰色砂混じりシルト層を除くと13. 灰オリーブ色粘質土層に足跡が確認された。3. 12. から瓦が出土した。(その6) 調査の第3遺構面に相当すると思われる。6. 黄褐色粘質土層の上層および下層に畦畔と思われる高まりが見られた。(その6) 調査の第4遺構面に相当すると思われる。11. 地山層がA地点より高い層位で検出した。

(C地点) A・B地点とはやや堆積状況が異なり、3. 洪水砂層が見られない。やや高い層位から21. 自然流路跡を検出した。流路跡は幅約3m、深さ約1mでほぼ南北方向を示す。遺物として瓦質羽釜片を検出した。

(D地点) 現状地盤が削られているが、ガレキ土を除くと攪乱を受けない旧耕作土層が確認された。24. 灰オリーブ色粘質シルト層は中世の耕作土層と思われる。13. 灰オリーブ色粘質シルト層の上層は薄い砂層で覆われており足跡が確認できた。遺物は瓦、土師質土器片が出土した。(その6) 調査の第3遺構面に相当すると思われる。下位の土層はA地点と相似する。地山層では11. 緑灰色粘質土層が見られず、22. にぶい黄褐色砂礫土層となる。また6'. 7. 層は東側に向かってさらに厚くなる傾向を示す。

(No2トレンチ E地点)

No2トレンチは、調査地の西側中央部で東西方向に設定した延長25mのトレンチである。行基大橋の橋脚が隣接するため、北側のトレンチを2つに分割して設定した(No2、No3トレンチ)。トレンチ内の西側から0～5mの地点をE地点とした。調査の結果、下位の層位から遺物包含層を確認した。

(E地点) 3. 17. の洪水砂層を除くと17'. オリーブ灰色シルト層に鋤溝跡が確認された。(その6) 調査における第2遺構面に相当すると思われる。12'. 灰色粗砂混じり粘質シルト層及び13'. 灰オリーブ粘質シルト層の上面は砂層に覆われており、多くの足跡を確認した。(その6) 調査の第3遺構面に相当すると思われる。遺物は瓦片が出土した。6'. 灰黄褐色粘質シルト層の上層から溝が切り込んでいるのが確認できた。(その6) 調査の第4遺構面に相当すると思われる。下位の土層はA地点と相似する。

(No3トレンチ F・G・H地点)

No3トレンチは、No2トレンチの続きとして調査地の中央部で東西方向に設定した延長55mのトレンチである。トレンチ内の西から0～5mの地点をF地点、20～25mの地点をG地点、50～55mの地点をH地点とした。調査の結果、各地点の下位の層位から遺物包含層を確認した。

(F地点) 3. 洪水砂層を除くと13. 灰オリーブ色粘質土層上面および下層に足跡が確認された。(その6) 調査の第3遺構面に相当すると思われる。13. 層中には薄い砂層が見られることから幾度となく洪水に見舞われていたものと推測される。下位の土層では27. ～31. の砂層の堆積が見られた。砂の堆積層は約1mを測る。堆積状況から(その6) 調査の第4面以下で検出した東西方向に延びる河川跡であると思われる。(その6) 調査においては、この河川跡から墨書土器をはじめ主に平安時代の遺物が出土している。

(G地点) 3. 洪水砂層を除くと13. オリーブ灰色粘質土層を切り込む自然流路を検出した。No1トレンチのC地点で検出した自然流路跡と同じものと思われる。(その6) 調査の第3遺構面に相当すると思われる。6'. 灰黄褐色粘質シルト層の下層から自然流路状の落ち込み(6". 灰褐色細砂混じり粘質シルト層)が見られた。(その6) 調査の第4遺構面に相当すると思われる。下層の地山層では11. 緑灰色粘質土層が見られず、22. にぶい黄褐色砂質土層となる。

(H地点) 調査区の東側になると現状地盤が削られているが、ガレキ土を除くと攪乱を受けない土層が確認された。3.23. の洪水砂層を除くと旧耕土層の4', オリーブ褐色砂混じり粘質土層が見られた。この層を除くと流路跡と洪水砂層が幾重にも重なっているのが確認できた。32. ~37. 層の自然流路は(その6) 調査における第4遺構面に相当すると思われる。下位の土層では部分的に旧地盤(40. 黄灰色砂礫混じり粘質土層)が見られる。下層は22. にぶい黄褐色砂質土層である。旧西除川の氾濫原ではないかと思われる。

(No4 トレンチ I地点)

大和川沿いの調査可能な範囲を確認するため、大和川に対して直交する南北方向にトレンチとして設定した延長15mのトレンチである。トレンチ内の北から0~5mの地点をI地点とした。調査の結果、北側は概ね現大和川の洪水による削平を受けているが、南側では洪水の影響を受けない堆積層を確認した。

(I地点) 洪水砂層を除くと流路跡(43. 灰黄色粘質シルト層)が確認できた。上層の洪水砂層による削平を受けるため切り込み面は確定できなかったが、6', 灰黄褐色粘質シルト層を切り込んでいることから、(その6) 調査の第4遺構面以前(中世)のものと思われる。流路跡の下層で炭化物や植物遺体を含む26', 灰色砂質シルト層が見られた。南側では洪水砂層の影響を受けない6', 灰黄褐色粘質シルト層が確認できた。下層は22. にぶい黄褐色砂質土層である。

(No5 トレンチ J地点)

大和川に対して直交する南北方向にトレンチとして設定した延長5mのトレンチで、No4 トレンチの東側に位置する。調査の結果、下位の土層では流路跡と洪水砂層が幾重にも重なっている状況を確認した。

(J地点) 現大和川の洪水砂の混じるガレキ土層を除くと旧整地層(41. にぶい黄橙色粘質土層)が見られた。この層を除くと流路跡と洪水砂層が幾重にも重なっているのが確認できた。44. は一時的な自然流路であると思われる。(その6) 調査の第4遺構面に相当すると思われる。下位の層位では29. 30. 45. 46. の砂層の堆積が見られた。堆積状況から(その6) 調査の第4面以下で検出した東西方向に延びる河川跡であると思われる。下層は粗砂層である。

4. まとめ

試掘調査範囲の各地点において、ほぼ全面にわたり遺物包含層を確認した。ガレキ土は表土直下に帯状に堆積しているが、下層の遺構面は概ね損なわれずに遺存しているものと思われる。特に、(その6) 調査の第4遺構面以下で検出した東西方向に延びる河川跡が、試掘調査対象地の西側中央部から東側北東部に向かって延びているものと予想され、発掘調査の成果が期待される。さらに、現地盤が削平され攪乱を受けていると思われていたD地点の下層からも旧耕土層を検出した。またD地点では東側に向かって旧土層が厚くなる傾向が見られた。

今回の試掘調査の結果、大和川今池遺跡の範囲は従来の周知されていた遺跡範囲より東側に広がる事が確認された。また、確認調査範囲のさらに東側に広がるものと考えられる。

4 小結

(その6) 調査区の調査成果をまとめると、以下のようになる。

1. 第2面、第2-b面では正方位に則った規格的な耕作土地区画溝を検出した。

直線的に伸びる溝跡と(その5) 調査区の第2-b面で検出した溝跡や畦畔などから、大和川付替え(1704年)以前には広域にわたって正方位に則った規格的な耕作土地区画のもとに耕作が営まれていたことが確認された。

2. 第3-a面では方形区画溝を検出した。

方形区画溝は正方位に則るもので、中世集落のなかでは小規模な区画溝に相当するが、区画内に在地の領主の居館と考えられる礎石をともなう建物の存在が想定された。方形区画溝では張り出し部や小区画溝なども見られることから、領主の館を中心として、一般農民が建物を建て、周囲を巡る区画溝に取り付く様に溝を巡らし周辺に拡大していったものと思われる。中世の農村が徐々に集村化していく村落形成の過程をうかがうことができた。

方形区画溝から出土した遺物は、15世紀から16世紀にかけてのものが多く、中でも鑄造関連の遺物も数多く見られた。大和川今池遺跡の近郊では鑄造関連遺物を検出した「我孫子鑄物師」の工房と推される苅田4丁目所在遺跡や山之内遺跡などが見つかっている。鑄造工房と方形区画溝が見られる状況には類するところがあり、当地も鑄物工房に関連するのではないかと想起される。

3. 第3-a面で441方形土坑や490土坑を検出した。

これらの土坑は粘土取り跡と考えられることから、「我孫子鑄物師」との関連が想定される。

4. 第3面では調査区西側の微高地上で、多数のピットの中から計17棟の掘立柱建物と柵列を復元することができた。

建物の配置に際しては規則性が見られ、8通りの掘立柱建物のプランを想定することができた。第4面相当(平安時代頃)の掘立柱建物も含まれていることが判明し、平安時代から鎌倉時代頃および鎌倉時代から室町時代頃に相当する時期に集落が営まれていたことが確認された。

5. 第3面では491・492井戸など12世紀代を中心とする時期の井戸を検出した。

井戸の機能時あるいは廃棄時に土器や銅銭を埋納したと思われる井戸で、微高地上では多数の建物ピットと掘立柱建物跡とともに、この頃に集落が広がっていたことを裏付けるものとなった。

6. 第4-a面では砂層上面で無数の足跡、わだち跡などを検出した。

調査区南側の谷部で南側川の上面を洪水による砂層が厚く堆積しており、この砂層上面で無数の足跡、わだち跡などを検出した。平安時代後半から鎌倉時代初め頃に相当するものである。わだち跡は幾重にも重なりまた、その延長方向も一様ではなく多方向を示していることから、街道や畦道を通行していたのではなく、湿地状態の荒野を縦横無尽に往来していたものと思われる。

7. 第4面では南側川を検出した。

調査区南側の谷部で西側から東側へ向けて流れる河川跡で、(その5) 調査区からさらに東側の調査区外に伸びる様相を示す。南側川は奈良時代末頃から平安時代頃に機能し、平安時代中頃には埋没したものと想定される。

南側川左岸の肩部で整地土層が一様に確認された。河川の増水・流水に対応する護岸堤に相当するものである。この地域において大規模な土木工事や開発が行われていたことが確認された。

搬入されてきた整地土中には多くの円筒埴輪片や須恵器などの細片が含まれていることから、古墳

時代頃の生活層を含む土層が掘削されたものと思われ、古代における大規模な開発の一端をうかがうことができた。

南側川内からは奈良時代から平安時代頃の遺物が大量に出土した。中には墨書土器や土師器杯底部に穴をあける実用性に乏しいものなども見られ、祭祀を行う場所として南側川が利用されていたことが明らかになった。この地域に住む人々にとって南側川が生活に密着した河川であったことがうかがえた。

8. 第4面では南側川の南岸部の平坦面で耕作面にとまなう畦畔を検出した。

これらの畦畔は正方位に則ったものではなく、近接する南側川に対してほぼ直角の方向を示すことから、西側から東側に低くなるこの地の自然地形に沿って畦畔が形成されたものと思われる。

9. 第5面では多方向に広がる自然流路跡と窪み状に広がる不定形土坑、溝状土坑などを検出した。

これらの遺構は恒常的なものではなく、河川の増水・洪水時などに形成された一過的な流路跡であり、地盤の窪地などに洪水砂が堆積した状況を示すものである。度重なる増水・洪水などで長い時期にわたりこの周辺は湿地状態であったことがうかがえた。

10. 第6面では調査区の南端部中央で周溝に囲まれた方形の小古墳を検出した。

周溝内から須恵器杯蓋などが出土しており、6世紀前半頃のものと思われる。平野部において古代や中世代における開発で埋没または消滅した古墳があったことが判った。これまでの調査で円筒埴輪や器材埴輪片が出土しており、埴輪をとまなう大型古墳の存在が問題になっていたが、埴輪をとまなわない小古墳の存在も明らかとなり、古墳時代を通しての当地における環境を復元する上で貴重な成果であるといえる。

11. 今回の調査の結果、遺構の広がりを確認すべく試掘調査を行うこととなった。

試掘調査の結果、大和川今池遺跡の範囲は従来の周知されていた遺跡範囲より東側に広がることが確認された。この結果を受けて、大和川今池遺跡の遺跡範囲の拡大がなされた。

12. 発掘調査の成果をもとに発掘調査現地説明会を実施した。

発掘調査現地説明会は、平成12年7月21日(土)の14~16時という気温30℃をこえる晴天下であったが、一般の方々をはじめ約230名の参加を得た。

また、遺跡や歴史に関心をもつ地元の方が多く、改めて大和川今池遺跡の発掘調査成果を学校校区内の催しで展示公開してほしいという要望もあり、平成12年11月19日(日)、松原市立第五中学校区第5回いきいき環境フェスタで大和川今池遺跡の展示・紹介を行った。

今後も、広く一般市民の方々に「埋蔵文化財の活用される場」として、発掘調査の成果がさらに活用されることを願うものである。

今回の調査では、この地における河川の流れと洪水砂の繰り返しを垣間見ることができた。幾度となく洪水や流水の被害に見舞われながらも、この地で人々が生きた小さな証を見つけることができた。

当時は何と称されていたのかは判らないが、「南側川」と名付けた河川も古くはその下層で確認された古墳時代の溝が始まりであった。谷状地形のままに東西方向に刻まれた細い溝が、水量の増加とともに流域が広がり、時には広がりすぎた流域を制御すべく、整地土を搬入して護岸堤を築きながら、生活に即した河川として、憂いも悩みもこの「南側川」に流してきた。奈良時代から平安時代にかけての時期には隆盛期を迎えたものと思われる。しかしながら、「南側川」は押し寄せる度重なる洪水・増水に

耐えられず、多くの人々の生活をもその多量の砂で埋め尽くし、荒涼とした湿地へと姿貌を遂げる。そのなかでも足跡やわだち跡を残していた。その後、砂で埋め尽くされた湿地の中を「大河川」として北に向かってその流れを有するようになる。勾配が緩やかになった平坦地に広がる河川である。「大河川」は(その5)調査区で検出したものである。「大河川」は、幾度となく洪水・流水を繰り返し、時には北河川(東側川)などの流れを刻みながらも人々の生活や田畑に潤いを与えていた。微高地上に残る多くの掘立柱建物跡や土器を埋納した井戸などが当時の人々の生活の一端を物語っている。さらに、当地からやや西側((その2)調査区)では方形の区画溝に囲まれた豪族の屋敷が建てられ、続いて小規模ではあるが方形の区画溝の中に敷石建物を建てた在地領主の館を中心に集村化していく。館の周囲を巡る方形区画溝は防御のためだけではなく、灌漑用の水路としての機能を有していた。河川から導かれた水を利用し、共存している様相が見受けられた。

時は流れ、河川が引き起こす洪水は人々の生活を脅かすものには変わりはない。然りながらも水は必要不可欠のものである。ここに多くの人々が知恵と力を結集して「大和川」が掘り造られたのである。そして、「南側川」や「大河川」の盛衰を演出してきた旧西除川は「大和川」の出現によりその流路を西に傾けることとなる。

現在は、松原市から大阪市また堺市へと東西方向に流れる大河「大和川」であるが、この川も1704年(宝永元年)に掘削されて造られた巨大な遺構である。400年の時の流れをある時は激しく、ある時は優しく、ここ大阪の人々とともに歴史を造り、また見守ってきた。全国でも名だたる現代人によって汚染された河川ではあるが、この「大和川」は今後どのような歴史を見守っていくのだろうか。「大和川」の400歳の誕生日を前に、発掘調査で得られた貴重な資料を再び埋没させることなく、活用できるものとして後世に受け継いで行かなければならないと思うところである。

表10 (その6) 出土遺物観察表①

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考	図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
	72	1	須恵質鉢	第2面	1井戸		36	89	55	白磁碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	72	2	須恵質鉢	第2面	1井戸		36	89	56	廈門碗窯系白磁碗(IV類)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	72	3	土師器羽釜	第2面	1井戸		36	89	57	景徳鎮窯系白磁端反碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	4	伊万里白磁碗	第1面	包含層		36	89	58	景徳鎮窯系青花アラベスタ文盤	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	5	龍泉窯系青磁盤	第1面	包含層		36	89	59	龍泉窯系青磁皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	6	龍泉窯系青磁無文碗	第1面	包含層		36	89	60	唐津溝縁皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	7	龍泉窯系青磁印花文碗	第1面	包含層		37	89	61	備前大德利	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	8	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第1面	包含層		37	89	62	備前花入	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	9	同安窯系青磁蓮弁文碗(V4c類)	第1面	包含層			89	63	備前花入	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	10	廈門碗窯系白磁碗	第1面	包含層		37	89	64	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	11	廈門碗窯系白磁碗	第1面	包含層		37	89	65	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	12	廈門碗窯系白磁碗	第1面	包含層		37	89	66	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	73	13	廈門碗窯系白磁碗	第1面	包含層		37	89	67	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	14	土師質・脚部	第1面	包含層		37	89	68	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	15	瓦質火舎	第1面	包含層		37	90	67	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	16	唐津溝縁皿	第2面	包含層		37	90	68	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	17	龍泉窯系青磁皿	第2面	包含層			90	69	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	18	土師器皿	第2面	包含層		37	90	70	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	19	土師器皿	第2面	包含層			90	71	備前播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	20	土師器皿	第2面	包含層		37	90	72	備前水屋甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	21	土師器皿	第2面	包含層			90	73	備前甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	22	土師器皿	第2面	包含層		37	90	74	備前甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	23	土師器杯	第2面	包含層			90	75	備前甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	24	瓦器皿	第2面	包含層			91	76	土師器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	73	25	土師器小甕壺	第2面	包含層		38	91	77	土師器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	78	26	備前種壺	第2-b面	2井戸		38	91	78	土師器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	78	27	軒丸瓦	第2-b面	16井戸			91	79	土師器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	78	28	廈門碗窯系白磁碗(IV-2類)	第2-b面	3溝			91	80	瓦器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	78	29	土師器皿	第2-b面	11溝		38	91	81	瓦器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	78	30	瓦器椀	第2-b面	11溝			91	82	瓦器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	78	31	鬼瓦	第2-b面	6溝			91	83	瓦器皿	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	79	32	土師器皿	第2-b面以下			38	91	84	瓦器椀	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	79	33	瓦器皿	第2-b面以下				91	85	瓦器椀	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	79	34	瓦器台付皿	第2-b面以下			38	91	86	瓦器椀	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	35	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第2-b面以下				91	87	瓦器椀	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	36	龍泉窯系青磁皿(I-1b類)	第2-b面以下			38	91	88	瓦器椀	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	37	白磁皿(VIIa類)	第2-b面以下				91	89	瓦質羽釜	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	38	廈門碗窯系白磁碗(IV-2類)	第2-b面以下			38	91	90	瓦質羽釜	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	39	廈門碗窯系白磁碗(IV類)	第2-b面以下				91	91	瓦質羽釜	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
35	79	40	廈門碗窯系白磁碗(IV-2類カ)	第2-b面以下			38	91	92	瓦質羽釜	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	79	41	須恵質鉢	第2-b面以下				91	93	瓦質播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
	79	42	須恵質鉢	第2-b面以下			36	89	94	瓦質播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	43	羣州窯系青花折花文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	メソに転用		91	95	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	44	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	見込に播字スタンプ文		91	96	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	45	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		36	89	97	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	46	龍泉窯系青磁碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			91	98	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	47	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		36	89	99	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	48	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			91	100	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
36	89	49	龍泉窯系青磁印花文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)							A12-d3・e1地点出土破片同一個体	
36	89	50	龍泉窯系青磁梵字文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)								
36	89	51	龍泉窯系青磁印花文碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)								
36	89	52	土龍泉窯系青磁碗	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	黒漆で補修の痕跡							
36	89	53	廈門碗窯系白磁碗(IV-2類)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)								
36	89	54	廈門碗窯系白磁碗(IV-2類)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)								

表11 (その6) 出土遺物観察表②

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考	図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
	91	101	瓦質火舎	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	148	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	91	102	瓦質花瓶	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	149	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	92	103	土師質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	150	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	92	104	瓦質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	151	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	92	105	瓦質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	152	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	92	106	瓦質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	153	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
	92	107	瓦質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	154	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
38	92	108	瓦質甕	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	155	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
39	93	109	軒丸瓦(C型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	156	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
39	93	110	軒丸瓦(C型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	157	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
39	93	111	軒丸瓦(C2型式?)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	158	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
39	93	112	軒丸瓦(C2型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	159	瓦器皿	第3-a面	13井戸	
39	93	113	軒平瓦(水波紋)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	160	瓦器椀	第3-a面	13井戸	
39	93	114	軒平瓦(新型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	161	瓦器椀	第3-a面	13井戸	
39	93	115	軒平瓦(新型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	162	瓦器椀	第3-a面	13井戸	
39	93	116	軒平瓦(宝珠文)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	163	瓦器椀	第3-a面	13井戸	
39	93	117	軒平瓦(宝珠文?)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	164	白磁碗(V類)	第3-a面	13井戸	
39	93	118	軒平瓦(新型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	165	粗泉瀝系青磁皿	第3-a面	13井戸	基筒底
39	93	119	軒平瓦(新型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	166	白磁碗(V類)	第3-a面	13井戸	
	93	120	軒平瓦(宝珠文?)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	167	須恵質鉢	第3-a面	13井戸	
39	93	121	軒平瓦(新型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	168	土師質羽釜	第3-a面	13井戸	
39	93	122	軒平瓦(C型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			97	169	瓦器椀	第3-a面	410井戸	
39	93	123	軒平瓦(B4型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	170	瓦器椀	第3-a面	410井戸	
39	93	124	軒平瓦(B4型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		42	97	171	瓦器椀	第3-a面	410井戸	
	93	125	鬼瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			102	172	瓦器椀	第3-a面	490土坑	
40	93	126	鬼瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			102	173	瓦器椀	第3-a面	490土坑	
	93	127	鬼瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			102	174	瓦器椀	第3-a面	490土坑	
40	94	128	丸瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	文字線刻	46	113	175	瓦器椀	第3面	建物7(216ピット)	
	94	129	丸瓦(B2型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		46	113	176	瓦器椀	第3面	214ピット	
40	94	130	丸瓦(B2型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		46	113	177	瓦器椀	第3面	269ピット	
40	94	131	丸瓦(B2型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		46	113	178	瓦器椀	第3面	263ピット	
40	95	132	平瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		46	113	179	瓦器椀	第3面	268土坑	
40	95	133	平瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			115	180	土師器皿	第3面	491井戸	
40	95	134	平瓦(B型式?)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			115	181	土師器皿	第3面	491井戸	
	95	135	平瓦(D型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	被熱?	43	115	182	土師器台付皿	第3面	491井戸	
40	95	136	平瓦(E型式)	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		43	115	183	土師器台付皿	第3面	491井戸	
40	95	137	平瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		43	115	184	土師器銷壺	第3面	491井戸	
	96	138	鳥倉	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			115	185	須恵質鉢	第3面	491井戸	
	96	139	鳥倉	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			115	186	瓦質羽釜	第3面	491井戸	
	96	140	鳥倉	第3-a面	方形区画溝(遺構30)			115	187	瓦器皿	第3面	491井戸	
	96	141	道具瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		43	115	188	瓦器皿	第3面	491井戸	
40	96	142	青銅製茶匙	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		43	115	189	瓦器皿	第3面	491井戸	
41	96	143	不明土製品	第3-a面	方形区画溝(遺構30)		43	115	190	瓦器皿	第3面	491井戸	
40	96	144	温石	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	紅柱石ホルンフェルス	43	115	191	瓦器皿	第3面	491井戸	
	96	145	根石?	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	流紋岩A		116	192	瓦器皿	第3面	491井戸	
42	97	146	土師器皿	第3-a面	13井戸			116	193	瓦器椀	第3面	491井戸	
42	97	147	土師器皿	第3-a面	13井戸			116	194	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	195	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	196	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	197	瓦器椀	第3面	491井戸	口縁部被熱
								116	198	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	199	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	200	瓦器椀	第3面	491井戸	
							43	116	201	瓦器椀	第3面	491井戸	
							43	116	202	瓦器椀	第3面	491井戸	
							43	116	203	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	204	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	205	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	206	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	207	瓦器椀	第3面	491井戸	
							43	116	208	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	209	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	210	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	211	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	212	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	213	瓦器椀	第3面	491井戸	
								116	214	瓦器椀	第3面	491井戸	
							44	117	215	木器曲物	第3面	491井戸	
							44	117	216	木器曲物	第3面	491井戸	
							44	117	217	木器曲物	第3面	491井戸	
							44	117	218	木器曲物	第3面	491井戸	
							43	117	219	木器箸	第3面	491井戸	
							43	117	220	木器箸	第3面	491井戸	

表12 (その6) 出土遺物観察表③

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考	図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考	
43	117	221	不明木器	第3面	491井戸			132	291	土師器台付皿?	第4面	南側川(遺構500)		
45	119	222	土師器皿	第3面	492井戸付近			132	292	土師器壺	第4面	南側川(遺構500)		
45	119	223	瓦器皿	第3面	492井戸			132	293	土師器蓋	第4面	南側川(遺構500)		
	119	224	瓦器椀	第3面	492井戸付近			132	294	土師器高杯	第4面	南側川(遺構500)		
45	119	225	瓦器椀	第3面	492井戸			132	295	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)		
45	119	226	瓦器椀	第3面	492井戸付近				132	296	土師器高杯又は 器台	第4面	南側川(遺構500)	東部瀬戸内
45	119	227	元豊通宝	第3面	492井戸			47	133	297	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	228	元豊通宝	第3面	492井戸	(2枚接着)			133	298	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	229	元豊通宝	第3面	492井戸				133	299	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	230	政和通宝	第3面	492井戸			47	133	300	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	231	瓦器皿	第3面	495井戸			47	133	301	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	232	瓦器椀	第3面	495井戸			47	133	302	須恵器杯蓋	第4面	南側川(遺構500)	
	119	233	瓦器椀	第3面	495井戸				133	303	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	234	須恵質鉢	第3面	495井戸				133	304	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
45	119	235	唐津窯系皿	第3面	495井戸	砂目積		47	133	305	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	ヘラ記号
121	236	土師器皿	第3面	包含層				47	133	306	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	237	土師器皿	第3面	包含層				47	133	307	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	238	土師器皿	第3面	包含層	回転系切り底			47	133	308	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	239	土師器皿	第3面	包含層					133	309	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	240	土師器鉢	第3面	包含層					133	310	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	241	瓦器皿	第3面	包含層					133	311	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	242	瓦器皿	第3面	包含層					133	312	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	243	瓦器椀	第3面	包含層					133	313	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
121	244	瓦器椀	第3面	包含層				47	133	314	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	「大」墨書
46	121	245	廈門窯系白磁 碗(IV-2類)	第3面	包含層			47	133	315	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
			廈門窯系白磁 碗(IV類)	第3面	包含層				133	316	須恵器杯	第4面	南側川(遺構500)	
46	121	246	碗(IV類)	第3面	包含層				133	317	須恵器鉢形鉢	第4面	南側川(遺構500)	
121	247	須恵質鉢	第3面	包含層					133	318	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
121	248	平瓦	第3面						133	319	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
125	249	瓦器皿	第4-a面	包含層				47	133	320	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	250	青磁蓮弁文碗	第4-a面	包含層			47	133	321	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
			廈門窯系白磁 碗(IV類)	第4-a面	包含層			47	133	322	須恵器短頸壺	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	251	白磁碗(V=4c 類)	第4-a面	包含層				133	323	須恵器短頸壺	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	252		第4-a面	包含層				133	324	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
125	253	土師器鉢?	第4-a面	包含層					133	325	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
125	254	瓦質羽釜	第4-a面	包含層					133	326	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
125	255	土師質羽釜	第4-a面	包含層					133	327	須恵器壺	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	256	備前摺鉢	第4-a面	包含層				133	328	須恵器短頸壺	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	257	備前摺鉢	第4-a面	包含層				133	329	須恵器平瓶	第4面	南側川(遺構500)	
125	258	瓦質摺鉢	第4-a面	包含層					133	330	須恵器平瓶	第4面	南側川(遺構500)	
125	259	須恵質鉢	第4-a面	包含層					133	331	須恵器平瓶	第4面	南側川(遺構500)	
125	260	土師器甕	第4-a面	包含層					133	332	須恵器すり鉢	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	261	備前甕	第4-a面	包含層				134	333	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
125	262	瓦質火舎	第4-a面	包含層					134	334	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
			軒平瓦(瓦珠文 新形式?)	第4-a面	包含層			47	134	335	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	263	軒平瓦(瓦珠文 新形式?)	第4-a面	包含層				134	336	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	264	軒平瓦(瓦珠文 新形式?)	第4-a面	包含層				134	337	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
46	125	265	軒平瓦(瓦珠文 新形式?)	第4-a面	包含層				134	338	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
47	132	266	土師器蓋	第4面	南側川(遺構500)	「真」墨書			134	339	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	267	土師器皿	第4面	南側川(遺構500)					134	340	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	268	土師器皿	第4面	南側川(遺構500)					134	341	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	269	土師器皿	第4面	南側川(遺構500)					134	342	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	270	土師器皿	第4面	南側川(遺構500)					134	343	土師器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	271	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				47	134	344	土師器把手付甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	272	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					134	345	土師器羽釜	第4面	南側川(遺構500)	
132	273	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					134	346	土師器羽釜	第4面	南側川(遺構500)	
132	274	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				47	134	347	土師器鉢	第4面	南側川(遺構500)	
47	132	275	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				135	348	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	276	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				47	135	349	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	277	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					135	350	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	278	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					135	351	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	279	土師器台付杯	第4面	南側川(遺構500)					135	352	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	280	土師器台付杯	第4面	南側川(遺構500)					135	353	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
47	132	281	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				135	354	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	282	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				47	135	355	須恵器甕	第4面	南側川(遺構500)	
132	283	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					136	356	土師器瓶	第4面	南側川(遺構500)	
132	284	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					136	357	土師器瓶	第4面	南側川(遺構500)	
132	285	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)					136	358	土師器瓶	第4面	南側川(遺構500)	
47	132	286	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)			48	136	359	土師器甗	第4面	南側川(遺構500)	
132	287	土師器杯	第4面	南側川(遺構500)				48	136	360	土師器甗	第4面	南側川(遺構500)	
132	288	土師器椀	第4面	南側川(遺構500)				48	136	361	土師器甗	第4面	南側川(遺構500)	
47	132	289	土師器椀	第4面	南側川(遺構500)	「大」墨書		48	136	362	土師器甗	第4面	南側川(遺構500)	
132	290	土師器椀	第4面	南側川(遺構500)				48	136	363	輪羽口	第4面	南側川(遺構500)	

表13 (その6) 出土遺物観察表④

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
48	136	364	青銅製円板	第4面	南側川(遺構500)	
48	136	365	根石?	第4面	南側川(遺構500)	花崗斑岩A、砥石使用
48	136	366	根石?	第4面	南側川(遺構500)	細粒砂岩
48	136	367	木器折敷?	第4面	南側川(遺構500)	
49	140	368	須恵器蓋	第5面	516自然流路	
	140	369	須恵器蓋	第5面	503自然流路	
49	141	370	土師器杯	第4・5面	黒茶層	
49	141	371	土師器杯	第4・5面	黒茶層	
49	141	372	土師器羽釜	第4・5面	黒茶層	
49	141	373	土師器甕	第4・5面	黒茶層	
49	141	374	土師器壺	第4・5面	黒茶層	
49	141	375	根石?	第4・5面	黒茶層	鯉石安山岩A
49	143	376	須恵器蓋	第6面	古墳周溝(505溝)	
	143	377	須恵器杯	第6面	包含層	
50	144	378	凹基無蓋式石鉢	第6面	包含層	サヌカイト 1.46g
50	144	379	凹基無蓋式石鉢	第5面	503自然流路	サヌカイト 0.85g
50	144	380	石槍未成品	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 16.87g
50	144	381	石槍	第4面	南側川(遺構500)	チャート 14.39g
50	144	382	石槍未成品	第5面	512不定形土坑	サヌカイト 145.42g
51	145	383	剥片 二次加工のある	第4面	南側川(遺構504)	サヌカイト 12.40g
51	145	384	剥片 二次加工のある	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 18.95g
51	145	385	剥片 二次加工のある	第5面	503自然流路	サヌカイト 13.99g
50	145	386	石槍未成品	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 25.40g
50	145	387	石槍未成品	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 132.56g
51	146	388	楔形石器	第4・5面	黒茶層	サヌカイト 23.24g
51	146	389	縦長剥片	第5面	512不定形土坑	サヌカイト 19.89g
51	146	390	横長剥片	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	サヌカイト 2.96g
51	146	391	横長剥片	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 8.04g
51	146	392	横長剥片	第6面	古墳周溝(505溝)	サヌカイト 5.97g
51	146	393	横長剥片	第5面	512不定形土坑	サヌカイト 20.90g
51	146	394	横長剥片	第6面	包含層	サヌカイト 4.90g
51	146	395	石核	第4面	南側川(遺構500)	サヌカイト 201.04g
49	147	396	弥生中期甕	第4面	南側川(遺構500)	
49	147	397	弥生中期鉢	第4・5面	黒茶層	
	147	398	弥生後期甕	第2-b面	390井戸	
49	147	399	弥生中期甕	第4面		
49	147	400	弥生後期壺	第4面	南側川(遺構500)	
49	147	401	弥生後期壺	第4面	南側川(遺構500)	
	147	402	弥生後期壺?	第4-a面	529溝状遺構	
	147	403	弥生中期壺?	第3面	包含層	
	147	404	弥生中期壺?	第4面	南側川(遺構500)	
	147	405	弥生中期壺?	第4面	南側川(遺構500)	
49	147	406	縄文晩期深鉢	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	407	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	408	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	409	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	410	円筒埴輪	第4・5面	黒茶層	
52	151	411	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	412	円筒埴輪	第4・5面	黒茶層	
52	151	413	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	414	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	415	円筒埴輪	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
52	151	416	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	417	円筒埴輪	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
52	151	418	円筒埴輪	第4-a面	北河川	
52	151	419	円筒埴輪	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
52	151	420	円筒埴輪	第3面	334土坑	
52	151	421	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	422	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	
52	151	423	円筒埴輪	第4面	南側川(遺構500)	

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
38		424	瓦質播鉢	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
40		425	平瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
40		426	平瓦	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
40		427	不明土製品	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
41		428	木の株	第3-a面		
41		429	焼土塊	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
41		430	焼土塊	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
41		431	焼土塊	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
41		432	焼土塊	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
41		433	焼土塊	第3-a面	方形区画溝(遺構30)	
42		434	常滑甕	第3-a面	13井戸	スタンプ文
42		435	常滑甕	第3-a面	13井戸	スタンプ文
43		436	銅銭	第3面	491井戸	
46		437	土師器皿	第3面	建物7(216ピット)	
48		438	土師器壺	第4面	南側川(遺構500)	
49		439	弥生後期壺	第4面	南側川(遺構500)	
49		440	弥生中期壺	第4面	南側川(遺構500)	
49		441	弥生中期摺手	第4面	南側川(遺構500)	
49		442	弥生中期壺	第4面	南側川(遺構500)	

第3節 (その7) 調査成果

1 調査の方法

(その7) 調査区の発掘調査は、平成12年度に大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと当該地区を対象として行った確認調査によって、西側に隣接する(その6) 調査区からの遺構の広がりが確認されたため、行われたものである。

確認調査後に、本調査区の現地表土は全て重機により掘削されており、今回の発掘調査は、現表土下の盛土及び大和川による近・現代の河川堆積物を、重機により掘削する工程から開始した。

重機掘削終了後は、順次人力による掘削作業に転換し、遺構面・遺構の検出を行った。

発掘調査にあたっては、隣接する(その6) 調査区の発掘調査成果や、これまでの調査成果を踏まえながら行い、地区割り等の調査方法は『遺跡調査基本マニュアル』1988に従って行った。

層序については(その6) と直接の対比を行い、遺構面の連続性を図りたかったが、調査区境部分に微高地や流路が存在しているため、両調査区の地層を直接対比することは困難であった。このため、発掘調査開始時点から、出土遺物や地層の堆積状況等を検討し、互いの地層の関係付けを行った結果、おおむね検証する事ができた。

なお、堤防際には現在の堤防の構築に伴うと考えられる、長大な攪乱坑が確認された。これを掘削すれば堤防の法線を損する点と、攪乱坑が調査終了面よりも下まで達している点から、調査対象からは除外した。

また、本調査区は大和川河川敷に位置しており、堤防際の掘削が出水期には禁止されている。このため、堤防に沿って約10m幅分の調査が、渇水期である11月からの調査となった。従って、第1面検出時にこの部分の調査を行うことが出来ず、第1面は図面上で整合させて掲載している。第2面以降については、調査区全面での調査を行った。

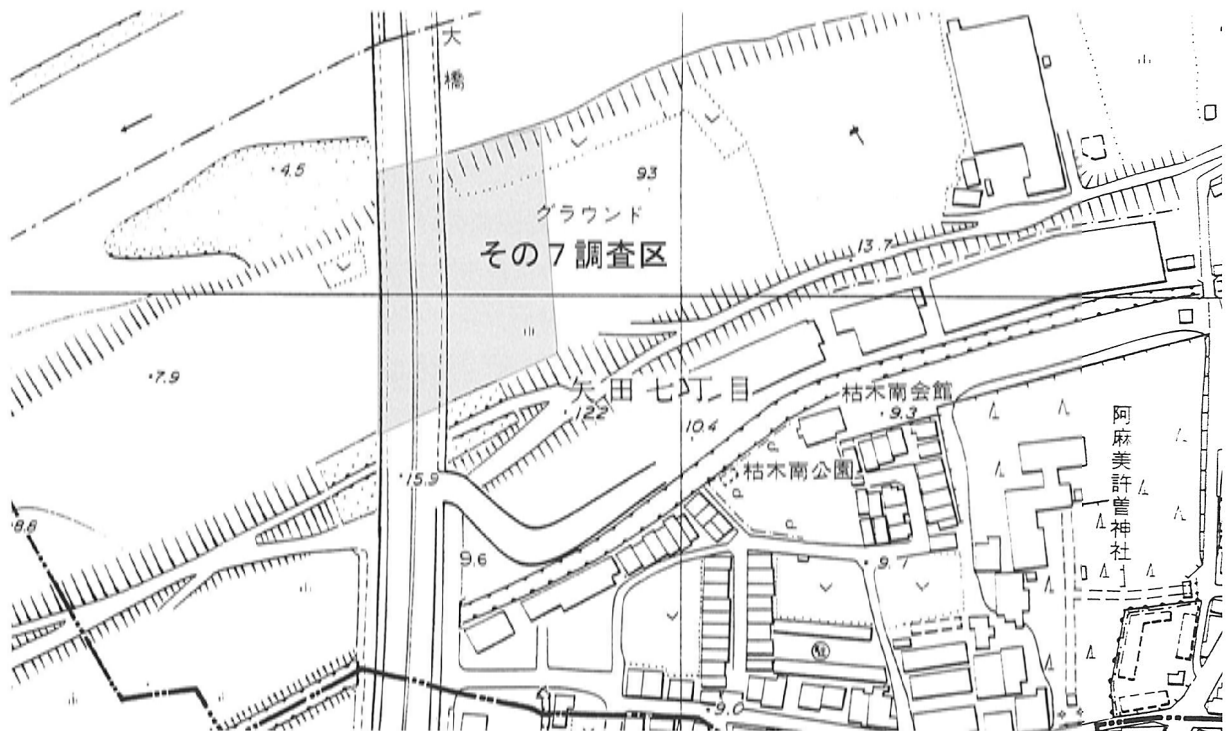


図156 (その7) 調査区位置図

2 基本層序 (図157・158)

本調査区は、第2章でも述べたように、旧西除川の氾濫原もしくは自然堤防上に位置しており、起伏に富んだ地形が見られる。調査対象としたのは、大和川によって堆積した砂層を除去した層からである。

層序は、基本的に旧西除川によって運ばれ堆積した土砂(河川堆積物)と、その土砂の土壌化又は耕作土化の繰り返しによって形作られている。この事は、調査区東側に分厚く堆積した砂層や、耕作土層の下層に残る河川堆積物から検証できる。

以下、基本層序について記述するが、河川堆積物は水平方向に側方変化をして同時異相を示すため、同一層でも土質や土色が異なり、この河川堆積物を母材した土壌層や耕作層も同様に、同一層内であっても土質や土色が異なる。また、後世の影響によって二次的に同一層内での、土色等が変化する場合がある。このため、基本層序の記述では、代表とする部分について行い、詳細については南北・東西断面図とその土色を参照して頂きたい。

なお、遺構面名と層名の関係に付いては、例えば第1層の上面が第1面となる。

第1層 大きく3層からなる。上層上面を第1面とする。

上層は、5B4/1 暗青灰シルト、細砂混じる。上面に踏み込みと見られる凹凸が多く見られる。マンガンを管状の鉄分の沈着あり。耕作層である。

中層は、5Y5/3 灰オリーブ細砂。マンガンを管状の鉄分の沈着あり。同じく耕作層である。

下層は、10BG6/1 青灰細砂～極細砂とシルトからなり、ラミナが見られる。自然堆積層(河川堆積物)である。下層は、部分的にしか見られないが、第2面を検出する鍵層となった。

第2層 大きく3層からなる。上層上面を第2面とする。第2面は、部分的ではあるが第1層下層の自然堆積層(河川堆積物)により覆われていたため、この部分では畦畔の検出が可能であった。

上層は、7.5Y5/2 灰オリーブ極細砂シルト。マンガンを管状の鉄分の沈着あり。上面に耕作に伴う踏み込みと考えられる凹凸が多く見られる部分がある。耕作層である。なお、第2面を形成する上層は、調査区西半でしか見られなかった。

中層は、7.5Y5/2 灰オリーブ細砂～極細砂シルト。マンガンを管状の鉄分の沈着多くあり、上層よりもやや粘性が強い。耕作層である。

中層の上面には、部分的ではあるが7.5GY7/1 明緑灰細砂で、ラミナの見られる層が僅かに見られた。自然堆積層(河川堆積物)である。中層も、調査区西半でしか見られなかった。

下層は、調査区西半では、部分的に僅かに確認された層で、ラミナが見られる砂層である。しかし東半では層厚約50cmの7.5Y7/1 明褐灰細砂～極粗砂とシルトからなる層で、上部はマンガンを、鉄分の沈着が見られ、ラミナが明瞭に観察できる自然堆積層(河川堆積物)である。層中には、複数の土壌化層が認められたが、平面で検出することは困難であった。

下層の砂層は、調査区の西半と東半で層厚が大きく異なるが、これは第3面を検出した流路と、この流路の西肩部に造られた盛土による堤状の遺構のためであろう。この堤状の遺構により、河川堆積物が西側へ及ばなかったと考えられる。なお、この下層の砂層は、第3面を検出する鍵層となった。

第3層 7.5R5/1 赤灰極細砂。マンガンを斑状の鉄分が見られる。上面に耕作に伴う踏み込みと考えられる凹凸が見られる。耕作層である。上面が第3面である。耕作層である。

第4層 10R4/1 暗赤灰極細砂。マンガンを管状の鉄分の沈着が見られる。上面が第4面である。

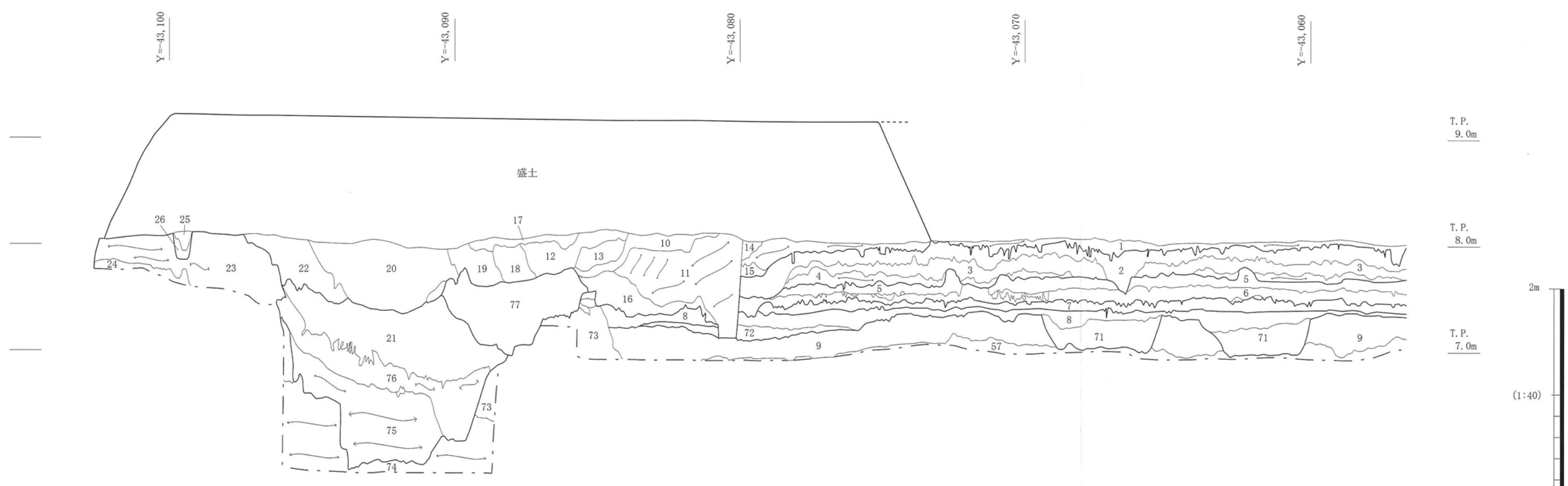
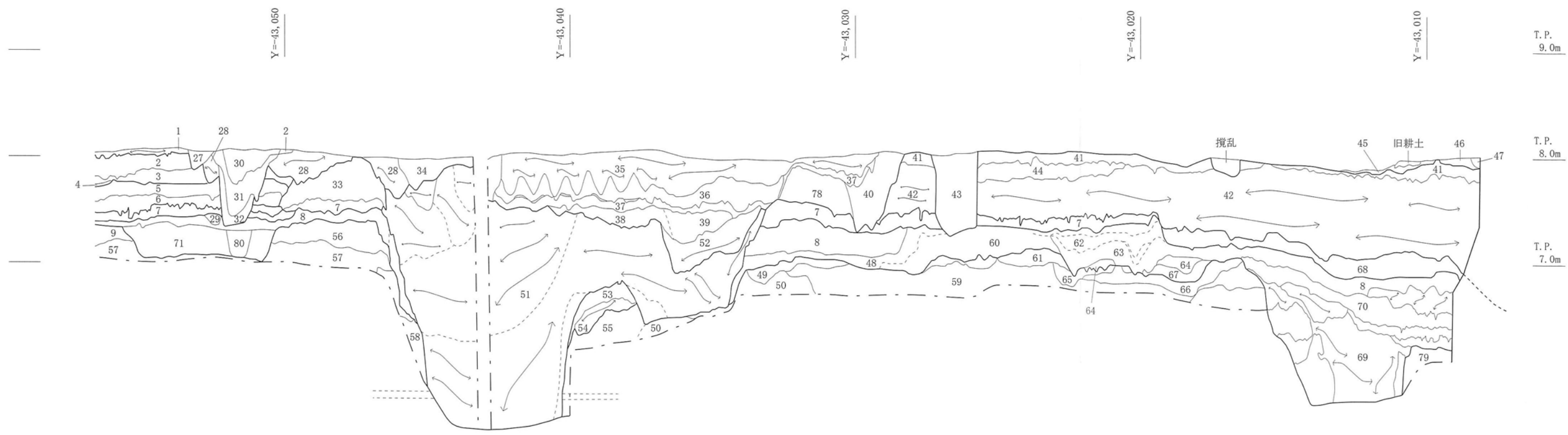


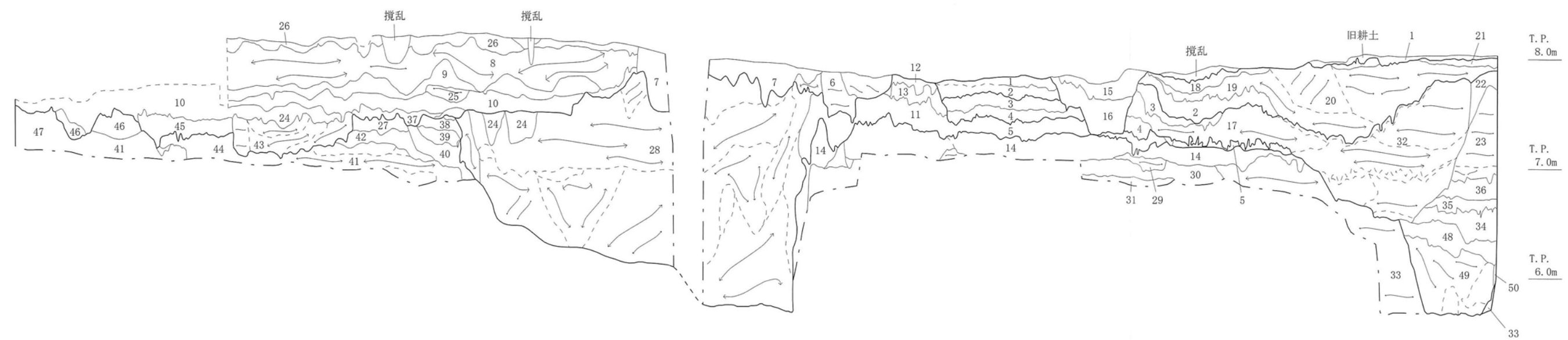
图157 东西土层断面图

X=156,000

X=155,990

X=155,980

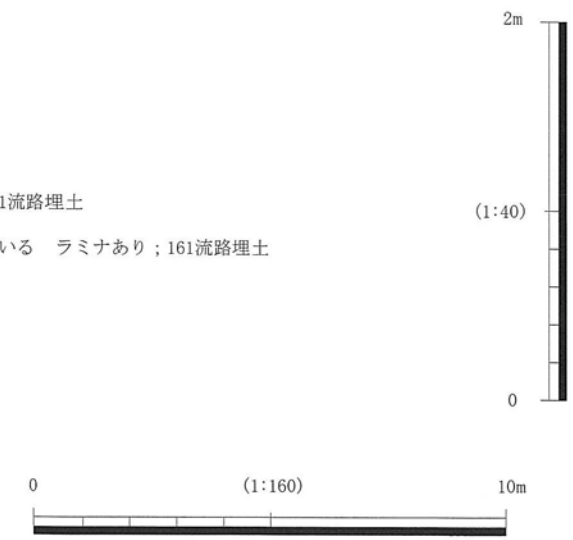
X=155,970



- 1 5B4/1 暗青灰シルト細砂混じる 上面踏み込み多し、マンガン・鉄分(管状)沈着;第1層
- 2 5Y5/3 灰オリーブ細砂 マンガン・鉄分(管状)沈着;第1層
- 3 7.5Y5/2 灰オリーブ極細砂シルト マンガン・鉄分(管状)の沈着、上面踏み込みが多い部分が認められる;第2層
- 4 7.5Y5/2 灰オリーブ細砂〜極細砂シルト マンガン・鉄分(管状)沈着多い、ややシルト質がつよい;第2層
- 5 7.5R5/1 赤灰極細砂 マンガン・鉄分(斑状)の沈着;第3層
- 6 5Y6/2 灰オリーブ粗砂〜中砂 ラミナあり 部分的に極粗砂、細砂あり;洪水砂層
- 7 7.5Y3/1 黒褐シルト (攪乱);攪乱埋土
- 8 2.5Y6/2 黄灰中砂〜細砂 ラミナあり、シルト層狭在、現大和川内凹み堆積砂層、現代遺物(ビニール・ガラス・ゴム)入る;第1面凹み内埋土
- 9 10YR4/1 褐灰中砂、粗砂混じる ややシルトっぽい 現代耕作土、うね、うねの下にラミナが入る 細砂あり;第1面凹み内埋土
- 10 2.5Y4/1 黄灰粗砂、小石混じる シルトっぽい 凹み最下層、現大和川内凹み(現代)ガラス入る;第1面凹み内埋土
- 11 5PB4/1 暗青灰シルト若干細砂混じる;第3層系
- 12 5PB4/1 暗青灰シルトブロックと;大畦畔1盛土
- 13 5PB4/1 N7/0 灰白シルトブロックのブロック土 暗青灰シルトブロックが多く混じる
- 14 5PB4/1 N7/0 暗青灰シルトブロックと;大畦畔1盛土
- 15 2.5Y7/1 灰白シルトブロックのブロック土 灰白シルトブロックが多くを占める
- 16 2.5Y7/1 明オリーブ灰細砂混じりシルト 7層に対応;第5層
- 17 2.5Y5/1 黄灰シルト中砂混じる ;1溝埋土
- 18 2.5Y5/1 黄灰シルト粗砂〜極粗砂混じるブロック土 ;1溝埋土
- 19 5YR6/4 にぶい橙細砂〜極細砂 ラミナあり、鉄分沈着;第2層内洪水砂層
- 20 10YR7/3 にぶい黄橙シルト、細砂混じる 2層に対応、土壌化弱い(凹み中);第1層
- 21 10YR8/1 灰白細砂〜極細砂 ラミナあり;第1層内洪水砂層
- 22 10YR6/1 褐灰シルト 鉄分・マンガン沈着若干あり (凹み中);第1層内洪水砂層
- 23 7.5Y6/4 にぶい橙シルト細砂混じり 2層に対応;第1層
- 24 7.5YR5/2 灰褐シルト混じり細砂;第2層系
- 25 10YR8/1 灰白粗砂〜極粗砂 ラミナあり(上半は細砂);161流路埋土
- 26 5PB4/1 暗青灰シルトブロックと;第1面凹み内埋土
- 27 5PB7/1 明青灰シルトブロックのブロック土層、中砂〜粗砂混じる 大和川凹底
- 28 2.5Y8/1 灰白細砂 ラミナあり、現大和川内凹み畑耕土下の砂層;第1面凹み内埋土
- 29 2.5Y5/1 黄灰細砂シルト混じり 41が土壌化した層 ※機械掘削終了層;旧地表層
- 30 5G7/1 明緑灰細砂;第5層系
- 31 7.5Y7/1 灰白極粗砂〜中砂〜細砂小礫あり 鉄分・マンガン沈着、洪水砂層 ;153流路埋土
- 32 10YR7/3 灰白中砂〜粗砂 ラミナあり;基盤層
- 33 10YR7/2 にぶい黄橙細砂 層下半に中砂ブロック状に混じる;基盤層

- 34 10YR6/3 にぶい黄橙中砂〜粗砂シルトブロック若干混じる;基盤層
- 35 10YR7/1 灰白極粗砂〜中砂 ラミナあり;第2層内洪水砂層
- 36 10YR6/1 褐灰 砂礫層 ラミナあり;基盤層
- 37 2.5Y4/1 黄灰シルト細砂含む;161流路埋土
- 38 5Y3/2 オリーブ黒 94と96のブロック土が入る、部分的にラミナがみられる;161流路埋土
- 39 5Y3/1 オリーブ黒シルト中砂含む 部分的にラミナがみられる、上面に踏み込み多し;161流路埋土
- 40 7.5R5/1 赤灰中砂混じりシルト;第1面凹み内埋土
- 41 7.5R4/1 暗赤灰細砂混じりシルトのブロックを含む
- 42 7.5R5/1 赤灰中砂混じりシルト;第5層系
- 43 7.5R4/1 暗赤灰細砂混じりシルトのブロックを上層に多く含む
- 44 7.5R5/1 赤灰中砂混じりシルト;第5層系
- 45 7.5R5/1 赤灰中砂混じりシルト;第5層系
- 46 7.5R4/1 暗赤灰細砂混じりシルトのブロックを(上層に?)より多く含む
- 47 10YR8/1 灰白細砂ブロックを含む
- 48 10YR7/1 灰白中砂〜小礫 ラミナあり;第5層系
- 49 10YR8/1 灰白細砂に;第5層系
- 50 7.5R5/1 赤灰細砂のブロック含む
- 51 2.5Y6/3 にぶい黄シルト〜中砂 土坑埋土;土坑埋土
- 52 5Y8/1 灰白細砂混じりシルトに;第5層系
- 53 5P5/1 紫灰シルトブロック含む
- 54 N6/0 灰中砂混じりシルト小石混じる 土坑埋土;土坑埋土
- 55 2.5Y7/4 浅黄中砂混じりシルトに粗砂混じる;第5層系
- 56 2.5Y6/6 明黄褐中砂〜粗砂シルト混じる;第5層系
- 57 2.5Y5/1 黄灰細砂混じりシルトに2.5Y5/1黄灰シルトブロックφ2〜4mmと;161流路埋土
- 58 2.5Y6/2 灰黄シルトブロックφ2〜4mm混じる
- 59 10YR3/2 オリーブ黒シルト細砂混じり 7.5Y8/1灰白中砂〜粗砂入る 小礫はいる ラミナあり;161流路埋土
- 60 7.5YR6/1 褐灰細砂シルト混じり;第3層系

図158 南北土層断面図



土壌層である。

第5層 5YR6/1 褐灰極細砂。土壌層である。上面が第5面である。土壌層である。

東西土層断面図 土色

1	10YR6/4	にぶい黄橙細砂～中砂 ラミナあり；洪水砂層
2	5B4/1	暗青灰シルト細砂混じる 上面踏み込み多し、マンガン・鉄分(管状)沈着；第1層
3	5Y5/3	灰オリーブ細砂 マンガン・鉄分(管状)沈着；第1層
4	10B6/1	青灰細砂～極細砂シルトの互層 ラミナあり、洪水砂層；第1層
5	7.5Y5/2	灰オリーブ極細砂シルト マンガン・鉄分(管状)の沈着、上面踏み込みが多い部分が認められる；第2層
6	7.5Y5/2	灰オリーブ細砂～極細砂シルト マンガン・鉄分(管状)沈着多い、3aよりややシルト質がよい；第2層
7	7.5R5/1	赤灰極細砂 マンガン・鉄分(斑状)の沈着；第3層
8	10R4/1	暗赤灰極細砂 マンガン・鉄分(管状)の沈着；第4層
9	5YR6/1	褐灰極細砂；第5層
10	10G5/1	緑灰極細砂シルト質；第1面回み内埋土
11	10YR6/3	にぶい黄橙中砂～極粗砂 ラミナ有り；第1面回み内埋土
12	7.5G5/1	緑灰シルト中砂～粗砂多く混じる 瓦多く含む；第1面回み内埋土
13	5B5/1	青灰粗砂～中砂 小礫混じり；第1面回み内埋土
14	7.5YR6/2	褐灰シルト粗砂混じり；土壌層
15	5YR6/2	灰褐シルト中砂混じり；土壌層
16	7.5YR8/1	灰白シルト細砂混じり 下半に下層のブロック混じる；第1面回み内埋土
17	10G5/1	緑灰中砂シルト混じり；第1面回み内埋土
18	2.5GY8/1	灰白シルトブロックと10YR7/4にぶい黄橙シルトブロックが混じる ブロック土層、瓦多し；第1面回み内埋土
19	10YR5/1	褐灰粗砂混じりシルトと10YR7/4にぶい黄橙シルトブロック遺物多し；第1面回み内埋土
20	10YR6/1	褐灰粗砂混じりシルトと10YR7/4 灰白シルトブロックのブロック土層、極粗砂～小礫混じる；第1面回み内埋土
21	5YR/1	灰白粗砂～極粗砂ラミナあり、シルト層が狭在、層最上層に5P4/1明青灰粗砂混じりシルト層が部分的に存在；161流路埋土
22	2.5Y6/3	にぶい黄中砂～粗砂炭化物混じる；第1面回み内埋土
23	2.5Y6/4 10Y7/1	にぶい黄シルト混じり 粗砂～小礫ブロック混じる；基礎層 灰白粗砂～小礫ブロック混じる シルトブロック混じる、部分的に中砂ブロック混じる
24	5YR/6	橙シルト27と同一層か？；基礎層
25	5YR4/2	灰褐シルト粗砂～極粗砂混じる；70溝埋土
26	10Y5/1	灰シルト粗砂混じりシルトブロック混じる 遺物混じる；71溝埋土
27	7.5Y4/1	褐灰粗砂～極粗砂現代の溝埋土(ニワトリ・フタ骨、ガラス・ビニール入る)；攪乱埋土
28	5YR/3	にぶい橙極粗砂～小礫下部には粗砂～中砂 ラミナあり；第1面回み内埋土
29	7.5R5/1	赤灰極細砂、中砂含む；4層系
30	2.5Y7/2	灰黄シルト混じり粗砂小礫、遺物、炭化物含む；1溝埋土
31	5Y5/1	灰シルト小礫～粗砂若干含む；2溝埋土
32	5Y5/1	灰シルトブロックが極粗砂に混じる；3溝埋土
33	7.5R5/1	赤灰極細砂と5YR6/1褐灰シルトのブロック土；第3面夫唯唯
34	7.5Y3/1	黒褐シルト；攪乱埋土
35	2.5Y6/2	黄灰中砂～細砂ラミナあり、シルト層狭在、現代遺物(ビニール・ガラス・ゴム)入る；第1面回み内埋土
36	10YR4/1	褐灰中砂、粗砂混じる ややシルトっぽい現代耕作土、うね、うねの下にラミナが入る、細砂あり；第1面回み内埋土
37	2.5Y4/1	黄灰粗砂、小石混じる シルトっぽい即み最下層、ガラス入る；第1面回み内埋土
38	10YR5/2	灰黄褐シルト極粗砂混じり 暗紫灰シルトブロック混じる；第1面回み内埋土
39	5P4/1	暗紫灰シルトブロックと10YR7/1灰白シルトブロック混じる 層下半に暗紫灰シルトブロックが多い；第1面回み内埋土
40	10Y5/1	灰粗砂混じりシルト ブロック土(下層のブロック入る)；攪乱埋土
41	7.5YR6/2	灰褐中砂混じりシルト；第1層
42	7.5YR/1	明褐灰細砂とシルトの互層、上層はマンガン・鉄分の沈着多い 洪水砂層、層中には複数の土壌化層が見られるが分層できず；第2層洪水砂層
43	7.5YR5/1	褐灰シルト粗砂混じりゴミ入る；攪乱埋土
44	7.5YR6/1	褐灰中砂混じりシルト 土壌化強い、マンガン沈着多い；第2層系
45	5YR6/1	褐灰中砂混じりシルト；土壌層
46	10YR6/3	にぶい黄橙中砂～粗砂混じりシルト；土壌層
47	10YR6/2	灰黄褐中砂～粗砂混じりシルト 下層にラミナのある細砂あり；遺構埋土
48	5B3/1	暗赤灰シルト炭化物入る(ラミナが若干みられる)；第4層
49	5P6/1	紫灰粗砂～極粗砂シルトブロック若干含む 若干土壌化、上層のシルトブロック入る；第5層
50	7.5YR7/4	にぶい橙砂礫；第5層
51	10YR8/2	灰白中砂～極粗砂～小礫 ラミナあり；153流路埋土
52	10YR7/2	にぶい黄橙粗砂～中砂シルトブロック混じる；第1面回み内埋土
53	7.5Y3/1	オリーブ黒シルト細砂混じる 炭化物混じる；第3層
54	7.5Y3/1	オリーブ黒細砂 ラミナあり；第3層系
55	5Y6/2	灰オリーブ粗砂～中砂 小礫混じる；第5層
56	5Y5/1	灰シルト細砂混じり；第5層
57	10YR7/1	灰白中砂～細砂 ラミナあり；基礎層
58	2.5Y7/1	灰白極粗砂～小礫；基礎層
59	10YR6/3	にぶい黄橙砂礫層；第5層
60	5YR2/2	黒褐シルト細砂含む；第4層
61	5YR3/3	暗赤褐中砂シルト混じり シルトブロックを含む；第5層系
62	5YR4/2	灰褐シルト細砂含む 灰色極細砂がラミナ状に入る；第4層
63	5YR3/2	暗赤褐シルト細砂含む 炭化物を含む；第4層
64	5YR7/2	明褐灰中砂 ラミナがみられる；第4層
65	7.5YR7/4	にぶい橙中砂～粗砂；第5層
66	10R4/2	灰赤中砂～粗砂シルト含む；第5層
67	5YR7/2	明褐灰細砂と5YR3/2暗赤褐シルト細砂ブロック；第5層
68	10YR5/2	灰黄褐中砂まじりシルト 黒褐、灰白シルトブロック入る；第3層
69	5YR6/1	褐灰中砂 ラミナあり；190流路埋土
70	5Y3/2	オリーブ黒シルト；191流路埋土
71	2.5YR3/1～1.7/1	暗赤灰～赤黒シルト細砂混じる；第5面遺構埋土
72	5Y3/1～2/1	オリーブ黒～黒シルト 細砂混じり；第4層
73	2.5Y7/4～7/3	浅黄シルト；基礎層
74	10G7/1～6/1	明緑灰～緑灰極細砂～極粗砂；基礎層
75	5Y3/1～2/1	オリーブ黒～黒シルト極粗砂混じる 小礫入る ラミナが見られる；161流路埋土
76	5YR3/1～2/1	黒褐シルト～細砂混じり ラミナあり；161流路埋土
77	7.5GY4/1	暗緑灰中砂シルト混じり；第2層系
78	5P4/1	暗紫灰シルトブロックと10YR5/2暗黄灰シルトブロック 盛土；第1面回み内唯唯
79	7.5Y7/1	灰白砂礫；基礎層
80	10YR3/1～2/1	黒褐～黒シルト 炭化物入る；193溝埋土

3 調査成果

第1面 (図159・160 図版53-1～3・54-5)

第1面は、基本的に大和川による河川堆積物（大和川洪水砂層と呼称）を重機により除去し、検出した遺構面であるが、調査区西端部分では重機により除去した河川堆積物とは異なる砂層が堆積しており、その上層に土壌層が見られた。この土壌層の上面で（その6）調査区から本調査区に延びている溝の延長を検出している。このことから（その6）で方形区画溝を検出した遺構面は、本調査区において土壌層上面に対応すると考えられる。従って、第1面で検出した方形区画溝と関連するであろう溝は、第1面より上の面から掘り込まれた遺構である可能性が強い。

また、調査区中央部分に現代のゴミ混じりの土砂で埋まっている、幅約18m、深さが約50～70cmの南北方向の凹みが、調査区を横切るように位置する。この土砂を除去すると、畝立てが観察されたことから、河川敷が耕作地として利用されていた時期にも、この凹みが存在している。作土中からは近世の遺物が出土している。この凹みは、旧西除川の一時期の河道であった可能性が考えられる。

以下、土壌層上面からの遺構を含めた、第1面検出の遺構について記述する。

70溝 (図159・160・162 図版53-2)

南北方向にほぼ真っ直ぐに延びる溝である。溝は70溝と先後関係にあり、断面観察では70溝埋没後に141溝が掘削されている事から、70溝が141溝に先行する遺構である。

溝の南端は、141溝の南2mのところで収束している。溝は、土壌層上面で検出した部分で幅2.4m前後、深さ0.8m前後を測る。溝底は、溝の南端から163溝を検出した微高地へと緩やかに上がって行き、163溝付近を頂点とし北へ下がって行く。

溝内では、土坑を2基検出した。2基とも深さは、溝底から約70cmを測る。

溝内からは、多量の瓦や土器が出土している。これらの遺物は、溝が埋められる際に投棄されたと考えられ、埋められた時期の1点を示すものであろう。溝内から出土した遺物には、土師器小皿、瓦器碗・小皿、備前播鉢・壺、瓦質羽釜・火鉢・甕、須恵器甕、青磁、白磁、砥石、温石がある。瓦では、三巴文軒丸瓦や多量の丸・平瓦、雁振瓦等が出土している。この他にも、土師質羽釜・甕、瓦質播鉢が出土した。出土した遺物は15世紀代のものが大半であるが、16世紀の白磁碗（IV-2類）も含まれる。

また、12世紀後半～13世紀の瓦器小皿も出土しているが、これは、溝の下層にある流路からの混じり込みでであろう。（図166-33・34、図167-35～61、図176-217・218）

141溝 (図159・160 図版53-2)

141溝は、（その6）で検出している方形区画溝（遺構30）の延長である。溝は、土壌層上面で検出した部分で幅約2m、深さは0.8m前後を測る。溝底は、多少の凹凸があるものの高さはほぼ一定で、幅は1m前後である。溝内からは、多量の瓦や土器が出土しているが、特に埋土中位の4層、黄灰シルトに粗砂が若干含まれる層に集中している。これらの遺物は、70溝と同様に溝が埋められる際に投棄されたと考えられる。

出土した遺物は、土器類で図化している瓦器小皿、備前播鉢、瓦質播鉢・火鉢・甕、土師質甕の他、土師器小皿、土師質羽釜、瓦質羽釜・甕、陶磁器が出土している。瓦では図化している三巴文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦・水波紋軒平瓦、鬼板瓦の他、多量の丸・平瓦や、雁振瓦が出土している。鬼板瓦や雁振瓦が出土している事から、これらを葺いた大棟、もしくは降棟を持つ建物が、周辺に存在していたと思われる。石製品では温石や砥石が、土製品では、土師器の底部に穴を開けたものが

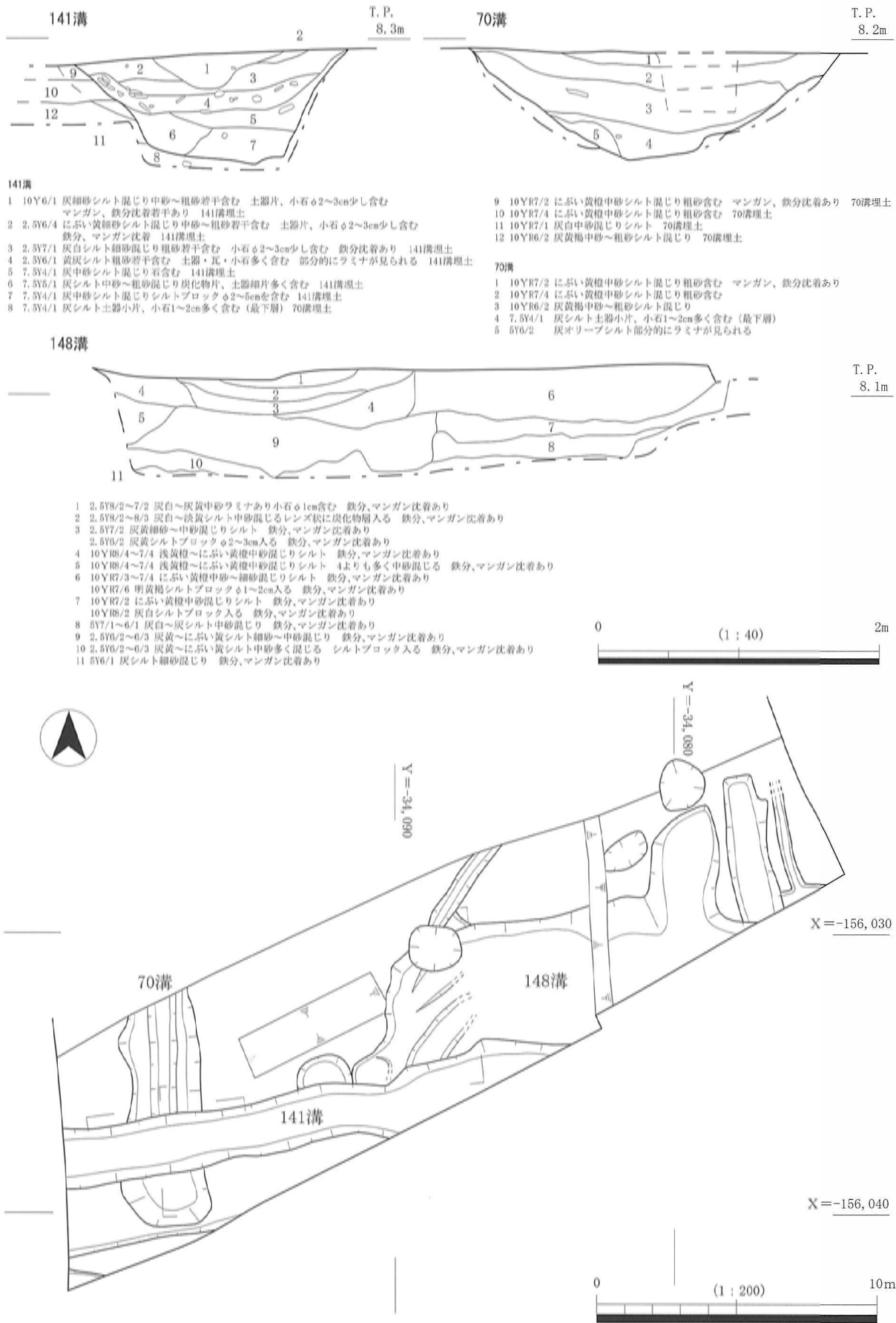


図159 141溝・70溝・148溝断面図(上) 第1面上面 平面図(下)

出土している。これらの遺物は、15世紀後半～16世紀代にかけてのものが大半を占める。

(図166-22～32、図175-197～209、図176-219)

148溝 (図159・160・162 図版53-2・54-4)

70溝・141溝より先行する遺構である。平面は不定形をなし、調査区南へと広がっている。埋土は、中砂が混じるシルトが主体である。70溝・141溝が掘削される前の旧地形である可能性が強く、人為的に埋められたと考えられる。遺構内から出土した遺物は図化している瓦器椀、瓦質甕、東播系片口鉢、備前大甕の他に瓦器小皿、土師器皿、土師質羽釜・甕、須恵器甕、青磁、白磁等が出土している。瓦では、丸・平瓦や雁振瓦が出土している。これらの遺物は、15世紀代の瓦質甕や瓦類が主に上層から出土しており、埋土の下層からは12世紀後半の瓦器椀が出土している。(図168-62～69)

163溝 (図160・162)

(その6) 方形区画溝(遺構30)の延長である。検出幅は1m前後、深さは10cm程である。このため、70溝と先後関係については不明であるが、平面では141溝の様に70溝を突き抜けていないため、70溝に取り付いていたと考えるのが妥当であろう。埋土は、シルト混じり極粗砂～粗砂で、小礫が混じる。

溝内からは、底にへばり付くように15世紀後半の備前擂鉢が1点出土している。(図168-70)

1溝 (図160・162 図版54-5)

調査区ほぼ中央で検出した、南北方向の溝である。北端は、調査区中央部分にある南北方向の凹みで削平され、検出できなかった。溝の検出延長は約45m、残存幅は約2m、深さは0.5～0.7mである。溝底は凹凸のあるものの、高さは一定である。埋土は、粗砂～極粗砂とシルト系の土で、ラミナは見られない。溝の全域から、土器や瓦が出土しており、特に遺物が集中して出土する層は見られなかった。

また、1溝の南端は、ラミナの見られる粗砂～極粗砂で埋没した落ち込み上に位置しており、溝は埋没した落ち込みの凹みを利用して、掘削されたと考えられる。

溝から出土した遺物は、土器類で図化している瓦質ミニチュア羽釜・羽釜・甕、備前擂鉢・鉢、青磁の他、土師器皿、白磁がある。瓦では図化している、三巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦丸、雁振瓦、玉縁式丸瓦の他、平瓦も出土している。出土遺物は、13世紀の白磁や17世紀の唐津皿の他は、15世紀～16世紀代がほとんどである。(図168-71～78、図176-210～213・220・221)

8溝 (図160・162 図版54-5・56-9)

ほぼ東西方向に掘られた溝で、西端は現代の攪乱によって削平されている。このため70溝と関係は不明である。幅は3～3.5m、深さは約0.6mで、溝底は東から西へ緩やかに下がっている。

溝の東端からは、幅20cm前後で深さ約10cmの細い溝が一条、1溝に向かって伸びている。1溝は、この細い溝に向かって張り出したような平面形状をしているが、溝がつながるであろう場所に浅い凹みがあり、その関係は不明である。出土した遺物は、土器類で図化している瓦器小皿、土師器小皿、土師質甕、須恵質羽釜、瓦質羽釜・甕・香炉方形蓋、備前擂鉢・甕、青磁、染め付けの他、土師質羽釜が出土している。

瓦では、図化している唐草文軒平瓦丸の他、丸・平瓦が出土している。遺物は、15世紀～16世紀がほとんどであるが、下層からの入り込みと考えられる、12・13世紀の瓦器も若干混じっている。

(図169-80～95、図176-214)

86溝 (図160 図版54-5・58-13)

1溝の西で検出した南北方向の溝である。検出延長約10m、幅は約1m～50cm、深さは10cm前後で

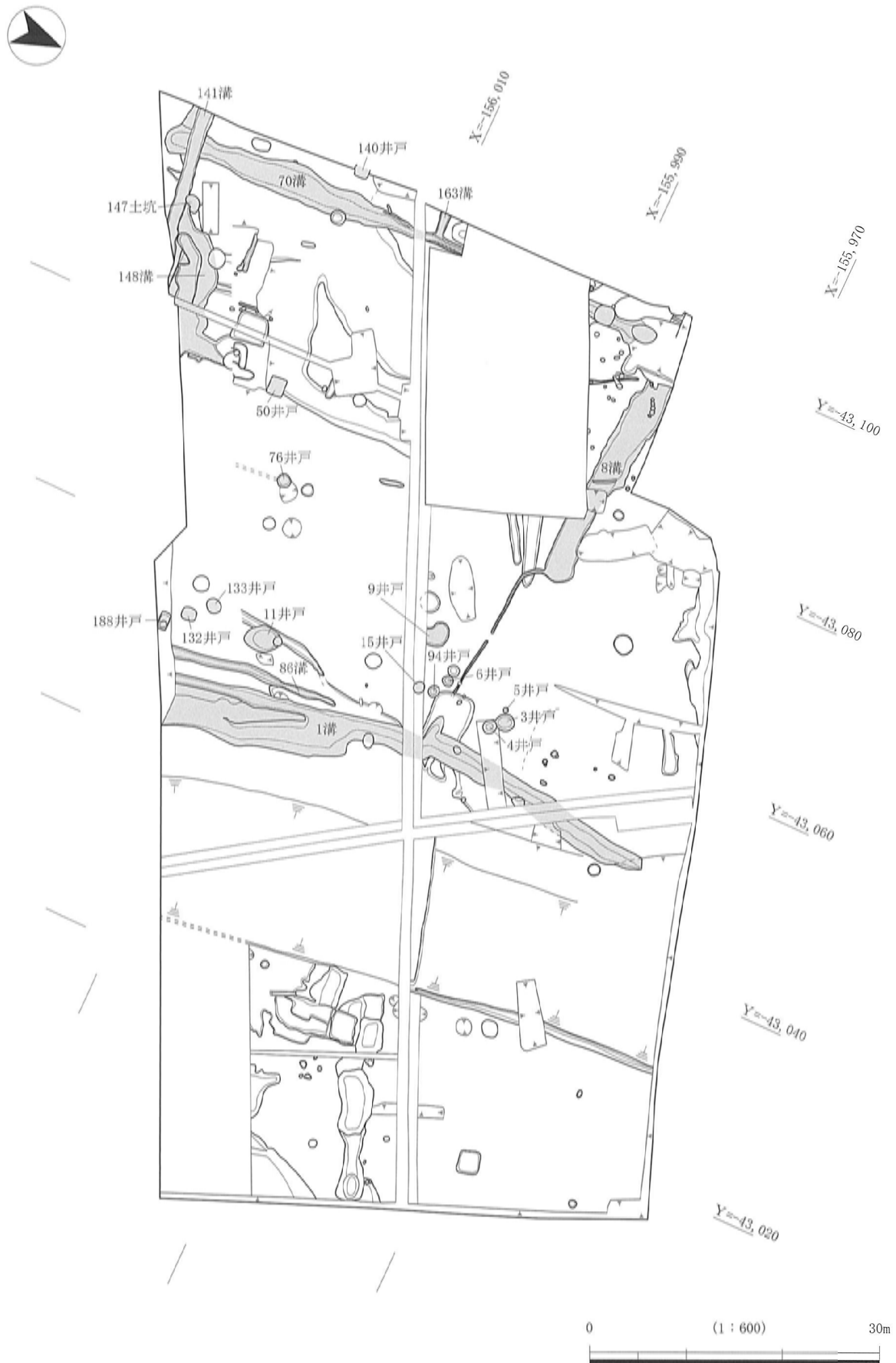


図160 第1面

ある。溝底付近から12世紀後半の瓦器椀が出土した。(図169-79)

4井戸 (図160・163 図版55-6)

土圧により変形が著しいが、一辺65cm前後の方形木枠をもつ井戸である。木枠は、四隅に丸材を立て、その外側に横方向に板材を置くものである。方形木枠内には、高さ約12cmの曲げ物が2段重ねられている。検出面から井戸底までの深さは約95cmである。掘方は、直径約1.6mの円形で、2段掘りの形状を示す。埋土から出土した遺物で図化しているものに、瓦質羽釜・甕、東播系片口鉢があるが、この他土師質羽釜、須恵器甕、丸・平瓦がある。遺物の時期は、東播系片口鉢が13世紀後半、それ以外は15世紀～16世紀のものである。(図170-97～99)

5井戸 (図160・164 図版55-7)

土師質羽釜の底を抜き井筒に転用した井戸で、深さは約83cmを測る。掘方は、直径1.1m前後の不定形の平面形を呈する。土師質羽釜は1段しか出土しなかったが、埋土内から同じ位の口径の土師質羽釜片が、2点出土している事から、少なくとも2段以上羽釜を積み上げ、井筒としていたと考えられる。

土師質羽釜は13世紀のものである。(図170-101～104)

6井戸 (図160・164 図版56-8)

瓦質甕の底を抜き井筒に転用した井戸で、深さは約54cmを測る。掘方は、直径約75cmの円形の平面形を呈する。瓦質甕内の埋土から、瓦器と土師器の小片が出土している。(図171-120)

50井戸 (図160・163 図版57-10)

瓦質井筒の井戸である。掘方は、一辺約1.6mの方形の平面形を呈する。瓦質井筒は、口径66cm、器高63cmで4段積み重ねており、井戸の深さは2.6m以上を測る。埋土内から出土した遺物は、図化した瓦器小皿、瓦質羽釜・甕、備前播鉢、外面を黒く燻した鬼板瓦片、須恵質の鬼板瓦片の他、丸・平瓦が

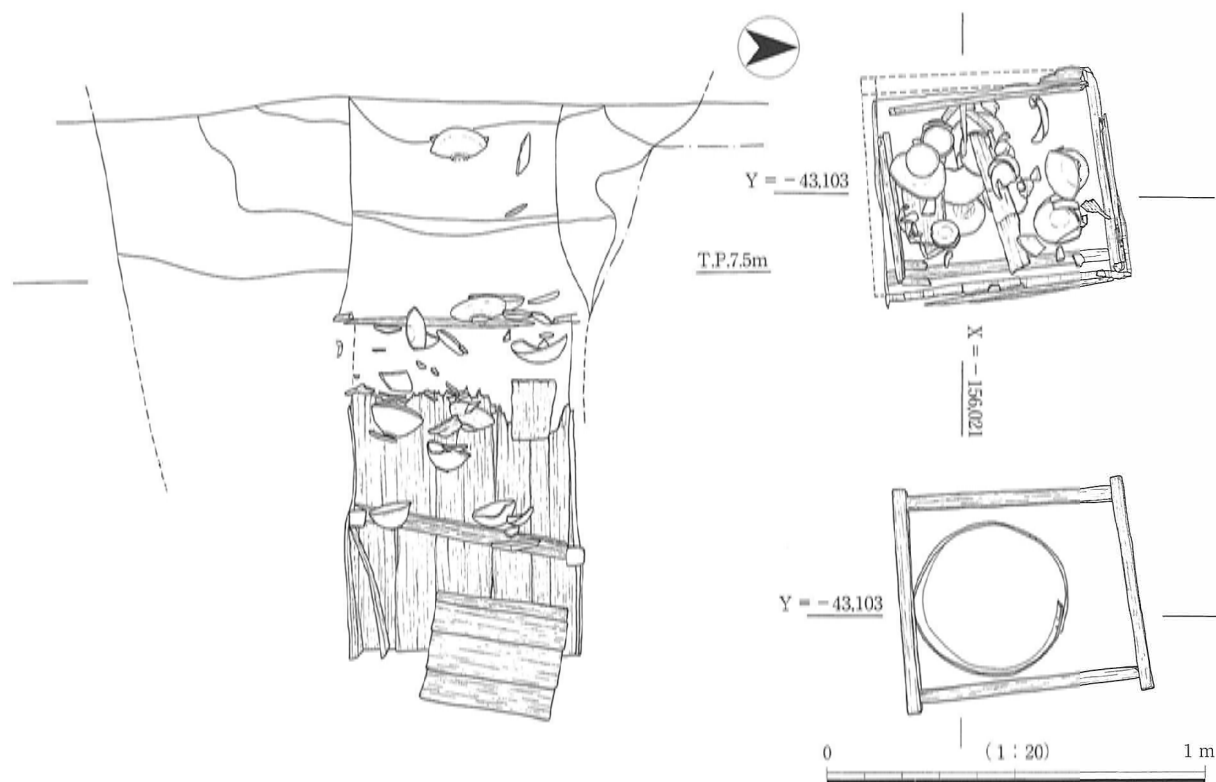


図161 140井戸平・断面図

出土している。これらの遺物は、15世紀～16世紀のものである。

(図171-115～119、図172-136、図177-229・230)

76井戸 (図160・163 図版57-11・58-12)

土師質井筒の上に、方形木枠を乗せた井戸である。掘方は、直径約1.6mの円形の平面形を呈する。

方形木枠の遺存状態は悪いが、四隅に丸材を立てその外側に板材を縦に並べる構造である。北東隅の丸材は、沈み込まないように下部に2点の連珠文軒平瓦が据えられていた。土師質井筒は、口径47.4cm器高29cmで4段積み重ねている。井戸底までの深さは約1.5mである。井筒の最終段内から竹を使った籠が出土しているが、非常に脆く取り上げることはできなかった。土師質井筒内の埋土から出土した遺物は、図化している瓦器碗、土師皿、瓦質羽釜の他、土師器甕、須恵器甕、瓦質播鉢、平瓦が出土している。これらの遺物は14世紀～15世紀のものである。(図172-121～123・137、図177-222・223)

94井戸 (図160・163 図版59-14)

平面形が直径約1.1mの円形を呈する掘方内に、直径約46cmの曲げ物3段を重ねた井筒が据えられた井戸である。曲げ物の井筒の外側2カ所には、井筒を固定するための竹が打ち込まれている。深さは約45cmである。埋土内からは羽釜、瓦器、土師器甕・皿の小片が出土したのみである。

132井戸 (図160・164 図版59-15)

瓦質井筒の井戸である。掘方は、長辺約1.35m、短辺約1.15mの長方形の平面形を呈する。深さは約2.2mである。瓦質井筒は1個体しか残っていなかったが、埋土内から別個体の瓦質井筒片が出土しており、2段以上瓦質井筒を積み重ねていたと考えられる。埋土内から出土した遺物は、図化している瓦質羽釜・播鉢・甕、唐草文軒平瓦の他瓦器、土師皿、土師質羽釜・甕が出土している。遺物は、14世紀～15世紀のものである。(図172-124～126、図177-224・225)

140井戸 (図160・161 図版60・61)

調査区の西端で検出しており、掘方の西半は(その6)調査区である。

井戸は、長辺60cm、短辺54cmの方形の木枠を持つ井戸である。木枠の構造は、四隅を組み継いだ方形の枠の外側に、縦方向に板材(側板)を並べ、板材と掘方の間を土砂で埋め木枠を固定するものである。枠は2段あったと思われるが上段の枠は腐って原型をとどめていなかった。

また、この上段の枠と考えられる材から、上55cmは板材が残っていなかったが、木枠内の埋土の状態から、多量の土器と共に埋められた際には、側板があったと考えられる。方形木枠内には枠の南に寄せて、直径40cmの曲げ物が3段重ねられており、この曲げ物の底が井戸底に当たる。検出面から井戸底までの深さは約1.6mを測る。

掘方は方形で、長辺が約1.5mであるが、短辺は不明である。方形の木枠は、掘方の南西隅に位置している。

木枠内の埋土からは、12世紀代の瓦器碗・小皿、土師皿がまとまって出土しており、井戸を埋める時に廃棄したと考えられるが、完形品が多く含まれる事から何らかのまじないの可能性もある。この他にも、底近くの砂層内から遺存状態が極めて悪いものの、櫛の一部が出土している。

出土した遺物は、図化している瓦器碗・小皿、土師器皿、東播系片口鉢の他に、瓦器碗・小皿、土師器皿の破片が大量に出土している。(図173-138～169)

188井戸 (図160・164 図版62-20)

板材を桶状に組み井筒とした井戸である。掘方は、長辺1.65m、短辺1.1mの長方形の平面形を呈す

る。板材は、上方が狭く下方が広がるよう円形に生まれ、外側には竹のタガが上中下の3段締められている。1段目の井筒は上部が腐って残りは悪いものの、1枚の板材の長さは1.1m前後で、幅はばらつきが多いもののほぼ8～10cm位である。2段目は1段目よりも短く1枚の板材の長さは45cm前後、幅は1段目とほぼ同じ位の8～10cm前後である。2段目の板材は下方端部の井戸底に当たる部分が、斜めに加工されており、底へ板材を円形に打ち込んだと考えられる。

板材には、ほぞ穴や敷居の溝と思われる加工痕があり、柱等の家屋部材の転用材である。埋土内からは15世紀の瓦質羽釜が完形で1点出土している他、瓦器、瓦質甕、白磁、瓦や、子供の頭大の石が出土している。(図172-131)

3井戸 (図160 図版54-5)

平面形が、直径約1.8mの円形を呈する、素掘りの井戸で、深さは約1.5m以上になる。井戸内からは、図化している土師器羽釜と、三巴文軒丸瓦、玉縁式丸瓦、格子叩き平瓦の他、土師器皿、瓦器碗・小皿、土師質甕、瓦質羽釜・甕、備前甕が出土している。これらの遺物は15世紀～16世紀のものである。(図170-100、図177-226～228)

9井戸 (図160 図版54-5)

直径約2mの円形の掘方内に、家屋の柱材を転用した方形木枠を据えた井戸である。調査終了面よりも2m以上深くなるため、確認を行ったのみである。埋土からは土師器の9世紀の土師器碗が出土しているが、方形木枠の構造から9井戸は室町時代以降の可能性が強く、井戸が埋められる際に混入したと考えられる。(図170-96)

11井戸 (図160 図版54-5)

平面形が直径約1.3mのほぼ円形を呈する、素掘りの井戸である。埋土内から出土した遺物で図化した瓦器碗・小皿、土師器小皿、東播系片口鉢の他、土師質羽釜、瓦質羽釜、備前播鉢、丸・平瓦が出土している。遺物は13世紀～14世紀中頃のものである。(図171-105～114)

133井戸 (図160 図版54-5)

平面形が直径約1.05mの円形の掘方を呈する、素掘りの井戸である。深さは約0.95mを測る。

埋土内から出土した遺物は、図化している瓦器碗の他、土師器、瓦質甕、須恵質甕、丸・平瓦がある。

また、瓦質井筒が出土していることから、井筒が据えられていた可能性が考えられる。(図172-127)

151井戸 (図160 図版54-5)

平面形が直径1.5mの円形の掘方を呈する、素掘りの井戸である。深さは約0.81mを測る。

埋土内から出土した遺物は、図化している瓦器碗、土師皿、須恵器甕の他、瓦器小皿、土師質甕・羽釜、備前甕がある。(図172-128～130)

147土坑 (図160 図版53-2)

検出状況から、141溝に先行する遺構である。平面形は不定形で、深さは約1.1mを測る。掘方内からは、15世紀の備前播鉢と、12世紀後半～13世紀初頭の瓦器碗が出土している。(図172-132～134)

大和川洪水砂層・第1面検出時出土遺物、第1層出土遺物

大和川洪水砂層・1面検出時出土の遺物は、染め付けをはじめ近・現代～奈良時代までの遺物を含む。特に、19の土馬は7世紀のものと考えられ、本遺跡周辺でも出土例はない。

第1層出土遺物は、3面の流路埋土からの遺物が多く含まれるため、奈良時代末～平安時代前期の遺物が多い。(図165・174・175-190～196 図版73・74・84～86)

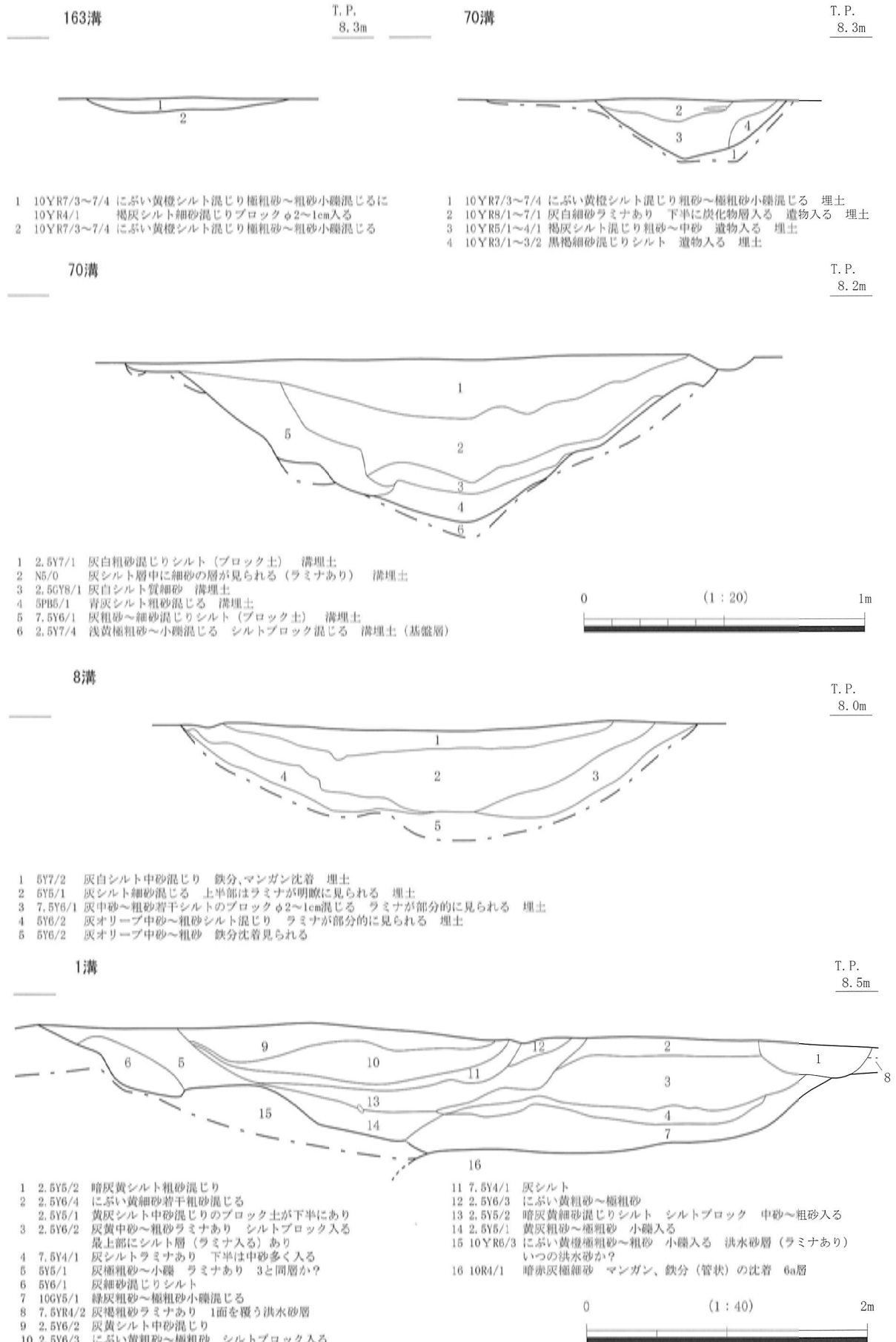


図162 163溝・70溝・8溝・1溝断面図

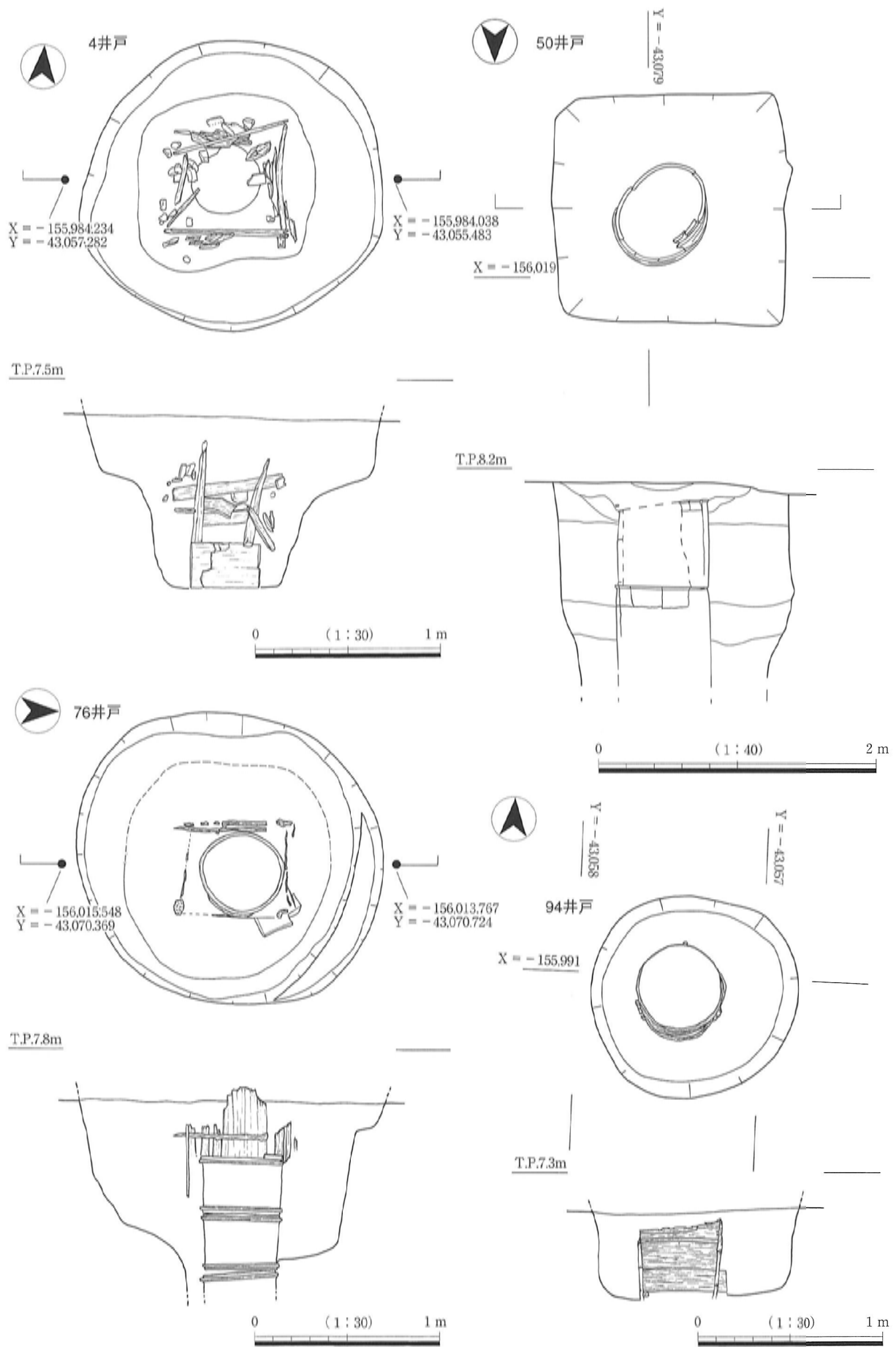


图163 4井戸・50井戸・76井戸・94井戸平・断面图

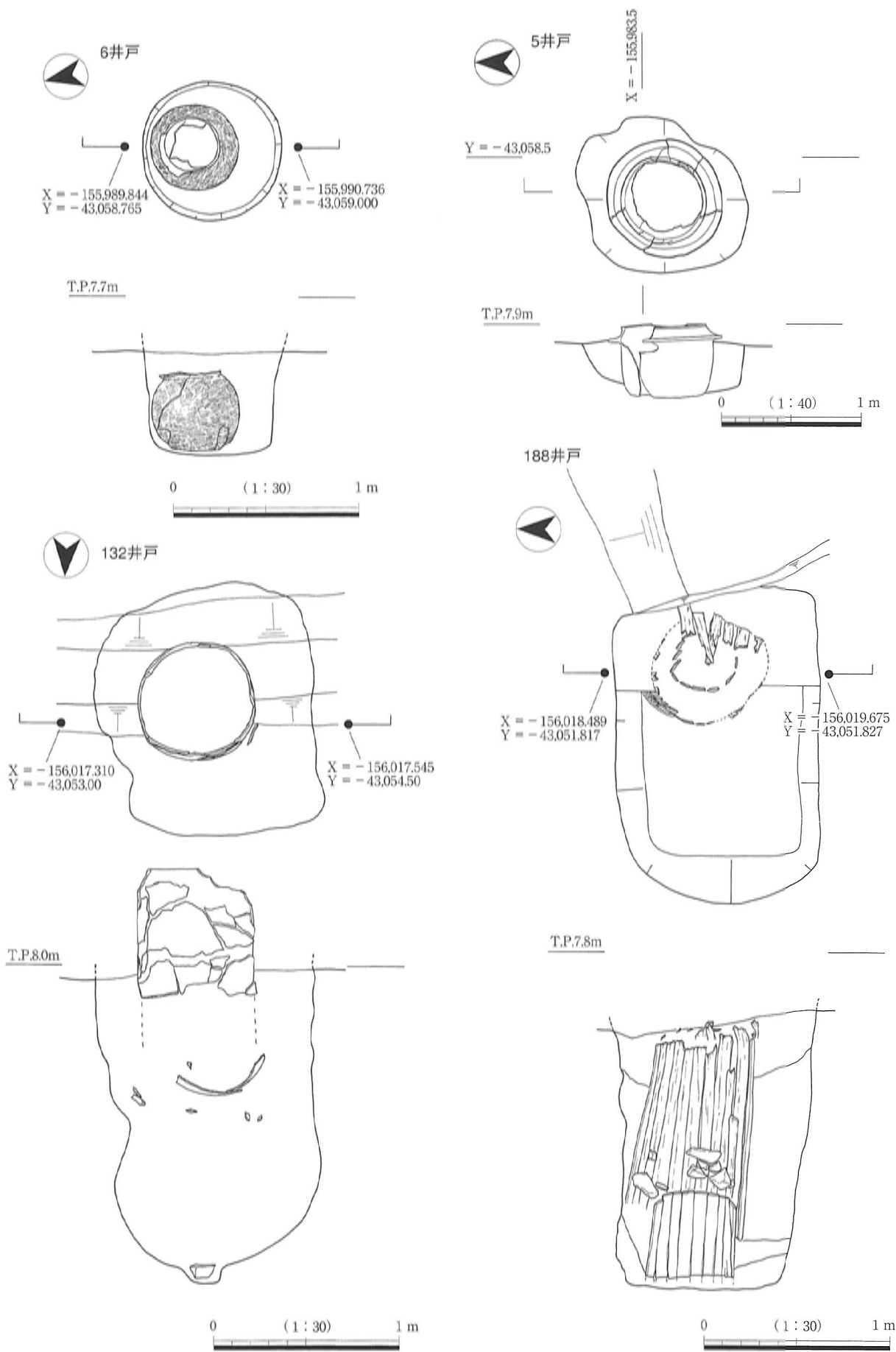


図164 5井戸・6井戸・132井戸・188井戸平・断面図

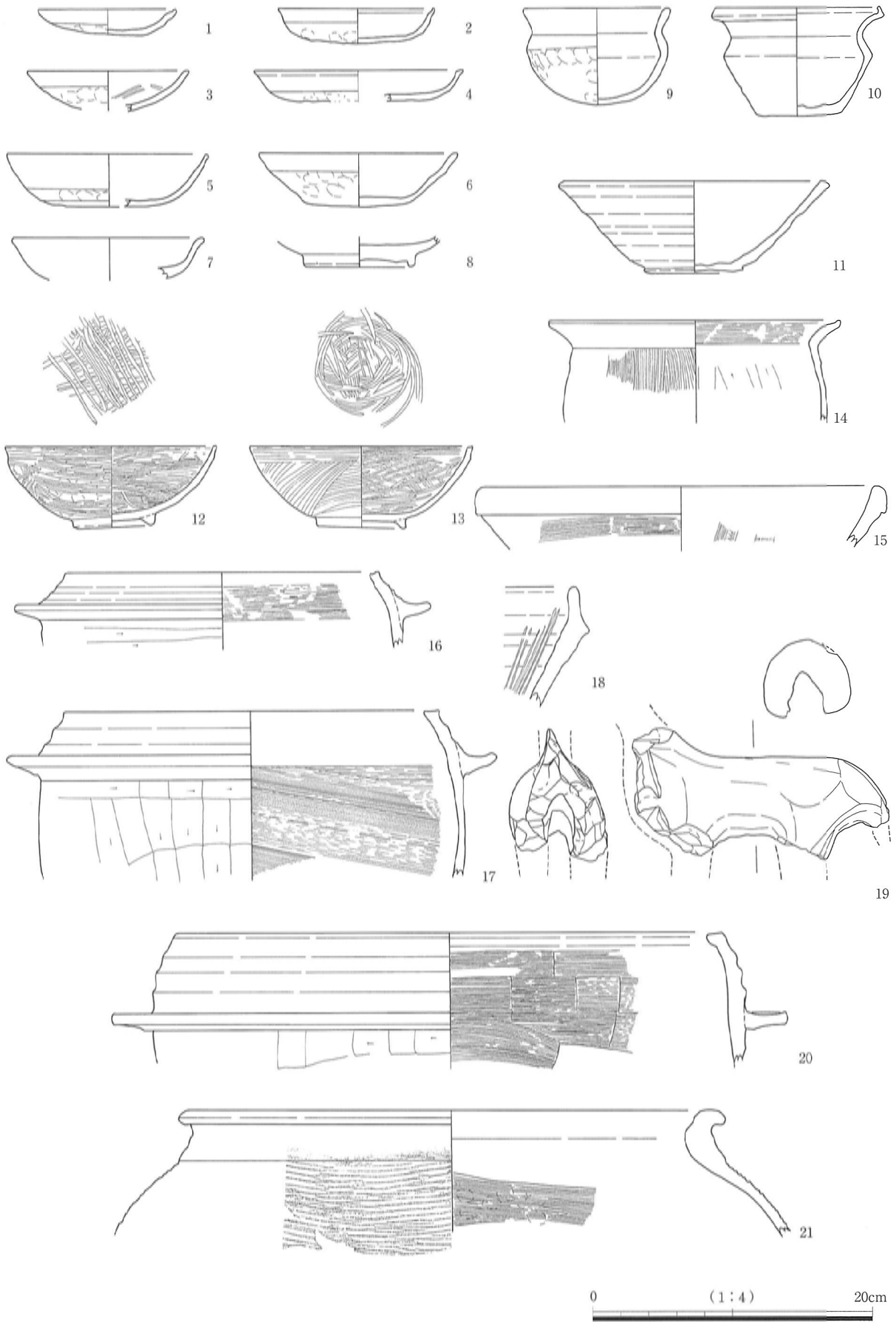


图165 第1面上層他出土遺物

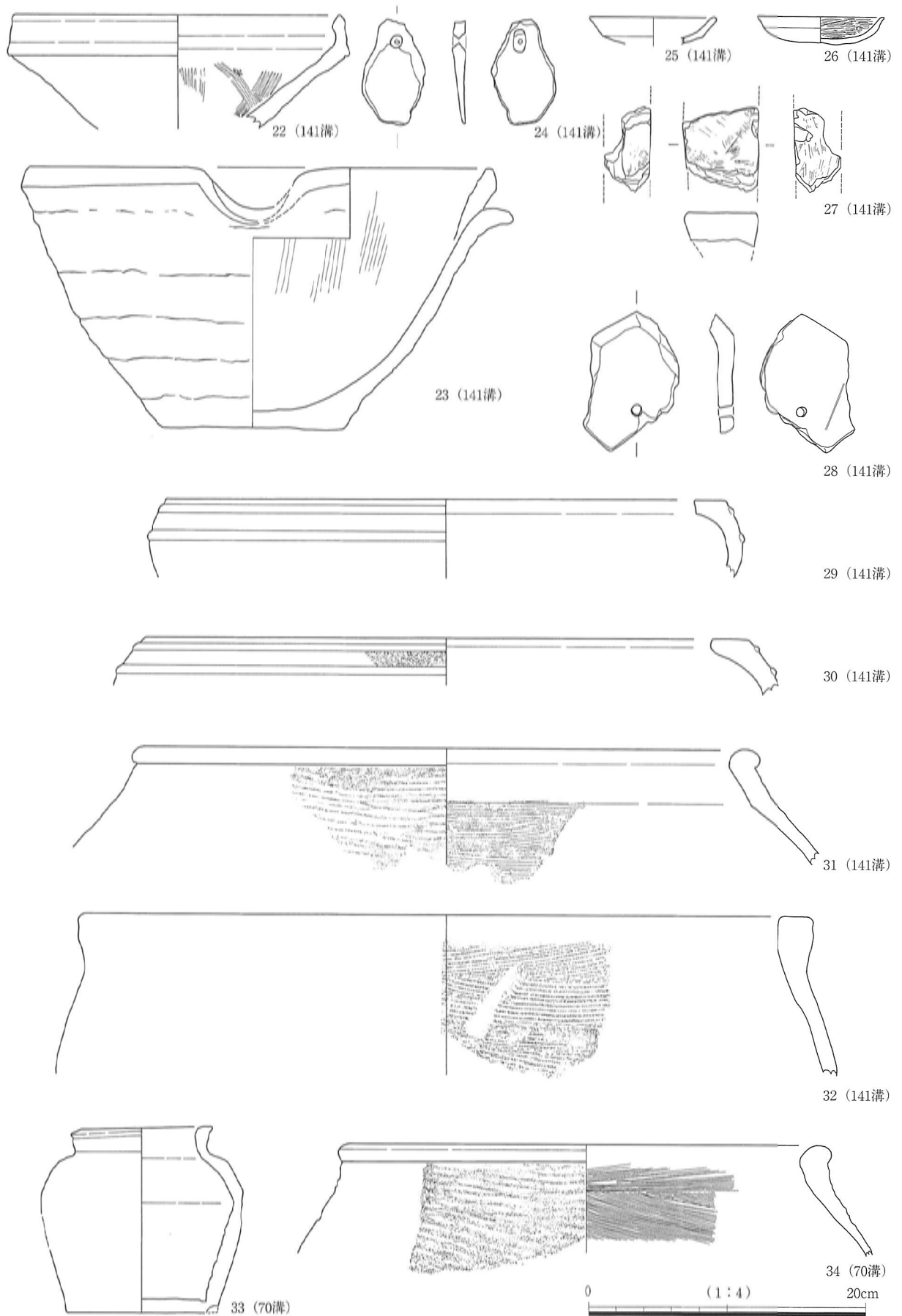


図166 70溝・141溝出土遺物

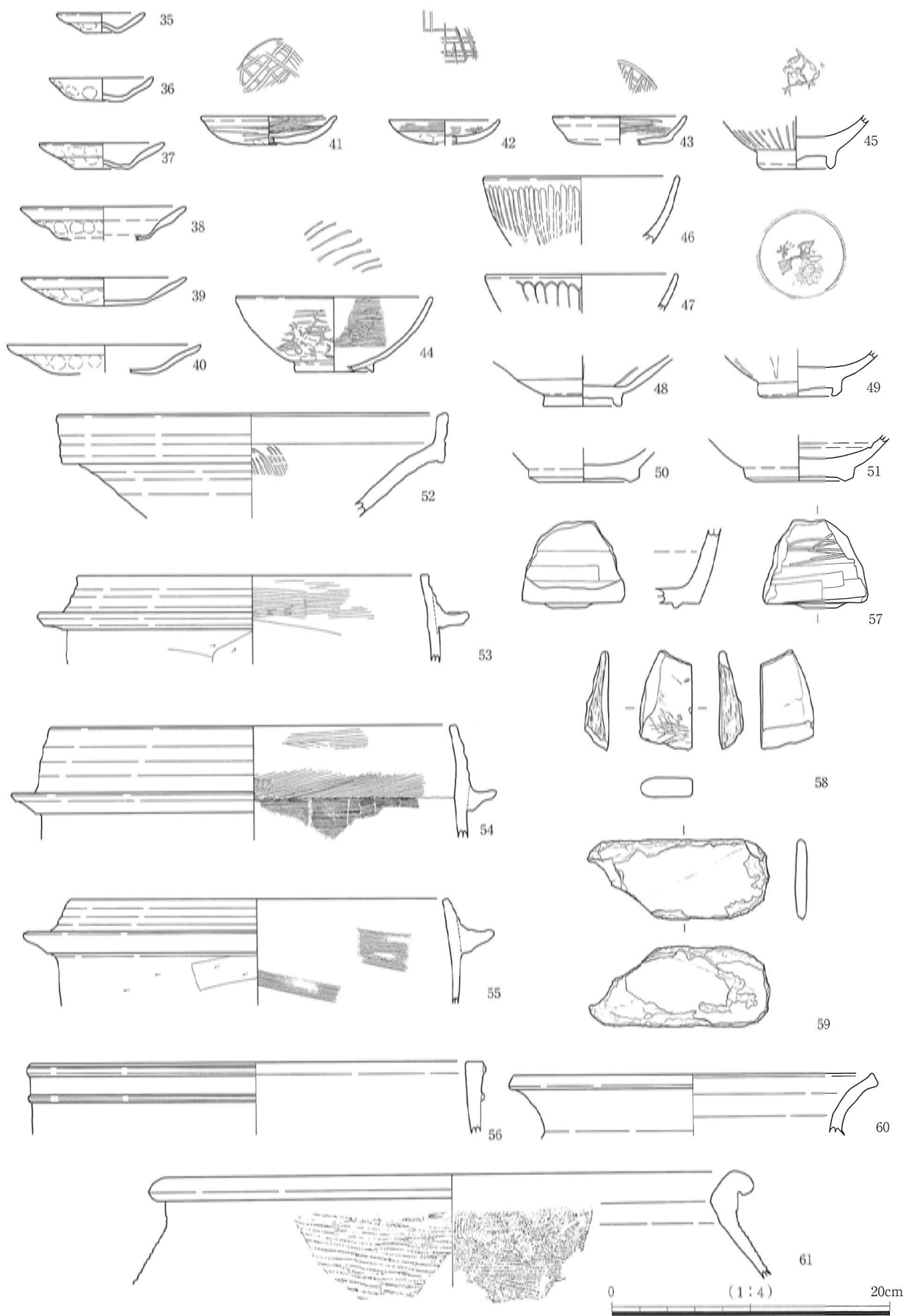


图167 70溝出土遺物

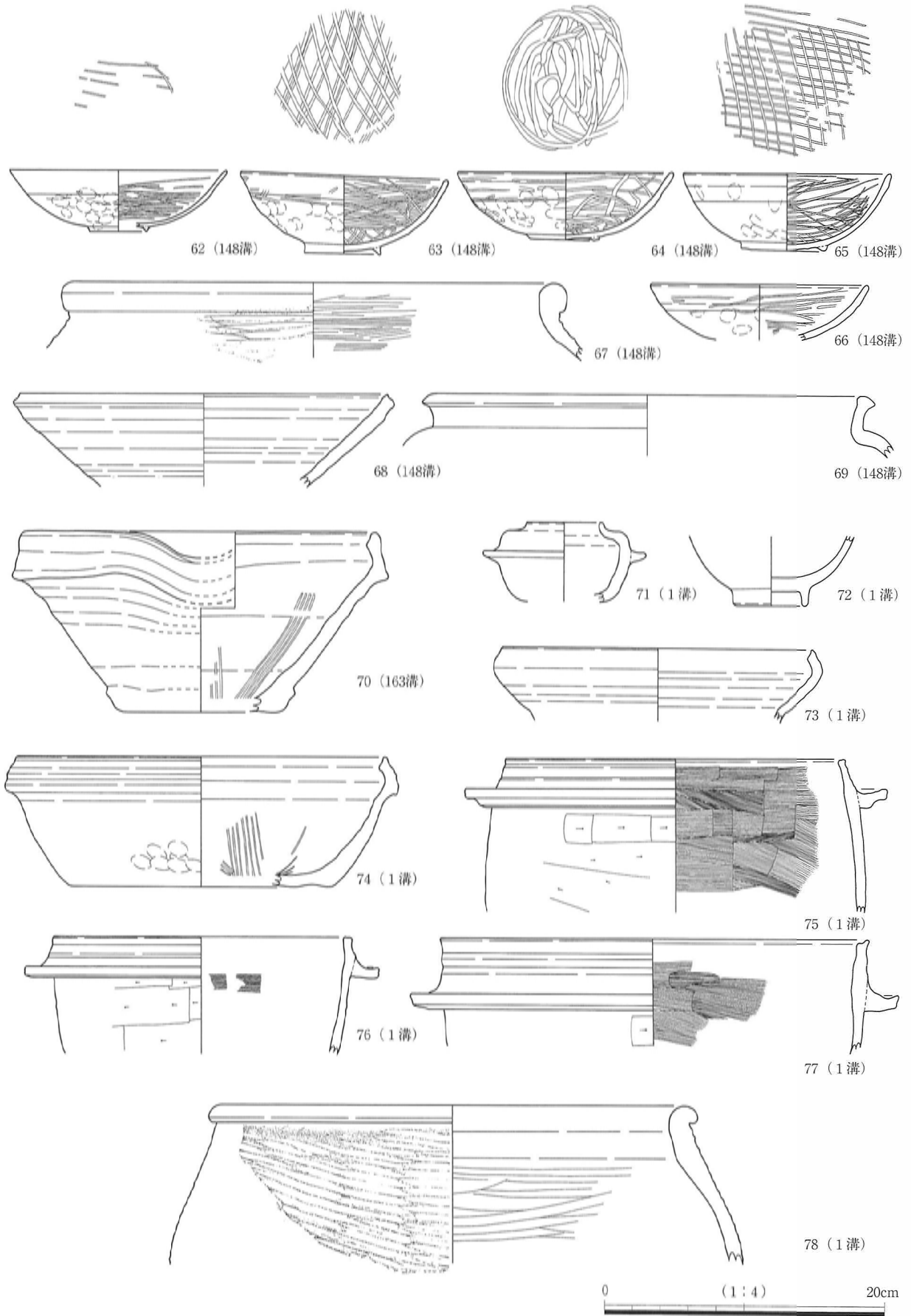


図168 1溝・148溝・163溝出土遺物

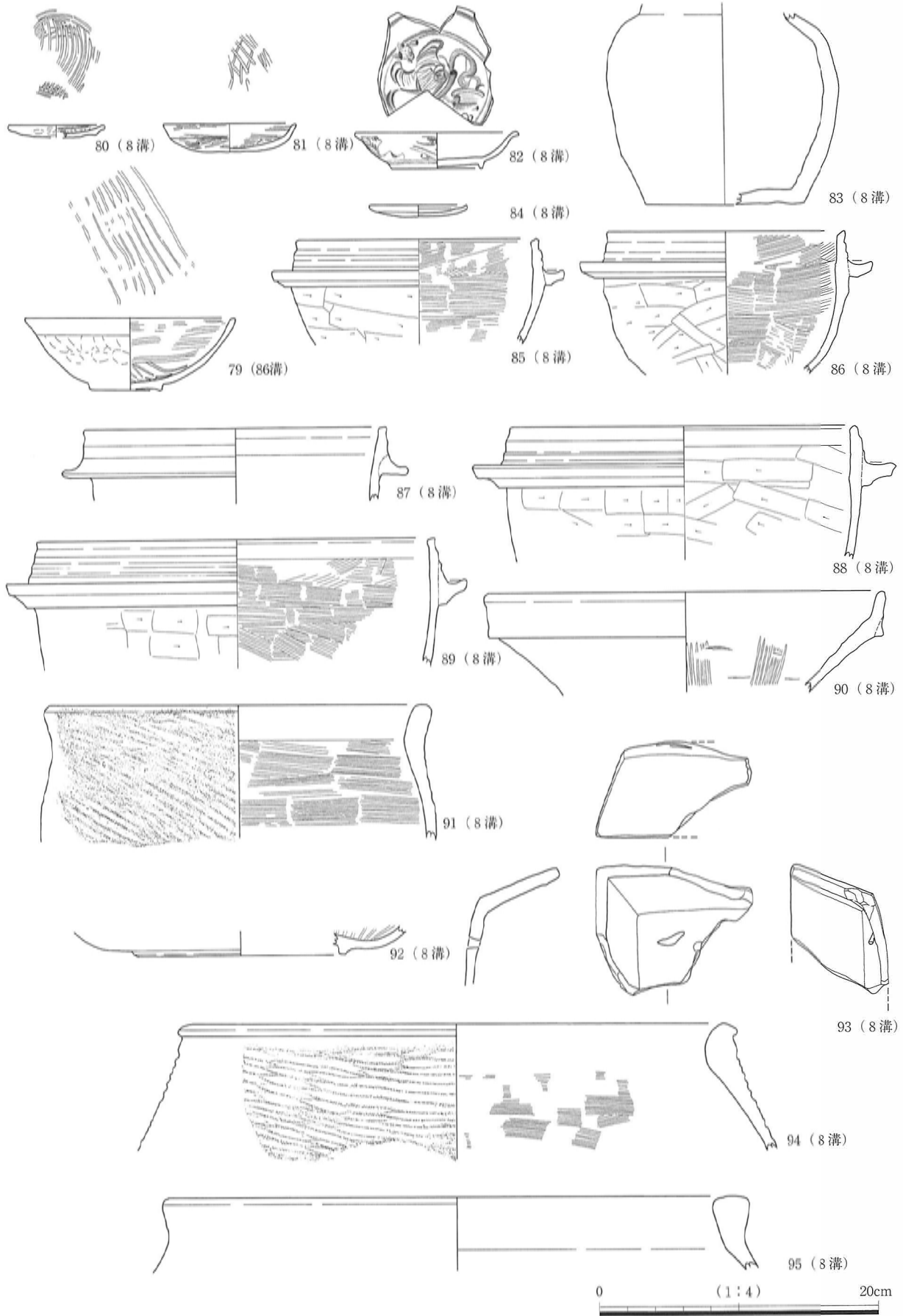


图169 8溝・86溝出土遺物

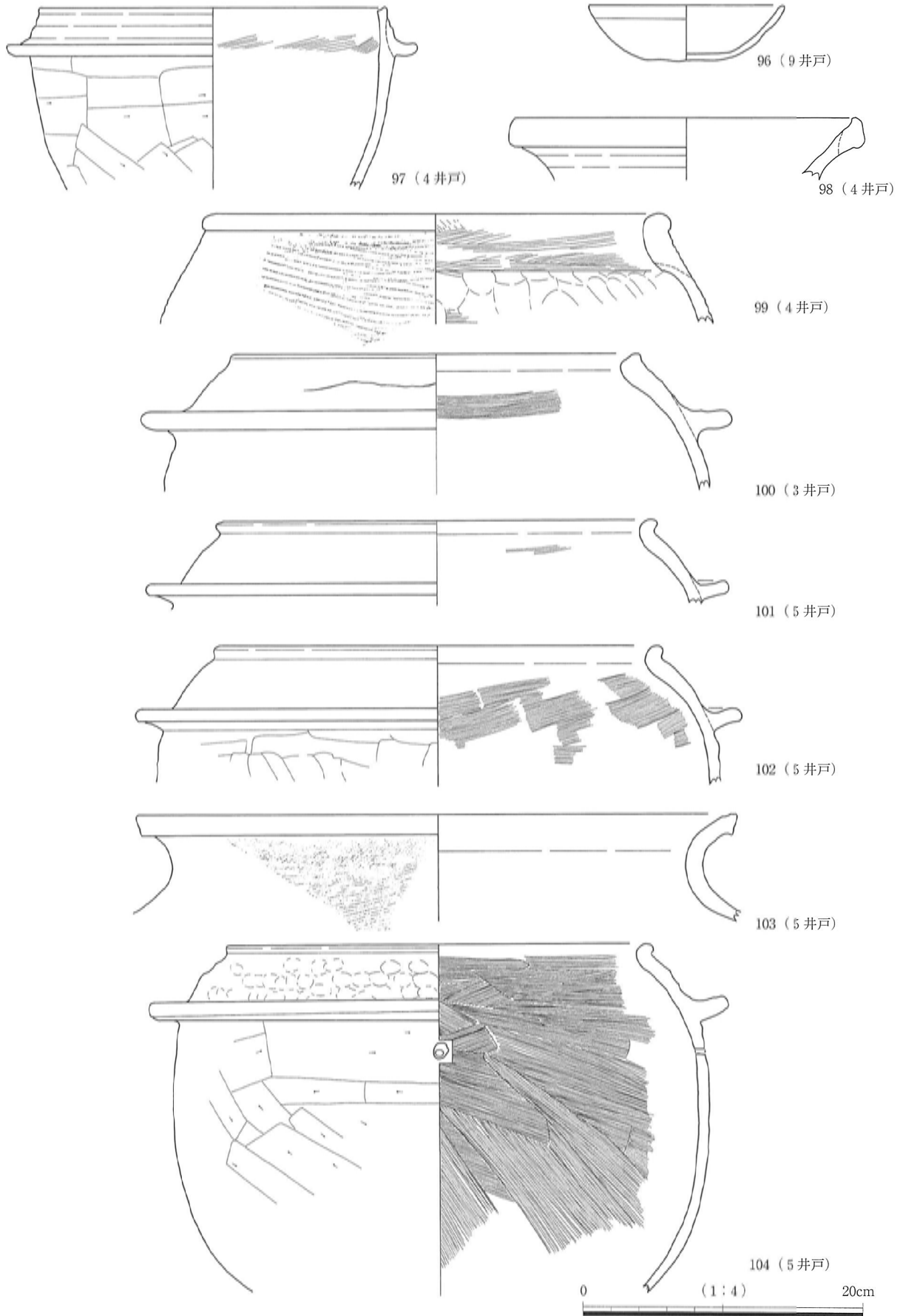


図170 3井戸・4井戸・5井戸・9井戸出土遺物

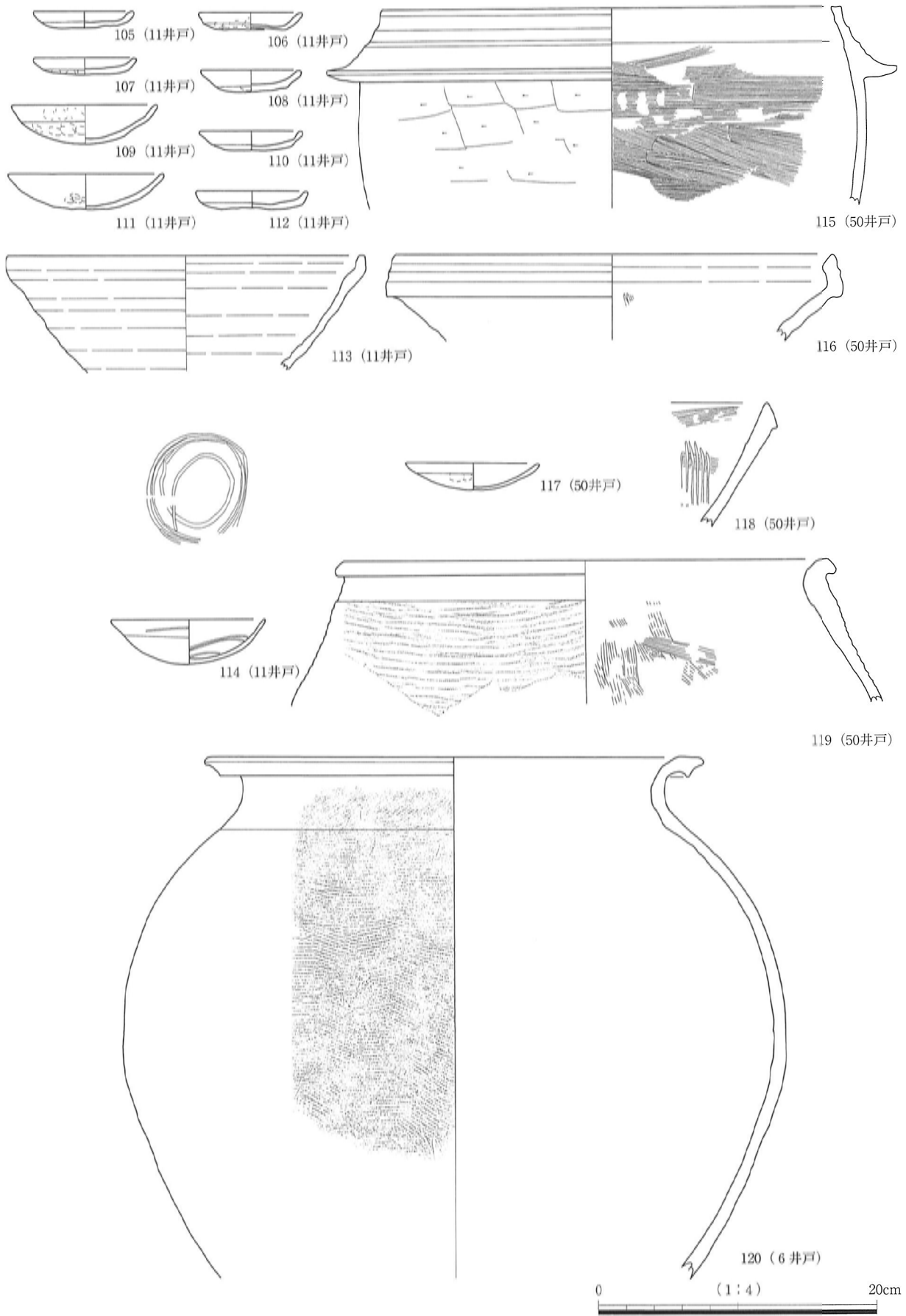


图171 6井戸・11井戸・50井戸出土遺物

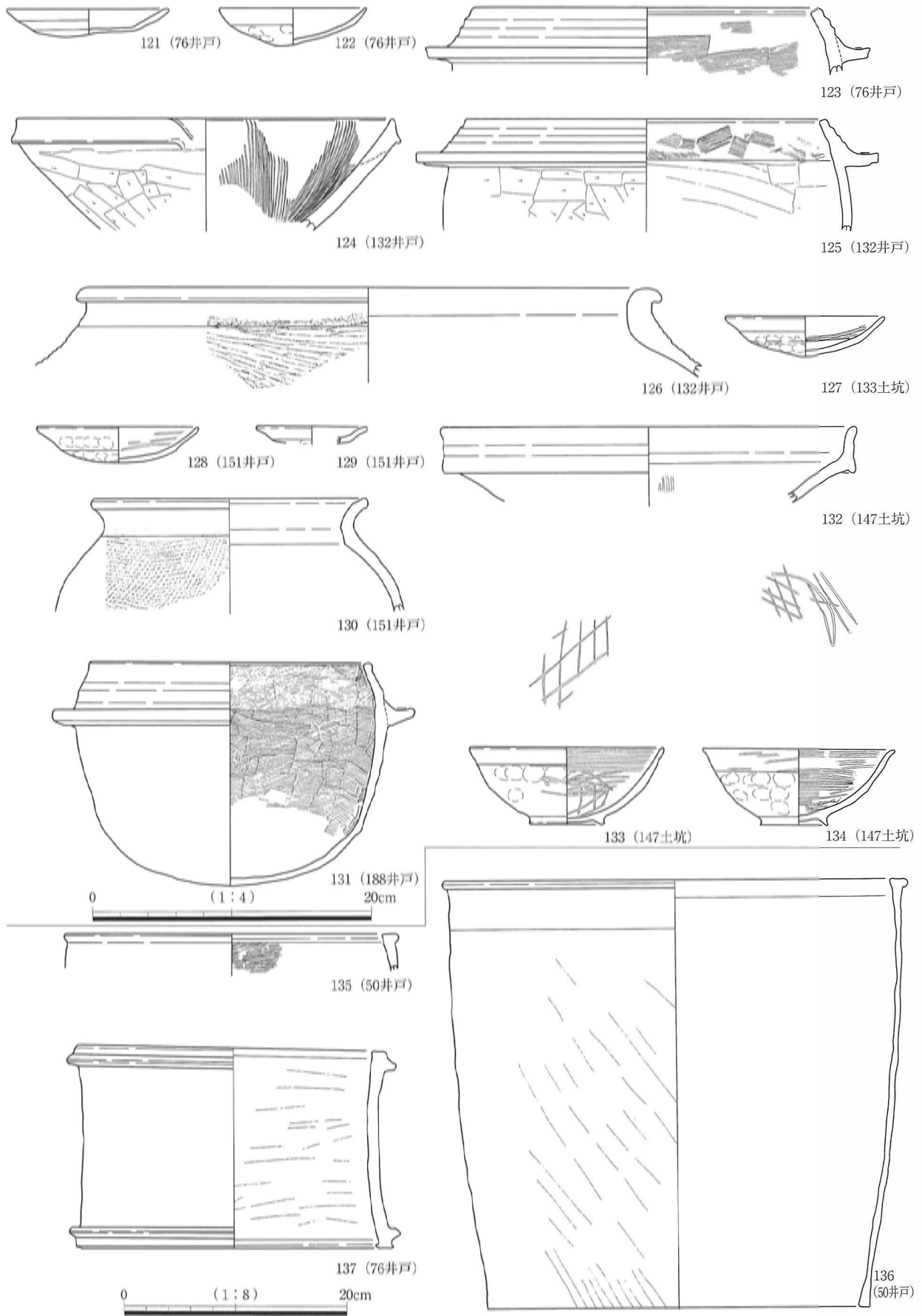


図172 50井戸・76井戸・132井戸・133井戸・147井戸出・151井戸・188井戸土遺物

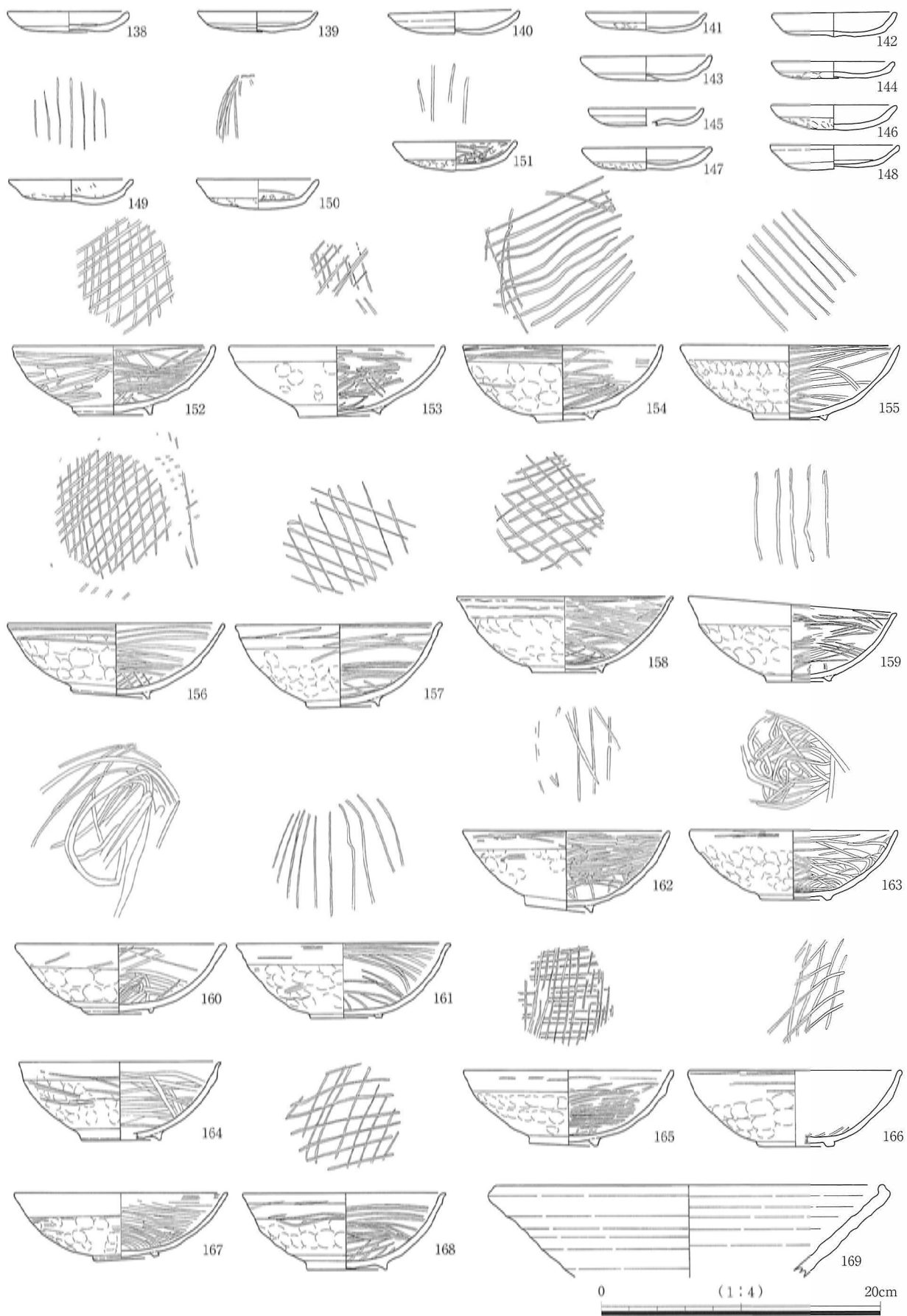


图173 140井戸出土遺物

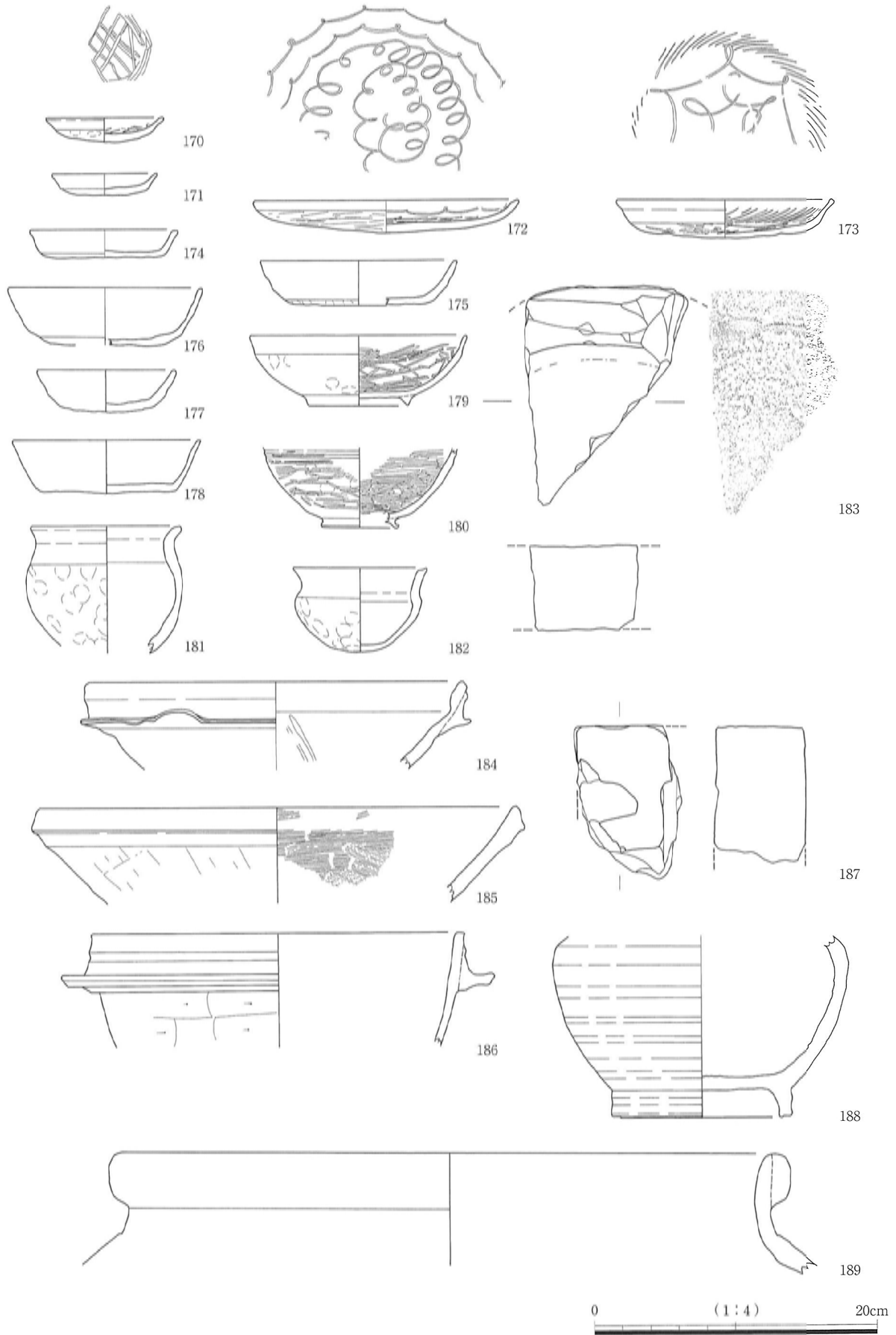


図174 第1層出土遺物



图175 第1面上層他・141溝出土瓦

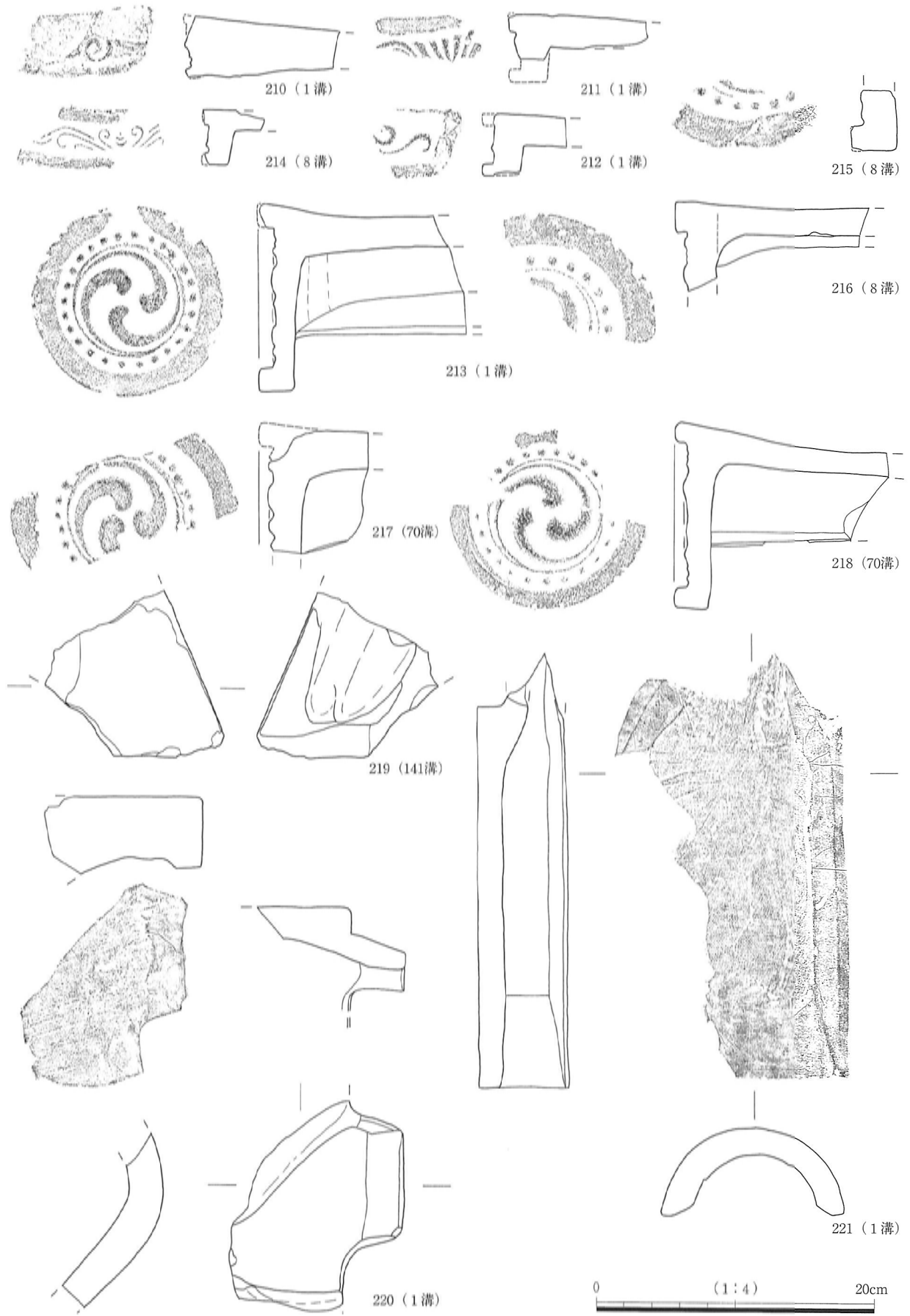


図176 1溝・8溝・70溝・141溝出土瓦

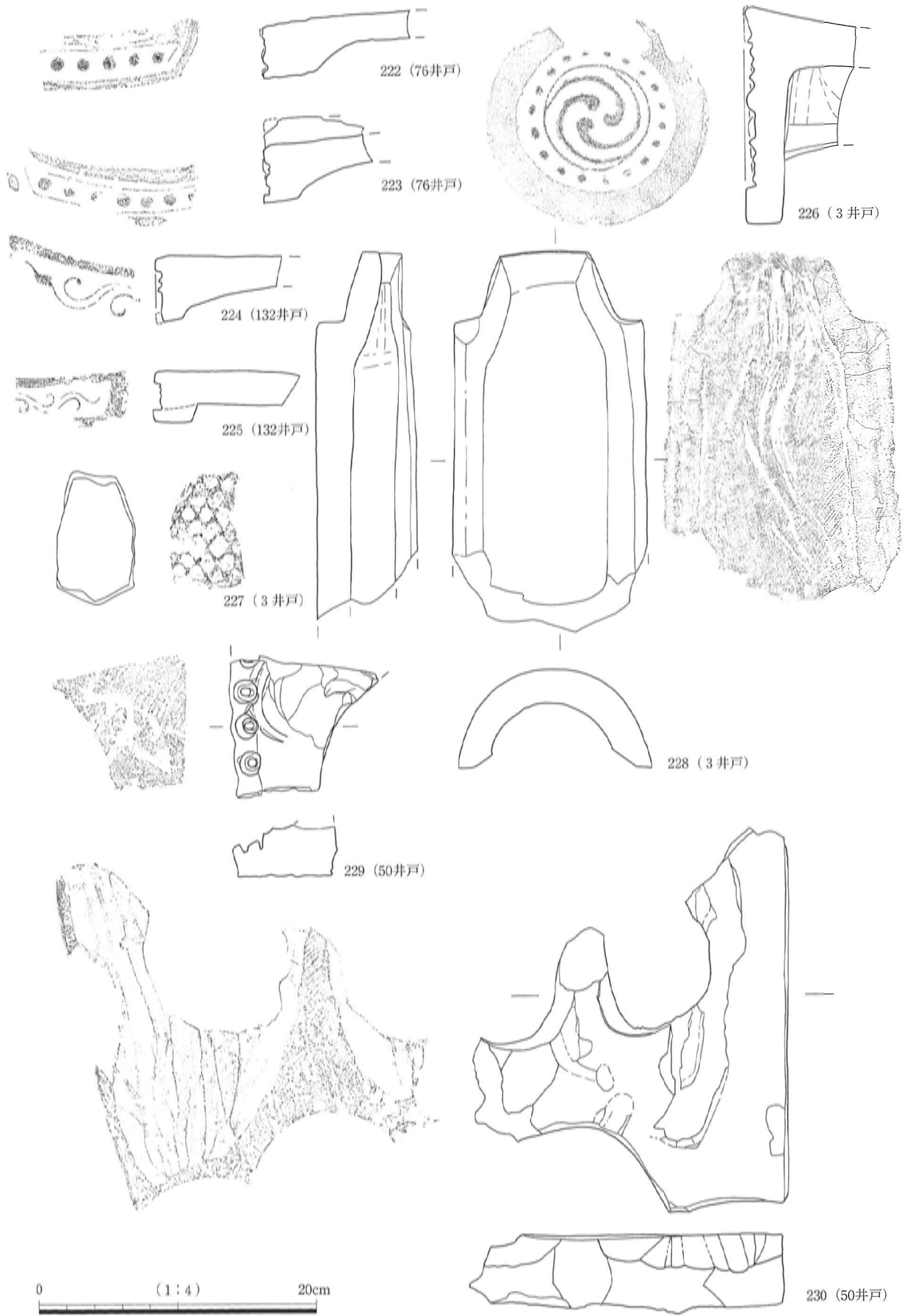


图177 3井戸・50井戸・76井戸・132井戸出土瓦

第2面 (図179 図版62-21・63)

この面は、第1層を除去して検出した遺構面である。第1層を除去すると調査区西半では、水田面を検出したが、調査区東半では分厚い洪水砂層の上面、第1層下面を検出したのみである。したがって第2面、水田面は調査区西半のみの調査となった。

検出した水田は、2層中層及び2層中層の上面に堆積した洪水砂層を攪拌して、作土を形成している。

水田面上に部分的に、ごく薄くではあるがラミナが見られる洪水砂層が存在しており、この部分では畦畔を検出できた。畦畔は、残りの良好な所で高さは3～4cmを測る。南北方向の畦畔は、北に対して東へ約30°振れており、東西方向の畦畔はこの南北方向の畦畔に対してほぼ、90°に交わっている。

畦畔で区画された水田は東西方向の長地形を呈するが、一筆の面積が確認できるものは無かった。

田面では、ほぼ東西方向の畦畔の方向に並行する、12本の素掘りの溝を検出している。この溝は、幅約50～60cm、深さは約5～10cmである。溝の中には、畦畔の上を横切っているものがあり、畦畔が造られた後、溝が掘削された事がわかる。この事から、これらの溝は上面の第1面段階での耕作等に伴う遺構であると考えられる。

高まり1は、南北方向の畦畔にほぼ並行して延びる遺構である。幅は上面の攪乱などにより不明であるが、高さは残りの良い部分で約7cmを測る。下面の第3面の高まりが反映されている遺構であるが、この面でも高まりとして、水田景観の一部を形作っていたと考えられる。この事は、この高まり1よりも東側に水田が検出されていないことが、傍証として上げられる。この面で検出した水田の、東端を限る遺構なのか、それとも今回検出できなかった、東側の田面が1段上がっていたのかは不明である。

南北方向の畦畔1は、調査区北側で、149凹みの南肩に沿って作られている、畦畔2に取り付いている。この畦畔2は、149凹みへ田面から水を流さないように作られたものであろう。

149凹みは、底の凹凸が激しいが、深い所で田面からの比高差は約40cmを測る。埋土は砂で、ラミナが見られる。

149凹みの位置には、下層の第3面段階に流路があり、それが洪水砂等で埋まりながらこの面で検出した、149凹みとなったものと考えられる。

この凹みは、下層の流路に

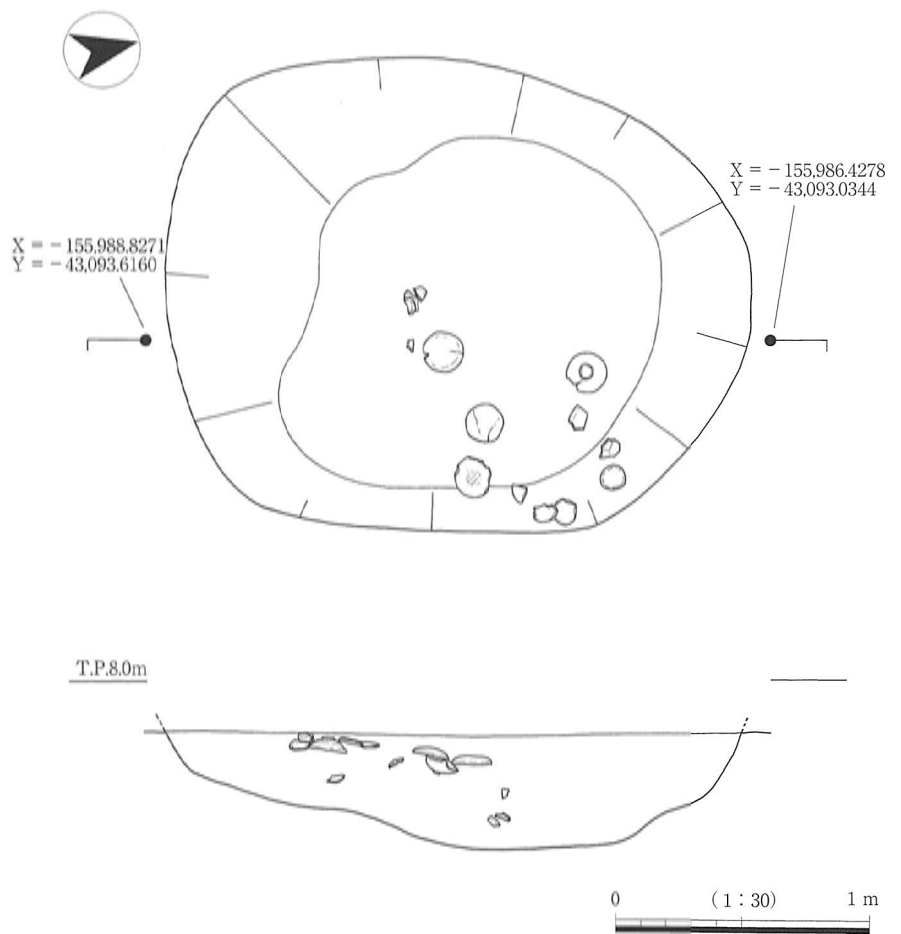


図178 182土坑平・断面図

沿って調査区西半を蛇行しており、場所によっては完全に砂で埋没し、第1層を除去することで凹みが平坦化している所もある。(図179 斜線部分) 149凹みからは、図181—239~255の土器などが出土している。この149凹みが完全に埋まっている部分で、検出した遺構に182土坑がある。

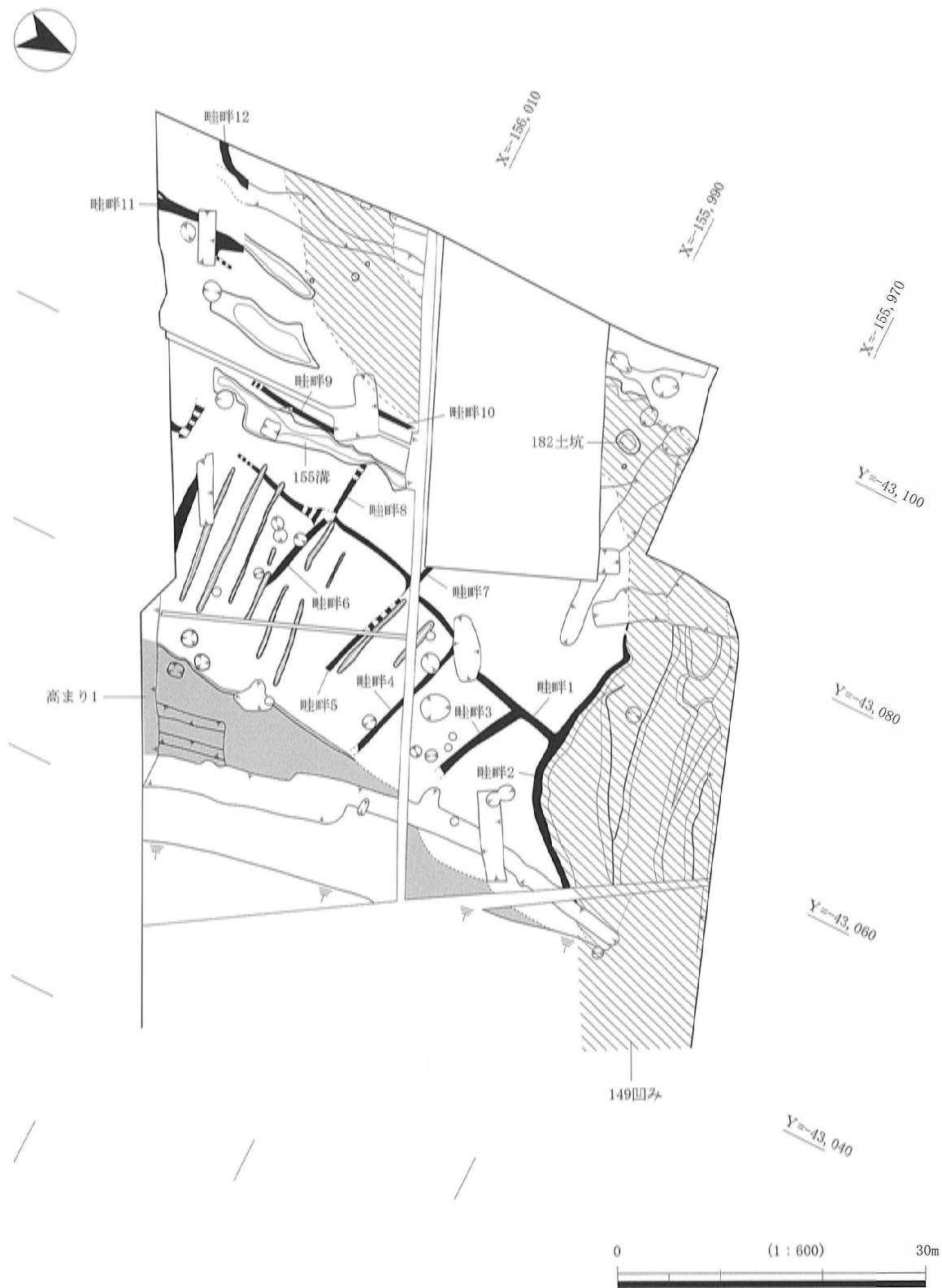


図179 第2面

182土坑 (図178・179 図版63-23・66-29)

この土坑は、平面形が長軸約2.3m、短軸が約1.9mの楕円形の掘方を呈する。深さは、約45cmである。土坑内からは、ほぼ完形の瓦器碗や土師皿が、埋土の上位部分からまとまって出土している。

図化した瓦器碗や土師皿の他、土師器の細片も多く出土している。(図181-231~238 図版89) これらは、12世紀中頃~後半のものである。

126土坑・127土坑 (図180)

126土坑・127土坑は長方形の平面形で、126土坑は長軸5.5m、短軸1.5mの深さは0.85m前後を測る。

127土坑は長軸2.8m、短軸1.7mで深さは0.9m前後を測る。どちらも、底は第5層まで到達している。壁面は垂直もしくは、ややオーバーハング気味で鋤と思われる農具の痕跡が見られた。埋土は、中砂~細砂のブロック土であり、土坑を掘り上げた後に、掘り上げた土で埋め戻したと考えられる。

分厚い洪水砂層(第2層下層)内の土壌層上面若しくは第1層が形成される段階での遺構面からの遺構であると考えられ、土坑の掘り込み面の特定はできなかった。同様の形態を持つ遺構が(その5)(その6)でも検出されている。

155溝 (図179・180)

155溝は、南北方向の溝である。検出延長約10m、幅は広い部分と狭くなっている部分があるが0.2~0.3m前後を測る。溝底は凹凸が激しく、深い所では0.7m、浅い所で0.15mを測る。溝内から遺物は出土していない。

2層から出土した土器は、図化している8世紀末~9世紀前半の土師器碗や須恵器杯、15世紀代の備前播鉢がある。この他にも、須恵器・土師器片が若干出土している。(図181-256~261)

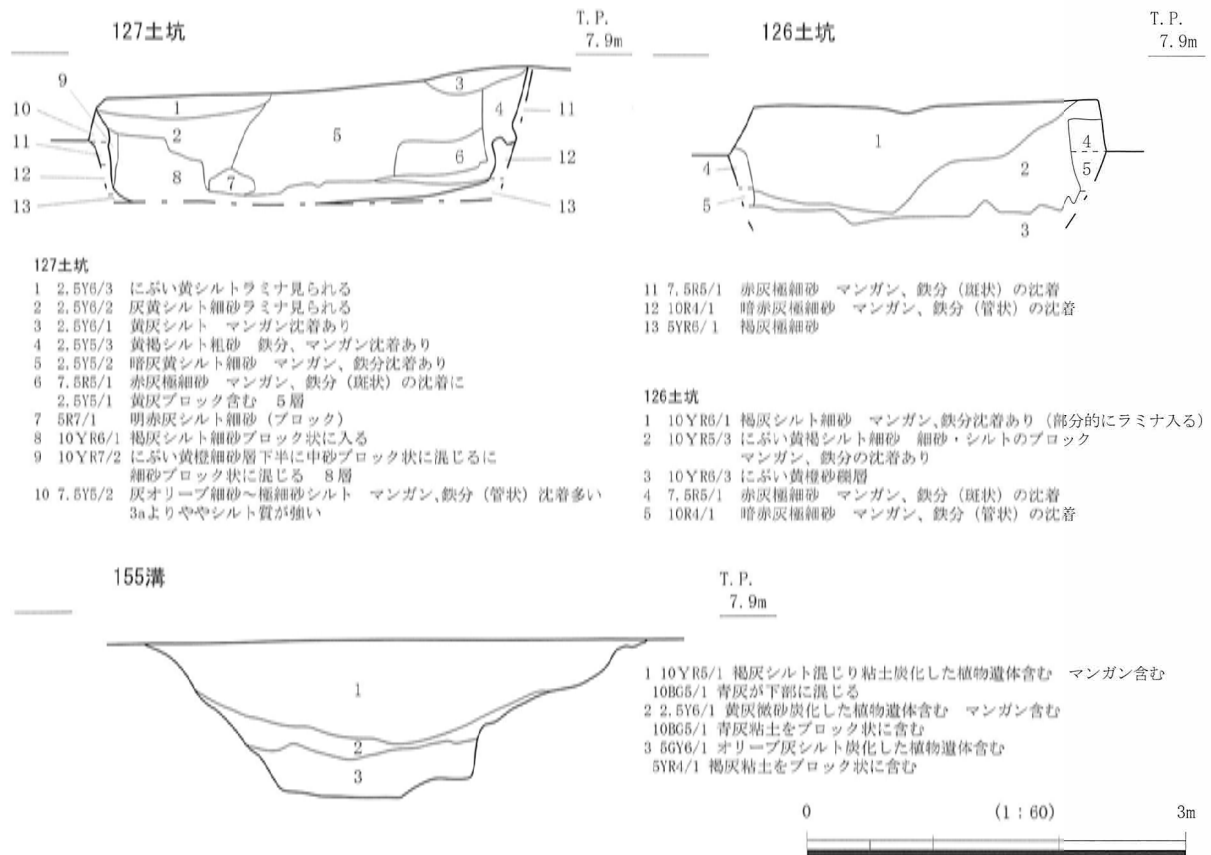


図180 127土坑・126土坑・155溝平・断面図

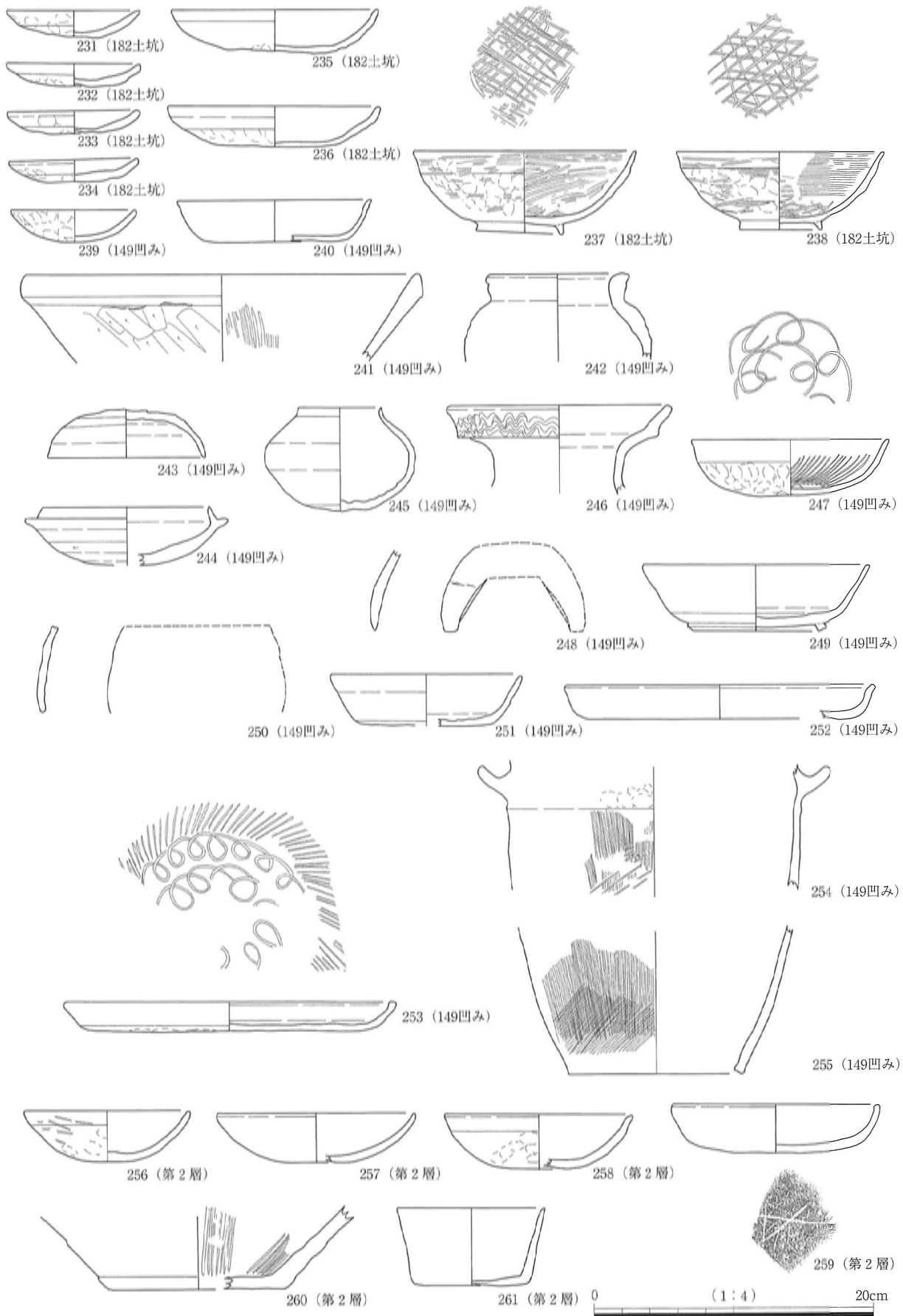


图181 182土坑・149凹み・第2層出土遺物

第3面 (図182~197 図版64~69)

第3面は、第2層を除去して検出した水田面で、第3層を作土としている。

水田面は、調査区北東隅と北西隅の自然堤防状の微高地、調査区ほぼ中央を南北に延びる153流路、調査区西半部を蛇行して走る161流路、調査区東半を南東から北西延びる187流路の間に広がる。

田面は砂層によって覆われているが、その状況は調査区ほぼ中央を南北に延びる153流路の、東と西では大きく異なる。153流路の西側では、田面を覆う砂層は薄く2~3cm程しか残っておらず、検出した畦畔の上部は上面からの耕作に伴う攪拌により失われている。このため、畦畔の高さは低く概ね、3~4cmである。

153流路の東半では、厚さ約50cmの砂層によって完全に水田面が覆われており、良好な形で畦畔を検出する事ができた。しかし、調査区南東隅では、田面を覆っている砂層の粒子が細かく極細砂からシルトのため、作土と誤認し誤って畦畔を削っている。

また、161流路の肩際では、砂層の堆積時に作土が流出しており畦畔の検出が困難であった。

水田面の高さは、153流路の西側ではT.P.7.5m前後、東側では高低差が大きくT.P.7.0~7.6mの等高線がまわる。

153流路の西側で検出した水田は東西方向の長地型の地割りで、南北方向の畦畔が北に対して東へ約18°傾いている。この状況は、上面の第2面で検出した畦畔とほぼ同じであり、第2面水田は第3面水田の地割りを踏襲している。

水口 (図182・184)

畦畔には、計7箇所の水口が設けられているが、水口には2つのタイプがある。1つは、畦畔を完全に切り、田面まで達しているもの。もう1つは、畦畔のほぼ半分の高さに削って、田面まで達していないものである。どちらも田面を覆う砂層が、内部に堆積しておりラミナも見られる。ここでは便宜上、前者をAタイプ、後者をBタイプと呼称しておく。畦畔13には、水口1・2が設けられているが、水口1はBタイプ、水口2はAタイプである。畦畔15にはAタイプの水口7が設けられており、畦畔16に設けられている2カ所の水口は、水口3がBタイプ、水口4がAタイプである。畦畔22に設けられている水口5・6は、Aタイプである。同一畦畔に、2種類のタイプの水口が設けられている理由は不明であるが、同一の水田区画に水口が2カ所設けられている場合は、AタイプとBタイプの組み合わせである。

大畦畔1 (図184 図版65-27)

大畦畔1は幅約2.5~1m、高さは約0.5mで、153流路の西肩に沿って造られており、流路の土手(堤防)の役目を果たしている。大畦畔1の断面を見ると、作土となっている第3層の下層にある第4層の上に盛られており、第4層の上層には、耕作に伴う攪拌の痕跡が見られない第3層に相当する層が見られた。盛土は、第3層と

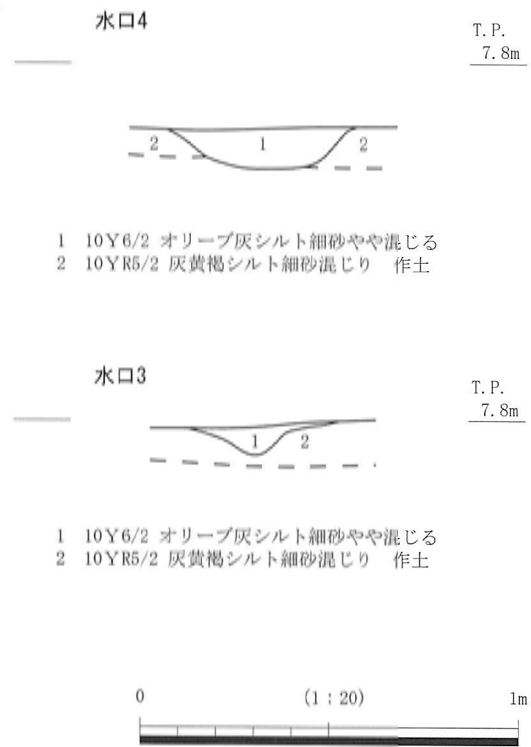


図182 水口3・4断面図

第4層のブロック土である。また、第5層の下層には良く締まった細砂層や砂礫層が見られるが、盛土内には、これらのブロックは見られなかった。

大畦畔1が造られている153流路は、ほぼ田面で検出された畦畔と並行して直線的に南北に流れている事から人工的に造られた水路の可能性が指摘できたが、検出した水路の幅・深さ共に規模が大きいため、その可能性は低く考えられた。また、大畦畔1を造るためと、153流路を掘削して出される土を処理するために、掘削された土を盛土に利用したと考えれば、当然、第5層の下層の堆積している良く締まった細砂層や砂礫層が混じるはずであるが、盛土内には、第3層と第4層のブロック土のみで、良く締まった細砂層や砂礫層は見られなかった。このため、検出した153流路が、人工的に造られた水路と考えることは困難である。しかし、盛土に見られるように、第3層・第4層のみを掘削して、造られた規模の水路と考えれば、上述の点は解決する。つまり、153流路は本来、大畦畔1を水路の西肩とし幅数m、深さは第5層までを掘削して得られる深さの規模の水路と想定される。それが、大規模な洪水と共に運ばれた土砂によって、本来の水路は削られ、今回検出した153流路となったと考えられないであろうか。また、この洪水によっても153水路の東側は完全に土砂によって埋没し、大畦畔1の北半では削られ、本来あったであろう、水路の東側の大畦畔も削られたと考えられる。

畦畔（図184）

畦畔14・16は、攪乱坑により大畦畔際では検出できなかったが、畦畔15と同様に大畦畔1に取り付いていると考えられる。

畦畔19は、遺存状態が悪く痕跡のみの検出であるが、161流路の南際にある凹みに沿って延びる畦畔17に取り付いている。凹みは、畦畔17から緩やかに161流路に向かって下がっており、この部分は下層の第5層が所々に見られた。これは、161流路に堆積している洪水砂によって水田作土である第3層が削られているためと考えられる。このため、本来この凹み部分にも水田面が広がっていた可能性も考えら



図183 土器3出土状況図

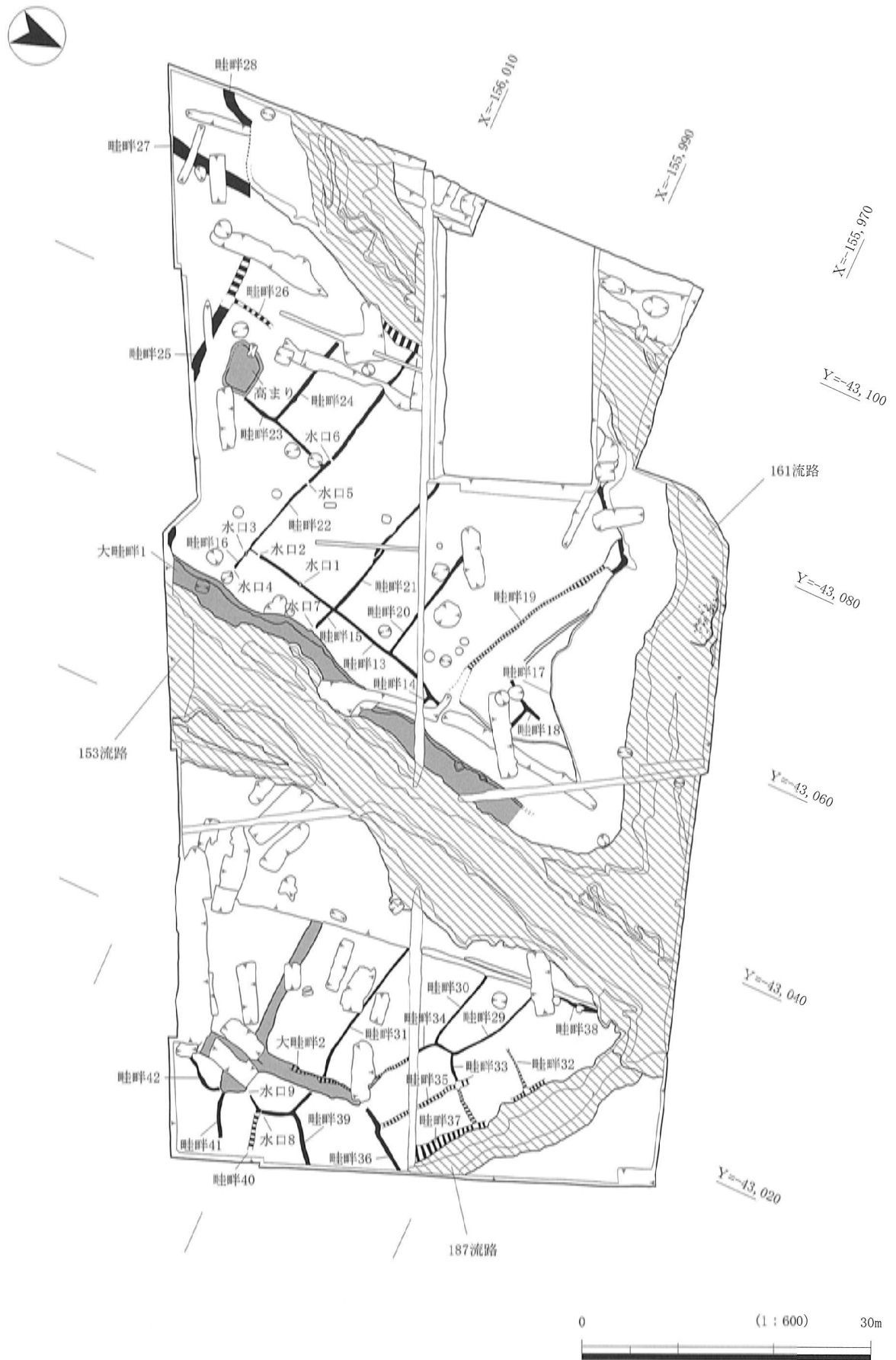


図184 第3面

れるが、凹みの端を畦畔17が巡り、田面との境を区切っていたと想定されるため、その可能性は低い。

畦畔19は、大畦畔1に本来取り付くと考えられるが、洪水砂により第3層ごと削られているため不明である。

153流路の東側で検出した水田は、大畦畔2と畦畔31で区画された部分が約T.P.7.5m、大畦畔2と畦畔30・34で区画された部分が約T.P.7.45m、畦畔29・30・34で区画された部分の高さが約T.P.7.4mと、周辺の水田区画よりも19~20cm高くなっている。この部分から、畦畔32・33・38・36・39・41・42が放射状にのび、これに直交する畦畔35等で区画されている。この水田のあり方は、微地形を生かした小区画水田を示している。これは、律令期の条里区画水田とは大きくかけ離れており、この時期の水田経営を考える上での貴重な資料であろう。また、畦畔37は、187流路の西方に沿って造られており、水が187流路へ逃げないように土手の役目を果たしている。

大畦畔2は、幅約1.7~2.0m、高さ約0.3mである。大畦畔2はL字状に延びるもので、盛土は黒褐色の細砂が混じるシルトである。また、南北に延びる部分では、若干上面が削れ、残りは悪いものの、縁に沿って畦畔状の幅30cm前後の高まりを検出している。

微高地上の区画の田面直上から土器がほぼ1個体出土している。(図197—442)この土器は、土師器の取手付甕で8世紀後半~9世紀初頭の時期に当たる。洪水砂に含まれて、流されてきたと考えても、この水田が埋没した時期の1点を示すと考えられる。(図183)

この事から153流路の西側で検出した水田も基本的には、同じ153流路内を削りながら堆積した洪水砂層で覆われていると考えられるので、第3面の水田は奈良時代末・平安時代初頭に洪水砂により埋没したものであろう。

153流路 (図184・189・190)

153流路は、前述のように洪水砂層によって削られており、当時の形は保たれておらず、本来はもっと幅が狭く、深さも浅い水路であった可能性が高い。

153流路内に堆積している洪水砂層中からは、多量の遺物が出土している。出土した遺物の大部分は、肩際付近の、主に洪水砂層上部からのものが多くを占める。(図189・190)

出土した遺物には瓦器小皿、黒色土器A類、須恵器、土師器、弥生土器が出土している。瓦器小皿、黒色土器A類は時期的にやや新しいが、その他の遺物は8世紀末~9世紀初頭のもものが大半を占める。流路の底からは、276土師器の鍋、278生駒西麓産の胎土を持つ羽釜が出土していることから、洪水砂層上部と、底でも時期差はほとんどなく、8世紀末~9世紀初頭に一気に埋没したと考えられる。出土遺物の中でも、多く見られる器種は、土師器の甕である。この中には、人面墨面が見られるものが2点ある。302は、残存率が1/2のため、本来対になっている人面の片一方しかないが、正円に近い目が描かれた顔である。304は、残存率が2/3あり、2面對になっている人面墨面が確認できる。墨書土器では279がある。279は、完形の皿で底部に「東」と書かれている。

295は完形の土師器の取手付短頸壺で、外面の剥落が激しいが、全面に丁寧に細かいミガキを施している。高台のやや上に直径5mmの穿孔が見られる。294も底部に穿孔が見られる、土師器の取手付甕である。この他、特殊な遺物として298・299・300の模型竈と297の模型甌がある。模型竈はいずれも、底を持たない竈である。外面は荒いナデで仕上げられており、粘土紐の継ぎ目が部分的に見られる。297の模型甌は、取手を持たず鉢の形態を持つが、底部に焼成前の穴が開けられており、甌を模していると考えられる。人面墨面土器やミニチュア竈・甌など祭祀に関わる遺物出土していることから、水田と153流路

が共に洪水砂によって埋没した時期を前後とする頃に、人面墨画土器やミニチュア甕・甗に関わるような祭祀を行ったと考えられる。

161流路 (図184～186・191～197 図版65-27・67)

161流路は、(その6) で検出している南側川 (遺構500・504) からの延長で、調査区西半を蛇行しながら、153流路と合流している。地形的に見て161流路は、(その6) 側が上流に当たるのであろう。

153流路と161流路の合流部分での断面観察では、153流路内の洪水砂層が161流路内に堆積した砂層を切っており、161流路がある程度埋没した後、153流路を埋没させた洪水砂層が堆積している。

161流路内に堆積している砂層は、上半部がラミナの見られる中砂から粗砂、下半部やや粒子が細くなり概ねラミナの見られる中砂から極細砂で、土器や木片、炭化物を含む。上半部の砂層は、田面を覆う砂層に対応しており、153流路内に堆積する洪水砂層と同時期であると考えられる。このため、第3面の水田面に対応する時期の、161流路は、ほぼ下半部の上面が底として対応するのであろう。

161流路の幅は、両肩を検出した部分で約9m、深さはこの部分で最大約1.4mを測る。

流路内の第3面の水田と対応するであろう上半部を除去し、さらに下層を掘削した所、土器溜まりを検出した。この土器溜まりは、161流路の北肩と考えられる部分から流路内へ向かっての斜面地で検出している。ここから出土した土器の多くは煤が付着しており、周辺には炭化した木片や、直径1～3cmの焼土塊が散乱している。地面には焼けて赤くなった部分が見あたらないため、別の場所から運んできてここへ廃棄したと考えられる。

土器溜まりから出土した土器には須恵器の杯身、杯蓋、脚付甗、杯、高台付杯、宝珠つまみ付杯蓋、鉢、高台付壺、提瓶、横瓶が、土師器では、杯、皿、高台付皿、椀、鉢、短頸壺、甕、取手付甕、鍋、長胴羽釜、甗片がある。これらの遺物は、ほぼ8世紀中頃のものである。(図191・192-335～350、図193～197-428～441)

土師器の杯335～342は、内面に一段の放射線状暗文と、その上に一段の螺旋状暗文が、見込み部分には螺旋状暗文が施される。外面の調整は横方向のミガキである。8世紀中頃、平城宮式でⅢ段階に属す

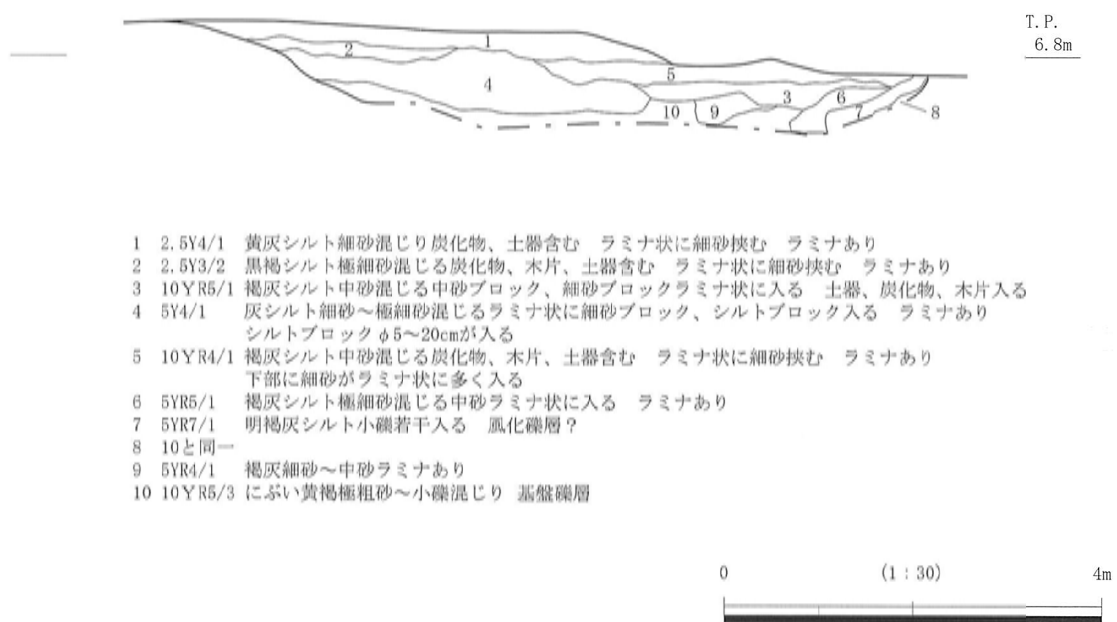


図185 161流路断面図

Y = -43.070



Y = -43.074

X = -155.970

T. P. 6. 7m

- 1 10YR2/1 黒 シルト混じり 炭 (炭屑)
焼土ブロック 2.6GY6/1 オリーブ灰
ブロック (δ1~2cm) を含む
土器、木、種子等を含む
- 2 10GY2/1 緑黒 シルト M・S含む
2.6GY6/1 オリーブ灰 ブロック含む 炭化物を含む
部分的にクミナが見られる
- 3 10YR4/1 褐灰 V・C・S~シルト クミナが見られる
- 4 10YR7/2 に近い黄褐色 M・S~F・S クミナが見られる
- 5 7.5YR5/1 褐灰 シルト 炭化物含む
- 6 2.6GY6/1 オリーブ灰 シルト~F・S (基盤層)

0 (1:30) 2 m

図186 161流路内土器だまり平・断面図

るものである。

187流路 (図184・187・188・201・192 図版67-32~69-35・95)

187流路は、調査区北東隅の微高地に沿って、南東から北西へ延び153流路に合流する。地形的に見て水は、南東から北西へ流れていたのであろう。153流路との関係は161流路と153流路との関係と同様で、153流路内の洪水砂層が187流路内に堆積した砂層を切っており、187流路がある程度埋没した後、153流路を埋没させた洪水砂層が堆積している。187流路は、幅約6m、深さは田面からでは0.3mであるが、調査区北東隅の微高地から流路底までの比高差は0.8mを測る。

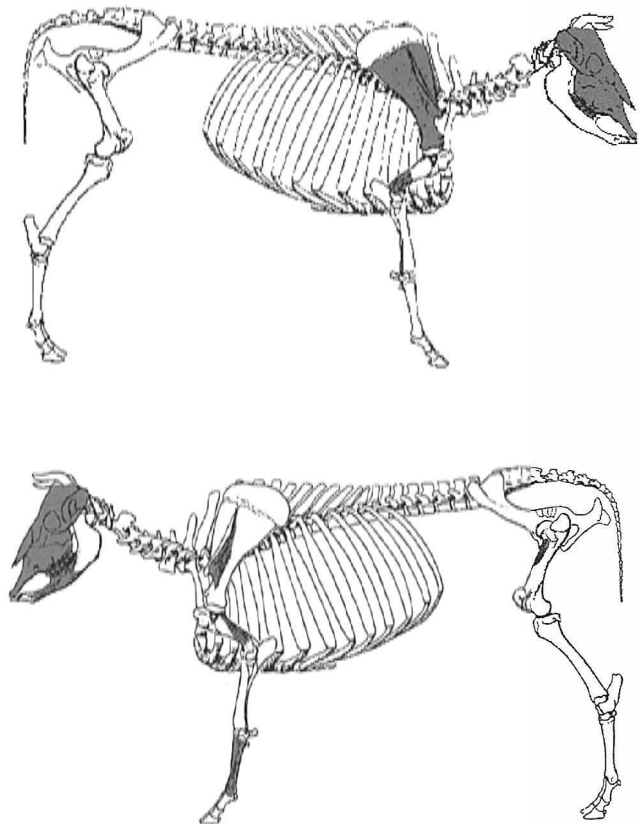
187流路内に堆積している砂層を除去すると牛骨と土器が出土した。牛骨は、流路に沿って長さ約9mに渡って、分散して出土している。出土位置は頭骨と中足骨が一番下流側から出土しており、上流に向かって下顎骨の一部、ややまとまって肋骨・脚部・下顎骨の一部・脊椎・肩胛骨の一部、四肢骨の一部、肩胛骨の一部の順である。ややまとまって出土している肋骨・脚部・下顎骨の一部・脊椎・肩胛骨の一部の周囲には、直径約5~10cmの拳大程の小石がみられる。流路内に堆積している砂層からは、ほとんど出土していない位の小石で、水流の関係で偶然に集まったのか、意図的に集めたのかは不明である。また、牛骨の周囲から土器も10点出土している。(図192—333・334) 333の土師器杯は、内面に放射線状暗文が一段、見込みには螺旋状暗文が施される杯で平城宮式Ⅲ、8世紀中頃のものである。

334は須恵器杯である。この他にも、須恵器杯、鉢、土師器杯があるがいずれも小片である。

牛骨や土器の出土した高さは、ほぼ揃っており、この位置が、牛骨や土器が廃棄または祭祀に伴う行為を行った8世紀中頃の、187流路底に近いと考えられる。

この8世紀中頃の時期は、流路161の土器溜まりと同時期である事から、187流路と161流路は、水田が埋没した8世紀末~9世紀初頭の時期よりも若干古い。このため、水田が埋没したのは8世紀末~9世紀初頭であるが、8世紀中頃にも水田が営まれていた可能性が高い。

また、187流路と161流路が同時期の遺物が出土している点や、161流路は蛇行しながら(その6)調査区から延びている点を考えると、本来187流路と161流路が同一遺構であった可能性も考えられる。



■ 出土した主な部位

図187 出土牛骨の部位



图188 187流路内牛骨平·断面图

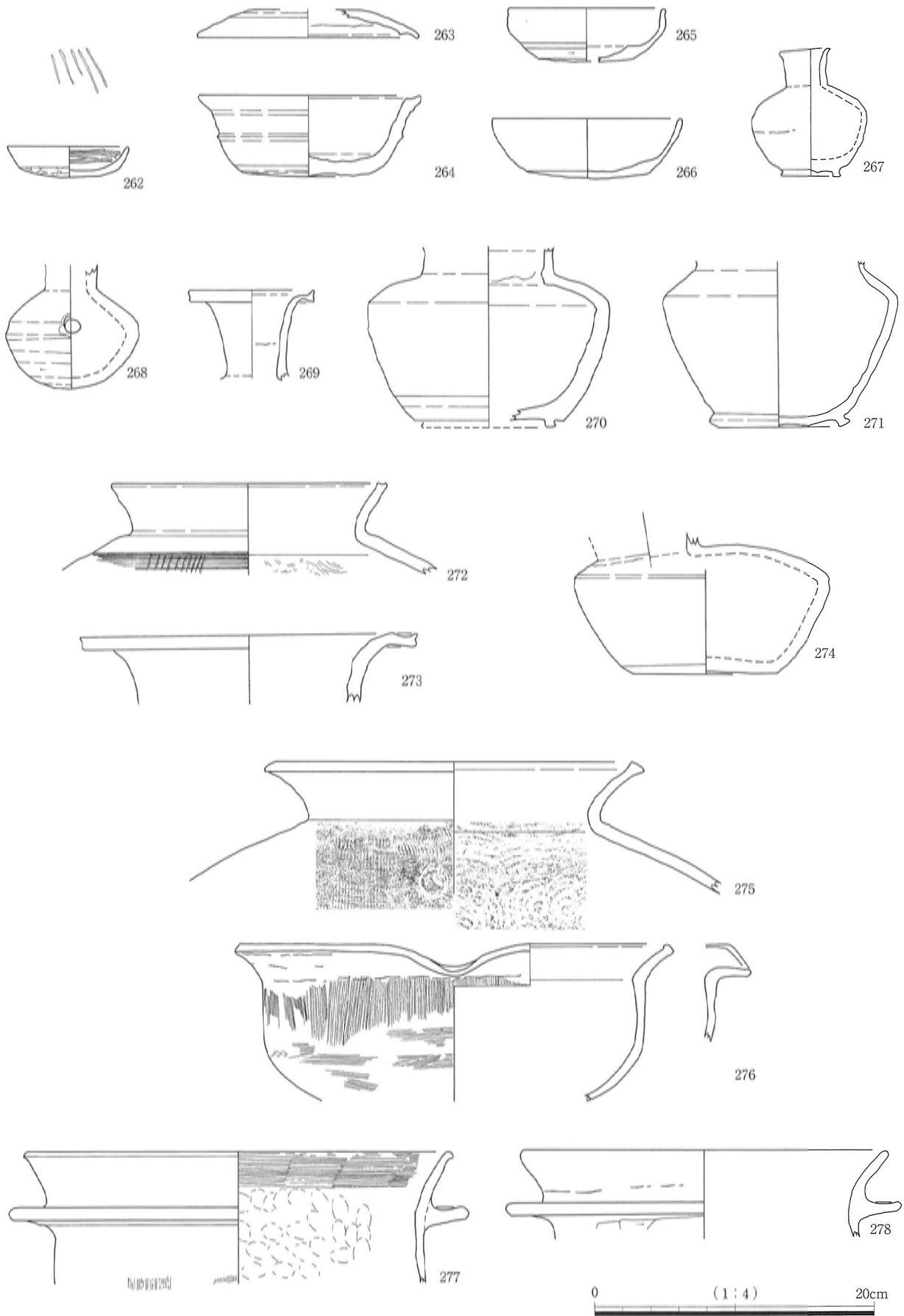


図189 153流路出土遺物

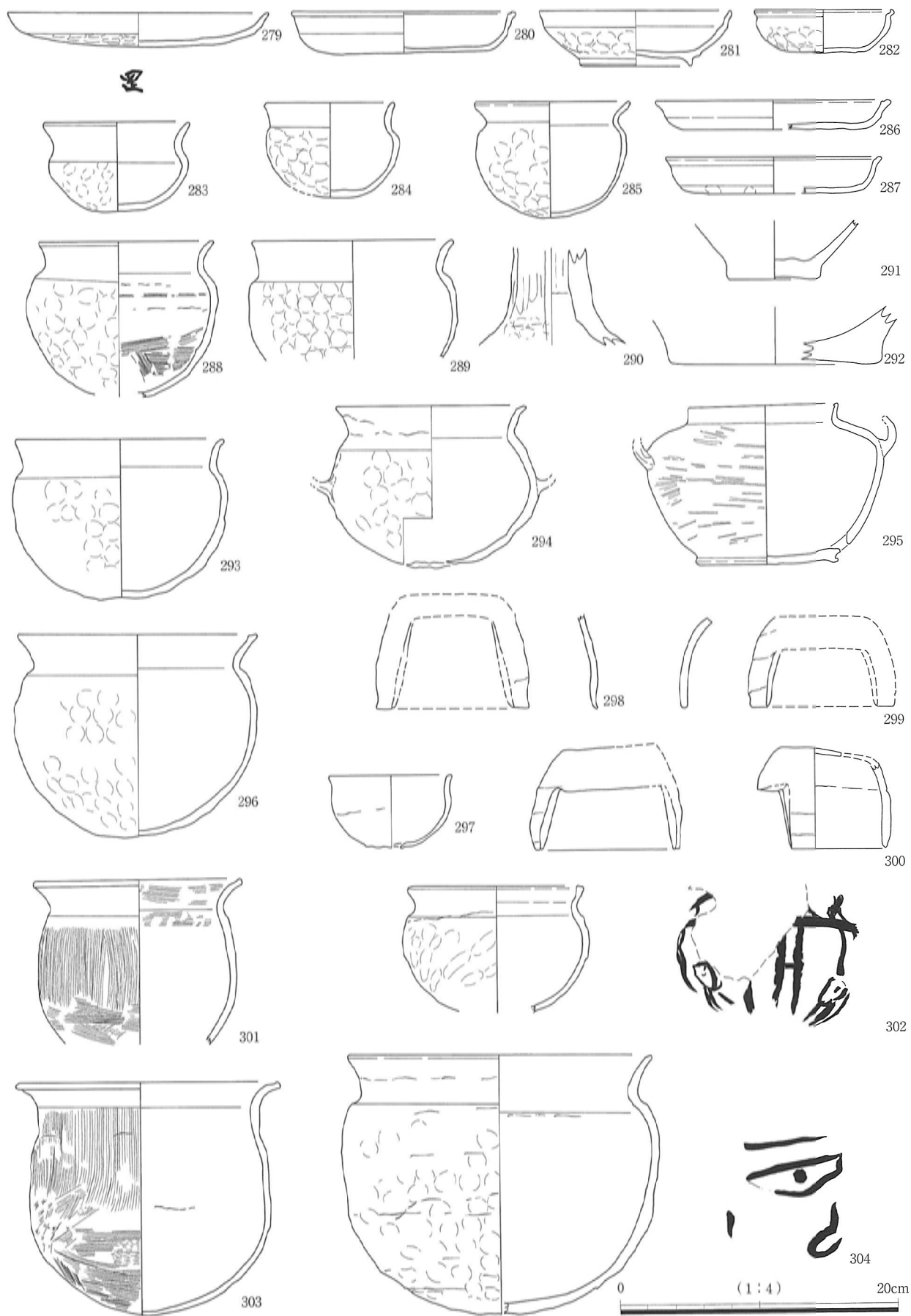


图190 153流路出土遺物

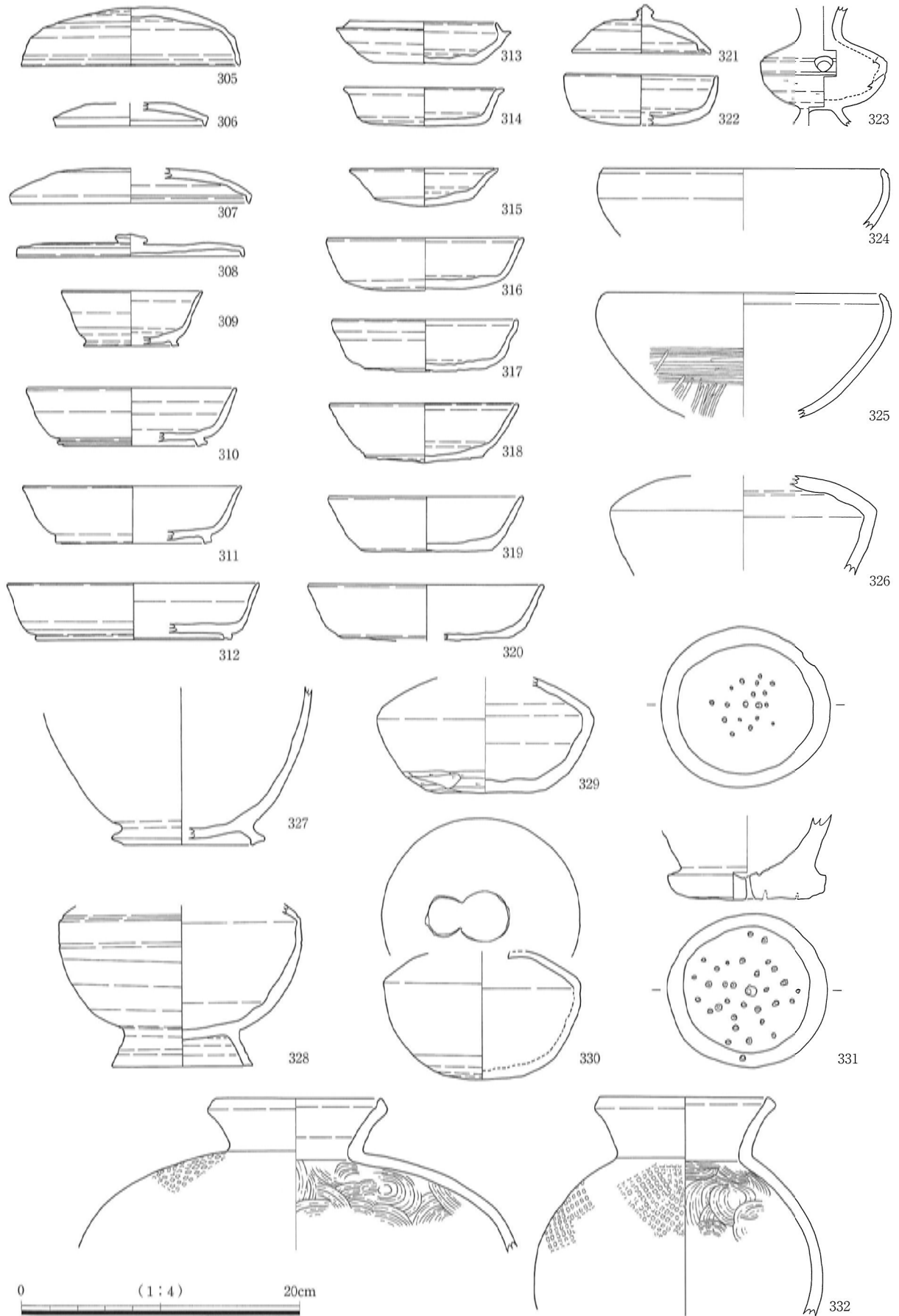


图191 161流路出土遺物

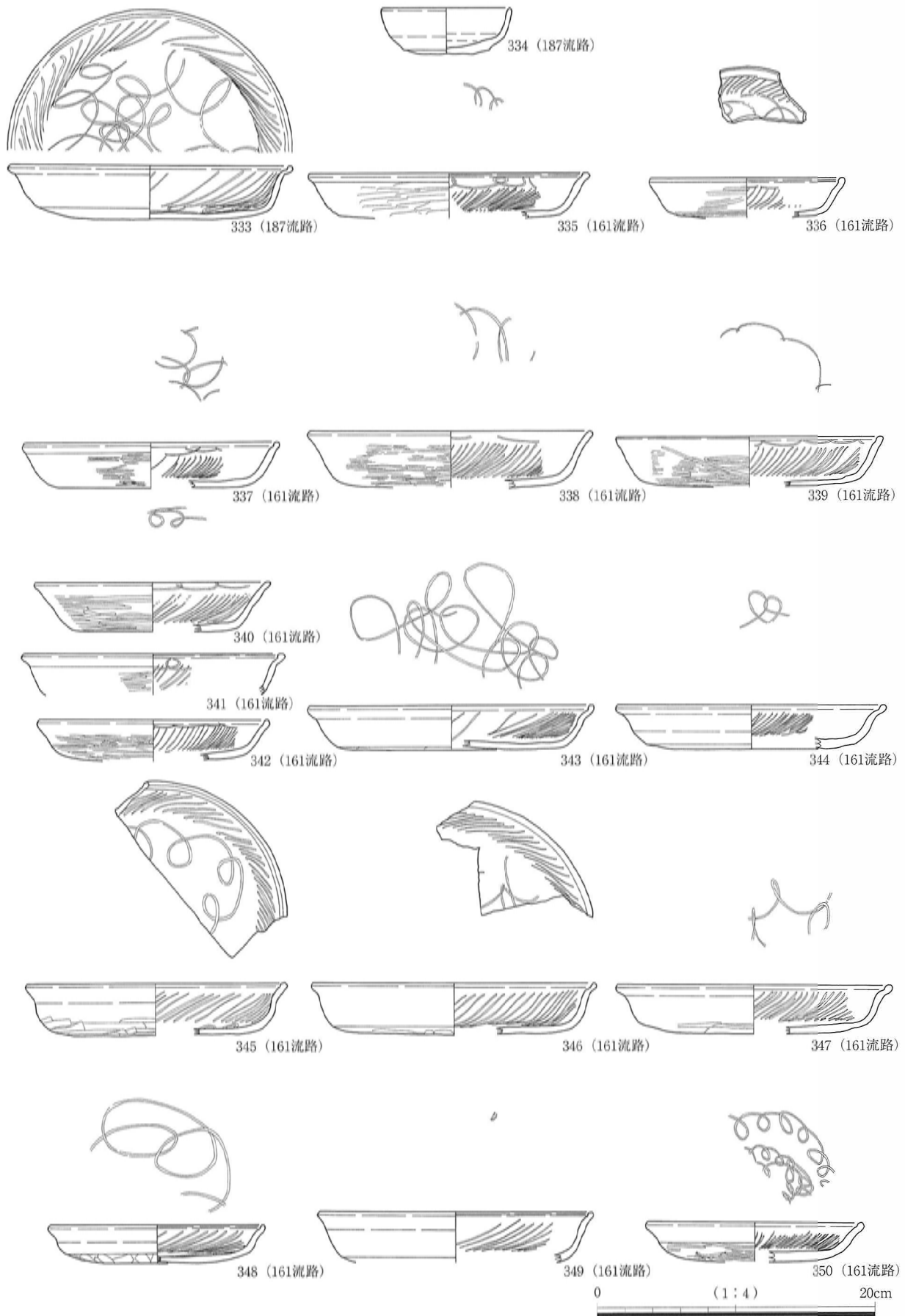


图192 187流路·161流路出土遺物

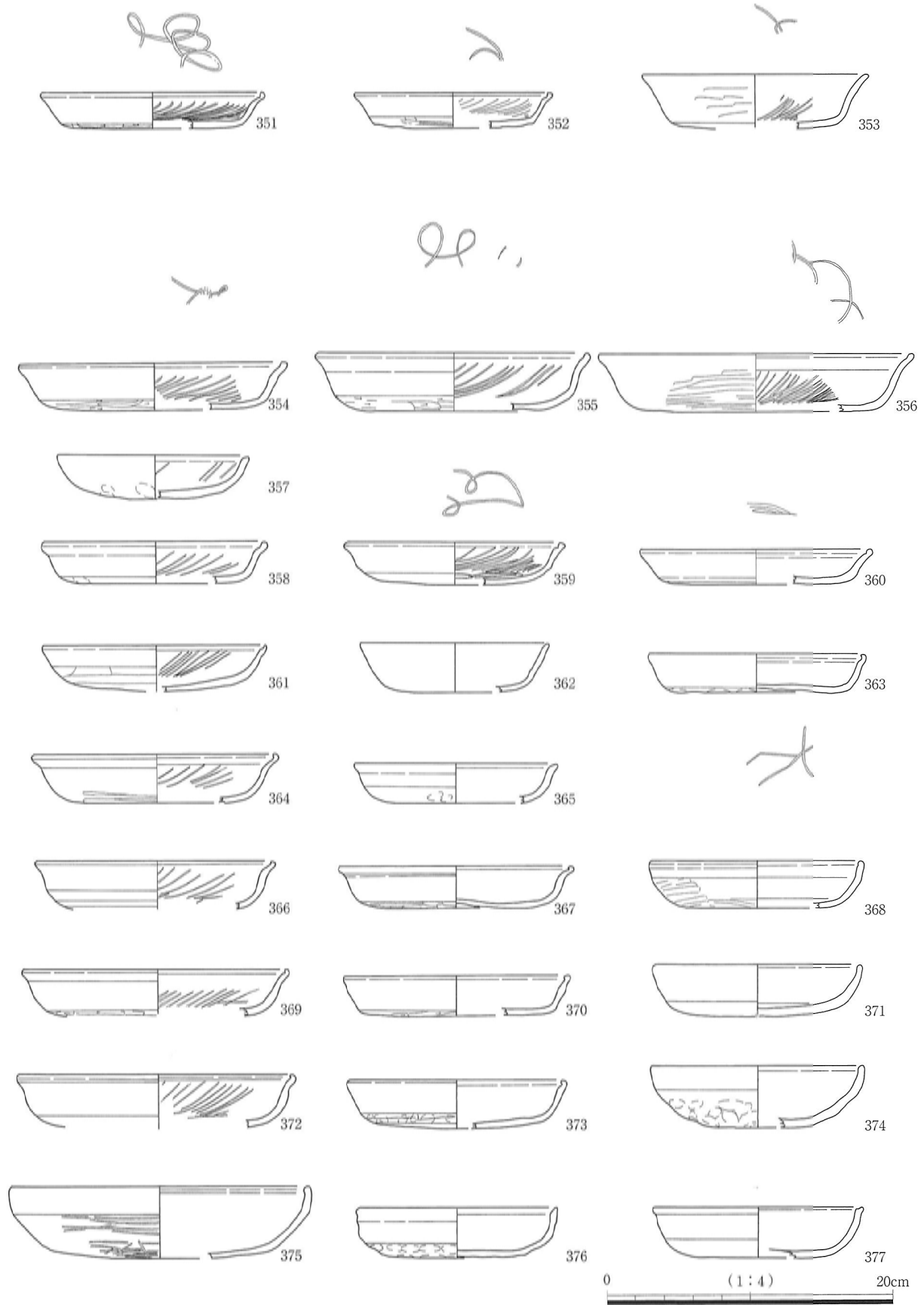


図193 161流路出土遺物

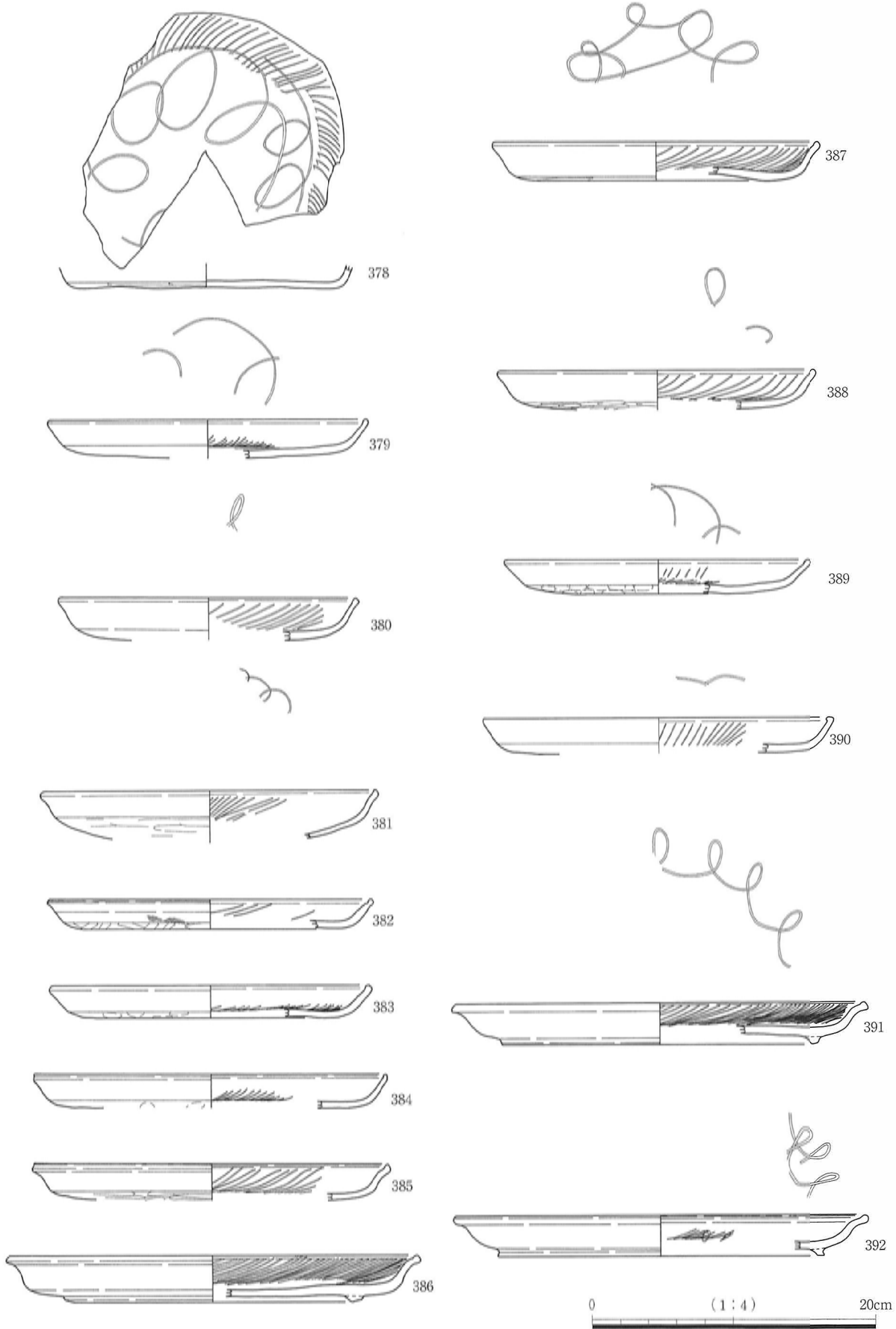


图194 161流路出土遺物

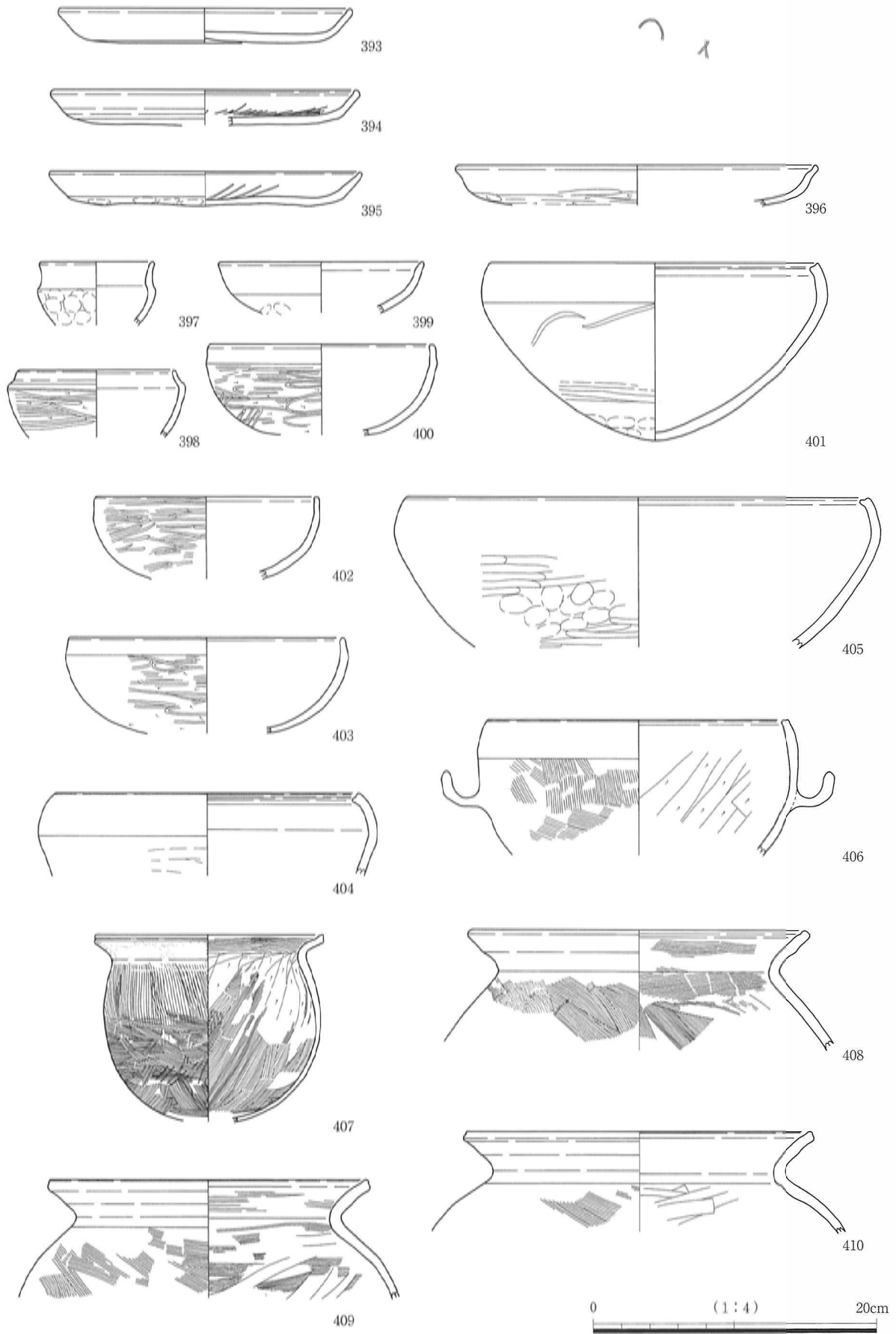


図195 161流路出土遺物

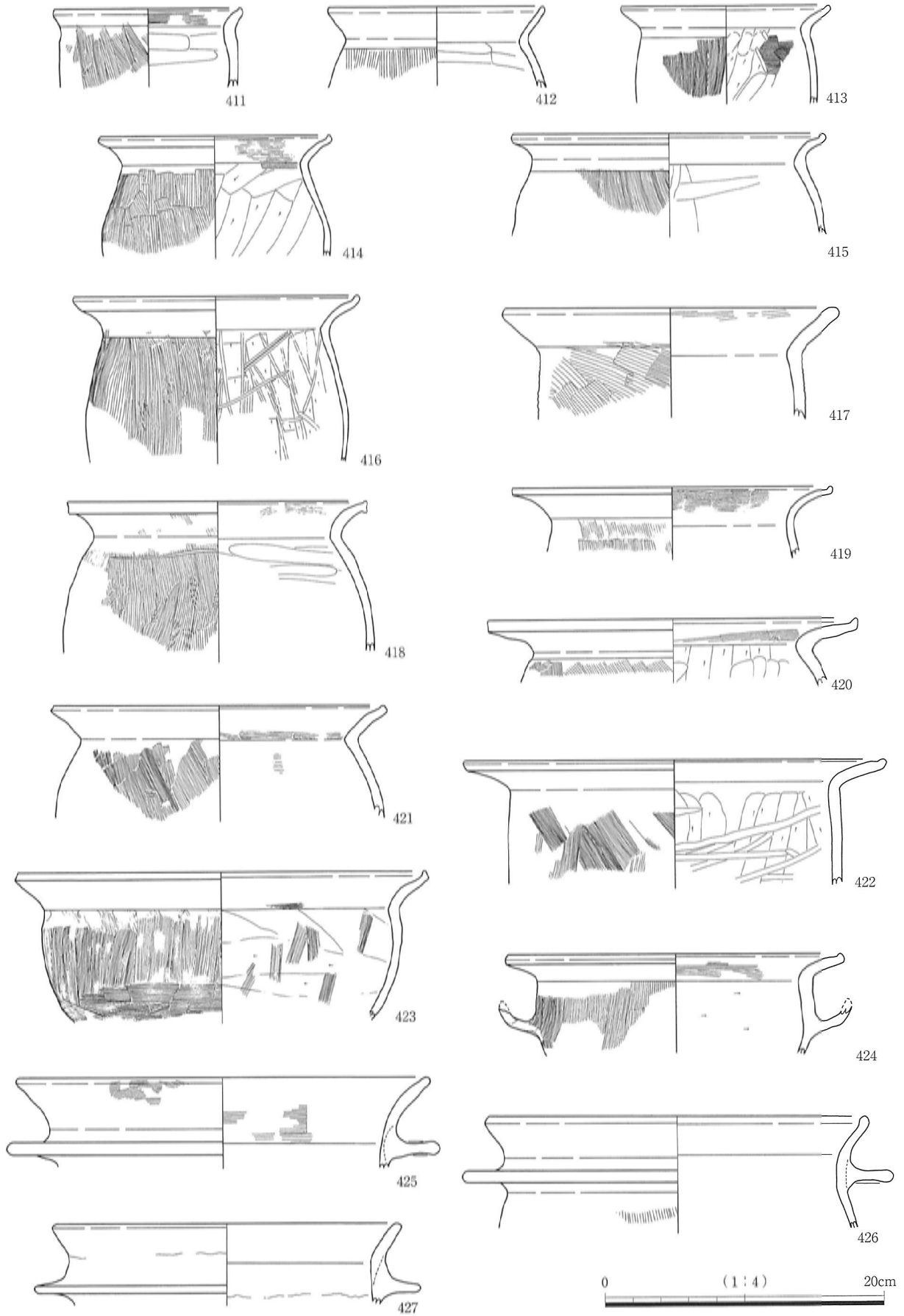


图196 161流路出土遺物

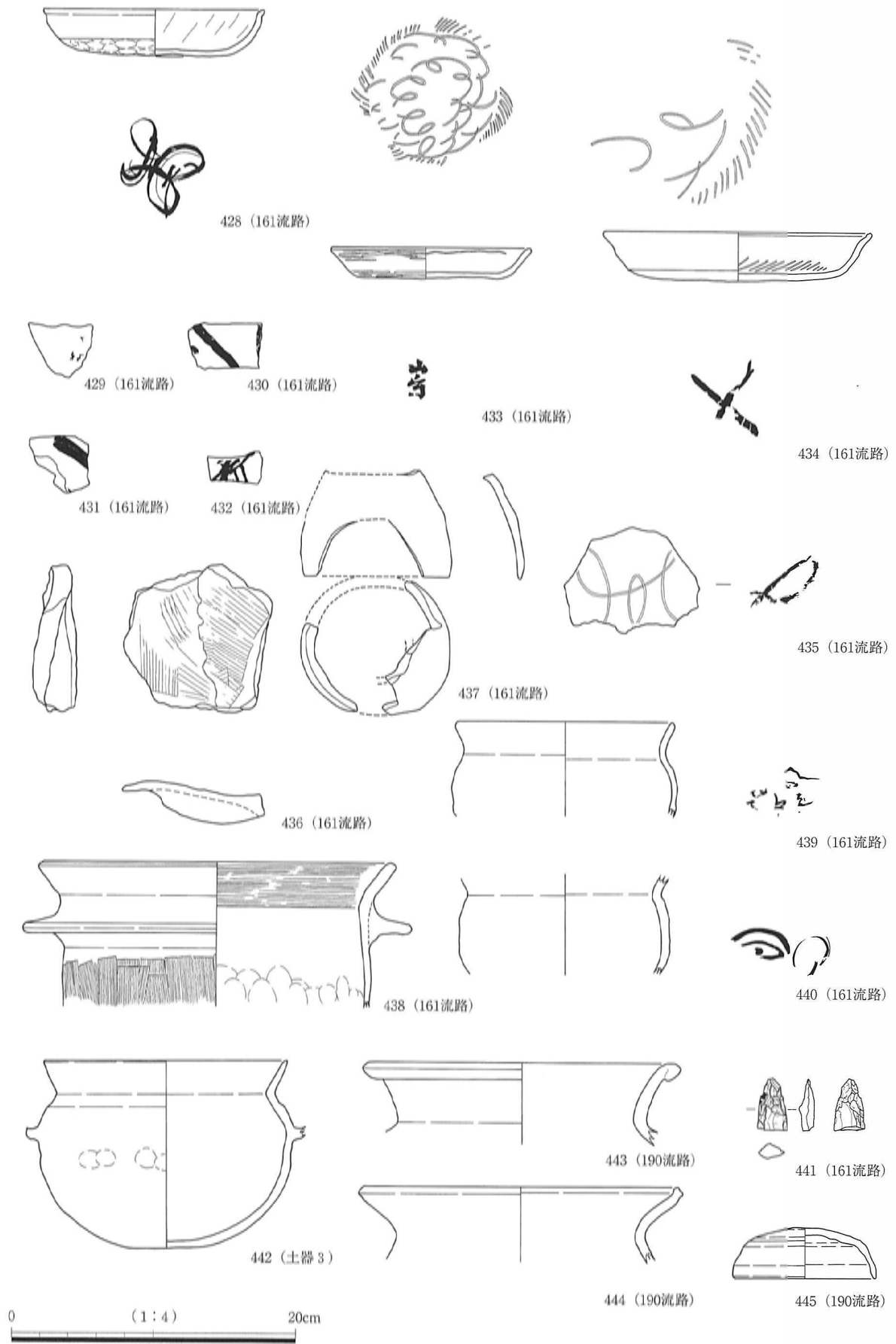


図197 161流路・190流路出土遺物・土器3

第4面 (図198 図版69-36・70-37)

この面は、第3層を除去して検出した遺構面である。第4面の地形は大きく見ると、第3面で検出した(その6)調査区から蛇行して延びてくる流路に向かって、調査区南から北へ向かって緩やかに下ってゆく地形が見られる。調査区南側ではT.P.7.5~7.6m、蛇行する流路際ではT.P.7.2~6.8mを測る。また、調査区南西隅には、T.P.8.0m前後の微高地が存在している。

この面で検出した遺構は、第3面時の畦畔が転写されたものや、同様に第3面の水田を造ることによってできた段差のみである。いずれも、第3面の水田形成の過程でできたものであり、この面に帰属する遺構ではない。この面では、第3面で検出した水田開発のための行為、特に開発当初に遡るような溝等の遺構の検出に努めたが、検出することはできなかった。

第4層から出土した遺物は、土師器や須恵器の小片があり、時期的には古墳時代のものが多く見られる。この他、円筒埴輪片やサヌカイト片も出土している。円筒埴輪片は調査区西半付近から出土しており、サヌカイト剥片は主に、調査区南側の第5層が露出している部分からの出土である。

第5面 (図199 図版70-38・39 71)

この面は、第4層を除去して検出した遺構面である。5面は、大きな凹みが重なり合って複雑な地形を示すが、大きく見れば4面と同様に南側から北へ向かって緩やかに下っている。南側ではT.P.7.5前後、北側ではT.P.7.0m前後を測る。

この凹みは、平面観察で先後関係がはっきりとわかるものもあるが、多くはぼんやりとした輪郭を示し、断面観察でも先後関係が明確でないものがある。凹み内には、4層系の層が堆積しており、凹み内に徐々に土砂が堆積し、土壌化しながら凹みを形成し、埋没させ平坦化していったのであろう。この面では凹みの上から掘り込まれている193溝を検出している。この193溝は、この面に帰属するものではなく、第4層が形成される過程で掘り込まれたものである。

193溝 (図199・200・202 図版71-40)

193溝は、東西に蛇行する溝で、検出延長は約55m、幅は約1mで、深さは25~40cmを測る。埋土は、褐灰シルト細砂~中砂混じりで第4層や凹み埋土と良く類似している。場所によって異なるが、埋土の下半にラミナが見られる層が堆積している。溝内からは、土師器底部が出土している。(図202-448)

190流路 (図199・201 図版71-41)

調査区東部で検出した190流路は、第5面を追って行くことで検出できた流路である。第3面で検出した187流路は、この190流路が河川堆積物で徐々に埋まっていった結果できた流路である。幅は広いところで約13m、狭いところでは約8mを測る。深さは、流路西側肩から底までは約80cm、流路東肩からでは約1.4mを測る。流路東側の肩は、水勢により抉られた形状を示す。流路内からは、187流路埋土の掘り残しと考えられる部分から遺物が出土したのみである。(図197-443~445)

192土坑 (図199・202・203 図版71-41 72)

192土坑は、190流路西側部分で底部分のみを検出した。検出した部分は、一辺約1mの隅丸方形の平面形を呈する。深さは、一番残りの良い部分で30cmを測る。埋土は、上層が青灰中砂に黒褐粘土ブロックを含む。下層は青灰中砂である。埋土に第4層系の土である黒褐粘土ブロックが入っていることから、192土坑は、第4層形成時に掘り込まれた土坑であると考えられる。

土坑内からは、弥生時代後期の広口壺2点と長頸壺1点がほぼ完形で出土している他、木片が出土し

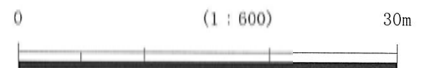


図198 第4面

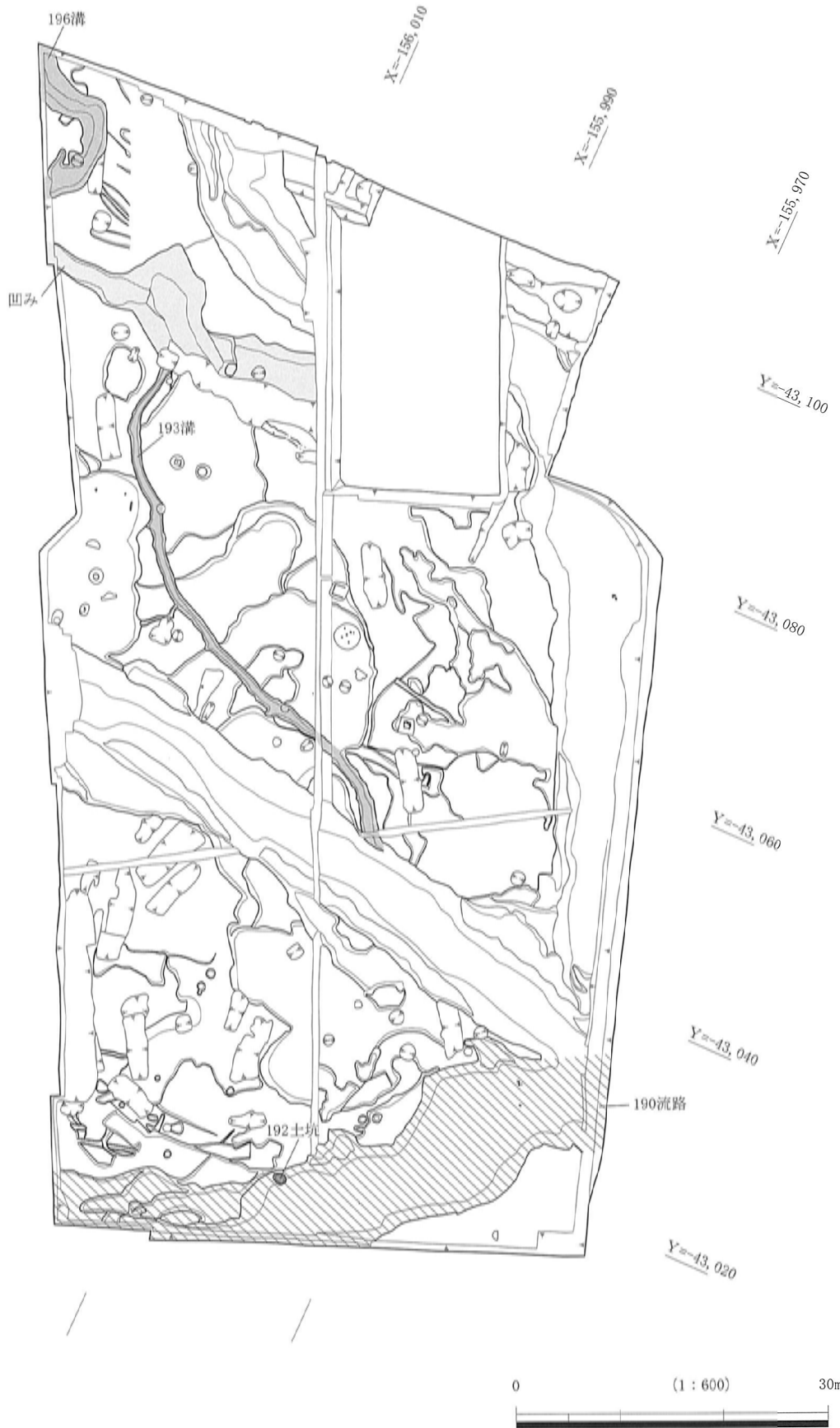


図199 第5面

ている。(図202-449~451) この土坑と出土遺物から、少なくとも第4層の形成時点に弥生時代後期の遺構面が存在する事が言える。調査区西半部では、東西方向の溝状の凹みと、調査区南西隅から円を描くように調査区外へ延びる196溝を検出している。いずれも埋土は第4層と区別はつかず、第4層を掘り下げて第5面を検出した際に、確認できた遺構である。溝状の凹みの底からは、6世紀頃と考えられる岩見型盾の破片が4点と、靱形埴輪片1点出土している。196溝からは、布留式期の小型丸底壺が1点完形で出土している。(図202-447)

第5層から出土した遺物は土師器や須恵器の小片があり、時期的には古墳時代~弥生時代のものである。この他、サヌカイトの石鏃や剥片が見られた。(図202-446・452)

また、この面の凹みからは埴輪片が出土しているが、第1・2層中や、流路内からも埴輪片が出土している。いずれも小片であり、全体像が確認できる個体はないため、主な埴輪の写真に掲載し、埴輪片の出土遺構と層位、種類について一覧表を掲げておく。

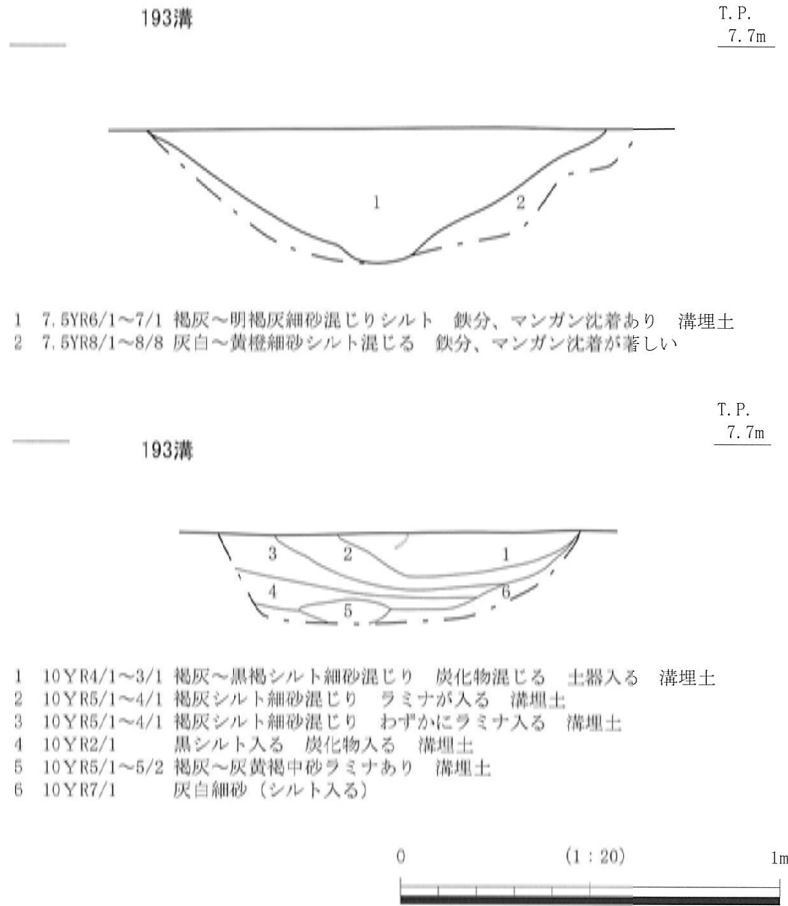


図200 193溝断面図

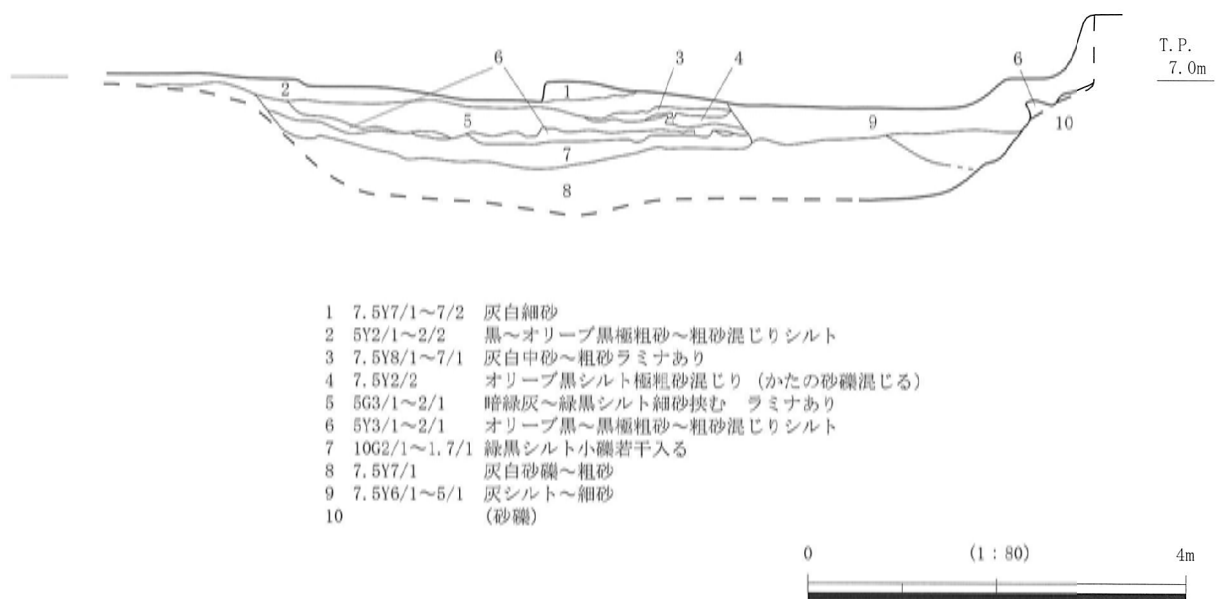


図201 187流路・190流路断面図

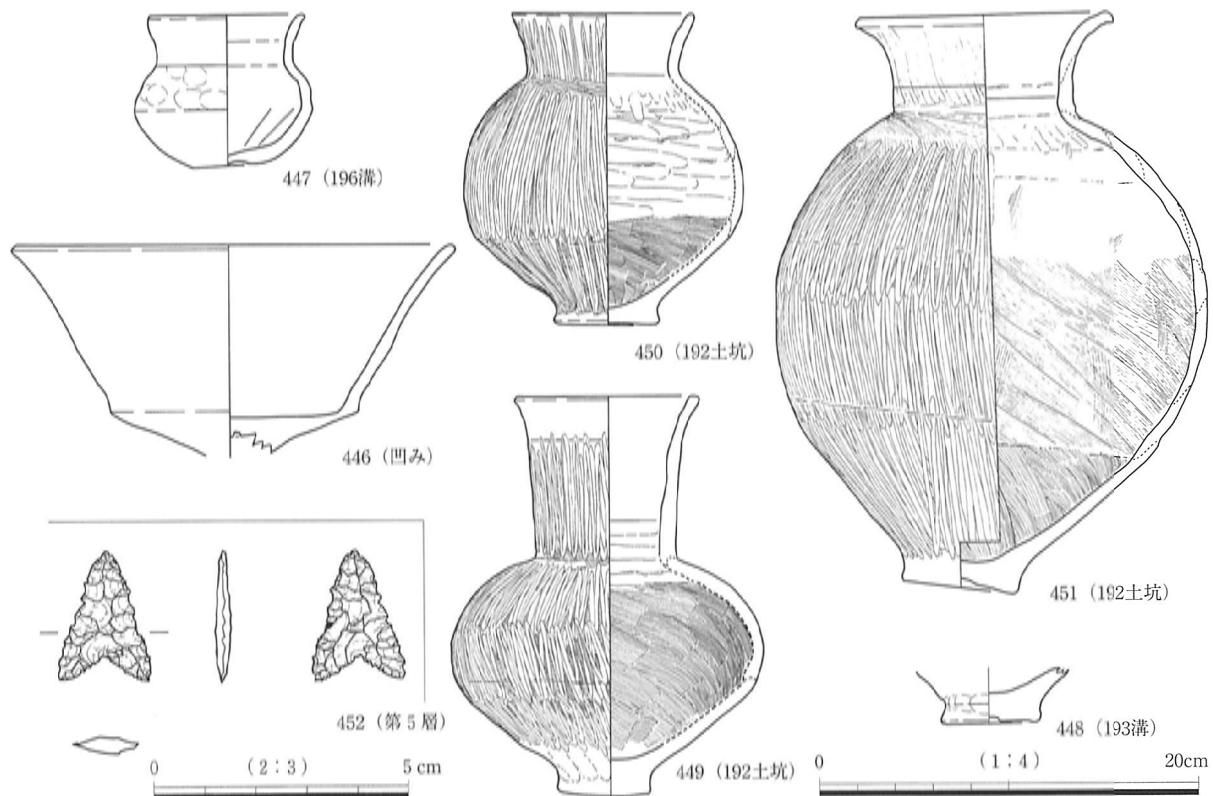


图202 192土坑・193溝・196溝・凹み・第5層出土遺物

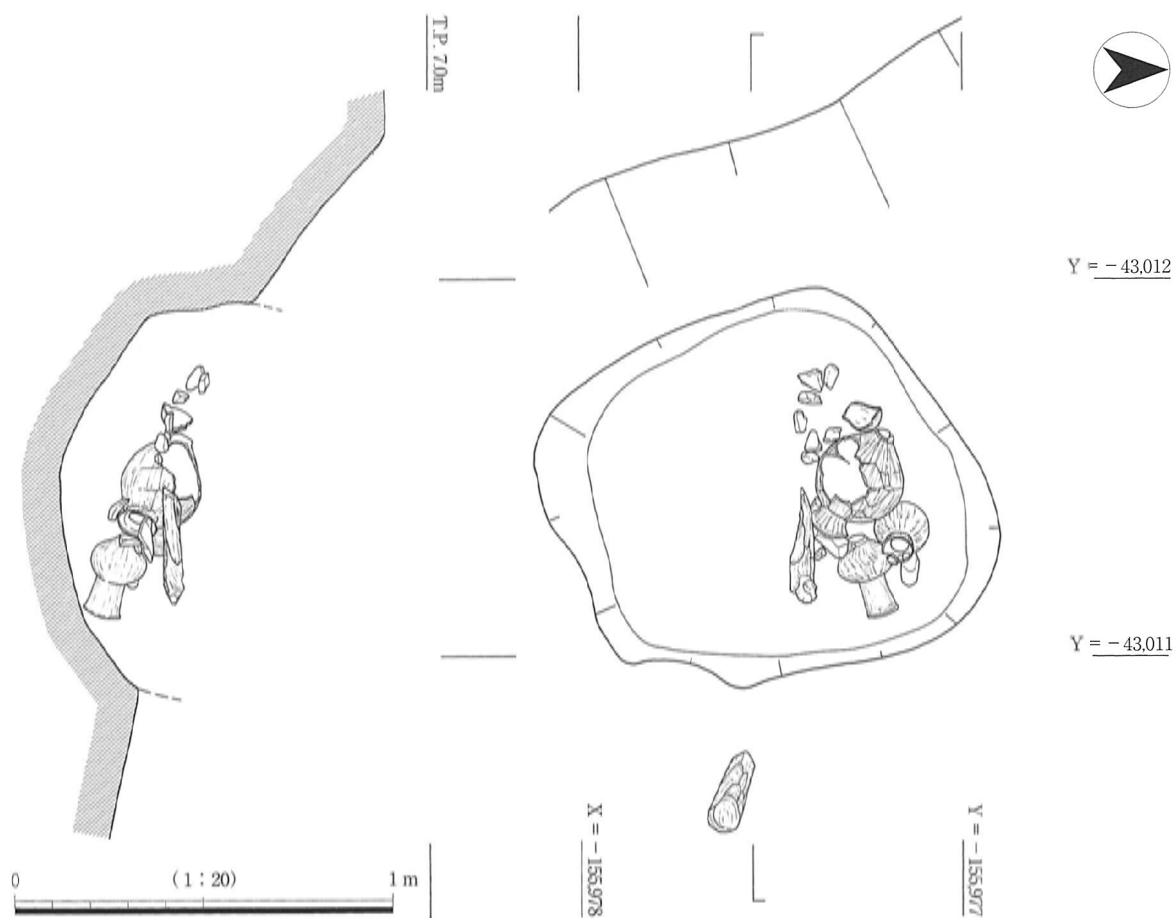


图203 192土坑内土器出土状況図

4 小結

以上、(その7)で検出した遺構面・遺構について述べてきた。ここでは、本文中に記述した、遺構面・遺構について整理し、まとめておきたい。

(その7)が位置する場所は、中位段丘面に接しながらも旧西除川による沖積作用が大きく働いており、基本層序でも述べた通り河川堆積物とその土壌化・作土化を繰り返しながら地層を形作っている。

そのため、遺構面の検出にあたっては、作土化を免れた河川堆積物である、いわゆる砂層を鍵層として第1面から第3面の検出を行った。第4・5面に関しては、土壌層の連続堆積であるため、ここでは明確な土質・色調等を層境の基準とした。

第5面とした、褐色極細砂を基調とする第5層上面では大きな凹みが重なり合っ出来た、複雑な地形を検出している。この面で検出した凹みの埋土は、全て第4層系の暗赤灰極細砂～シルトである。

この凹みは、第5面の凹凸が反映され、第4層が形成されてゆく過程で形成された遺構であり、第5面に帰属する遺構ではない。第4層や凹み埋土の色調や土質から見ると、湿地の状態を示していると考えられる。この湿地状の凹凸がある程度平坦化された状態が第4面であるが、この面は上層の第3層上面からの耕作に伴う攪拌で、上部は削平され本来の姿を保っていない。

この第4層の形成過程のいずれかの段階に、弥生時代後期～古墳時代に対応する面が含まれると考えられる。これは、第5面で検出した196溝から出土した布留の小型丸底甕や、192土坑から出土した弥生時代後期の甕・壺から言えよう。なお、196溝も192土坑も凹みと同様に第5面で検出はしているが、第5面に帰属するものではなく、第4層形成時の一時期に作られた遺構である。この事は、凹みと同様に、埋土が第4層系であることと言える。

また、可能性としては、飛鳥・奈良時代前半もこの第4層形成時の一点にあたる可能性が考えられる。

この第4層を母材とした層が第3層である。第3層は作土層であり、上面ではかなり良好な形で水田を検出している。水田は、この面を覆う河川堆積物から出土する土器や、水田を南北に走る153流路内に堆積している砂層から出土している土器等から、奈良時代末～平安時代初頭を1点とする年代以前と考えられる。

この水田の畦畔の方向は、大きく見て北から東へ約18°ほど傾いており、第2層上面で検出した第2面水田の畦畔の方向とも一致している。このことから、少なくとも奈良時代末～平安時代初頭頃から平安時代中頃～後期頃までの地割りは北から東へ約18°ほど傾いて設定されている可能性が指摘できる。この地割り方向と、(その5)(その6)で検出されている正方位にのる地割り方向との関係は、今後検討すべき課題であろう。

また、153流路や、161流路上層からは、奈良時代末～平安時代初頭の人面墨画土器や穿孔土器、模型竈、模型甌、墨書土器が出土している。洪水砂が153流路を形作り、田面と共に153流路も埋没させた段階で、これらの出土遺物に関する祭祀を、周辺で行っていたと考えられる。これら祭祀に関する遺物は、当遺跡周辺では類例が少なく、本遺跡の特殊性を示す事象と考えられる。なお、153流路は調査成果で述べたように、検出状況は流路であるが西肩に造られた大畦畔1の盛土の状況から、本来大畦畔1を水路の西肩とし幅数m、深さは5層までを掘削して得られる深さの規模の水路と想定される。それが、大規模な洪水と共に運ばれた土砂によって、本来の水路は削られ、今回検出した153流路となったと考えられる。

その他、第3面で検出している161流路からは奈良時代中頃の土器が集中して出土しており、187流路

の下層からも、同じく奈良時代中頃の土器と共に牛骨が出土している。この事から、奈良時代中頃に水田を営んでいたとは言い難いが、少なくとも人の手が入る環境であった事が考えられる。、187流路から出土した牛骨は、奈良時代の殺牛殺馬と関連付けのできる資料であろう。

第3面を覆う洪水砂層を母材とした層が第2層であり、耕作層である。第2層上面である第2面では、下面の流路が反映された、凹みが検出されている他、畦畔が検出されており、生産域として利用されていたことが分かる。時期としては出土した遺物から、平安時代後期頃と考えられる。調査区中央を南北に走る下面の流路が反映された形で、大畦畔1が検出されているが、この大畦畔以東では第2面を検出できなかった。これは、上面に削平されたためか、耕作に向かない土質（砂層）のため放棄されていたのかは不明であるが、下面の流路と水田面を覆った分厚い洪水砂層による影響が大きいと考えられる。

また、今回は面的な調査を行わなかったが、第2層中には基本層序で述べている、中層にあたる土壤層を確認している。第2面・第3面とも水田面であり、上面では水田が検出される可能性が高い。

第1面は、第1層中層及び下層を母材とした第1層の上面である。第1層も第2層と同じく、中層に土壤層を確認しており、ここでも水田が検出できる可能性は高いが、中層上面には、砂層が見られないことから遺存状況は悪いと考えられる。

第1面では、調査区東で畦畔らしき遺構を検出したが非常に分かりづらく、断定できなかった。しかし、第1面も田畠などの生産域として利用されていたのであろう。ただし、(その6)との境付近にある、70溝・141溝・163溝は、(その6)で方形区画溝と呼称されている溝と一体と考えられる遺構であり、埋土中に多量の瓦や日常生活品である播鉢、羽釜、甕等が多く含まれている。このため、溝が検出されている付近は、居住域に近い場所であった可能性がある。また、この部分で検出した鎌倉時代の140井戸は、方形木枠組のものとしては屋敷地内にあつたとしてもおかしくない作りである。この井戸からは、破片ではあるが、櫛も出土している。

(その7) 出土遺物一覧表①

遺物番号	図番号	図版番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時期	特徴
1	165	73	攪乱内	土師皿	10.0	1.9	灰白	灰白	11C前半	完形 灯明皿
2	165	73	大和川洪水砂層	土師皿	(11.0)	2.5	橙・淡橙	橙	13C前半	残存率約3/5
3	165	73	大和川洪水砂層	瓦器椀	11.3	(2.9)	暗灰	灰	14C前半	残存率約3/4
4	165	73	大和川洪水砂層	土師皿	(14.9)	(2.2)	浅黄橙	灰白・橙	13C前半	残存率約1/3
5	165	73	大和川洪水砂層	土師器椀	(14.3)	(3.8)	にぶい黄橙	灰白	9C前半	残存率約1/3
6	165	73	大和川洪水砂層	土師器椀	14.1	3.9	橙	にぶい橙	10C前半	残存率約1/2
7	165	73	大和川洪水砂	龍泉窯系椀	(13.4)		灰白～白・(オリーブ灰)	灰白～白・(オリーブ灰)	15C	口縁部
8	165	73	大和川洪水砂	龍泉窯系椀			灰白・(灰白)	灰白・(灰白)	15C	底部
9	165	73	大和川くぼみ下層 砂層	土師器小型甕	10.1	7.0	橙・灰白	橙	9C	ほぼ完形 壺H 平城宮Ⅲ
10	165	73	北辺側溝内出土	須恵器壺	11.7	7.8	灰	灰	8C前半	完形
11	165	73	方形区画溝検出中	東播系片口鉢	(18.4)	6.7	灰	灰	12C	残存率約1/4
12	165		攪乱内	瓦器椀	15.1	5.8	灰	灰	11C後半	完形
13	165		攪乱内	瓦器椀	15.7	5.9	灰	灰	11C後半	完形 壺 平城宮Ⅲ～Ⅴ
14	165		北側側溝	土師器甕	(20.5)		黒	褐灰	8C中～後半	残存率約1/7
15	165		第1層上層遺構固み埋土内倉	瓦質擂鉢	(27.8)		灰白	灰白	14C後半	残存率約1/6 外面鈔まで僅かに煤が付着
16	165	73	第1層上層遺構固み埋土内倉	瓦質羽釜	(22.0)		褐灰・灰白	灰白	15C前半	残存率約1/4 外面鈔まで僅かに煤が付着
17	165	73	第1層上層遺構固み埋土内倉	瓦質羽釜	(26.7)		暗灰	灰白	15C前半	残存率約1/4
18	165		大和川洪水砂層	備前擂鉢			橙・灰赤	橙	15C後半	小片
19	165	74	東西筋堀7'内	土製品土馬			橙	橙	7C	首・脚欠損
20	165		大和川洪水砂層	瓦質羽釜	(38.5)		暗灰	灰	15C中頃	残存率約1/6
21	165		第1層上層遺構固み埋土内倉	瓦質甕	(37.7)		灰	暗灰	14C	残存率約1/5
22	166	74	141溝	備前擂鉢	(23.7)	(8.3)	暗赤褐・にぶい橙	灰白	15C後半～16C前半	残存率約1/5
23	166	74	141溝	瓦質擂鉢	33.1	19.2	灰白	灰白	16C初	残存率約3/5
24	166	74	141溝	風石					中世	
25	166		141溝	瓦器皿	(9.0)	(2.0)	灰	灰	中世	残存率約1/10強
26	166	74	141溝	瓦器皿	(8.5)	2.0	灰	灰	中世	残存率約1/4
27	166	74	141溝	磁石					中世	
28	166	74	141溝	土器製品			橙	橙	中世	
29	166	74	141溝	瓦質火鉢	(40.2)		灰	灰	中世	残存率約1/10以下
30	166	74	141溝	瓦質火鉢	(43.4)		灰	灰	中世	残存率約1/10以下
31	166	74	141溝	瓦質甕	(44.0)		黄灰	黒褐	15C後半	残存率約1/10以下
32	166	75	141溝	土師器甕	(62.7)		灰黄	灰黄	16C	残存率約1/10以下
33	166	75	70溝	備前壺	9.0	13.0	暗赤褐	暗赤褐	15C	残存率約3/5
34	166	75	70溝	瓦質甕	(34.2)		灰・明オリーブ灰	灰	15C	残存率約1/8 京都系
35	167	75	70溝	土師皿	6.1	1.4	褐灰	黒褐	15C	残存率約4/5 京都系 灯明皿
36	167	75	70溝	土師皿	7.3	1.7	淡黄	淡黄	15C	残存率約1/2 京都系
37	167	75	70溝	土師皿	(8.7)	1.9	黒	黒褐	15C	残存率約1/3 京都系 へそ皿
38	167	75	70溝	土師皿	(11.7)	(2.4)	黄灰～灰白	黄灰～灰白	15C	残存率約3/5 京都系
39	167	75	70溝	土師皿	(11.6)	2.1	褐灰	黒褐	15C	残存率約1/3 京都系
40	167	75	70溝	土師皿	(13.7)	(2.1)	黒褐	黄灰	15C	残存率約2/5
41	167	75	70溝	瓦器皿	(9.6)	2.1	灰	灰		残存率約2/5
42	167	75	70溝	瓦器皿	(7.7)	1.7	灰・灰白	灰	13C	残存率約1/4
43	167	75	70溝	瓦器皿	(9.6)	(2.1)	灰	灰		残存率約1/10
44	167		70溝	瓦器椀	(14.0)	5.4	灰	灰	12C後半	残存率約1/10強 龍泉窯系
45	167	75	70溝	青磁碗			灰白・(オリーブ灰)	灰白・(オリーブ灰)	15C	高台部 龍泉窯系
46	167	75	70溝	青磁碗	(14.0)		灰白・(オリーブ緑)	灰白・(オリーブ緑)	15C	残存率約1/4 龍泉窯系
47	167	76	70溝	青磁碗	(13.7)		褐灰・(灰オリーブ)	褐灰・(灰オリーブ)	15C	残存率約1/10以下 龍泉窯系
48	167	76	70溝	青磁碗			灰白・(灰オリーブ)	灰白・(灰)		残存率約4/5強 龍泉窯系
49	167	76	70溝	青磁碗			灰白・(オリーブ灰)	灰白・(オリーブ灰)	15C	残存率約
50	167	76	70溝	白磁碗			灰白・(灰白)	灰白・(灰白)		残存率約3/4弱 IV-2類
51	167	76	70溝	白磁碗			灰白・(灰白)	灰白・(灰白)	16C	残存率約1/2
52	167	76	70溝	備前擂鉢	(27.8)		赤・灰赤	赤	15C後半	残存率約1/10以下
53	167	76	70溝	瓦質羽釜	(25.0)		褐灰	褐灰	15C末	
54	167	76	70溝	瓦質羽釜	(29.0)		褐灰・灰白	灰	15C後半	残存率約1/8
55	167		70溝	瓦質羽釜	(27.1)		灰白	灰	15C	残存率約1/8
56	167	76	70溝	瓦質火鉢	(33.4)		黄灰	黄灰	中世	残存率約1/10
57	167	77	70溝	瓦質火鉢			灰～暗灰	灰～暗灰	中世	残存率約1/10以下
58	167	77	70溝	磁石					中世	
59	167	77	70溝	風石					中世	
60	167		70溝	須恵器甕	(25.9)		灰	灰		残存率約1/10
61	167	77	70溝	瓦質甕	(41.0)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	15C(後半?)	残存率約1/10 III-2
62	168	77	148溝	瓦器椀	(15.6)	4.4	暗灰・灰白	灰・灰白	12C末～13C初	残存率約1/4 II-3
63	168	77	148溝	瓦器椀	(14.8)	5.6	灰	灰	12C後半	残存率約3/5 II-3

(その7) 出土遺物一覧表②

遺物 番号	図番 号	図版 番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時 期	特 徴
64	168	77	148溝	瓦器椀	15.3	4.9	灰	灰	12C中頃	残存率約4/5強 II-3
65	168	77	148溝	瓦器椀	14.8	5.5	暗灰・灰白	暗灰	12C中頃	ほぼ完形 II-3
66	168		148溝	瓦器椀	(15.3)		灰・灰白	灰	12C中頃	残存率約1/5
67	168	77	148溝	瓦質甕	(34.2)		灰白	灰白	15C	残存率約1/10以下
68	168		148溝	東播系片口鉢	(26.4)		灰	灰	12C前半	残存率約1/10強
69	168	77	148溝	備前甕	(30.3)		灰赤	灰赤	12C	残存率約1/10以下
70	168	77	163溝	備前播鉢	(25.1)	13.0	褐灰・明赤褐	灰褐～赤褐	15C後半	残存率約1/10 外面鏽まで煤付着
71	168	78	1溝	瓦質ミニチュア羽釜	(5.2)	(5.7)	灰	灰	16C	残存率約1/3
72	168	78	1溝	龍泉窯系椀			(オリーブ灰)	(オリーブ灰)	15C	残存率約1/4
73	168		1溝	備前鉢	(22.2)		黒褐	褐灰	15C	残存率約1/5
74	168	78	1溝	備前播鉢	(26.5)	9.4	灰・黄灰・灰白	灰・黄灰	15C中頃	残存率約1/4
75	168	78	1溝	瓦質羽釜	(24.0)		黒褐	褐灰	16C前半	残存率約1/4弱
76	168	78	1溝	瓦質羽釜	(21.3)		灰白・黒褐	灰白・灰褐	15C末～16C初	残存率約1/4
77	168	78	1溝	瓦質羽釜	(30.6)		灰黄褐	灰白	15C末	残存率約1/10以下
78	168	78	1溝	瓦質甕	(33.0)		灰	灰白	15C前半	残存率約1/4 II-3
79	169	78	86溝	瓦器椀	15.0	5.3	灰	灰	12C後半	ほぼ完形
80	169	78	8溝	瓦器皿	6.6	(0.9)	灰	灰・暗灰	13C	残存率約1/2
81	169	78	8溝	瓦器皿	(9.5)	2.0	灰	灰	12C後半	残存率約1/4弱
82	169	78	8溝	景徳鎮青花	(11.6)	2.0	(明緑灰)	(明緑灰)	15C	残存率約1/2
83	169	79	8溝	備前甕	11.5		赤黒	黒	15C	残存率約3/4弱
84	169		8溝	土師皿	(6.9)	0.8	浅黄橙	浅黄橙	14C	残存率約1/4
85	169	79	8溝	須恵質羽釜	(17.0)		灰	青灰	15C	残存率約1/5
86	169	79	8溝	須恵質羽釜	(17.0)		青灰	青灰	15C	残存率約1/3
87	169	79	8溝	瓦質羽釜	(21.8)		橙	にぶい・橙	15C後半	残存率約1/8
88	169		8溝	瓦質羽釜	(24.6)		黒褐	黒褐	15C	残存率約1/3
89	169	79	8溝	瓦質羽釜	(28.4)		灰白	灰白	15C	残存率約1/4
90	169	79	8溝	備前播鉢	(28.1)		にぶい・赤褐	灰赤	15C～16C	残存率約1/10
91	169	79	8溝	瓦質甕	(27.2)		灰	暗灰	16C	残存率約1/8
92	169	80	8溝	青磁龍泉窯			(明オリーブ灰)	(明オリーブ灰)	15C	残存率約1/5
93	169	80	8溝	瓦質香炉方形蓋			灰	灰・にぶい・黄橙	中世	
94	169	79	8溝	瓦質甕	(38.2)		灰白・橙	黄灰	15C	残存率約1/5
95	169	79	8溝	土師器甕	(41.4)		浅黄橙	灰白	15～16C	残存率約1/10
96	170	80	9井戸	土師器椀	13.8	4.0	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	9C前半	残存率約3/4弱
97	170	80	4井戸	瓦質羽釜	(24.5)		黒・灰黄	黒・黒褐	15C末～16C初	残存率約1/3
98	170		4井戸	東播系片口鉢	(24.2)		灰	灰	13C後半	残存率約1/8
99	170	80	4井戸	瓦質甕	(31.4)		暗灰	暗灰	15C	残存率約1/10
100	170	80	3井戸	土師器羽釜	(28.1)		橙	にぶい・橙	13C	残存率約1/4
101	170	80	5井戸	土師質羽釜	(30.4)		橙・にぶい・赤褐	にぶい・橙	13C	残存率約1/3
102	170	80	5井戸	土師質羽釜	(31.4)		灰・黒	淡黄	13C	残存率約1/5
103	170	80	5井戸	須恵器甕	(42.8)		灰白・明オリーブ	灰白・明オリーブ	13C	残存率約1/10
104	170	80	5井戸	土師質羽釜	30.0		灰白・黒	灰白	13C末～14C初	残存率約3/4弱
105	171	80	11井戸	土師皿	(7.1)	1.2	淡橙	淡橙	13C	残存率約4/5
106	171	80	11井戸	土師皿	7.3	1.3	灰白	灰白	14C	ほぼ完形
107	171	81	11井戸	土師皿	(7.2)	1.2	灰白	灰白	13C	残存率約3/4弱
108	171	81	11井戸	瓦器皿	7.1	1.6	灰	灰	13C	残存率約3/5
109	171	81	11井戸	瓦器皿	10.4	2.8	灰	暗灰	14C中頃	残存率約3/4弱 褐色系
110	171		11井戸	土師皿	(7.3)	1.4	淡橙	浅黄橙	13C	残存率約2/5
111	171	81	11井戸	瓦器皿	11.0	2.0	灰	灰	14C中頃	残存率約4/5 褐色系
112	171	81	11井戸	土師皿	(7.9)	1.2	灰白	灰白	13C	残存率約3/5
113	171		11井戸	東播系片口鉢	(25.5)		灰	灰	13C	残存率約1/10強
114	171	81	11井戸	瓦器椀	10.9	3.2	灰	灰	13C中～14C初	残存率約4/5
115	171	81	50井戸	瓦質羽釜	(33.0)		灰白・灰	灰白	15C初	残存率約1/4弱
116	171	81	50井戸	備前播鉢	(32.0)		暗赤灰・灰赤	灰赤・暗赤灰	15C	残存率約1/8
117	171	81	50井戸	瓦質皿	9.6	2.0	暗灰～灰白	灰～灰白	14C～15C	残存率約3/5
118	171		50井戸	瓦質播鉢			灰白	灰	14C	残存率約1/8弱
119	171	81	50井戸	瓦質甕	(34.8)		灰～オリーブ黒	灰～黒	15C	残存率約1/5
120	171	81	6井戸	瓦質甕	(36.0)		暗灰	灰白	13C	残存率約2/5
121	172	81	76井戸	土師皿	(11.5)	1.9	灰白	灰白	14C	残存率約1/2
122	172	81	76井戸	瓦器椀	(10.4)	2.7	黒	灰白・灰	14C	残存率約2/5
123	172	81	76井戸	瓦質羽釜	(24.6)		黒	黒	14C	残存率約1/5
124	172	81	132井戸	瓦質播鉢	(26.9)		灰・灰白	灰・灰白・にぶい・赤褐	13C末～14C初	残存率約1/4
125	172	82	132井戸	瓦質羽釜	(25.6)		橙・浅黄・暗灰	橙・浅黄	14C後半	残存率約1/10
126	172	82	132井戸	瓦質甕	(40.0)		暗灰・灰	灰	15C(後半)	残存率約1/10以下
127	172		133井戸	瓦器皿	(11.2)	2.9	灰・灰白	灰・灰白	14C前半	残存率約2/5

(その7) 出土遺物一覧表③

遺物番号	図番号	図版番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時期	特徴
128	172	82	151井戸	瓦器椀	(11.3)	2.6	灰	灰	13C後半～14C初	残存率約1/4
129	172		151井戸	土師皿	(7.6)	(1.2)	淡黄	灰白	13C～14C	残存率約1/5
130	172	82	151井戸	須恵器甕	(19.4)		黒	褐灰	中世(13C～14C)	残存率約1/5
131	172	82	188井戸	瓦葺羽釜	20.0	16.1	灰白・黒褐・黒	にぶい、黄褐・黒	15C?	ほぼ完形
132	172	82	147土坑	備前摺鉢	(29.2)		橙	橙	15C	残存率約1/10以下
133	172	82	147土坑	瓦器椀	(13.8)	5.5	灰	灰	12C後半～13C初	残存率約1/4
134	172	82	147土坑	瓦器椀	13.4	5.4	灰	灰	12C後半～13C初	残存率約1/2
135	172		50井戸	瓦葺井筒	(47.4)		灰	灰	15C	残存率約1/10以下
136	172	82	50井戸	瓦葺井筒	(65.6)	61.7	灰	灰	15C	残存率約1/10強
137	172	82	76井戸	瓦葺井筒	44.0	28.8	灰白・黒	浅黄	15C	完形
138	173	82	140井戸	土師皿	8.4	1.5	灰白	浅黄橙	12C前半	完形
139	173	83	140井戸	土師皿	8.7	1.5	浅黄橙	橙	12C前半	完形
140	173	83	140井戸	土師皿	9.5	1.7	浅黄橙	浅黄橙	12C前半	ほぼ完形
141	173	83	140井戸	土師皿	8.6	1.4	にぶい、黄橙	浅黄橙	12C	ほぼ完形
142	173	83	140井戸	土師皿	9.0	1.8	にぶい、黄橙	浅黄橙	12C前半	完形
143	173	83	140井戸	土師皿	9.2	1.7	浅黄橙	浅黄橙	12C(後半)	ほぼ完形
144	173	83	140井戸	土師皿	(8.6)	1.2	灰白	灰白	12C	残存率約1/2
145	173		140井戸	土師皿	(8.1)	(1.3)	にぶい、橙	にぶい、橙	12C前半	残存率約2/5
146	173	83	140井戸	土師皿	9.1	1.7	灰白	灰白	12C前半	完形
147	173	83	140井戸	土師皿	9.4	1.7	灰白	灰白	12C前半	完形
148	173	83	140井戸	土師皿	9.3	1.8	にぶい、橙	淡黄	12C前半	完形
149	173	83	140井戸	瓦器皿	8.9	1.5	灰	灰	12C(後半)	残存率約4/5強
150	173	83	140井戸	瓦器皿	8.6	2.1	灰	灰白	12C(後半)	残存率約4/5強
151	173	83	140井戸	瓦器皿	8.8	2.1	灰	灰	12C(後半)	残存率約3/5
152	173	83	140井戸	瓦器椀	14.6	5.0	暗灰	暗灰	12C中頃	ほぼ完形
153	173	83	140井戸	瓦器椀	(15.4)	5.1	灰	灰	12C後半	残存率約1/2
154	173	83	140井戸	瓦器椀	14.4	5.0	暗青灰	暗青灰	12C後半	ほぼ完形
155	173	83	140井戸	瓦器椀	15.8	5.4	青黒	暗青灰	12C後半の中頃	残存率約3/5
156	173	83	140井戸	瓦器椀	15.8	5.2	灰	灰	12C前半	残存率約4/5強
157	173	84	140井戸	瓦器椀	14.8	6.0	暗灰	暗灰	12C中頃	完形
158	173	84	140井戸	瓦器椀	15.5	5.6	暗灰・灰白	暗灰	12C後半	完形
159	173	84	140井戸	瓦器椀	14.8	5.6	暗灰	灰	12C後半～中頃	完形
160	173	84	140井戸	瓦器椀	15.3	5.0			12C後半	完形
161	173	84	140井戸	瓦器椀	15.1	5.4	暗灰	灰	12C後半	完形
162	173	84	140井戸	瓦器椀	14.8	5.9	灰	灰	12C後半	ほぼ完形
163	173	84	140井戸	瓦器椀	14.8	5.0	灰・灰白	灰	12C後半	残存率約4/5強
164	173		140井戸	瓦器椀	(14.4)	5.7	暗灰	灰	12C後半	残存率約2/5
165	173	84	140井戸	瓦器椀	14.9	5.4	オリーブ灰	灰	12C中頃～後半	完形
166	173		140井戸	瓦器椀	(15.4)	5.5	灰	灰	12C後半	残存率約2/5
167	173	84	140井戸	瓦器椀	15.2	4.8	灰	灰	12C後半	ほぼ完形
168	173	84	140井戸	瓦器椀	14.5	5.5			12C後半	ほぼ完形
169	173		140井戸	東播系片口鉢	(27.6)		灰	褐灰	12C中頃～後半	残存率約1/8
170	174		第1層	瓦器皿	(8.2)	1.7	灰	灰	13C	残存率約2/5
171	174	84	第1層	土師皿	7.4	1.6	浅黄橙	淡橙	13C後半～14C前葉	残存率約3/4弱 杯C 平城宮Ⅱ～Ⅲ
172	174	84	第1層洪水砂層	土師器皿	(18.6)	2.3	灰黄褐・にぶい、橙	灰白	8C前半	残存率約1/2 杯A 平城宮Ⅱ～Ⅲ
173	174	84	第1層洪水砂層	土師器杯	(15.1)	(2.7)	浅黄	浅黄	8C前半	残存率約2/5
174	174	84	第1層 洪水砂層	土師器皿	10.3	2.0	明黄褐	明黄褐	9C前半	ほぼ完形
175	174	85	第1層	土師器椀	(13.8)	3.2	橙	にぶい、黄橙	9C前半	残存率約1/2弱
176	174	85	第1層	須恵器杯	13.6	4.1	灰	灰	8C末	残存率約3/5
177	174		第1層	須恵器杯	(9.7)	3.0	にぶい、橙	にぶい、橙	8C末	残存率約1/5弱 杯A 平城宮Ⅴ～Ⅵ
178	174		第1層 洪水砂層	須恵器杯	(13.3)	3.8	灰	灰	8C末～9C前半	残存率約2/5
179	174	85	第1層	黒色土器A類	(15.3)	5.0	黒	黒	9C	残存率約1/5
180	174		第1層	瓦器椀	(5.2)	(5.6)	灰	灰	12C後半	残存率約1/5
181	174	85	第1層洪水砂層(粗砂)	土師器小型甕	10.4		浅黄	明黄褐・浅黄橙	9C	残存率約4/5
182	174	85	第1層洪水砂層	土師器小型甕	9.3	6.0	オリーブ黄	浅黄	9C	残存率約4/5 上白
183	174	85	第1層	石臼					中世	
184	174	85	第1層	備前摺鉢	(26.5)		暗赤灰・灰赤	灰赤	15C前半	残存率約1/10以下
185	174	85	第1層	瓦葺摺鉢	(33.9)		灰	灰	14C	残存率約1/10強
186	174	85	第1層	瓦葺羽釜	(26.2)		浅黄	灰黄	15C末～16C初	残存率約1/5
187	174		第1層							灰軸
188	174	85	第1層洪水砂層	須恵器壺			灰白	灰白	9C後半	残存率約1/2
189	174		第1層	備前大甕	(46.5)		黒褐	にぶい、赤褐	15C	残存率約1/5
190	175	86	おち	三巴文軒丸瓦					中世	
191	175	86	大和川洪水砂層	複弁蓮華文軒丸瓦					12C	

(その7) 出土遺物一覧表④

遺物 番号	図番 番号	図版 番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時 期	特 徴
192	175	86	大和川洪水砂層	三巴文軒丸瓦					中世	
193	175	86	大和川洪水砂層	三巴文軒丸瓦					中世	
194	175	86	大和川洪水砂層	均整唐草文					中世	
195	175	85	大和川洪水砂層	雁振瓦					中世	
196	175	86	落ち込み	平瓦					中世	
197	175	86	141溝	三巴文軒丸瓦					中世	
198	175		141溝	複弁蓮華文軒丸瓦					中世	
199	175	86	141溝	三巴文軒丸瓦					中世	
200	175	86	141溝	水波紋軒平瓦						
201	175	86	141溝	唐草文軒平瓦					中世	
202	175		141溝	唐草文軒平瓦					中世	
203	175	86	141溝	唐草文軒平瓦					中世	
204	175		141溝	水波紋軒平瓦					中世	
205	175	86	141溝	唐草文軒平瓦					中世	
206	175	86	141溝	唐草文軒平瓦					中世	
207	175		141溝	唐草文軒平瓦					中世	
208	175	86	141溝	唐草文軒平瓦					中世	
209	175	86	141溝	水波紋軒平瓦					中世	なで 曲線頸
210	176		1溝	軒平瓦					中世	なで
211	176	87	1溝	軒平瓦					中世	なで 折り返し頸 唐草文
212	176	86	1溝	唐草文軒平瓦					中世	室町前期
213	176	87	1溝	三巴文軒丸瓦					14C	蓮華唐草文
214	176	87	8溝	軒平瓦						三巴文
215	176	87	8溝	軒丸瓦						三巴文
216	176	87	8溝	軒丸瓦						
217	176	87	70溝	三巴文軒丸瓦						
218	176	87	70溝	三巴文軒丸瓦						
219	176	87	141溝	鬼板瓦					中世	
220	176	87	1溝	雁振瓦						縄叩き後縦方向なで
221	176	87	1溝	丸瓦						
222	177	87	76井戸	連珠文軒平瓦					13C~14C	
223	177	87	76井戸	連珠文軒平瓦					13C~14C	
224	177	88	132井戸	軒平瓦					中世	
225	177	87	132井戸	軒平瓦					中世	
226	177	88	3井戸	三巴文軒丸瓦					13C~14C	格子目叩き
227	177		3井戸	平瓦					13C	縦方向板なで
228	177	88	3井戸	丸瓦						
229	177	88	50井戸	鬼板瓦					15C	
230	177	88	50井戸	鬼板瓦					15C	
231	181	89	182土坑	土師皿	9.6	2.0	浅黄橙	浅黄橙	12C後半	残存率約3/5
232	181	89	182土坑	土師皿	9.7	1.6	灰白	灰白	11C末	残存率約3/4弱
233	181	89	182土坑	土師皿	(9.6)	1.6	浅黄橙	浅黄橙	12C後半~中頃	残存率約1/2
234	181	89	182土坑	土師皿	9.0	1.8	浅黄橙	浅黄橙	12C	完形
235	181	89	182土坑	土師器杯	14.9	3.2	浅黄橙	浅黄橙	12C中頃	完形
236	181	89	182土坑	土師器杯	15.1	3.0	浅黄橙	灰白	12C中頃	ほぼ完形
237	181	89	182土坑	瓦器椀	15.8	6.0	灰	灰	12C中頃	残存率約3/4弱
238	181	89	182土坑	瓦器椀	14.7	5.6	灰	灰	12C中頃	ほぼ完形
239	181	89	149凹み	土師皿	9.1	2.3	橙	橙	13	完形
240	181	89	149凹み	土師器杯	(14.0)	3.0	灰白	明黄褐	9C	残存率約1/4
241	181	89	149凹み	瓦質播鉢	(28.1)		暗灰	暗灰	15C後半	残存率約1/5
242	181	89	149凹み	備前壺	(9.0)		極暗赤褐	灰赤	15C	残存率約1/6 杯
243	181	89	149凹み	須惠器杯蓋	11.0	3.5	暗青灰	灰	7C	残存率約4/5 飛鳥II
244	181	89	149凹み	須惠器杯身	(11.8)	(4.2)	灰	灰	7C前半	残存率約1/3 壺A 平城宮III
245	181	90	149凹み	須惠器壺	(5.8)	7.5	灰	灰	8C中頃~	残存率約1/2強
246	181	90	149凹み	土師器壺	15.6		にぶい黄	暗灰黄・灰黄	庄内	頸部 杯A 平城宮III
247	181	90	149凹み	土師器杯	14.2	4.0	灰白	灰黄	8C中頃	残存率約3/5 杯A 平城宮V~VI
248	181	90	149凹み	土師器模倣壺	(10.0)	(6.2)	灰白	灰白	8C末~9C初	残存率約2/5 杯A 平城宮I
249	181	90	149凹み	須惠器杯	(16.0)	4.8	灰	灰	8C初	残存率約2/5
250	181	90	149凹み	土師器模倣壺	=	(6.2)	橙	橙	8C末~9C初	杯A
251	181	90	149凹み	須惠器杯	(13.6)	(3.7)	オリーブ灰	灰	8C末~9C初	残存率約2/5 杯A 平城宮V~VI
252	181	90	149凹み	土師器杯	(22.1)	(2.5)	にぶい橙	にぶい橙	8C末~9C初	残存率約1/10 皿A 平城宮III
253	181	90	149凹み	土師器皿	(23.0)	2.1	にぶい黄橙	浅黄	8C中頃	残存率約2/5 椀
254	181		149凹み	土師器椀			オリーブ黄	灰白	8C末~9C初	椀
255	181	90	149凹み	土師器椀			灰黄	灰黄	8C末~9C初	椀AII 平城宮VI

(その7) 出土遺物一覧表⑤

遺物番号	図番号	図版番号	遺構・層位等	器種	口径cm	器高cm	外面色調	内面色調	時期	特徴
256	181	90	第2層(洪水砂)	土師器碗	11.7	3.6	灰白	灰白・橙	8C末	残存率約3/5 碗A 平城宮VI～VII
257	181		第2層(洪水砂)	土師器碗	(14.0)	3.6	灰白	にぶい黄橙	9C前半	残存率約1/4 碗
258	181		第2層(洪水砂)	土師器碗	(13.4)	3.9	橙	橙	9C後半	残存率約1/5 碗 平城宮VI
259	181		第2層(洪水砂)	土師器碗	(14.7)	3.5	橙	にぶい赤褐	8C末	残存率約1/2
260	181		第2層	備前播鉢			赤	赤橙	中世	残存率約1/8 碗A 平城宮VI～VII
261	181	90	第2層(洪水砂)	須恵器杯	10.6	5.6	灰	灰	9C前半	残存率約2/5
262	189		153流路	瓦器皿	8.6	2.2	暗灰	灰	13C	ほぼ完形 (平城宮I?)
263	189	91	153流路	須恵器蓋	(15.8)	(2.0)	灰白・暗灰	灰白・暗灰	8C初(7C後半)	残存率約2/5
264	189	91	153流路	須恵器鉢	15.8	5.9	緑灰	黒	7C	ほぼ完形 杯A 平城宮VI
265	189	91	153流路	須恵器杯	(11.2)	3.9	灰	灰	9C初	残存率約2/5 平城宮VI
266	189	91	153流路	須恵器杯A	13.5	4.4	灰	灰	8C末～9C初	完形 平城VI
267	189	91	153流路	須恵器蓋L	3.4	9.3	灰	灰	8C末～9C初	ほぼ完形 □
268	189	91	153流路	須恵器皿			灰	灰	7C後半	口縁部欠損
269	189		153流路	須恵器壺	9.0		灰	灰		残存率約4/5強 壺L 平城宮V前後
270	189	91	153流路	須恵器壺			灰	灰白	8C末	残存率約2/5 平城宮IV～V
271	189		153流路	須恵器壺			暗青灰	暗青灰	8C後半	残存率約2/5
272	189		153流路	須恵器甕	(19.6)		青灰	青灰		残存率約1/10強
273	189		153流路	須恵器甕	(24.2)		灰	灰		残存率約1/4
274	189	92	153流路	須恵器平瓶			灰白	灰白	9C前半	口縁部欠損
275	189	91	153流路	須恵器甕	(25.6)		灰	灰		残存率約1/10 鍋A 平城宮V～VI
276	189	92	153流路	土師器鍋	(30.6)	(11.3)	浅黄橙	浅黄橙	8C末～9C初	残存率約1/2 生駒西産 平城宮IV～VI
277	189	92	153流路	土師器羽釜	30.0		橙	にぶい橙	8C後半	胴部欠損 生駒西産 平城宮III～V
278	189	92	153流路	土師器羽釜	26.0		にぶい黄褐	黄褐	8C後半	口縁部 皿A 平城宮VI
279	190	92	153流路	土師器皿	18.8	2.5	浅黄	明黄褐	9C初	完形 皿A 平城宮V
280	190	92	153流路	土師器皿	16.0	3.0	浅黄橙	浅黄橙	8C末	残存率約3/4弱
281	190	92	153流路	黒色土器A類	13.7	4.1	灰黄	浅黄	9C前半	残存率約4/5 壺B 平城宮VII
282	190	92	153流路	土師器壺	(9.7)	3.2	灰白	淡黄	9C初頃	残存率約2/5 平城宮VI～VII
283	190	92	153流路	土師器甕	10.3	6.5	浅黄	灰黄	9C初(前半)	残存率約4/5 平城宮VI～VII
284	190	92	153流路	土師器甕	9.2	6.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	9C初(前半)	残存率約4/5 平城宮VI～VII
285	190	92	153流路	土師器甕	(11.0)	8.5	にぶい黄橙	にぶい赤褐	9C初(前半)	残存率約3/4弱 杯A 平城宮V～VI
286	190		153流路	土師器杯	(16.7)	2.2	灰白	灰白	8C末～9C初	残存率約1/10 平城宮IV～V
287	190		153流路	土師器杯	(15.2)	2.7	灰白	にぶい橙	8C中頃～後半	残存率約1/10 平城宮VI～VII
288	190	93	153流路	土師器甕	(12.5)		にぶい黄橙	浅黄	9C初(前半)	残存率約3/5 平城宮V～VI
289	190		153流路	土師器甕	14.4		灰黄	灰黄	8C末～9C初	残存率約4/5 平城宮VI～VII
290	190		153流路	土師器高杯			にぶい黄橙	にぶい黄橙	9C初	残存率約1/3
291	190		153流路	土師器壺			灰白	黄灰	庄内～布留	
292	190		153流路	壺底部			明褐	明褐	弥生時代	
293	190	93	153流路	土師器甕	14.9	11.6	灰褐	にぶい赤褐	9C初(前半)	ほぼ完形 甕B 平城宮VI
294	190	93	153流路	土師器甕	(13.5)	11.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C末	残存率約1/2 平城宮III
295	190	93	153流路	土師器壺	10.6	11.7	明黄褐	にぶい黄橙	8C中頃	ほぼ完形 平城宮VI～VII
296	190		153流路	土師器甕	(17.2)	14.7	にぶい黄橙	浅黄	9C初(前半)	残存率約1/3 平城宮VI
297	190	93	153流路	土師器模型瓶	8.8	5.3	灰黄	明黄褐	9C初	ほぼ完形
298	190		153流路	土師器模型壺	10.9	(6.9)	橙	にぶい橙	8C末～9C初	残存率約1/10以下
299	190	93	153流路	土師器模型壺	(10.1)	6.5	にぶい橙	浅黄橙	8C末～9C初	残存率約2/5 平城宮VI?
300	190	94	153流路	土師器模型壺	10.4	7.4	明褐灰	明褐灰	8C末・9C初	残存率約4/5 平城宮V～VI
301	190	93	153流路	土師器甕	14.8		灰白	にぶい黄橙	8C末～9C初	残存率約1/2 甕A 平城宮VI(～VII)
302	190	94	153流路	土師器甕	(12.0)		灰黄	にぶい黄橙	9C初	残存率約2/5 平城宮IV～V
303	190	93	153流路	土師器甕	(18.8)	16.9	浅黄橙	浅黄橙	8C後半	残存率約3/5 甕A 平城宮VI
304	190	94	153流路	土師器甕	(21.8)	19.0	にぶい黄橙	橙	8C末・9C初	残存率約1/2 杯蓋 飛鳥I～II
305	191	94	161流路	須恵器杯蓋	(15.6)	4.2	青灰	灰白	7C前半	残存率約2/5 蓋 平城宮
306	191		161流路	須恵器杯蓋	(10.7)	(1.7)	灰～オリーブ黒	灰・黒	8C	残存率約1/4 杯蓋
307	191	95	161流路	須恵器杯蓋	(17.0)	(2.5)	灰	灰	8C	残存率約1/4 杯B蓋 平城宮III～
308	191	94	161流路	須恵器蓋	(16.3)	1.7	灰	灰	8C中頃～	残存率約1/3 杯B 平城宮III～
309	191	95	161流路	須恵器高台付杯	(10.0)	4.0	灰	灰	8C後半	残存率約1/4 杯B 平城宮III～
310	191	95	161流路	須恵器杯	(15.0)	4.2	黄灰	灰	8C後半	残存率約1/3 杯B
311	191	95	161流路	須恵器高台付杯	(15.6)	4.2	灰	灰	8C	残存率約1/5 杯B 平城宮III～V
312	191		161流路	須恵器杯	(18.0)	4.1	青灰	暗赤灰・青灰	8C後半	残存率約1/10
313	191	94	161流路	須恵器杯身	10.4	3.1	黄灰	黄灰	7C前半	ほぼ完形
314	191	94	161流路	須恵器杯	(11.2)	2.8	灰白	灰	7C後半	残存率約2/5 杯
315	191	95	161流路	須恵器杯	(10.5)	2.8	灰	灰	8C	残存率約1/4 杯A 平城宮V
316	191	95	161流路	須恵器杯	14.0	3.8	青灰	青灰	8C後半	残存率約3/5 杯A 平城宮III～

(その7) 出土遺物一覧表⑥

遺物 番号	図番 号	図版 番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時 期	特 徴
317	191		161流路	須恵器杯	(13.2)	3.8	灰・褐灰	灰・オリーブ黒	8C後半	残存率約2/5 杯A 平城宮Ⅲ～
318	191		161流路	須恵器杯	(13.4)	4.3	灰・暗灰	灰・黄灰	8C後半	残存率約1/3 杯A 平城宮Ⅲ～
319	191		161流路	須恵器杯	(13.8)	4.0	灰	灰	8C後半	残存率約1/3 杯A
320	191	95	161流路	須恵器杯	(16.8)	(4.1)	黄灰・黒	黄灰	8C	残存率約1/2弱 杯G蓋 飛鳥Ⅱ
321	191	94	161流路	須恵器杯蓋	9.9	3.5	灰	灰白	7C中頃	ほぼ丸形 杯G 平城宮Ⅰ(飛鳥Ⅴ)
322	191	94	161流路	須恵器杯	(10.9)	3.6	灰白・灰	灰白・灰	8C前半	残存率約1/4 高台付口
323	191	94	161流路	須恵器高台付皿	(9.0)		灰	灰	7C前半	残存率約3/5 鉢A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
324	191		161流路	須恵器鉢	(20.0)		灰	灰	8C後半	残存率約1/10 鉢A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
325	191		161流路	須恵器鉢	(19.6)		灰	灰黄	8C後半	残存率約1/5 鉢K 平城宮Ⅲ～
326	191		161流路	須恵器壺			灰	灰	8C後半	残存率約1/10強 壺L 平城宮Ⅲ～
327	191		161流路	須恵器壺			暗青灰	灰	8C中頃～	残存率約1/5 壺K 飛鳥Ⅲ
328	191	95	161流路	須恵器壺			灰	灰	8C初	残存率約1/3
329	191		161流路	須恵器壺?			灰・(オリーブ灰)	灰・(オリーブ灰)	8C	残存率約1/4 平瓶
330	191	95	161流路	須恵器平瓶			灰	灰	8C	残存率約1/2 搦鉢 平城宮Ⅲ～Ⅴ
331	191	95	161流路	須恵器鉢			灰	灰白	8C中～後半	残存率約1/2
332	191	95	161流路	須恵器横瓶	(12.2)		灰	灰	7C前半	残存率約1/5 杯A 平城宮Ⅲ
333	192	95	187流路	土師器杯	20.2	4.0	淡黄橙	淡黄橙	8C中頃	残存率約4/5強 杯A
334	192	95	187流路	須恵器杯	(9.0)	3.3	暗オリーブ灰	暗オリーブ灰	8C末～9C初	残存率約1/4 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
335	192	95	161流路	土師器皿	(20.0)	(3.3)	黄灰	黄灰	8C中頃～	残存率約1/10 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
336	192		161流路	土師器杯	(13.9)	(2.9)	にぶい黄橙	明褐灰	8C中頃	残存率約1/10 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
337	192		161流路	土師器杯	(18.2)	(3.3)	にぶい橙	灰褐	8C中頃～	残存率約1/10強 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
338	192	96	161流路	土師器杯	(20.1)	(4.1)	褐灰	褐灰・黒	8C中頃～	残存率約1/10 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
339	192	96	161流路	土師器杯	(19.1)	(3.6)	灰黄	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/10強 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
340	192	96	161流路	土師器杯	(16.6)	(3.6)	黒褐	褐灰	8C中頃～	残存率約1/10強 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
341	192		161流路	土師器杯	(18.6)	(3.0)	褐灰	褐灰	8C中頃	残存率約1/10以下 杯A 口縁部レン暗文あり平城宮(Ⅱ～?)Ⅲ
342	192		161流路	土師器杯	(16.5)	(2.9)	にぶい黄	浅黄	8C中頃	残存率約1/10強 杯A 平城宮Ⅲ
343	192	96	161流路	土師器杯	(20.2)	3.2	にぶい橙・黒	橙・黒	8C中頃	残存率約1/2 杯A 平城宮Ⅲ
344	192		161流路	土師器杯	(19.2)	3.2	灰褐・灰黄褐	灰黄褐・褐灰	8C中頃	残存率約1/10強 杯A 平城宮Ⅲ
345	192	96	161流路	土師器杯	(18.8)	(3.8)	にぶい橙・黒褐	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/4 杯A 平城宮Ⅲ
346	192	96	161流路	土師器杯	(20.2)	(3.7)	黒褐・黒	黒褐・黒	8C中頃	残存率約1/5 杯A 平城宮Ⅲ
347	192		161流路	土師器杯	(19.7)	(3.6)	褐灰～黒褐	褐灰～黒褐	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ
348	192	96	161流路	土師器杯	(15.3)	2.8	にぶい橙・褐灰	にぶい褐	8C中頃	残存率約1/3 杯A 平城宮Ⅲ
349	192		161流路	土師器杯	(19.6)	(3.7)	灰黄褐	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/10以下 杯A 平城宮Ⅲ
350	192		161流路	土師器杯	(15.4)	(2.9)	灰黄褐	灰黄褐	8C中頃	残存率約1/4 杯A 平城宮Ⅲ
351	193	96	161流路	土師器杯	(15.5)	(2.6)	橙	橙	8C中頃	残存率約1/3 杯A 平城宮Ⅲ
352	193		161流路	土師器杯	(13.8)	(2.5)	にぶい橙	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ
353	193		161流路	土師器杯	(15.7)	(3.9)	灰褐	黒褐	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ
354	193		161流路	土師器杯	(18.7)	(3.3)	黄灰・黒	黄灰・黒	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ
355	193	96	161流路	土師器杯	(18.8)	4.1	褐灰・明褐灰	褐灰	8C中頃	残存率約1/5 杯A 平城宮Ⅲ
356	193		161流路	土師器杯	(21.8)	(4.1)	橙・褐灰	にぶい黄橙・黒	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
357	193	96	161流路	土師器杯	(13.4)	2.8	にぶい橙	にぶい橙	8C中頃	残存率約1/4 杯A 平城宮Ⅲ
358	193		161流路	土師器杯	(15.6)	(3.0)	にぶい褐	黒	8C中頃	残存率約1/10 杯
359	193		161流路	土師器杯	(15.0)	(3.0)	褐灰・にぶい黄橙	にぶい黄橙・黒褐	8C	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅱ～
360	193		161流路	土師器杯	(16.1)	2.4	にぶい黄橙・灰黄褐	にぶい黄橙・暗灰	8C後半	残存率約1/5 杯A 平城宮Ⅲ
361	193	96	161流路	土師器杯	(15.8)	(3.2)	灰白	にぶい橙	8C中頃	残存率約2/5 杯A
362	193	96	161流路	土師器杯	(13.2)	(3.5)	橙	浅黄橙	8C	残存率約1/3 壺A 平城宮Ⅳ～Ⅴ
363	193	96	161流路	土師器杯	(15.0)	2.7	にぶい黄橙	明褐灰	8C後半	残存率約4/5 杯A 平城宮Ⅲ
364	193		161流路	土師器杯	(17.0)	(3.4)	褐灰・灰黄褐	黒	8C中頃	残存率約1/10
365	193		161流路	土師器杯	(14.2)	(2.8)	灰褐	灰黄褐	8C	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ
366	193		161流路	土師器杯	(16.8)	(3.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/10以下 杯A 平城宮Ⅴ
367	193	96	161流路	土師器杯	(16.2)	3.0	黒褐・褐灰	黒・褐灰	8C後半	残存率約2/5 杯A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
368	193		161流路	土師器杯	(14.7)	(3.4)	灰黄褐・にぶい黄橙・暗灰	灰褐・灰黄褐	8C後半	残存率約2/5 杯A 平城宮Ⅲ
369	193		161流路	土師器杯	(18.6)	(3.3)	明褐灰	灰褐	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
370	193	96	161流路	土師器杯	(15.6)	(2.8)	橙	にぶい橙	8C後半	残存率約1/5 杯A 平城宮Ⅲ～Ⅴ
371	193		161流路	土師器杯	14.6	3.7	黒褐	褐灰・にぶい橙	8C後半	残存率約1/2強 杯A 平城宮Ⅲ
372	193		161流路	土師器杯	(19.3)	(3.8)	黒褐	黒	8C中頃	残存率約1/10 杯A 平城宮Ⅲ～Ⅳ
373	193		161流路	土師器杯	(14.9)	(3.4)	灰黄・灰黄褐	灰黄・にぶい黄橙	8C中～後半	残存率約2/5 杯 在地系か
374	193	96	161流路	土師器杯	(14.8)	(4.4)	明赤褐・灰黄褐	黒・灰	8C中頃	残存率約1/5 壺B 平城宮Ⅲ

(その7) 出土遺物一覧表⑦

遺物 番号	図番 号	図版 番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時 期	特 徴
375	193		161流路	土師器鉢	(21.0)	(5.1)	灰黄褐・褐灰	黒	8C中頃	残存率約1/10 椀C 平城宮IV? 在地系
376	193	96	161流路	土師器椀	(13.9)	3.6	浅黄橙	にぶい橙	8C後半	残存率約1/2 椀C 平城宮III～IV
377	193		161流路	土師器椀	(14.6)	(3.6)	黒・灰黄褐	黒	8C後半	残存率約1/4 皿A 平城宮III
378	194		161流路	土師器皿			にぶい黄橙	黄褐	8C中頃	残存率約1/2 皿A 平城宮III
379	194	97	161流路	土師器皿	(22.5)	(2.7)	灰褐・褐灰	黒褐	8C中頃	残存率約1/5 皿A 平城宮III
380	194		161流路	土師器皿	(21.0)	(3.0)	淡橙	橙	8C中頃	残存率約1/10 皿A 平城宮III
381	194		161流路	土師器皿	(23.4)	(3.4)	灰白	浅黄橙	8C中頃	残存率約1/10 皿A 平城宮III
382	194		161流路	土師器皿	(22.9)	2.2	橙	橙	8C中頃	残存率約1/10以下 皿A 平城宮III
383	194	97	161流路	土師器皿	(22.5)	2.4	にぶい黄橙・暗灰	灰白・にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/10餘 皿A 平城宮III
384	194		161流路	土師器皿	(24.9)	(2.4)	灰黄褐・褐灰	黒褐	8C中頃	残存率約1/10以下 皿A 平城宮III
385	194		161流路	土師器皿	(25.0)	(2.6)	にぶい橙	にぶい褐	8C中頃	残存率約1/10以下 皿B 平城宮III
386	194	97	161流路	土師器高台付皿	(28.9)	3.3	にぶい橙	黒	8C中頃	残存率約1/4 皿A 平城宮III
387	194	97	161流路	土師器皿	(22.7)	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/3 皿A 平城宮III
388	194	97	161流路	土師器皿	(22.2)	(2.8)	橙	橙	8C中頃	残存率約1/5 皿 平城宮III
389	194	97	161流路	土師器皿	(21.2)	2.4	灰褐	灰褐	8C中頃	残存率約1/10餘 皿A 平城宮III
390	194		161流路	土師器皿	(24.6)	(2.6)	にぶい黄橙	にぶい褐	8C中頃	残存率約1/10 皿B 平城宮III
391	194	97	161流路	土師器皿	(28.9)	3.0	灰白・黄灰	灰白	8C中頃	残存率約1/5 皿B 平城宮III
392	194		161流路	土師器皿	(29.0)	2.0	にぶい褐・灰黄褐	黒	8C中頃	残存率約1/10 皿A 平城宮III～IV
393	195		161流路	土師器皿	(20.5)	2.5	黒・にぶい褐	黒褐	8C後半	残存率約1/5 皿A 平城宮III～IV
394	195		161流路	土師器皿	(21.5)	(2.6)	にぶい黄橙・暗灰	にぶい黄橙	8C後半	残存率約1/5 皿A 平城宮III～IV
395	195		161流路	土師器皿	(21.8)	2.6	灰黄	にぶい黄橙	8C中頃	残存率約1/4 皿A 平城宮III～IV
396	195		161流路	土師器皿	(25.1)	(2.8)	浅黄橙	浅黄橙	8C中頃	残存率約1/10以下 甕? (平城IV ～V)
397	195	97	161流路	土師器甕	(8.0)		にぶい橙	にぶい橙	8C後半	残存率約1/4 甕A? 平城宮III
398	195	97	161流路	土師器甕	(11.0)		にぶい黄橙・黄灰	にぶい黄橙・褐灰	8C中頃	残存率約1/10 椀C 平城宮III～IV
399	195		161流路	土師器鉢	(14.3)		にぶい黄橙	にぶい橙	8C後半	残存率約1/10 鉢 平城宮III～
400	195	97	161流路	土師器鉢	(15.7)	(6.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C中頃～	残存率約1/5 鉢A 平城宮IV
401	195	97	161流路	土師器鉢	(23.0)	12.6	暗灰・灰褐	暗灰	8C後半	残存率約1/10 鉢A 平城宮III～IV
402	195	97	161流路	土師器鉢	(15.5)		灰黄褐	にぶい黄橙	8C後半	残存率約1/10 鉢 平城宮III～
403	195		161流路	土師器鉢	(19.3)	(6.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C中頃～	残存率約1/10餘 鉢 平城宮(III ～?)IV
404	195		161流路	土師器鉢	(21.4)		灰褐・黒	黒	8C後半	残存率約1/10以下 鉢 平城宮III～
405	195	97	161流路	土師器鉢	(32.6)		褐灰	黒褐	8C中頃～	残存率約1/10 鍋B 平城宮III～
406	195	97	161流路	土師器取手付鉢	(21.2)		にぶい黄橙	灰白	8C後半	残存率約1/3 甕A 平城宮III～V
407	195	97	161流路	土師器甕	16.2	(13.4)	灰黄	灰黄	8C後半	残存率約4/5 甕A
408	195	97	161流路	土師器甕	(23.5)		にぶい橙	にぶい橙	8C	残存率約1/5 甕A 平城宮III～IV
409	195	97	161流路	土師器甕	(22.4)		灰黄褐	灰黄褐・黒褐	8C中頃	残存率約1/10以下 甕A 平城宮III ～
410	195		161流路	土師器甕	(24.2)		橙	浅黄橙・にぶい褐	8C中頃～	残存率約1/10 甕C 平城宮III～
411	196		161流路	土師器甕	(13.3)		にぶい橙・黒褐	橙・灰褐	8C中頃～	残存率約1/10 甕C 平城宮III～
412	196		161流路	土師器甕	(15.4)		褐灰	にぶい橙	8C中頃～	残存率約1/5 甕A 平城宮III～IV
413	196		161流路	土師器甕	(15.0)		橙・にぶい黄橙	橙・にぶい黄橙	8C後半	残存率約1/10 甕 平城宮III～V
414	196	97	161流路	土師器甕	(16.4)		黄灰	黄灰	8C中～後半	残存率約1/4 甕A
415	196	97	161流路	土師器甕	(22.3)		灰黄褐	灰黄褐	8C	残存率約1/10 甕 平城宮III～V
416	196		161流路	土師器甕	(20.2)		暗灰・褐灰・灰褐	暗灰・褐灰・灰褐	8C中～後半	残存率約1/5 甕C 平城宮III～
417	196		161流路	土師器甕	(23.7)		褐灰	黒・褐灰	8C中頃～	残存率約1/10 甕A 平城宮IV～V
418	196		161流路	土師器甕	(21.4)		黒褐・灰褐	黒	8C後半	残存率約1/10 甕A 平城宮III～IV
419	196		161流路	土師器甕	(23.0)		浅黄	にぶい黄橙	8C後半	残存率約1/10餘 甕A
420	196	97	161流路	土師器甕	(26.4)		淡橙・褐灰	淡橙・褐灰	8C	残存率約1/3 甕A 平城宮III～
421	196		161流路	土師器甕	(23.7)		褐灰	褐灰	8C中頃～	残存率約1/10 甕C
422	196		161流路	土師器甕	(30.2)		灰黄	灰黄	8C	残存率約1/4 鍋A 平城宮IV～V
423	196	98	161流路	土師器鍋	(29.2)		にぶい浅黄	浅黄	8C後半	残存率約1/5 甕B 平城宮III～V
424	196		161流路	土師器取手付甕	(23.9)		灰黄褐	灰白	8C中頃	残存率約1/10以下 生駒西麓産羽 釜 平城宮IV～V
425	196	98	161流路	土師器羽釜	(29.2)		にぶい褐	にぶい褐	8C後半	残存率約1/10以下 生駒西麓産羽 釜 平城宮III～V
426	196	98	161流路	土師器羽釜	(27.0)		灰黄褐・黒	黒褐・黒	8C後半	残存率約1/8 生駒西麓産羽釜 平 城宮IV～V
427	196	98	161流路	土師器羽釜	(24.4)		灰褐	灰褐	8C後半	残存率約1/10 墨画あり 杯A 平城 宮III
428	197	98	161流路	土師器杯	(15.4)	3.4	灰白	灰黄	8C中頃	残存率約1/2 墨画
429	197	98	161流路	土師器鉢	-	-	暗灰黄	灰黄		小片 墨画
430	197	98	161流路	土師器甕	-	-	オリブ黄	灰オリブ		小片 墨画
431	197	98	161流路	土師器甕	-	-	灰黄	灰黄		小片 墨書
432	197	98	161流路	土師器杯	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙		小片 墨書 杯A 平城宮IV～V
433	197	98	161流路	土師器杯	(13.6)	2.2	橙	橙	8C後半	残存率約1/2 墨書 杯A 平城宮III
434	197	98	161流路	土師器杯	(18.8)	3.5	にぶい橙	にぶい橙	8C中頃	残存率約1/3 墨書
435	197	98	161流路	土師器杯	-	-	にぶい黄褐	にぶい黄褐		残存率約1/10 裾部

(その7) 出土遺物一覧表⑧

遺物番号	図番号	図版番号	遺構・層位等	器種	口径 cm	器高 cm	外面色調	内面色調	時期	特徴
436	197		161流路	移動式竈	-	-	にぶい黄橙・赤褐	褐・黒褐		平城宮V～VI
437	197	99	161流路	土師質模倣型甗	10.0	7.5	灰黄	灰黄	8C末～9C初	残存率約1/3 生駒西麓産羽釜 平城宮III～V
438	197		161流路	土師器羽釜	(24.4)		にぶい褐・黒	にぶい褐・黒褐	8C後半	残存率約1/10以下 墨画 平城宮VI
439	197	99	161流路	土師器甗	(15.2)		黄灰	灰白	8C末～9C初	残存率約1/10 人面墨画 甗A 平城宮V～VI
440	197	98	161流路	土師器甗	-		にぶい黄橙	にぶい黄橙	8C末～9C初	残存率約1/10強
441	197	99	161流路	尖頭器					先端部のみ	甗B 平城宮VI
442	197	99	3面上 土器3	土師器把手付甗	(17.1)	13.2	浅黄橙	浅黄橙	8C末	残存率約1/2
443	197		190流路	須恵器甗	(20.5)		灰	灰	8C(奈良)	残存率約1/4 甗A
444	197		190流路	土師器甗	(22.1)		にぶい黄橙	浅黄橙	8C(奈良)	残存率約1/4
445	197	99	190流路	須恵器杯蓋	9.8	3.6	灰白	灰	7C	残存率約3/4
446	202	99	回み(第5面)	土師器高杯	(22.0)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	布留	残存率約1/3 小型丸底壺
447	202	99	196溝	土師器壺	8.0	8.1	にぶい黄橙	灰白	布留	ほぼ完形
448	202		193溝	土師器壺			浅黄橙	浅黄橙		
449	202	100	192土坑	長頸壺					弥生時代後期	
450	202	100	192土坑	広口壺					弥生時代後期	
451	202	100	192土坑	広口壺					弥生時代後期	
452	202	99	第5層	石鏃					縄文時代	サヌカイト
500	-	74	第1層洪水砂	土師器杯						
501	-	88	141溝	丸瓦					中世	玉縁式
502	-	88	8溝	平瓦					中世	
503	-	91	149回み	土師器甗					8C末～9C初頭	墨画
504	-	100	149回み(上層)	埴輪					古墳時代	
505	-	100	149回み	埴輪					古墳時代	馬か
506	-	100	回み(第5面)	埴輪岩見型盾					古墳時代	
507	-	101	8溝(下層)	埴輪人物					古墳時代	人物埴輪の右部分
508	-	101	8溝(下層)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
509	-	101	落ち込み内	埴輪					古墳時代	器財埴輪
510	-	101	落ち込み内	埴輪					古墳時代	器財埴輪
511	-	101	落ち込み内	埴輪					古墳時代	器財埴輪
512	-	101	落ち込み内	埴輪					古墳時代	器財埴輪
513	-	101	落ち込み内	埴輪					古墳時代	器財埴輪
514	-	101	8溝(下層)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
515	-	101	回み(第5面)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
516	-	101	回み(第5面)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
517	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
518	-	101	回み(第5面)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
519	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
520	-	101	回み(第5面)	埴輪					古墳時代	器財埴輪
521	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
522	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
523	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
524	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	器財埴輪
525	-	101	149回み	埴輪					古墳時代	円筒埴輪
526	-	101	161流路	埴輪					古墳時代	円筒埴輪
527	-	101	161流路	製埴土器						
528	-	101	161流路	製埴土器						
529	-	101	161流路	製埴土器						
530	-	101	161流路	製埴土器						
531	-	101	161流路	製埴土器						
532	-	101	161流路	製埴土器						
533	-	101	161流路	製埴土器						
534	-	101	161流路	製埴土器						
535	-	101	161流路	製埴土器						
536	-	101	161流路	製埴土器						
537	-	101	161流路	製埴土器						

第5章 まとめ

本書では（その5）（その6）（その7）の調査成果を述べてきた。これら大和川今池遺跡の調査については、当センターが（その1）（その2）（その3）として行った延長部分に当たる。大和川左岸側の河川敷部分を西から順に東へと調査を行ってきたものであり、総延長は約600mとなる。

大和川今池遺跡は、地形的に見ると現在の狭山池付近から北に向かって扇状に大きく開く地形の中に位置する比較的不安定な地域と言える。今回の調査地内の微地形を観察すると「微高地」部分と、「氾濫原」から徐々に安定化した「平地」部分に大きく分けることができる。「微高地」部分は扇状に大きく開く地形の中を縦横に走る河川によって形成された自然堤防状の高まり、「平地」部分は「氾濫原」から狭山池の築造、改築の中で扇状地が徐々に安定し、平地化され耕作地として土地利用される過程を読み取る事ができる。

このような自然地形によって制約された中での、大和川今池遺跡の変遷を今回の調査成果を基に、時代順にまとめる事とする。

まず自然堤防状の微高地部分での変遷を概略する。

古墳時代では、竪穴住居1棟を検出している他、微高地の縁辺に当たると考えられる所から6世紀前半の小規模な方墳を1基検出している。既往の調査や今回の調査でも、円筒埴輪・形象埴輪・器財埴輪の破片が各層や流路内から多数出土しており、この方墳が検出されたことによりより一層、埴輪を伴う規模の古墳が周辺に位置している可能性が高くなった。

その後、微高地上には、奈良時代末頃と考えられる掘立柱建物も検出されているが、主に平安時代～鎌倉時代・室町時代までの掘立柱建物が多数検出されている。鎌倉時代には、この掘立柱建物が廃絶し、新たに方形に区画する溝が掘削され、その中に礎石建ちの建物が検出されている。やがて礎石建ちの建物も廃絶し、区画溝も埋められて行くが、溝の埋土中からは多数の軒瓦や丸平瓦、鬼板、雁振瓦が出土し、日常雑貨である瓦質・土師質の羽釜や播鉢・甕と共に、輸入陶磁器も比較的多く出土している。また、鋳造関連の遺物も出土しており、規模は不明であるが何らかの鋳造施設が存在していた可能性が考えられる。

このような、微高地上の建物の変遷に伴って、「氾濫原」から徐々に安定化した「平地」でも、湿地の様相を示す状態から開発の手が入り、耕作地化されて行く過程が見られる。

古墳時代に対応する面では、まだ湿地の様相を示しており、自然地形と思われる不定形の土坑や、細かな流れの跡の他、平安時代まで地形に影響を及ぼす蛇行する流路が検出されている。自然地形の他にも、出土遺物から古墳時代前期と考えられる、人工的に掘削された溝も検出している。

また、弥生時代後期の壺や甕が出土した土坑を1基検出している事から、弥生時代後期にも人間の活動が行われた事が示唆できる。

奈良時代中頃には蛇行する流路が存続しながら、この流路内に数カ所土器がまとめて投棄されている。また、別の流路内からは、牛の骨が出土しており、殺牛殺馬に係る祭祀が行われていた事も想定できよう。

奈良時代末～平安時代初頭若しくは、それよりやや以前の時期に相当する水田が検出されており、「氾濫原」から徐々に安定化した「平地」は生産域として積極的に利用されていたことがわかる。

水田の畦畔は、現在地図上で見られる地割り方向と異なり、やや東へ振っている事から、地形に即した地割りを行っているのか、それとも古い段階の地割りの方向を示しているのか、今後の検討課題であろう。

この時期には蛇行する流路が砂等で埋没しながらも存続しており、後の洪水砂で本来の姿を止めていない水路と共に水田へ水を供給していたと考えられる。やがて大規模な洪水による砂で、蛇行する流路や水路、田面が埋没している。また、その前後と考えられる時期には、洪水砂で埋没した流路から人面墨画土器、穿孔土器、模型竈・甌が出土しており、これらの遺物に関する祭祀が行われていたと考えられる。

平安時代中頃～鎌倉・室町時代に入ると、正方位にのる畦畔が検出される水田となる。以後、大和川が付け替えられるまで地割りを踏襲しながら耕作地として利用され、付け替え後は河川敷内の耕作地として大和川に並行・直交する畦畔を設けて利用されている。室町時代頃には盛んに井戸が造られており、耕作の形態が変わったのか、水の供給に変化が起こった可能性が考えられる。

以上、調査成果を概観してきたが、土地利用に関して居住域としての微高地の利用と、「氾濫原」から徐々に安定化した「平地」の生産域としての利用の大きく2つの形態が、軌を一にしながら移り変わっている景観が今回の調査から読み取れた。

また、当遺跡の耕地開発は奈良時代に行われ、その後狭山池の改修と共に旧西除川が安定し、水の供給も安定したことにより、さらに大規模な開発が平安時代中～後期頃を画期として行われた事が考えられる。いずれも土地の開発に伴う、居住域は微高地上で検出された建物群が関係していると考えられる。

今回調査した（その5）（その6）（その7）は、旧西除川の影響が、地形の形成だけではなく土地開発にも大きく影響を与えていることが想定でき、さらにそれは狭山池の築造によることが大きいのであろう。

第6章 考察

1 大和川今池遺跡出土の石器の石種とその産地

奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員）

大和川今池遺跡から出土した石器の石材を肉眼で観察した。石種は流紋岩A、流紋岩B、黒雲母流紋岩、白雲母流紋岩、黒曜石、柘榴石黒雲母安山岩、輝石安山岩A、輝石安山岩B、橄欖石安山岩、花崗斑岩A、花崗斑岩B、ひん岩、細粒砂岩、礫質砂岩、片麻状黒雲母花崗岩、変輝緑岩、石英質片岩、絹雲母片岩、紅柱石ホルンフェルス、鉱物種は滑石である。また、珪藻土についても観察した。観察した石種・鉱物種・土の特徴と推定される採石地について述べる。

流紋岩A：加工石297 407 砥石96 自然石375 409 色は暗灰色である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5～3 mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色、淡桃色で、粒径が0.5～2 mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状、粒状で、粒径が0.3～0.5mm、量が僅かである。石基は黒色、ガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。産地不明。

流紋岩B：自然石381 445 408 色は灰色で、礫形が亜円である。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は無色透明、粒径が0.5～3 mm、量が多い。長石は淡桃色、粒径は1～4 mm、量が中である。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は榎尾川の上流に分布する流紋岩の岩相の一部に似ている。榎尾川の川原石にも同じような石がみられる。

黒雲母流紋岩：加工石0122 色は青灰色で、ガラス質の石である。黒雲母の斑晶がごくごく僅かに含まれる。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2mmである。

このような岩相を示す石を見聞していない。産地不明。

白雲母流紋岩：加工石185 自然石354 色は灰色で、ガラス質の石である。白雲母の斑晶が僅かに含まれる。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2mmである。

このような岩相を示す石を見聞していない。産地不明。

黒曜石：破片149 黒色透明である。

九州方面か長野方面か？

柘榴石黒雲母安山岩：自然石1490 色は灰色である。斑晶鉱物は長石、黒雲母、柘榴石である。長石は無色透明、短柱状で、粒径が1～1.5mm、量が中である。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が0.5～3 mm、量が中である。柘榴石は濃赤色、粒径が0.5mm、量がごくごく僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上層群中部ドンズルボー層に分布する石切場火山岩の岩相の一部に似ている。川原石様であることから、太子町付近の飛鳥川が採石地と推定される。

輝石安山岩A：割石285 122 668 706 1567 378 739 色は暗灰色で、板状節理が顕著である。節理の厚さは2～3 cmである。石英の捕獲晶がある。粒径が0.7mmである。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は無色透明、粒径が0.3～0.4mm、量がごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.3

～0.4mm、量が僅かである。石基は灰色、ガラス質で、細粒の長石が多い。

このような岩相を示す石は岩相的に羽曳野市の春日山に分布する春日山火山岩の岩相の一部に似ている。採石地としては石材に鋭い角があることから川原石というよりも春日山が推定される。

輝石安山岩B：割石484 0541 自然石0564 色は灰色で、微かに節理面がみられる。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が多い。輝石は黒色、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は榎尾川上流の鍋山に分布する輝石安山岩の岩相の一部に似ている。現在、鍋山の輝石安山岩は碎石として販売されている。

橄欖石安山岩：割石592 色は暗灰色である。斑晶鉱物は長石、輝石、橄欖石である。長石は褐色、短柱状で、粒径が0.2～0.5mm、量が中である。輝石は黒色と無色透明のものがある。黒色の輝石は粒状、粒径が0.3～0.7mm、量が僅かである。無色透明の長石は柱状で、粒径が0.3mm、量がごくごく僅かである。橄欖石は褐色透明、粒径が0.5～0.7mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は柏原市国分市場の芝山に分布する橄欖石安山岩の岩相の一部に似ている。角が鋭く残っていることから芝山で採石されたと推定される。

花崗斑岩A：299 色は灰白色で、礫形が亜角である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は淡桃色で、粒径が1～3mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～5mm、量が僅かである。石基は粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈の石にみられる。川原石様であり、採石地を限定し難い。

花崗斑岩B：割石0137 色は淡桃色である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は無色透明で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～6mm、量が僅かである。石基はやや粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈の石にみられる。採石地を限定し難い。

ひん岩：自然石1535 色は淡灰緑色である。石英の捕獲晶がある。石英は粒径が1～6mm、量がごく僅かである。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、粒径が0.5～3mm、量が中である。角閃石は暗灰緑色、粒径が0.5～5mm、量が中である。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。産地不明。

細粒砂岩：石臼388 砥石180 自然石298 600 色は灰色である。構成粒は流紋岩、石英、長石である。流紋岩は暗灰色、粒形が亜角、粒径が0.1～0.3mm、量が僅かである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1～0.3mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが僅かに見られる。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.1～0.3mm、量が多い。

このような岩相を示す石は岩相的に和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては泉南付近が推定される。

礫質砂岩：自然石188 376 色は褐色である。構成粒は花崗岩、流紋岩、石英、長石である。花崗岩は灰白色、粒形が亜角、粒径が0.5～0.6mm、量がごくごく僅かである。石英と長石が噛み合っている。流紋岩は暗灰色、粒形が亜角、粒径が0.2～4mm、量が中である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.6mm、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～0.5mm、量が中である。

このような岩相を示す石は岩相的に和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては泉南付近の海岸が推定される。

片麻状黒雲母花崗岩：割石141 色は灰色で、縞状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が 0.5mm 、量が非常に多い。長石は灰白色、粒径が 0.5mm 、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が 0.5mm 、量が中である。黒雲母が集合して脈状をなす。

このような岩相を示す石は、高安山から松尾丘陵にかけての付近、奈良市高円山付近、天理市竜王山付近等に広く分布している。何れの石とも決めがたい。

変輝緑岩：自然石1293 色は灰色である。斑晶鉱物は長石、角閃石、輝石である。長石は灰白色、粒径が $0.2\sim 4\text{mm}$ 、量が多い。角閃石は黒色、粒径が $0.2\sim 0.4\text{mm}$ 、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が $0.2\sim 0.5\text{mm}$ 、量が僅かである。

このような岩相を示す石は領家式花崗岩中に捕獲岩として含まれることが多い。奈良県明日香村から桜井市の南部にかけては比較的多くの捕獲岩が見られる。採石地は限定できない。

石英質片岩：自然石266 127 白色の円礫、亜角礫である。片理がみられる。

このような岩相を示す石は三波川帯の結晶片岩が分布する付近の海岸の礫に見られることがある。また、淡路島の五色ヶ浜の海岸にもみられる。

絹雲母片岩：192 色は灰色で、片理が顕著である。絹雲母は無色透明、板状で、粒径が $0.5\sim 1\text{mm}$ 、量が多い。

このような岩相を示す石は紀ノ川の流域や吉野川の流域に分布する絹雲母片岩の岩相の一部に似ている。

紅柱石ホルンフェルス：自然石274 加工石354 色は暗灰色で、片理が顕著である。紅柱石の斑晶が目立ち、片理に沿って絹雲母が並ぶ。紅柱石は暗灰色で、柱状、粒径が $5\sim 8\text{mm}$ 、量が僅かである。絹雲母は無色透明、板状で、粒径が $0.1\sim 0.2\text{mm}$ 、量が非常に多い。

このような岩相を示す石は岩相的に京都府笠置町和東付近や亀岡市付近に分布するホルンフェルスの岩相の一部に似ている。採石地としては木津川や淀川の川原が推定される。

滑石：加工片0536 色は暗灰緑色である。

滑石は和歌山市東部の貴志川流域や兵庫県相生市大泊、同県養父群八鹿町等の蛇紋岩中に脈状に産する。産地は限定できない。

珪藻土：252 色は白色である。円形の珪藻が僅かであるがみられる。

このような土は能登半島の北部に見られる珪藻土に似ている。

2 大和川今池遺跡出土の埴輪の表面に見られる砂礫

奥田 尚 (奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員)

大和川今池遺跡から出土した埴輪の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。観察は始めに埴輪の表面全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察した埴輪片は僅か9片である。観察結果と推定される砂礫の採取地について述べる。

砂礫種について

埴輪の表面に見られる砂礫種は岩石片として花崗岩・流紋岩・チャート・火山ガラス、鉱物片として石英・長石・黒雲母・角閃石である。角砂礫の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大1mmである。石英と長石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色・灰色・暗灰色・褐色で、粒形が角・亜角、粒径が最大15mmである。石基はガラス質で、石英の斑晶があるものや溶結しているものがある。

チャート：色は灰色・黒色で、粒形が亜角・亜円、粒径が最大4mmである。

火山ガラス：無色透明で、粒径が最大0.3mmである。貝殻状やフジツボ状をなす。

石英：無色透明・赤色透明で、粒形が角、粒径が最大1.5mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色で、粒形が角、粒径が最大2mmである。

黒雲母：金色、板状、粒状で、粒径が最大2mmである。

角閃石：黒色や褐色で、粒形が角、粒径が最大0.2mmである。粒状や柱状をなし、自形をなすものもある。

砂礫構成について

遺跡付近の地層の砂礫構成を基に類型に区分すれば、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする4類型のみであり、更に細区分すれば、4a類型、4an類型、4eg類型、4n類型となる。各砂礫構成の特徴について述べる。

4a類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

表22 大和川今池遺跡出土の埴輪の表面に見られる砂礫

試料番号	器種	岩														鉱物										海綿の骨片	類型		
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石				輝石	
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	L・中	L・微	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			裸眼	30倍
(その5) 403底部	円筒埴輪					L・中	L・微											M・微	M・中	L・微	M・微							S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 404	円筒埴輪					L・中	L・微					L種	亜角					M・微	M・中	M・種	M種							S微	I Veg 和泉丘陵
(その5) 403口縁	円筒埴輪					L・中	L・微											M種	M・微	M・中	M・種	S種						S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 415	円筒埴輪					L・中	L・多											S種	M・中	M・微	M種	M・種	M種					S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 410	円筒埴輪	M種	L・種			M・微	L・中											M・微	M・中	M・微	M・種	M種					S種	I Va 和泉丘陵	
(その5) 397	器形埴輪		M種			L・微	M種											M・微	M・中	M・微	M種	S種						S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 398	器形埴輪		M種			L・微	M種											M・微	M・中	M・微	M種	M種						S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 399	器形埴輪		L種			L・微	L・微											M種	M・微	M種	M種	M種	M種					S種	I Va 和泉丘陵
(その5) 400	器形埴輪		L種			L・微	L・微											M・微	M・微	M・種	L・微	M・微	M種					S微	I Va 和泉丘陵

裸眼=裸眼観察 30倍=30倍実体顕微鏡による観察 L=粒径が2mm以上 M=粒径が2mm未満0.5mm以上 S=粒径が0.5mm未満 非=量が非常に多い 多=量が多い 中=量が中 微=量が僅か 種=量がごく僅か 種=量がごく僅か 30倍=実体顕微鏡の倍率が30倍 実体顕微鏡による観察 L=粒径が1mm以上 M=粒径が1mm未満0.3mm以上 S=粒径が0.3mm未満 =以下の粒径がある E=自形 W=白雲母が含まれる フ=フジツボ状 試料番号は報告書の番号と同じ 類型区分は奥田の区分(1992,『出内式土器研究II』)を参照 試料番号(その5)403が2点あるのは、2破片が個別観察後に接合したことによる。

このような砂礫は砂礫相的に泉北丘陵の北部付近の砂礫に似ている。

4 an類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫や他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は砂礫相的に泉北丘陵の北部付近の砂礫に似ている。

4 eg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートの砂礫や自形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は砂礫相的に泉北丘陵の北部付近の砂礫に似ている。

4 n類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は砂礫相的に泉北丘陵の北部付近の砂礫に似ている。

以上のように埴輪の表面に見られる砂礫構成から砂礫の採取地を推定すれば、全ての埴輪が泉北丘陵北部付近が推定される。

3 大和川今池遺跡（その5・6）発掘調査にかかる種実同定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント(株)）

はじめに

本報は、大阪府文化財調査研究センターが、遺跡周辺の古植生、堆積環境などの推定を目的として川崎地質株式会社に委託して実施した委託分析業務報告書を、渡辺がまとめ直したものである。

また、大和川今池遺跡は大阪府大阪市、堺市、松原市の市境に立地する遺跡であり、今回の調査地点は大阪市東住吉区矢田に位置する。

試料について

今回の分析試料は全て、大阪府文化財調査研究センターの提供を受けたものである。試料採取地点のうち、竪穴住居の位置、および試料「D」の採取地点を図1に示す。また遺構500の位置を図2に、遺構500に関する分析試料①～⑫の採取位置を図3に示す。

処理・観察方法

試料約300～500ccを約5%のNaOH水溶液に浸して1～2日放置し、試料を泥化させた。さらに0.5mmの篩いを通して残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の抽出、同定を行った。

種実同定結果と記載

種実同定の結果を表1に示す。遺構500からは種子（実）を主とする植物遺体が26種類同定された。また、縦穴住居の試料No. Dからは、植物遺体が全く検出できなかった。

以下に同定を行った種類の形態的特長を示す。

① カラスザンショウ属 (*Fagala*) ミカン科

果実が検出された。黒褐色。大きさは3mm程度。楕円形。表面には粗い亀甲状の網目模様がみられる。

② ブドウ科 (*Vitaceae*)

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。やや縦に長い心臓形であると考えられるが、破損し腹面の1/2（全体の1/4）が残る。腹面には中央に縦筋が走り、その脇は楕円形に深くくぼんでいる。

③ ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。心臓形であると考えられるが、破損し背面を中心としたおよそ1/3が残る。背面中央に「さじ」状の「へそ」が顕著であり、「へそ」回りはくぼんでいる。

④ ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.) ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。黒色、ほぼ球形で大きさは4mm程度。背面には「さじ状」の「へそ」がある。種皮は厚く硬い。

⑤ イバラモ属 (*Najas*)

種子が検出された。大きさは3mm程度。黒褐色で細長く、両端はやや丸い。表面は柔らかくて弾力があり、縦長の細胞が密に配列する。

⑥ ミクリ属 (*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。大きさは3 mm程度。側面観は紡錘形で、上面観は多角形状である。表面はざらつく。やや堅くて弾力があり、数本の筋が走る。先端部が鋭くとがっていたと思われるが、欠損している。

⑦ サジオモダカ属 (*Alisma*) オモダカ科

果実が検出された。倒卵形で大きさは2 mm程度。果皮は淡褐色でわらかい。種子は入っている部分は欠損している。

⑧ オモダカ科 (*Alismataceae*)

種子が検出された。U字形で大きさは2 mm程度。淡褐色でわらかい。表面はざらつく。

⑨ スプタ近似種 (*Blyxa* cf. *echinosperma* (Clarke) Hooker) トチカガミ科スプタ属

種子が検出された。楕円形で大きさは1 mm程度。表面薄くて柔らかく、微細な突起がある。両端に刺状の突起がある。

⑩ イネ科 (*Gramineae*)

穎が検出された。淡褐色、楕円形で大きさ2 mm程度。表面は柔らかくて薄く、弾力がある。

⑪ カヤツリグサ科 (*Cyperaceae*)

果実が検出された。褐色で側面観は円形、上面観は凸レンズ状。大きさは2 mm程度。表面は薄くてやや堅く、ざらつく。先端が急に細くなって尖る。

⑫ スゲ属 (*Carex*) カヤツリグサ科

果実が検出された。大きさは1~2 mm程度。褐色、倒卵形で、先端部は細くなる。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

⑬ ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒色。堅く光沢がある。大きさは2 mm程度。偏平で背面が高く稜になっている。腹面は平らである。片凸レンズ状の広倒卵形。先端部はとがり、基部はせばまって「へそ」がある。表面には細かい凹凸があり、横軸方向に平行な横しわがあるように見える。数本の針状の花被がみられ、先端には逆刺がある。

⑭ イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰色、不定形で、大きさは1 mm程度。種皮はやや柔らかい。くぼんだ発芽孔が存在し、その側面には一文字のくぼみがあり、それに直行するしわ模様が存在する。表面には円形の小孔が多数存在する。

⑮ ミズアオイ属 (*Monochoria*) ミズアオイ科

種子が検出された。長楕円形で大きさは1 mm程度。種皮には網脈がある。表面は薄くて柔らかく、透き通る。

⑯ タデ属 (*Polygonum*)

果実が検出された。大きさは2 mm程度。3 稜形で表面は薄くて堅く、ざらつく。

⑰ サナエタデ近似種 (*Polygonum lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実が検出された。黒褐色で大きさは2 mm程度。偏平な円形で、両側面は少しくぼむ。果皮は平滑で光沢があり、薄く堅い。

⑱ アカザ科—ヒユ科 (*Chenopodiaceae—Amaranthaceae*)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1 mm程

度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

⑲ ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。黒色で、大きさは1 mm程度。表面には荒い突起が密に配列している。

⑳ ウマノアシガタ近似種 (*Ranunculus cf. japonica* Thunb.) キンボウゲ科キンボウゲ属

果実が検出された。大きさは2 mm程度。倒卵円形、淡褐色で、扁平。表面は薄くて柔らかく、ざらつく。花柱は短く突出する。

㉑ キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (*Potentilla—Duchesnea—Fragaria*) バラ科

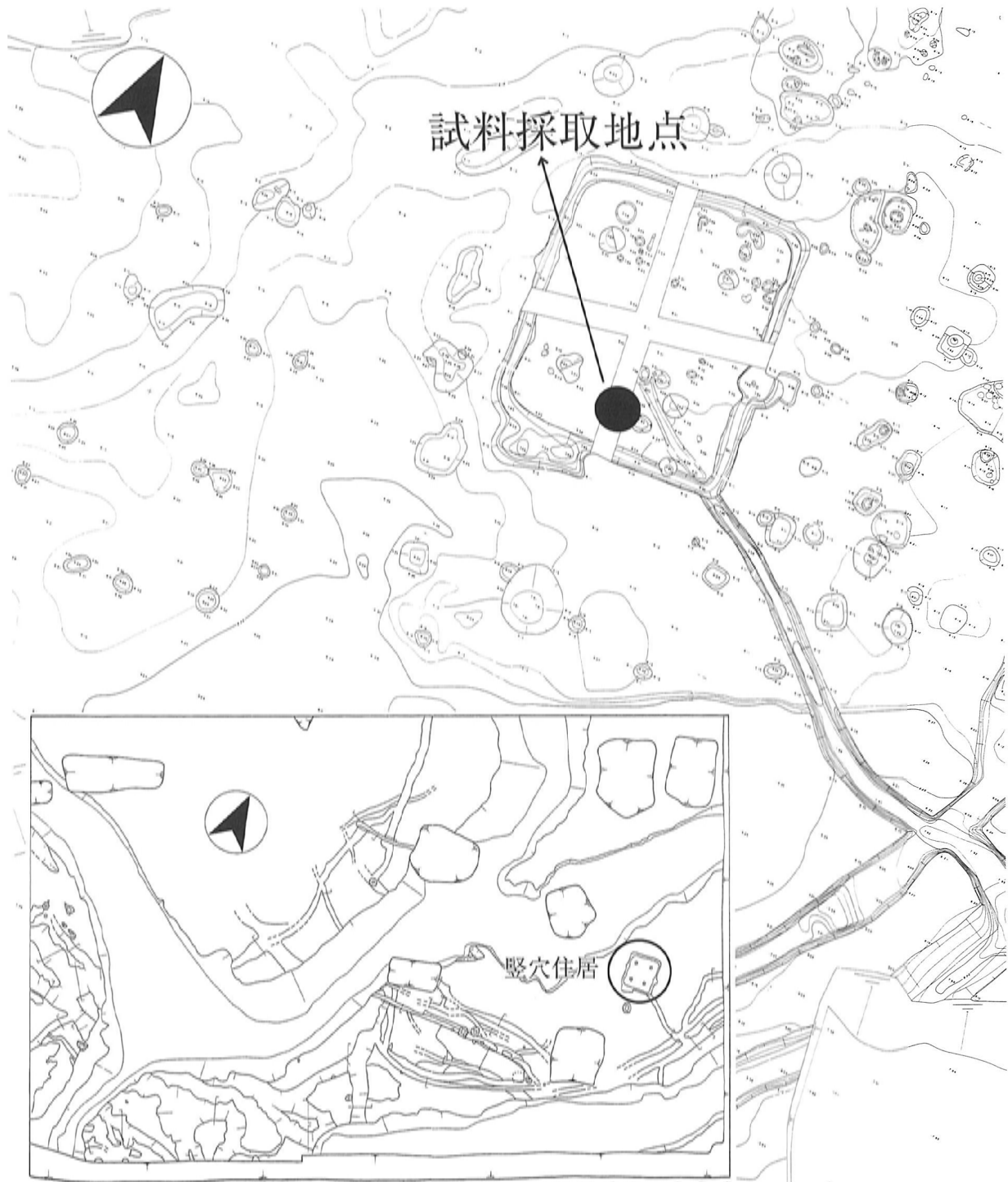


図204 竪穴住居の位置と試料「D」採取地点

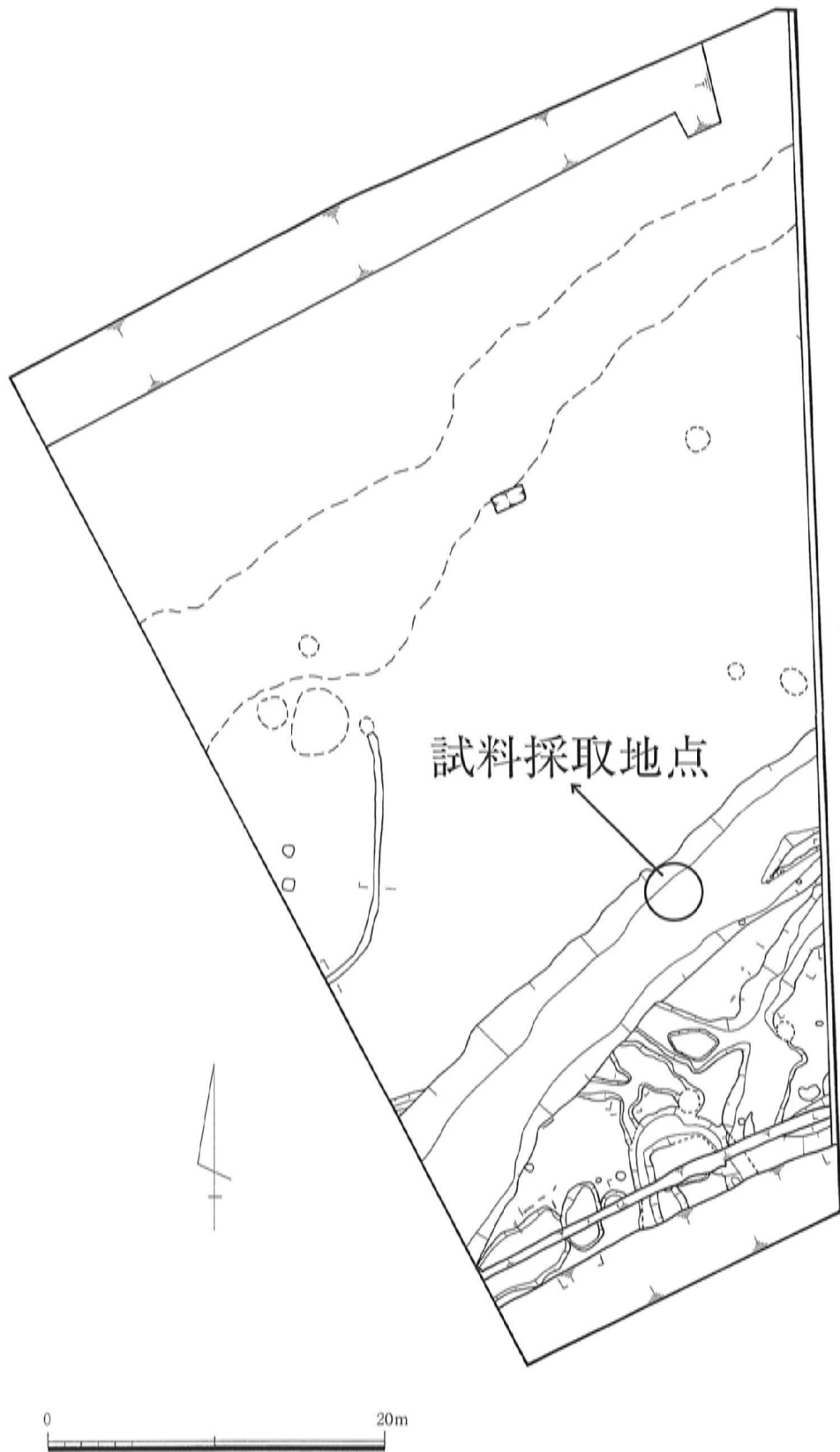


図205 南側川（遺構500）の位置

種子を検出された。褐色。大きさは、2 mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体はすじ状の模様があるが、不鮮明である。

② カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子の破片が検出された。黒色、楕円形で大きさは約1.5mm。表面には横軸方向に平行に溝が数本走っている。

③ オトギリソウ属 (*Hypericum*) オトギリソウ科

種子を検出された。長楕円形で大きさは1 mm程度。種皮は黒色で薄く、柔らかい。表面は亀甲状の模様がある。

④ メハジキ属 (*Leonurus*) シソ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。灰褐色、くさび形で大きさは2 mm程度。3稜があり、先端部はとがる。表面はやや堅く、ざらつく。

⑤ イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。褐色。大きさは1.5mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

⑥ ナス科 (*Solanaceae*)

種子を検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは1 mm程度。褐色。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、畝は波うっている。

考察

検出された種実の多くは草本（特に水生植物や、水生植物を多く含む種類が多い）に由来する。検出された水生植物あるいは水生植物を多く含む種類には、イバラモ属、ミクリ属、サジオモダカ属、スブタ近似種、スゲ属、ホタルイ属、イボクサ、ミズアオイ属、サナエタデ近似種、ウマノアシガタ近似種、オトギリソウ属があり、調査地近辺あるいは上流には沼沢地的な環境があったと考えられる。特に、水田や溜め池これらに伴う水路など、水深が浅く、比較的富栄養な水域を示唆する。

遺構500は平安時代に埋まったと考えられており、大和川今池遺跡内で設定されている地域花粉帯のⅢ帯（渡辺、2000）の時期がこれに相当する。Ⅲ帯は前後の地域花粉帯と花粉の出現傾向が大きく異なり、エノキ属－ムクノキ属花粉が局地的に高率を示すほか、イネ科（40ミクロン以上）花粉は低率を示す。また、今回検出された植物遺体のうち木本は低木やつる性のものがほとんどであった。したがって、奈良時代末ころまでは調査地近辺は水田であったと考えられる（渡辺、2000）が、平安時代には景観が一変して草本や低木を中心とし、局地的にエノキ属－ムクノキ属が生育する荒地が広がった可能性がある。

一方で、遺構500の性格および周囲の土地利用について、発掘調査の成果を踏まえて再考する必要がある。「荒地」と考えたものの、人家近くの草地あるいは庭園？の一部などであった可能性も否定はできない。

まとめ

- 1) 13試料を対象とした種実分析の結果、11試料から延べ26種類の種実を検出できた。
- 2) 種実分析の結果および既知の花粉分析結果を基に、遺構500の性格、および調査地近辺の古環境を

推定した。

①遺構500近辺あるいは上流には沼沢地的な環境があったと考えられる。特に、水田や溜め池これらに伴う水路など、水深が浅く、比較的富栄養な水域を示唆する。

②遺跡近辺には、草本や低木を中心とし、局地的にエノキ属-ムクノキ属が生育する荒地が広がった可能性がある。

引用文献

渡辺正巳(2000)大和川今池遺跡(その1~4)発掘調査に係る微化石分析,大和川今池遺跡(その1・2)-大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書1-,(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書53,295-317.

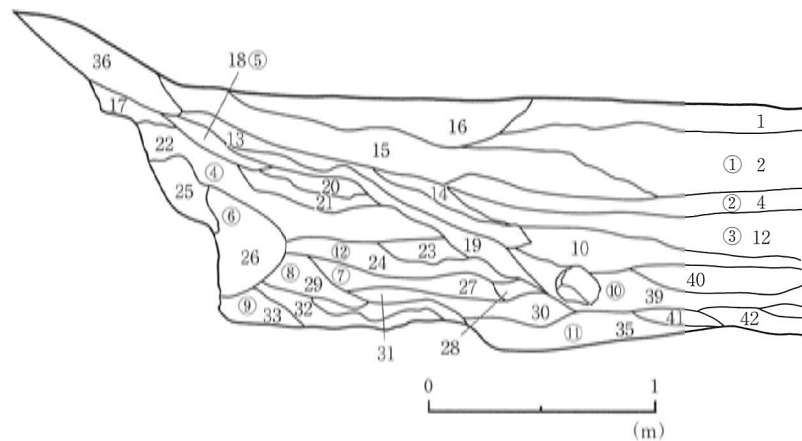
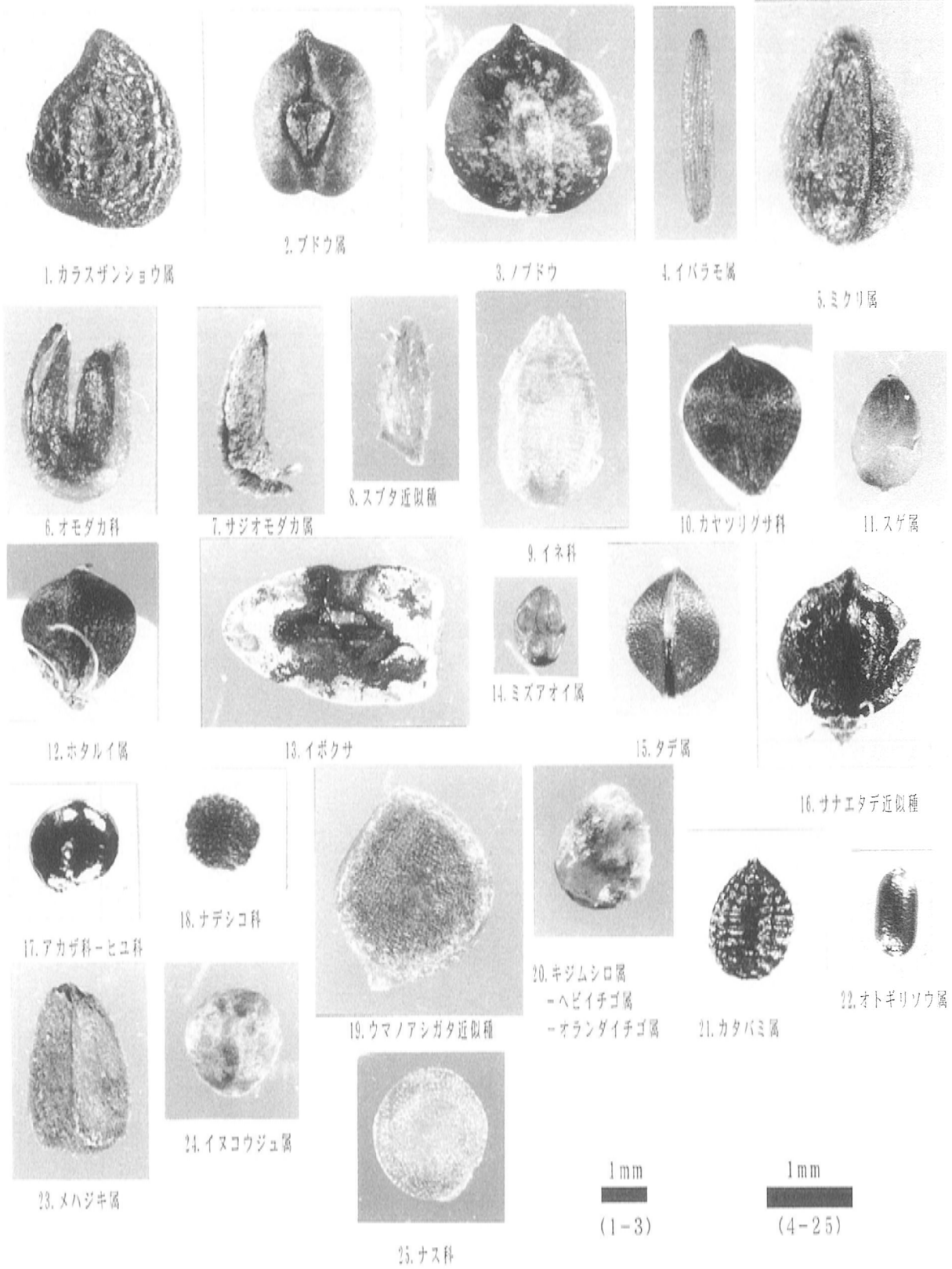


図206 南側川(遺構500)断面図と試料採取位置

表23 大和川今池遺跡種実組成表

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	D
1 カラスザンショウ属					2								
2 ブドウ科								1					
3 ブドウ属					1								
4 ノブドウ				1									
5 イバラモ属							2		3		1		
6 ミクリ属									1				
7 オモダカ科							1	1	3	3	1		
8 サジオモダカ属									1				
9 スブタ近似種							1	1		1			
10 イネ科				1									
11 カヤツリグサ科	1		5	8			14	4	6				
12 スゲ属	1						12		5	9		3	
13 ホタルイ属	1			2				4	8	2		3	
14 イボクサ			2										
15 ミズアオイ属							1						
16 タデ属							2		14	5	7	1	
17 サナエタデ近似種							8						
18 アカザ科-ヒユ科				1			59						
19 ナデシコ科							3			1			
20 ウマノアシガタ近似種					2					1			
21 キリシロ属-ヒキイコ属-オランダイコ属			1										
22 カタバミ属				3	2			1					
23 オトギリソウ属							1	4	5		4	1	
24 メハジキ属							5					1	
25 イヌコウジュ属				5			2		3	1	4	5	
26 ナス科							1		1	1			
不明	0	3	3	17	8	0	2	6	6	4	9	4	0
種実総数	3	3	11	44	13	0	114	22	56	27	26	18	0



1. カラスザンショウ属

2. ブドウ属

3. ノブドウ

4. イバラモ属

5. ミクリ属

6. オモダカ科

7. サジオモダカ属

8. スプタ近似種

10. カヤツリグサ科

11. スゲ属

12. ホタルイ属

13. イボクサ

9. イネ科

14. ミズアオイ属

15. タデ属

16. サナエタデ近似種

17. アカザ科-ヒユ科

18. ナデシコ科

20. キジムシロ属
-ヘビイチゴ属
-オランダイチゴ属

21. カタバミ属

22. オトギリソウ属

23. ヌハジキ属

24. イヌコウジュ属

19. ウマノアシガタ近似種

25. ナス科

1mm
—
(1-3)

1mm
—
(4-25)

写真2 種実化石顕微鏡写真

4 大和川今池遺跡（その7）出土のウシについて

安部みき子（大阪市立大学大学院医学研究科）

大和川・今池遺跡の8世紀から9世紀後半の自然河川の包含層から出土した動物遺体は、同定できた出土骨の全てがウシであり、出土層が同じで出土部位が重複していないため同一個体の可能性がある。出土骨の保存状態は非常に悪く、ピビアナイトにより骨の層版が剥離しているため、骨表面にみられる解体痕や殺傷痕などは不明である。出土部位を表1に、骨計測値を表2と3に示した。

同定できた部位は頭蓋骨、下顎骨、肩甲骨、上腕骨、中手骨と大腿骨で、そのうち計測できた部位は上顎臼歯列と個々の臼歯、下顎骨および臼歯列と個々の臼歯、遊離した左上顎第3小白歯と中手骨である。計測値は吹田市五反島遺跡のウシ（中世）と、現生の見島牛（体高約116cm）ならびに黒毛和牛のメスとを比較した。

上顎では第2大臼歯と第3大臼歯を五反島遺跡のものと比較すると、いずれの計測値も五反島遺跡の平均値に近く大きさの範囲内である。下顎大臼歯列長は五反島遺跡の平均値が88.6mmであるのに対し本遺跡のものは91.0mmとわずかに大きい、小白歯列長は本遺跡のものが51.8mmであり五反島のものが52.4mmと本遺跡の方がわずかに小さい。個々の臼歯も大臼歯は本遺跡のものの方が大きい、小白歯は小さく、臼歯列長の結果と同様の傾向にある。第1大臼歯で計測した下顎体高は本遺跡の方が五反島遺跡のものより約10mm大きい。中手骨の最大長は本遺跡のものが205.28mmであるのに対し、五反島遺跡のものは196mm、見島牛は188.0mm、黒毛和牛のメスが209.6mmであり、五反島遺跡や見島牛よりやや大きい、黒毛和牛のメスよりやや小さい。

今回出土したウシが祭祀に用いられたか食用に解体されたかについては、骨表面の解体痕が観察できなかったことや自然河川の包含層から出土していることから、判断は困難である。

(表24～26、図207、図版102)

参考文献

- 仙波輝彦 1960 長崎県壱岐島中期および後期弥生時代遺跡出土哺乳動物骨の研究。人類学研究 7(1-2): 190-233 P1. I～XII。
 茂原信生、桜井秀雄 1996 吹田市五反島遺跡出土獣骨。吹田市五反島遺跡発掘調査報告書-南吹田下水処理場増設に伴う発掘調査報告書-自然科学編、吹田市教育委員会：63-107

表24 動物遺体の出土表

資料番号	骨番号	種	出土部位		計測値および備考
			左右	部位	
187	1 ウシ	—	—	頭蓋骨	左上顎第4小臼歯～第3大白歯、右上顎第2小臼歯～第3大白歯まで釘植、計測値は別表
187	12 ウシ	—	左	下顎骨	切歯部と下顎枝破損、計測値は別表
187	18 ウシ	—	左	肩甲骨	肩甲棘周辺遺存
187	2 ウシ	—	左	中手骨	最大長 205.28
187	26 ウシ	—	右	肩甲骨	内側板のみ遺存
187	25 ウシ	—	左	上腕骨	近位部と遠位部内側破損
187	23 ウシ	—	右	上腕骨	近位部と遠位部内側破損
187	9上,8下	ウシ	左	上顎第3小臼歯	近位部と骨幹中央まで破損、遠位の関節部破損
187	16 ウシ	ウシ	左	大腸骨	上顎骨の一部が附着、近位心径 18.01、頬舌径 18.68
187	25 ウシorウマ	ウシorウマ	不明	長骨片	関節部
187	9上,8下	ウシorウマ	不明	寛骨片?	—
187	7 不明	不明	不明	長骨片	2
187	27 不明	不明	不明	骨片	1
187	14 不明	不明	不明	関節部	—
189	13 ウシorウマ	ウシorウマ	不明	長骨片	骨幹の一部
161 第4面	6 ウマ	ウマ	左	大腸骨	近位部と骨幹中央より遠位破損
161 流2 551	ウシorウマ	ウシorウマ	不明	臼歯のエナメル片	1
161 流2 551	ウマ	ウマ	右	上顎第4小臼歯?	保存状態が悪いため計測不能
161 流2 551	不明	不明	不明	骨片	1
187・190	ウマ	ウマ	不明	基節骨	最大長 73.73

※下段の動物遺体については、別選構出土の為、本文ではふれていない

表25 上顎骨計測値

計測部位	大和川・今池		五反島		
	左	右	平均値	最大値	最小値
頬臼歯列長	—	135.9	—	—	—
小臼歯列長	—	55.8	—	—	—
大白歯列長	82.9	82.5	—	—	—
上顎幅	第4小臼歯間	127.4	—	—	—
	第1大白歯間	130.1	—	—	—
	第2大白歯間	130.8	—	—	—
	第3大白歯間	129.4	—	—	—
第2小臼歯	頬舌径	—	13.7	—	—
	近位心径	—	18.4	—	—
第3小臼歯	頬舌径	—	17.4	—	—
	近位心径	—	17.8	—	—
第4小臼歯	頬舌径	21.5	20.9	—	—
	近位心径	17.8	16.5	—	—
第1大白歯	頬舌径	24.8	24.4	—	—
	近位心径	26.8	24.0	—	—
第2大白歯	頬舌径	25.1	25.8	24.7	25.1
	近位心径	27.2	27.3	27.7	28.7
第3大白歯	頬舌径	24.9	24.0	24.6	—
	近位心径	31.4	30.8	33.9	—

計測値の単位はmm

表26 下顎骨計測値

計測部位	大和川・今池		五反島	
	左	平均値	最大値	最小値
頬臼歯列長	142.0	137.6	154.2	113.3
小臼歯列長	51.8	52.4	60.3	46.9
大白歯列長	91.0	88.6	96.3	68.2
下顎体高	第2小臼歯前縁	52.5	—	—
	第1大白歯前縁	60.6	50.6	53.0
第2小臼歯	頬舌径	8.4	7.9	—
	近位心径	12.8	12.0	—
第3小臼歯	頬舌径	10.1	10.7	—
	近位心径	16.4	—	—
第4小臼歯	頬舌径	14.3	14.3	—
	近位心径	23.6	—	—
第1大白歯	頬舌径	17.3	15.3	17.2
	近位心径	24.9	26.5	—
第2大白歯	頬舌径	18.7	16.3	17.2
	近位心径	29.3	26.5	—
第3大白歯	頬舌径	16.8	16.1	17.6
	近位心径	40.3	39.4	41.8

計測値の単位はmm



■ 出土部位

図207 出土牛骨部位